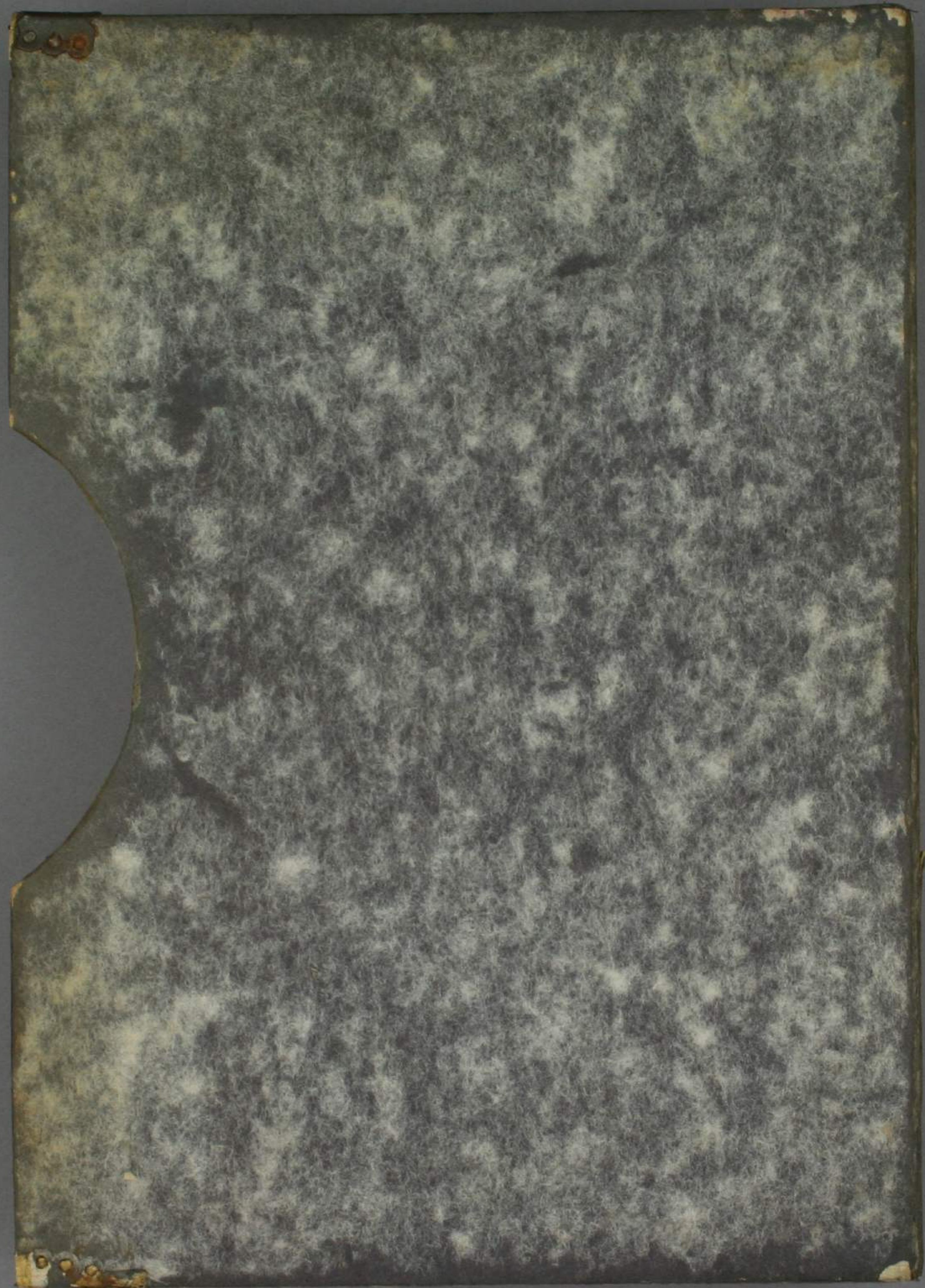




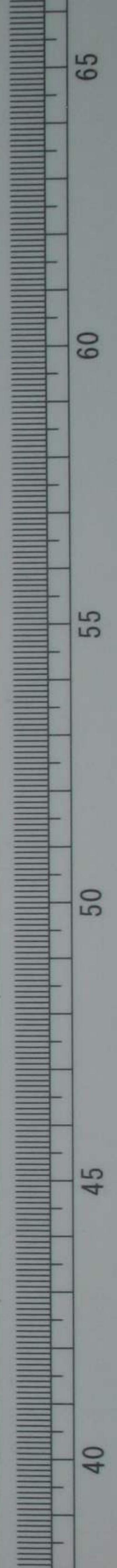
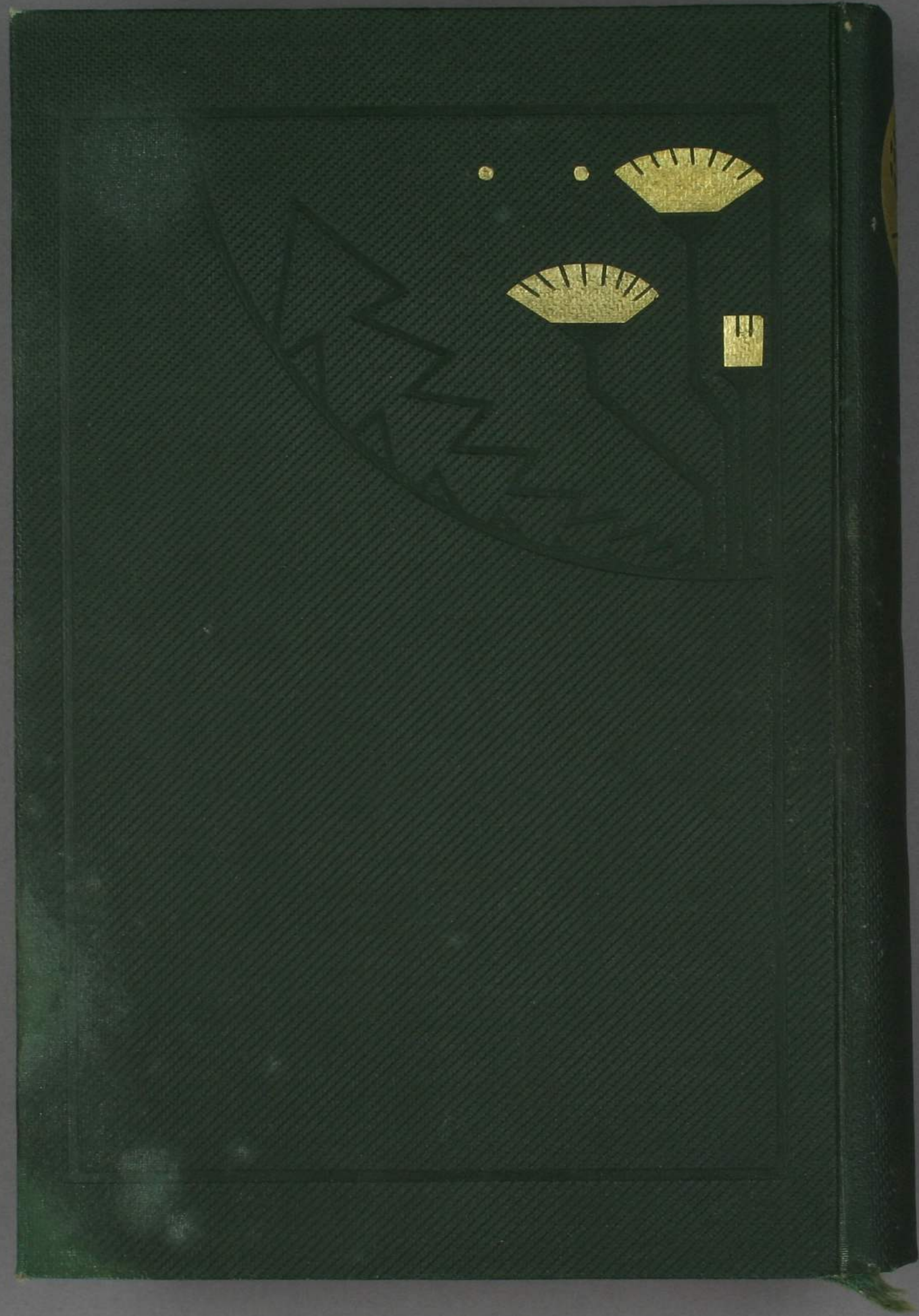
獨步全集

前篇









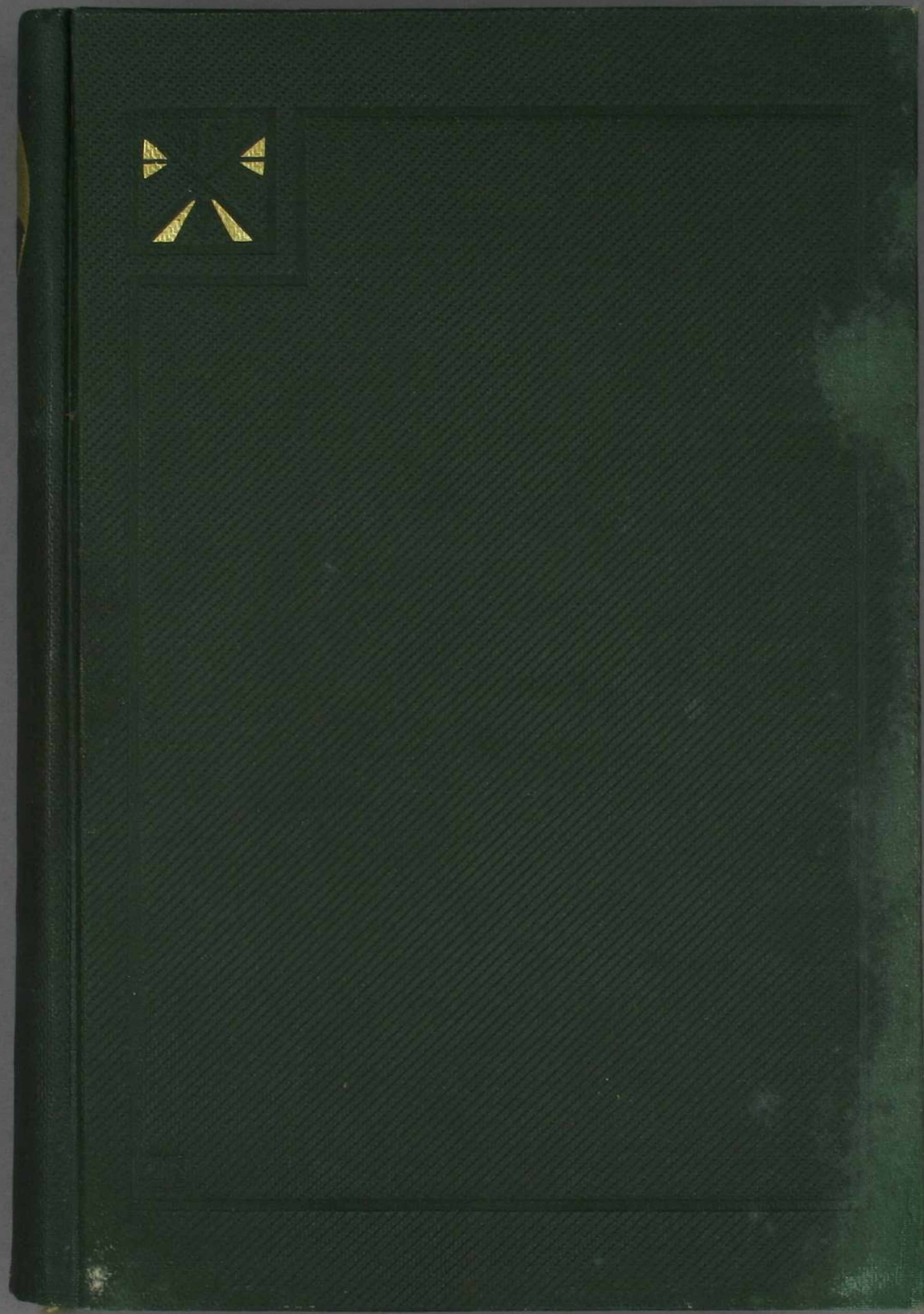




獨步全集

前篇











獨步全集

前編





獨步全集

前編











### 凡 例

- 一 國木田獨歩の小説及び新體詩を輯めて『獨歩全集』二巻をつくる。
- 一 獨歩の作品は明治三十年五月、日光に寄寓せる時脱稿せる『源をぢ』を處女作となし、四十一年一月大久保の僑居に於て執筆せる『二老人』を以てその最終の作となす。
- 一 前編には主としてその前半生に成れる作品を蒐録し、後編には其後半生に成れるものを蒐録す。
- 一 校正は一に當初の原本に由りたれど、誤字、誤植、假名遣ひの誤れるものは、總てこれを改めんことを期せり。送りたる假名、振假名に於てもまた然り。



凡例  
 一本書を出版するに當りて、從來著作権を有する彩雲閣、左  
 久良書房の二書肆が特に覆刻を快諾せられたるを感謝  
 す。

故人三回周忌の日  
 編者

目次

牛肉と馬鈴薯	一
運命論者	四一
巡査	八三
酒中日記	九五
富岡先生	一六一
空知川の岸邊	一九九
郊外	二二三
鎌倉夫人	二五一
神の子	二七三
源をぢ	二八七



星	.....	三二五
園遊會	.....	三二三
春の鳥	.....	三五三
少年の悲哀	.....	三七三
夫婦	.....	三八九
河霧	.....	四三一
小春	.....	四五一
遺言	.....	四七五
初孫	.....	四八三
岡本の手紙	.....	四九一
わかれ	.....	五〇七
置土産	.....	五三三

湯ヶ原より	.....	五五一
日の出	.....	五六五
非凡なる凡人	.....	五九三
晝の悲み	.....	六一五
馬上の友	.....	六二九
悪魔	.....	六五三
正直者	.....	七〇九
第三者	.....	七三五
女難	.....	七七九



牛肉と馬鈴薯



明治俱樂部として芝區櫻田本郷町のお塚端に西洋作の餘り立派ではないが、それでも可なりの建物があつた。建物は今でもある。しかし持主が代つて、今では明治俱樂部其者はなくなつて了つた。

この俱樂部が未だ繁昌して居た頃のことである。或年の冬の夜、珍らしくも二階の食堂に燈火が點いて居て、時々高く笑ふ聲が外面に漏れて居た。元來この俱樂部は夜分人の集つて居ることは少ないので、ストーブの煙は平常も晝間ばかり立ちのぼつて居るのである。

然るに八時は先刻打つても人々は未だなか／＼散じさうな様子も見えない。人力車が六臺玄關の横に並んで居たが、車夫どもは皆な勝手の方で例の一六勝負最中らしい。



すると一人の男、外套の襟を立て、中折帽を面深に被つたのが、眞暗な中からひよつくり現はれて、いきなり手荒く呼鈴を押した。

内から戸が開くと

「竹内君は来てお出ですかね」と低い聲の沈重いた調子で訊ねた。

「ハア、お出で御座います、貴方は？」と片眼の細顔の、和服を着た受付が叮嚀に言つた。

「これを」

と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり、何の肩書もない。受付は其を受取り、急いで二階に上つて去つたが、間もなく降りて来て、

「どうぞ此方へ」と案内した、導かれて二階へ上ると、暖爐を熾に燃いて居たので、

ムツとする程温かい。暖爐の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に倚つて居る。傍の卓子にウキスキーの壺が載つて居て、こつぶの飲み干したるもあり、注いだま

まのもあり、人々は可い加減に酒が廻はつて居たのである。

岡本の姿を見るや竹内は起つて、元氣よく、

「まア之れへ掛け給へ」と一の椅子をすゝめた。

岡本は容易に坐に着かない。見廻すと其中の五人は兼て一面識位はある人であるが、一人、色の白い中肉の品の可い紳士は未だ見識らぬ人である。竹内はそれと氣がつき、

「ウン貴方は未だ此方を御存知ないだらう、紹介しませう、此方は上村君と言つて北海道炭礦會社の社員の方です、上村君、此方は僕の極く舊い朋友で岡本君……」と未だ言ひ了らぬに上村と呼ばれし紳士は快活な調子で、

「ヤ、初めて……お書きになつた物は常に拜見して居ますので……今後御懇意に……」

岡本は唯だ「どうかお心易く」と言つたざり黙つて了つた。そして椅子に倚つた。

「サア其先を……」と綿貫といふ背の低い、眞黒の頬髭を生して居る紳士が言つた。

「さうだ！、上村君、それから？」と井山といふ眼のしよぼくした頭髪の薄い、瘦

方がたの紳士が促した。

「イヤ岡本君が見えたから急に行りにくくなつた。ハ、ハ、ハ」と炭礦會社の紳士は少し差にかんだやうな笑方をした。

「何ですか？」



岡本は竹内に問うた。

「イヤ至極面白んだ。何かの話の具合で我々の人生観を話すことになつてね、オア聞いて居給へ。名論卓説、滾々として盡きずだから。」

「ナニ最早大概吐き盡したんですよ。貴方は我々俗物黨と違つて眞物なんだから、幸貴方の聞きませう、ね諸君！」

と上村は逃げかけた。

「いけない、先づ君の説を終へ給へ！」

「是非承はりたいものです」と岡本はウキスキーを一杯、下にも置かないで飲み干した。

「僕のは岡本君の説とは恐らく正反對だらうと思ふんでね。要之、理想と實際は一致しない。到底一致しない……」

「ヒヤ〜」と井山が調子を取つた。

「果して一致しないとならば、理想に従ふよりも實際に服するのが僕の理想だといふのです」

「たゞそれだけですか」と岡本は第二の杯を手にして唸るやうに言つた。

「だつてねエ、理想は喰べられませぬものを！」と言つた上村の顔は兎のやうであつた。

「ハ、ハ、ハ、ピフテキぢやアあるまいし！」と竹内は大口を開いて笑つた。

「否ピフテキです。實際はピフテキです。スチューです」

「オムレッツかね！」と今まで黙つて半分眼りかけて居た、眞紅な顔をして居る松木、坐中で一番年の若さうな紳士が眞面目で言つた。

「ハツ、ハツ、ハ」と一坐が噴飯でした。

「イヤ笑ひごとぢやアないよ」と上村は少し躍起になつて、

「例へて見ればそんなものなんで、理想に従へば芋ばかり喰つて居なきアならない。ことによると馬鈴薯も喰へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯と何ちが可い？」

「牛肉が可いねエ！」と松木は又た眠むさうな聲で眞面目に言つた。

「然しピフテキに馬鈴薯は附屬物だよ」と頬髭の紳士が得意らしく言つた。

「さうですとも！理想は則ち實際の附屬物なんだ！馬鈴薯も全きり無いと困る。しか



し馬鈴薯ばかりぢやア全く閉口する！」  
 と言つて、上村はやゝ満足したらしく岡本の顔を見た。  
 『だつて北海道は馬鈴薯が名物だつて言ふぢやアありませんか？』と岡本は平氣で訊  
 ねた。

『其の馬鈴薯なんです、僕はその馬鈴薯には散々酷い目に遭つたんです。ね、竹内君  
 は御存知ですが僕は斯う見えても同志社の舊い卒業生なんで、矢張その頃は熱心なア  
 ーメンの仲間、言ひ換へれば大々的馬鈴薯黨だつたんです！』

『君が？』とさも不審さうな顔色で井山がしよぼ／＼眼を見張つた。

『何も不思議は無いサ。其頃はウラ若いんだからね。岡本君はお幾歳かしらんが、僕  
 が、同志社を出たのは二十二でした。十三年も昔なんです。それはお目に掛けたいほ  
 ど熱心なる馬鈴薯黨でしたかね。學校に居る時分から僕は北海道と聞くと、ぞく／＼  
 するほど惚れて居たもんで、清教徒を以て任じて居たのだから堪らない！』

『大變な清教徒だ！』と松木が又た口を入れたのを、上村は一寸と腮で止めて、ウキ  
 スキーを嘗めながら、

『斷然この汚れたる内地を去つて、北海道自由の天地に投じようと思ひましたね』と  
 言つた時、岡本は凝然と上村の顔を見た。

『そしてやたらに北海道の話聞いて歩いて歩いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて來  
 たといふ者があると直ぐ話を聴きに出掛けましたよ。處が又先方は旨いことを話して  
 聞かすんです。やれ自然が何うだの、石狩河は洋々とした流れだの、見渡すかぎり森  
 又た森だの、堪つたもんどぢやアない！僕は全然まゐつちまいました。そこで僕は色々  
 と聞きあつめたことを綜合して如此ふうな想像を描いて居たもんだ。…先づ僕が自  
 己の額に汗して森を開き林を倒し、そしてこれに小豆を撒く、…』

『その百姓が見たかへたねエ。ハツハツ、』と竹内は笑ひだした。

『イヤ實地行つたのサ。まア待ち給へ、追ひ／＼其處へ行くから…其内にだんだ  
 んと田園が出來て來る、重に馬鈴薯を作る、馬鈴薯さへ有りやア喰ふに困らん…』

『ソラ馬鈴薯が出た！』と松木は又た口を入れた。

『其處で田園の中央に家がある。構造は極めて粗末だが一見米國風に出來て居る。新  
 英洲植民時代そのまゝといふ風に出來て居る。屋根が斯う急勾配になつて物々しい



煙突が横の方に一つ。窓を幾個附けたものかと僕は非常に氣を揉んだことがあつたッ  
け……」

『そして眞個に其家が出来たのかね』と井山は又しよぼ／＼眼を見張つた。

『イヤこれは京都に居た時の想像だよ、窓で氣を揉んだのは……さうだ／＼若王寺へ  
散歩に往つて歸る時だつた！』

『それからどうしました？』と岡本は眞面目で促がした。

『それから北の方へ防風林を一區劃、なるべくは林を多く取つて置くことにしました。  
それから水の澄み渡つた小川が此防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。  
無論この川で家鴨や鶺鴒が其紫の羽や眞白な背を浮べてるんですよ。此川に三寸厚  
さの一枚板で橋が架かつて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと色々工  
夫したが矢張り附けないほうが自然だといふんで附けないことは極めました……まア  
構造はこんなものですが、僕の想像はこれで満足しなかつたのだ……先冬になると……  
……』

『ちよつとお話の途中ですが、貴方は其の「冬」といふ音にかふれやアしませんでした

か？』と岡本は訊ねた。

上村は驚いた顔色をして、

『貴方は如何して其を御存知です。これは面白い！有繁貴方は馬鈴薯黨だ！冬と聞いては全く堪りませんでしたよ。何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてね  
エ！それに僕は例の熱心なるアーメンでせう。クリスマス萬歳の仲間でせう。クリ  
スマと來ると何うしても雪がイヤといふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居  
ないと嘘のやうでしてねエ。だから僕は北海道の冬といふよりか冬即ち北海道といふ  
感が有つたのです。北海道の話も聞いても、冬になると……』と斯ういはれると、身體  
が斯うふる／＼つとなつたものです。それで例の想像にもです。冬になると雪が全然  
家を埋めて了ふ。そして夜は窓硝子から赤い火影がチラ／＼と洩れる。折り／＼風が  
ゴーツと吹いて來て林の梢から雪がばた／＼と墜ちる。牛部屋でホルスタイン種の牝  
牛がモーツと唸る！』

『君は詩人だ！』と叫んで床を靴で蹴つたものがある。これは近藤といつて岡本が此  
部屋に入つて來て後も一言も發しないで、唯だウキスキーと首引をして居た背の高い、



一癖あるべき顔構をした男である。

「ねエ岡本君！」と言ひ足した。岡本はたい、黙つて首肯いたばかりであつた。

「詩人？さうサ、僕は其頃は詩人サ、山々霞み入合の」といふグレーのチャーチャーの翻譯を愛讀して自分で作つて見たものだアね。今日の新聞詩人から見ると僕は先輩だアね。」

「僕も新體詩なら作つたことがあるよ」と松木は今度は少し乗地になつて言つた。

「ナーニ僕だつて二つ三つ作つたものサ」と井山が負けぬ氣になつて眞面目に言つた。

「綿貫君、君はどうだね？」と竹内が訊ねた。

「イヤお恥しいことだが僕は御存知の女氣のない通り詩人氣は全くなかつた。『權利義務』で一貫して了つた。如何だらう僕は餘程俗骨が發達してると見える！」と綿貫は頭を撫でて見た。

「イヤ僕こそ甚だお恥しい話だがこれで矢張り作つたものだ。そして何かの雑誌に二つ三つ載せたことがあるんだ！ハツハツ、、、」

「ハツハツ、、、」と一同が噴飯して了つた。

「さうすると諸君は皆詩人の古手なんだね。ハツハツ、、、奇談々々！」と綿貫が叫んだ。

「さうか。諸君も作つたのか。驚いた。其昔は皆な馬鈴薯黨なんだね」と上村は大に面目を施こしたといふ顔付。

「お話の先を願ひたいものです」と岡本は上村を促した。

「さうだ、先をやり給へ！」と近藤は殆ど命令するやうに言つた。

「宜しい！それから僕は卒業するや一年ばかり東京でマゴ／＼して居たが、斷然と北海道へ行つた。其時の心持といつたら無いね。何だか斯う馬鹿野郎！といふやうな心持がしてねエ。上野の停車場で汽車に乗つて、ビューツと汽笛が鳴つて汽車が動き出すと僕は窓から頭を出して東京の方へ向いて唾を吐きかけたもんだ。そして何とも言へない嬉しさがこみ上げて来て人知れずハンケチで涙を拭いたよ眞實に！」

「一寸と君、一寸と馬鹿野郎！」といふやうな心持といふのは僕には了解が出来ないが……其の如何いふんだね？」と權利義務の綿貫が眞面目で訊ねた。

「唯だ東京の奴等を言つたのサ、名利に汲々として居る其醜態は何だ！馬鹿野郎！乃



公を見ろ！といふ心持サ」と上村も亦た眞面目で註解を加へた。

『それから道行は抜にして、兎も角無事に北海道は札幌へ着いた。馬鈴薯の本場へ着いた。そして苦もなく十萬坪の土地が手に入つた。サアこれからだ、所謂額に汗するのはいくらだといふんで直に着手したねエ。尤も僕と最初から理想を一にして居る友人、今は矢張僕と同じ會社へ出て居るがね、それと二人で開墾事業に取掛つたのだ。そら、竹内君知つて居るだらう 梶原信太郎のことサ……』

『ウン 梶原君が！彼が矢張馬鈴薯だつたのか。今ぢやア豚のやうに肥つてるぢやアないか』と竹内も驚いたやうである。

『さうサ、今ぢやア鬼のやうな顔をして、血のたれるビフテキを二口に喰つて了ふんだ。處が先生僕と比較すると初から利口であつたねエ。二月ばかりも辛棒して居たらうか、或日こんな馬鹿氣たことは断然止さうといふ動議を提出した。其議論は何も自から斯んな思をして隠者になる必要はない。自然と戦ふよりか寧ろ世間と格闘しようぢやアないか。馬鈴薯よりか牛肉の方が滋養分が多いといふんだ。僕は其時大に反對した。君止すなら止せ。僕は一人でもやると力んだ。すると先生やるなら勝手にやり給へ。

君も最少しすると悟るだらう。要するに理想は空想だ。痴人の夢だ。なんて捨臺辭を吐いて直ぐ去つて了つた。取殘された僕は力んでは見たものゝ内々心細かつた。それでも小作人の一人二人を相手に、其後三月ばかり辛棒したねエ。豪いだらう！』

『馬鹿なんサ！』と近藤が叱るやうに言つた。

『馬鹿？馬鹿たア酷だ！今から見れば大馬鹿サ。然し其時は全く豪かつたよ』

『矢張馬鹿サ。初から君なんかの柄にないんだ。北海道で馬鈴薯ばかり食はうなんていふ柄ぢやアないんだ。それを知らないで三月も辛棒するなア馬鹿としか言へない！』

『馬鹿なら馬鹿でもよろしいとして、君のいふ「柄にない」といふことは次第に悟つて來たんだ。難有いことには僕に馬鈴薯の品質が無かつたのだ。其處で夏も過ぎて樂しみにして居た「冬」といふ例の奴が漸次近づいて來た。其露拂が秋、第一秋からして思つたよりか感心しなかつたのサ。森とした林の上をバラ／＼と時雨て來る。日の光が何となく薄いやうな氣持がする。話相手はなしサ、食ふものは一粒幾價と言ひさうな米を少しばかりと例の馬の鈴。寢る處は木の皮を壁に代用した掘立小屋』

『それは貴方覺悟の前だつたでせう！』と岡本が口を入れた。



「其處ですよ。理想よりか實際の可いはうが可いといふのは。覺悟はして居たもの、矢張り餘り感服しませんでしたねエ。第一、それぢやア痩せますもの」

上村は言つて杯で一才と口を濕して、

「僕は痩せようとは思つて居なかつた！」

「ハツハツ、、、」と一同笑ひだした。

「そこで僕はつくづく考へた。成程梶原の奴の言つた通りだ。馬鹿げきつて居る。止さうツといふんで止しちまつたが、あれで彼の冬を過したら僕は死んで居たね」

「其處で如何いふんです、貴方の目下のお説は？」と岡本は嘲るやうな、眞面目な風で言つた。

「だから馬鈴薯には懲々しましたといふんです。何でも今は實際主義で、金が取れて旨いものが喰へて、斯うやつて諸君と燠爐にあたつて酒を飲んで、勝手な熱を吹き合ふ。腹が減いたら牛肉を食ふ……」

「ヒヤ〜僕も同説だ。忠君愛國だつてなんだつて牛肉と兩立しないことはない。それが兩立しないといふなら兩立させることが出来ないんだ。其奴が馬鹿なんだ」と綿貫

は大に敦圀いた。

「僕は違ふねエ！」と近藤は叫んだ。そして燠爐を後に椅子へ馬乗になつた。凄じい光を帯びた眼で座中を見廻しながら、

「僕は馬鈴薯黨でもない。牛肉黨でもない！上村君なんかは最初、馬鈴薯黨で後に牛肉黨に變節したのだ。即ち薄志弱行だ。要するに諸君は詩人だ。詩人の墮落したのだ。だから無暗と鼻をひく〜さして牛の焦る臭を嗅いで歩く。其醜體つたらない！」

「オイ〜、他人を悪口する前に先自家の所信を吐くべしだ。君は何の墮落なんだ」と上村が切り込んだ。

「墮落？墮落たア高い處から低い處へ落ちたことだらう。僕は幸にして最初から高い處に居ないから其様外見ないことはしないんだ！君なんかは主義で馬鈴薯を喰つたのだ。嗜さで喰つたのぢやアない。だから牛肉に餓えたのだ。僕なんかは嗜さで牛肉を喰ふのだ。だから最初から、餓ゑぬ代り今だつてがつ〜しない……」

「一向要領を得ない！」と上村が叫んだ。近藤は直ちに何ごとを言ひ出さんと身構をした時、給仕の一人がつか〜と近藤の傍に来て其耳に附いて何ごとをか囁いた。



すると、

『近藤は、この近藤はシカク寛大なる主人ではない、と言つて呉れ！』と怒鳴つた。

『何だ？』と坐中の一人が驚いて聞いた。

『ナニ、車夫の野郎、又た博奕に敗けたから少し貸して呉れると言ふんだ。要領を得ないア何だ！大に要領を得て居るぢやアないか。君等は牛肉黨なんだ。牛肉主義なんだ。僕のは牛肉が最初から嗜きなんだ。主義でも、ヘチマでもない！』

『大に賛成ですなア』と静に沈重いた聲で言つた者がある。

『賛成でせう！』と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

『至極賛成ですなア、主義でないと言ふことは至極賛成ですなア、世の中の主義つて言ふ奴ほど愚なものはない』と岡本は其訝えくした眼光を座上に放つた。

『其説を承らう、是非願ひたい！』と近藤は其四角な腮を突き出した。

『君は何方なんです、牛と薯、エ、薯でせう？』と上村は知つた顔に岡本の説を誘うた。

『僕も矢張、牛肉黨に非ず、馬鈴薯黨に非ずですなア。然し近藤君のやうに牛肉が

嗜きとも決つて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌ですが、さりとして肉とか薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません』

『それぢやア何だらう？』と井山が其尤もらしいしよぼく眼をばちつかした。

『何でもありません。比喩は廢して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならつて俗に和して肉慾を充たして以て我生足れりとする可も出来ないのです、出来ないのです、爲ないのではないので、實をいふと何方でも可いから決めて了つたらと思ふけれど、何といふ因果か、今以て唯つた一つ不思議な願

を持って居るから、其ために何方とも得決めないで居ます』

『何だね、其の不思議な願と言ふのは？』と近藤は例の歴しつけるやうな言振で問うた。

『一口には言へな』

『まごか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう？』

『まづ其様なことです。…實は僕、或少女に懸想したことがあります』と岡本は眞面目で語り出した。



「愉快々々、談愈々佳境に入つて来たぞ、それからッ？」と若い松木は椅子を煖爐の方へ引寄せた。

「少し談が突然ですがね、まづ僕の不思議の願といふのを話すには此邊から初めませう。其少女はなかくの美人でした」

「ヨウ！ヨウ！」と松木は躍上らんばかりに喜んだ。

『どちらかと言へば丸顔の色のくつきり白い、肩つきの按排は西洋婦人のやうに肉附が佳くつて而もなだらかで、眼は少し眠いやうな風の、パツチリとはしなないが物思に沈んでるといふ氣味がある。此眼に愛嬌を含めて凝然と睥視されるなら大概の鐵腸漢も軟化しますなア。處で僕は容易にやられて了つたのです。最初其女を見た時は別にさうも思つて居なかつたが、一度が二度、三度目位から變に引つけられるやうな氣がして、妙に其女のこと氣になつて來ました。それでも僕は未だ戀したとは思ひませんでしたねエ。』

「或日僕が其女の家へ行きますと、両親は不在で唯だ女中と其少女と妹の十二になるのと三人ざりでした。すると少女は身體の具合が少し悪いと言つて鬱いで、奥の間に

獨、つくねんと坐つて居ましたが、低い聲で唱歌をやつて居るのを僕は縁側に腰をかけたまゝ聽いて居ました。

「お榮さん僕はそんな聲を聽かされると何だか哀れつぽくなつて堪りません」と思はず口に出しますと、

「小妹は何故こんな世の中に生きて居るのか解らないのよ」と少女がさもく頼なささうに言ひました。僕にはこれが大哲學者の厭世論にも優つて眞實らしく聞えたが、その先は詳しく言はないでも了解りませう。

「二人は忽ち戀の奴隷となつて了つたのです。僕は其時初めて戀の樂しさと哀しさとを知りました。二月ばかりといふものは全で夢のやうに過ぎましたが、其中の出來事の一、二をお安くない幕を談すと先づ斯なこともありましたつケ、

「或日午後五時頃から友人夫婦の洋行する送別會に出席しましたが、僕の戀人も母に伴はれて出席しました。會は非常な盛會で、中には伯爵家の令嬢なども見えて居ました。夜の十時頃漸く散會になり、僕はホテルから芝山内の少女の宅まで、月が佳いから歩いて送ることにして、母と三人ぶら〜と行つて來ると、途々母は口を極めて洋行夫



婦を褒め、頻と羨ましうなことを言つて居ましたが、其言葉の中には自分の娘の餘り出世間的傾向を有して居るのを残念がる意味があつて、斯る傾向を有するも要するに其交際する友に由ると言はぬばかりの文句すら交へたので、僕と肩を寄せて歩いて居た娘は、僕の手を強く握りました、それで僕も握りかへした、これが母へ對する果敢ない反抗であつたのです。

『それから山内の森の中へ來ると、月が木間から蒼然たる光を洩して一段の趣を加へて居たが、母は我々より五歩ばかり先を歩いて居ました。夜は更けて人の通行も稀になつて居たから、四邊は極めて靜に僕の靴の音、二人の下駄の響ばかり物々しう反響して居たが、先刻の母の言葉が胸に應へて居るので僕も娘も無言、母も急に眞面目くさつて黙つて歩いて居ました。

『森影暗く月の光を遮つた所へ來たと思ふと少女は突然僕に抱きつかんばかりに寄添つて

「貴方母の言葉を氣にして小妹を見捨ては不可ませんよ」と嘯き、其手を僕の肩にかけるが早いか僕の左の頬にべたり熱いものが觸て一種、花にも優る香が鼻先を掠めま

した。突然明い所へ出ると、少女の兩眼には涙が一ぱい含んで居て、其顔色は物凄くほど蒼白かつたが、一は月の光を浴びたからでも有りませう。何しろ僕はこれを見ると同時に一種の寒氣を覺えて恐いとも哀しいとも言ひやうのない思が胸に塞へて、恰度、鉛の塊が胸を壓しつけるやうに感じました。

『其夜、門口まで送り、母なる人が一寸と上つて茶を飲めと勧めたを辭し自宅へと歸路に就きましたが、或難い謎をかけられ、それを解くと自分の運命の悲痛が悉く了解りでもするといつたやうな心持がして、決して比喩ぢやアない、確にさういふ心持がして、氣になつてならない。そこで直ぐは歸らず山内の淋しい所を選つてぶらぶら歩き、何時の間にか、丸山の上に出ましたから、ベンチに腰をかけて暫時く凝然と品川の沖の空を眺めて居ました。

「若しか彼女は遠からず死ぬるのぢやアあるまいか」といふ一念が電のやうに僕の心中最も暗き底に閃いたと思ふと僕は思はず躍り上がりました。そして其所らを夢中で往きつ返りつ地を見つめたまゝ歩いて「決して其なことはなす」「斷じてなす」と、魔を叱するかのやうに言つて見たが、魔は決して去らない、僕はをり／＼足を止めて地を



凝視して居ると、蒼白い少女の顔がわり／＼と眼先に現はれて来る、どうしても其顔色がこの世のものではないことを示して居る。

「遂に僕は心を静めて今夜十分眠る方が可い、全く自分の迷だと決心して丸山を下りかけました。すると更に僕を惑亂させる出来事にふつかりました。といふのは上る時は少も氣がつかなくつたが路傍にある木の枝から人がぶら下つて居たことです。驚きおしたねエ、僕は頭から冷水をかけられたやうに感じて、其所に突立つて了りました。

「それでも勇氣を鼓して近づいて見ると女でした、無論その顔は見えないが、路にぬぎ捨てゝある下駄を見ると年若の女といふことが分る……僕は一切夢中で紅葉館の方から山内へ下りると突當にある彼の交番まで駆けつけて其由を告げました……」

「其女が君の戀して居た少女であつたといふのですかね」と近藤は冷やかに言つた。

「それでは全で小説ですが、幸に小説にはなりませんでした。

「翌々日の新聞を見ると年は十九、兵士と通じて懐胎したのが兵士には國に歸つて了はれ、身の處置に窮して自殺したものらしいと書いてありました。兎も角僕は其夜殆ど眠りませんでした。

「然かし能くしたもので、其翌日少女の顔を見ると平常に變つて居ない。そして其うつとりした眼に笑を含んで迎へられると、前夜からの心の苦惱は霧のやうに消えて了ひました。それから又一月ばかりは何のこともなく、たゞうれしい楽しいことばかりで……」

「成程これはお安くないぞ」と綿貫が床を蹴つて言つた。

「まア黙つて聴き給へ、それから」と松木は至極眞面目になつた。

「其先を僕が言はうか、斯うでせう、最後に其少女が欠伸一つして、それで神聖なる戀が最後になつた、さうでせう？」と近藤も何故か眞面目で言つた。

「ハツハツ、……」と二三人が噴飯して了つた。

「イヤ少なくとも僕の戀はさうであつた」と近藤は言ひ足した。

「君でも戀なんていふことを知つて居るのかね」これは井山の柄にない言草。

「岡本君の談話の途中だが僕の戀を話さうか？ 一分間で言へる、僕と或少女と乙な中になつた。二人は無我夢中で面白い月日を送つた。三月目に女が欠伸一つした。二人は分れた。これだけサ。要するに誰の戀でもこれが大切だよ。女といふ動物は三月



たつと十人が十人、飽きて了ふ。夫婦なら仕方がないから結合して居る。然し其は女が欠伸を嚙殺して其日を送つて居るに過ぎない。どうです君はさう思ひませんか？」

「さうかも知れませんが。然し僕のは幸に其欠伸まで達しませんでした。先を聴いて下さい。」

「僕も其頃、上村君のお話と同様、北海道熱の烈しいのに罹つて居ました。實をいふと今でも北海道の生活は好からうと思つて居ます。それで僕も色々想像を描いて居たので、それを戀人と語るのが何よりの樂でした。矢張上村君の亞米利加風の家は僕も大判の洋紙に鉛筆で圖取までしました。しかし少し違ふのは冬の窓からちらちらと燈火を見せるばかりでない。折り／＼樂しさうな笑聲、澄んだ聲で歌ふ女の唱歌を響かしたかつたのです……」

「だつて僕は相手が無かつたのですもの」と上村が情けなさうに言つたので、どつと皆が笑つた。

「君が馬鈴薯黨を變節したのも、一は其故だらう」と綿貫が言つた。

「イヤ其れは嘘言だ。上村君に若し相手があつたら北海道の土を踏まぬ先に變節して

居たゝらうと思ふ。女といふ奴は到底馬鈴薯主義を實行し得るもんぢやアない。先天的のビフテキ黨だ。恰度僕のやうなんだ。女は芋が嗜好きなんていふのは嘘サ！」

と近藤が怒鳴るやうに言つた。其最後の一句で又た皆がどつと笑つた。

「それで二人は」と岡本が平氣で語りだしたので漸々静まつた。

「二人は將來の生活地を北海道と決めて居まして、相談も漸く熟したので僕は一先故郷に歸り、親族に託してあつた山林田畑を悉く賣り飛ばし、其資金で新開墾地を北海道に作らうと、十日間位の積で國に歸つたのが、親族の故障やら代價の不折合やらで思はず二十日もかゝりました。」

「すると或日少女の母から電報が來ました。驚いて取る物も取あへず歸京して見ると、少女は最早死んで居ました」

「死んだ？」と松木は叫んだ。

「さうです。それで僕の總ての希望が悉く水の泡となつて了ひました」と岡本の言葉の未だ終らぬうち近藤は左の如く言つた。それが全で演説口調。

「イヤどうも面白い戀愛談を聴かされ我等一同感謝の至に堪ません。さりながらです、



僕は岡本君の爲めに其戀人の死を祝します、祝すといふが不穩當ならば喜びます、ひそかに喜びます、寧ろ喜びます、却て喜びます、若しも其少女にして死な、んだならばです、其の結果の悲惨なる、必ず死の悲惨に増すものが有つたに違ひないと信ずる』  
とまでは頗る眞面目であつたが、自分でも少し可笑しくなつて來たか急に調子を變へ、聲を低うし笑味を含ませて、

『何となれば、女は欠伸をしますから……凡そ欠伸に數種ある、其中最も悲むべく憎む可きの欠伸が二種ある、一は生命に倦みたる欠伸、一は戀愛に倦みたる欠伸、生命に倦みたる欠伸は男子の特色、戀愛に倦みたる欠伸は女子の天性、一は最も悲しむべく、一は最も憎むべきものである』  
と少し眞面目な口調に返り、

『即ち女子は生命に倦むといふことは殆どない、年若い女が時々そんな様子を見せることがある、然し其は戀に渴して居るより生ずる變態たるに過ぎない、幸にして其戀を得る、其後幾年月かは至極樂しさうだ、眞に樂しさうだ、恐らく樂といふ字の全意義は斯る女子の境遇に於て盡されて居るだらう、然し忽ち倦んで了ふ、即ち戀に倦んで

了ふ。女子の戀に倦んだ奴ほど始末にいけないものは決して他にあるまい、僕はこれを憎むべきものと言つたが實は寧ろ憐れむべきものである、處が男子はさうでない、往々にして生命そのものに倦むことがある、斯る場合に戀に出遇ふ時は初めて一方の活路を得る。そこで全き心を捧げて戀の火中に投ずるに至るのである。斯る場合に在ては戀即ち男子の生命である』

と言つて岡本を顧み、

『ね、さうでせう。どうです僕の説は穿つて居るでせう』

『一向に要領を得ない！』と松木が叫んだ。

『ハッ、、要領を得ない？ 實は僕も餘り要領を得て居ないのだ、たゞ今のやうに言つて見たいので。どうです岡本君、だから僕は思ふんだ君が馬鈴薯黨でもなくビフテキ黨でもなく唯だ一の不思議なる願を持つて居るといふことは、死んだ少女に遇ひたいといふんでせう』

『否！』と一聲叫んで岡本は椅子を起つた。彼は最早餘程酔つて居た。

『否と先づ一語を下して置きます。諸君にして若し僕の不思議なる願といふのを聴い



て呉れるなら談ませう』

『諸君は知らないが僕は是非聴く』と近藤は腕を振つた。衆皆は唯だ黙つて岡本の顔を見て居たが松木と竹内は眞面目で、綿貫と井山と上村は笑味を含んで。

『それでは否の一語を今一度叫んで置きます。』

『成程僕は近藤君のお察しの通り戀愛に依つ一方の活路を開いた男の一人である。であるから少女の死は僕に取つての大打撃、殆ど總ての希望を破壊し去つたことは先程申し上げた通りです、若し例の返魂香とかいふ價物があるなら僕は二三百斤買ひ入れたい。どうか少女を今一度僕の手に戻したい。僕の一念こゝに至ると身も世もあられぬ思がします。僕は平氣で白狀しますが幾度僕は少女を思つて泣いたでせう。幾度其名をよんで大空を仰いだでせう。實に彼少女の今一度此世に生き返つて來ることは僕の願です。』

『しかし、これが僕の不思議なる願ではない。僕の眞實の願ではない。僕はまだ大なる願、深い願、熱心なる願を以て居ます。この願さへ叶へば少女は復活しないでも宜しい。復活して僕の面前で僕を賣つても宜しい。少女が僕の面前で赤い舌を出して冷笑しても宜しい。』

『朝に道を聞かば夕に死すとも可なりといふのと僕の願とは大に意義を異にして居るけれど、其心持は同じです。僕は此願が叶はん位なら今から百年生きて居ても何の益にも立たない、一向うれしくない。寧ろ苦しい思ひます。』

『全世界の人悉く此願を有つて居ないでも宜しい、僕獨り此願を追ひます、僕が此願を追うたが爲めに其爲めに強盜罪を犯すに至つても僕は悔ひない、殺人、放火、何でも關ひません、若し鬼ありて僕に保證するに、爾の妻を與へよ我これを姦せん爾の子を與へよ我これを喰はん然らば我は爾に爾の願を叶はしめんと言はば僕は雀躍して妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます』

『こいつは面白い、早く其願といふものを聞きたいもんだ！』と綿貫が其髯を力任せに引いて叫んだ。

『今に申します。諸君は今日のやうなグラ〜政府には飽きられたらうと思ふ、そこでビスマルクとカブールとグラッドストーンと豊太閤見たやうな人間をつきまさせて一つの鋼鐵のやうな政府を形り、思切つた政治をやつて見たいといふ希望もあるに相違な



い、僕も實にさういふ願を以て居ます、併し僕の不思議なる願はこれでもない。  
 『聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になりたい、眞實にさうなりたい、併し若し僕の此不思議なる願が叶はないで以て、さうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。』

『山林の生活！と言つたばかりで僕の血は沸きます。則ち僕をして北海道を思はしめたのもこれです。僕は折り々々郊外を散歩しますが、この頃の冬の空晴れて、遠く地平線の上に國境をめぐる連山の雪を戴いて居るのを見ると、直ぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる！然しです、僕の一念ひとたび彼の願に觸れると、斯んなことは何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら紅塵三千丈の都會に車夫となつて居てもよろしい。』

『宇宙は不思議だとか、人生は不思議だとか。天地創生の本源は何だとか、やかましい議論があります。科學と哲學と宗教とはこれを研究し闡明し、そして安心立命の地を其上に置かうと悶えて居る、僕も大哲學者になりたい、ダルキン跣足といふほどの大科學者になりたい、若しくは大宗敎家になりたい、併し僕の願といふのはこれでも

ない。若し僕の願が叶はないで以て、大哲學者になつたなら僕は自分を冷笑し自分の顔に「偽」の一字を烙印します』

『何だね、早く言ひ玉へ其願といふやつを！』と松木はもどかしさうに言つた。

『言ひませう、喫驚しちやアいけませんぞ』

『早く早く！』

岡本は靜かに、

『喫驚したいといふのが僕の願なんです』

『何だ！馬鹿々々し！』

『何のこつた！』

『落語か！』

人々は投げだすやうに言つたが、近藤のみは黙つて岡本の説明を待つて居るらしい。  
 『斯ういふ句があります、』

Awake, poor troubled sleeper : shake off

Thy torpid night-mare dream.



「即ち僕の願とは夢魔を振り落したいことです！」

「何のことだか解らない！」と綿貫は呟やくやうに言った。

「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です！」

「愈々以て謎のやうだ！」と今度は井山が其顔をつるりと撫でた。

「死の秘密を知りたいといふ願ではない、死てふ事實に驚きたいといふ願です！」

「イクラでも君勝手に驚けば可いぢやアないか、何でもないことだ！」と綿貫は嘲るやうに言った。

「必ずしも信仰そのものは僕の願ではない、信仰無くしては片時たりとも安ずる能はざるほどに此宇宙人生の秘義に悩まされんことが僕の願であります」

「成程こいつは益々解りにくいぞ」と松木は呟やいて岡本の顔を穴のあくほど凝視して居る。

「寧ろ此使用ひ古るした葡萄のやうな眼球を剝り出したのが僕の願です！」と岡本は思はず卓を打つた。

「愉快々々！」と近藤は思はず聲を揚げた。

「アルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽は喰ひたく思はない、彼が十九歳の時學友アレキシスの雷死を眼前に視て死そのもの、秘義に驚いた其心こそ僕の欲する處であります。」

「勝手に驚けと言はれさせた綿貫君は、勝手に驚けとは至極面白い言葉である、然し決して勝手に驚けないのです。」

「僕の戀人は死なした。此世から消えて失なりました。僕は全然戀の奴隷であつたから彼少女に死なれて僕の心は掻亂されてたことは非常であつた。しかし僕の悲痛は戀の相手の亡なつたが爲の悲痛である。死てふ冷酷なる事實を直視することは出来なかつた。即ち戀ほど人心を支配するものはない、其戀よりも更に幾倍の力を人心の上に加ふるものがあることが知られます。」

「曰く習慣の力です。」

Our birth is but asleep and forgetting.

この句の通りです。僕等は生れて此天地の間に來る、無我無心の小兒の時から種々な



事に出遇ふ、毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶番となつて了ふ。哲學で候ふの科學で御座ると言つて、自分は天地の外に立て居るかの態度を以て此宇宙を取扱ふ。

Full soon thy soul shall have her earthly freight,

And custom lie upon thee with a weight,

Heavy as frost, and deep almost as life!

この通りです、この通りです!

「即ち僕の願は如何にかして此霜を叩き落さんことであります。如何にかして此古び果てた習慣の壓力から脱れて、驚異の念を以つて此宇宙に俯仰介立したいのです。その結果がビフテキ主義とならうが、馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此生命を誑はうが、決して頓着しない!

「結果は頓着しません、原因を虚偽に置きたくない。習慣の上に立つて遊戯的研究の上に前提を置きたくない。

「ヤレ月の光が美だとか花の夕が何だとか、星の夜は何だとか、要するに滔々たる詩

人の文字は、あれは道樂です。彼等は決して本物を見ては居ない、まぼろしを見て居るのです。習慣の眼が作る處のまぼろしを見て居るに過ぎません。感情の遊戯です。哲學でも宗教でも、其本尊は知らぬこと其末代の末流に至つては悉くさうです。

「僕の知人に斯う言つた人があります。吾とは何ぞや (What am I?) なんていふ馬鹿な問を發して自から苦むものがあるが到底知れないことは如何にしても知れるもんでない、と斯う言つて嘲笑を洩らした人があります。世間並からいふと其通りです、然し此問は必ずしも其答を求むるが爲めに發した問ではない。實に此天地に於ける此我てふもの、如何にも不思議なことを痛感して自然に發したる心靈の叫である。此問其物が心靈の眞面目なる聲である。これを嘲るのは其心靈の麻痺を白状するのである。僕の願は寧ろ、如何にかして此問を心から發したのであります。處がなか〜此問は口から出ても心からは出ません。

「我何處より來り、我何處にか往く、よく言ふ言葉であるが、矢張り此問を發せざらんと欲して欲せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩でもさうです、だから其以外は悉く遊戯です虚偽です。



『もう止ませよう！無益です、無益です、いくら言つても無益です。……ア、疲勞  
た！しかし最後に一言しますがね、僕は人間を二種に區別したい、曰く驚く人、曰く  
平氣な人……』

『僕は何方へ屬するのだらう！』と松本は笑ひながら問うた。

『無論、平氣な人に屬します、こゝに居る七人は皆な平氣の平三の種類に屬します。

イヤ世界十幾億萬人の中、平氣な人でないものが幾人ありませうか、詩人、哲學者、  
科學者、宗教家、學者でも、政治家でも、大概は皆な平氣で理窟を言つたり、悟り顔  
したり、泣いたりして居るのです。僕は昨夜一つの夢を見ました。

『死んだ夢を見ました。死んで暗い道を獨りどとぼ〜辿つて行きながら思はず「マ  
サカ死なうとは思はなかつた！」と叫びました。全くです、全く僕は叫びました。

『そこで僕は思ふんです、百人が百人、現在、人の葬式に列したり、親に死なれたり  
子に死なれたりしても、矢張り自分の死んだ後、地獄の門でマサカ自分が死うとは思  
なかつたと叫んで鬼に笑はれる仲間ませう。ハッ……ハッ……』

『人に驚かして貰へばしやつくりが止るさうだが、何も平氣で居て牛肉が喰へるのに

好んで喫驚したいといふ者も物數奇だねハ、ハ、ハ、と綿貫は其太い腹をかゝえた。

『イヤ僕も喫驚したいと言ふけれど、矢張り單にさう言ふだけですよハ、ハ、ハ、』

『唯だ言ふだけのことか、ヒ、ハ、ハ、』

『さうか！唯だお願ひ申して見る位なんですなハッ……』

『矢張道樂でさアハッハッハッ』と岡本は一所に笑つたが、近藤は岡本の顔に言  
ふ可からざる苦痛の色を見て取つた。



運  
命  
論  
者



## (一)

秋の半ば過、冬近くなると何れの海濱を問はず、大方は淋れて来る。鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は濱づたひに往通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は何時のやうに滑川の邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風が身に染むので直ぐ麓に下りて其處ら日あたりの可い所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四邊を見廻したが、思ふやうなところがないので、彼方彼方と探し歩いた。すると一個所、面白い場所を発見けた。



砂山が急に崩れて草の根で僅にこれを支へ、其下が岬のやうになつて居る。其根方に坐つて兩足を投げ出すと、背は後の砂山に靠れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソファに倚つたやうで、眞に心持の佳い場處である。

自分は持つて来た小説を懐から出して心長閑に讀んで居ると、日は暖かに照り空は高く晴れ此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、汀に轉がる波音の穩かに重々しく聞える外は四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書籍に取られて了つた。

然るにふと物音の爲たやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處に人が立つて居たのである。何時此處へ来て、何處から現はれたのか少しも氣がつかなかつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると年輩は三十ばかり、面長の鼻の高い男、背はすりりとした瘦形、衣裝といひ品といひ、一見して別荘に来て居る人か、それとも旅宿を取つて滞留して居る紳士と知れた。

彼は其處につつ立つて自分の方を凝と見て居る其眼つきを見て自分は更に驚き且つ怪んだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑ふ猜忌の眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味を帯ふ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一步一步、靜かに歩きだした。されども此窪地の外に出ようとは仕ないで、たゞ其處らぶらぶら歩いて居る、そして時々凄い眼で自分の方を見る。「たゞいの様子尋常でないので、自分は心持が悪くなり、場所を變へる積で其處を起ち、砂山の上まで来て、後を顧ると、如何だらう怪しの男は早くも自分の坐つて居た場處に身體を投げて居た！そして自分を見送つて居る筈が、さうでなく立てた膝の上に腕組をして突伏して顔を腕の間に埋めて居た。

餘りの不思議さに自分は様子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭に枯草を敷いて這ひつくばひ、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上げなかつた。けれども十分とは自分を待たさなかつた、彼の起ちあがるや病人の如く、何となく力なげであつたが、起つたと思ふと其儘くると後向になつて、砂山の岬に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめた。

取り出した物は大きな罍、彼は袂からハンケチを出して罍の砂を拂ひ、更に小さな洋盃様のものを出して、罍の栓を抜くや、一盃一盃、三四杯續けさまに飲んだが、罍を



静かに下に置き、手に杯を持つたまゝ、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ、自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで来て、怪げな笑味を浮べながら、

『貴方は僕が今何を爲たか見て居たでせう？』  
と言つた聲は少し嘎れて居た。

『見て居ました』と自分は判然答へた。

『貴方は他人の秘密を覗がうて可いと思ひますか』と彼は益々怪げな笑味を深くする。

『可いとは思ひませぬ』

『それなら何故僕の秘密を覗ひました』

『僕は此處で書籍を読むの自由を持つて居ます』

『それは別問題です』と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

『別問題ではありませぬ。貴方が何を爲ようと僕が何を爲ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴方に秘密があるなら自から先づ秘密に爲たら可いでせう』

彼は急にそは／＼して左の手で頭の毛を掻るやうに搔きながら、

『さうです、さうです。けれども彼れが僕の爲し得るかぎりの秘密なんです』と言つて暫らく言葉を途切らし、氣を塞めて居たが、

『僕が貴方を責めたのは悪う御座いました、けれども何卒今御覽になつたことを秘密に仕て下さいませんかお願いですが』

『お頼とあれば秘密にします。別に僕の關したことでありませぬから』

『難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました勿卒貴方を詰めまして……』と彼は人を壓しつけようとする最初の氣勢とは打つて變り、如何にも力なげに詫びたのを見て、自分も氣の毒になり、

『何もさう謝るには及びませぬ、僕も實は貴方が先刻僕の前に佇立つて僕ばかり見て



居た時の風が何となく怪かつたから、それで此處へ来て貴方の爲ることを覗がうて居たのです。矢張貴方を覗がつたのです。けれども彼の事が貴方の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい」

彼は黙つて自分の顔を見て居たが、

「貴方は必定守つて下さる方です。」と聲をふるはし、

「如何でせう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか」

「酒ですか、酒なら僕は飲まないはうが可いのです」

「飲まないはうが！飲まないはうが！無論さうです。もう飲まないで済むことなら僕とても飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲むのです。それが僕の秘密なんです。如何でせう、僕と貴方と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか」といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顔色は實に大なる秘密、痛しい秘密を包んで居るやうに思はれた。

「よろしう御座います、それでは一つ戴きませう。」と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立

つて元の場處へと引返すので、自分も其後に従つた。

## (三)

「これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の龜屋へ行つて最上のを呉れると内證で三本買って来て此處へ匿して置いたのです、一本は最早たいらげて空欄は滑川に投げ込みました。これが二本目です。未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます」

自分は彼の差した杯を受け、少しづつ啜りながら彼の言ふ處を聞いて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高まるを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入らうとは思はなかつた。

「それで先刻僕が此處へ来て見ると、意外にも貴方が既に此場處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ僕の酒庫を犯し。僕の酒宴の筵を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんて、僕はそれで貴方を見つめながら此處を去りなかつたのです」と彼は微笑して言つた、其眼元には心の底に潛んで居る彼の優しい、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が惨しげに見えた、其處で自分も笑を



含み、

『さうでせう、それではなければあんな眠つきで僕を御覧になる譯は御座いません。さも恨めしさうでした』

『イヤ恨めしくは御座いません、情けなかつたのです。オヤ、乃公は隠して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷かれて了ふのか、と自分の運命を詛つたのです。詛ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄じい見も亦た氣力もありません。運命が僕を詛うて居るのです。』 貴方は運命といふことを信じますか？え、運命といふこと。如何です、も一つ』と彼は體を上げたので、

『イヤ僕は最早戴きまします』と杯を彼に返し『僕は運命論者ではありませぬ』  
彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

『それでは偶然論者ですか』

『原因結果の理法を信するばかりです』

『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合か澤山ある。その時、貴

方は運命といふ人間の力以上の者を感じませぬか？』

『感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神秘らしい名目を其力に加へることは出来ませぬ』

『さうですか、さうですか、解りました。それでは貴方は宇宙に神秘なしと言ふお考なのです、要之、貴方には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴方の頭は二々が四で、一切が間に合ふのです。貴方の宇宙は立體でなく平面です。窮無限といふ事實も貴方には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフイニティー(無限)を式で示さうとする數學者のお仲間です』と言つて苦しげな嘆息を洩らし、冷かな、嘲るやうな語氣で、

『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴方は運命に祝福されて居る方、貴方の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です』

『それでは此で失禮します』と自分は起上がった、すると彼は狼狽て自分を引止め、『ま、ま、貴方怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひま



す。つい其の自分で勝手に苦しんで勝手に色々なことを、馬鹿な譯にも立たん事を考へて居るもんですから、つい見境もなく饒舌なのです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何だか貴方には言つて見たう感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴方には笑はれるかも知れませんが、僕にはやはり怪しの運命が僕と貴方を引着けたやうに感ぜられるのです。不幸な男と思つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし……」

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……』

『さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし……。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでせう！酔つたのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴様にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聞いて下さい、僕の不幸な運命を！』

此苦痛の叫を聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きませうとも。僕が聞いてお差支へがなければ何事でも承りませう』

『聞いて下さいますか。それならお話しませう。けれども僕は運命の怪しき力に感う

て居る者ですから、其積で聞いて下さい。若し原因結果の理法と貴方が言ふならそれでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴方が知りましたなら、それを僕が怪しき運命の力と思ふのを無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます。で貴方に聞きませうが此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一の石が飛んで来て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻子は餓に沈み、其爲めに母と子は争ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が此世に有り得ること、貴方は信するでせうか』

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ること、は信じます、それは』

『さうでせう、それなら貴方は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲惨がやゝもすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認むるのです、僕の身の上の如き、全く其なので、殆んど信す可からざる怪しい運命が僕を弄んで居るのです。僕は運命と言ひます。僕にはさう外には信じられんですから』と言つて彼は



吻と嘆息を吐き、

『けれども貴方聽いて呉れますか』

『聽きますとも！何卒かお話をなさい』

『それなら先づ手近な酒のことから話させよう。貴方は定めし不思議なことゝ思つて居るでせうが、實は世間に有りふれたことで、苦惱を忘れたさの魔酔劑に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠して飲まなければならぬ宅の事情があるからなので、その上、此場所は如何にも静かで且つ快潤で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人の視がう暗い蔭のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横たへて酒精の方に身を託し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに弱り果てた僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます』

『そんなら貴方は、自滅を願うて居るのですか』と自分は驚いて問うた。

『自殺ぢやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないのです。貴方、運命の鬼が最も巧に使ふ道具の一は「惑」ですよ。「惑」は悲を苦に變へます。苦惱を更に自乗

させます。自殺は決心です。始終惑のために苦しんで居る者に、如何して此決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張り自滅といふ渾鈍な方法しか策がないのです』

と染々言ふ彼の顔には、明に絶望の影が動いて居た。

『如何いふ理由があるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之を傍觀する譯には行きません。自滅といふも自殺に違ひないのですから』と自分が言ふや、

『けれども自殺は人々の自由でせう』と彼は笑味を含んで言つた。

『さうかも知れませんが、然し之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です』

『可う御座います。僕も決して自滅したくは有りません若し貴方が僕の物語を悉皆聽いて、其上で僕を救ふの策を立て、下さるのなら僕は此上もない幸福です』

斯う聞いては自分も黙つて居られない。

(三)

『可しい！何卒か悉皆聽かして貰ひませう。今度は僕の方からお願します』



「僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は養家のを冒したので、僕の元の姓は大塚といふのです。」

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛藏と言つて御存知でも御座いますか、東京控訴院の判事としては一寸世間にも名の知れた男で、剛藏の名の示す如く、剛直一邊の人物、随分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひで、たゞ物陰に一人引込んで、何を考へるともなく茫然して居ることが何より好きでした。十二歳の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆ど散り盡して、色褪せた花瓣の未だ梢に残つて居たのが、若葉の隙からホロ／＼と一片二片落つる様を今も判然と想ひだすことが出来るので知れます。僕は士藏の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺めて居ますと、夕日が斜に庭の木間に射し込んで、さなきだに静かな庭が、一層肅然として、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀いやうな楽しいやうな、所謂春愁でせう、そんな心地になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、兒童の胸にも春の静な夕を感じることの、實

際有り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はさういふ少年でした。父の剛藏はこのことを大變苦にして、僕のことを坊主臭い子だと數々小言を言ひ、僧侶なら寺へ興つて了ふなど怒鳴つたこともあります。それに引かへ僕の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ツ年齢が下でしたが骨格も父に肖て逞しく、氣象もまるで僕とは異つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たものです。母といふはお豊といひ、言葉の少ない、柔和らしく見えて確固した氣象の女でしたが、僕を叱つたこともなく、さりとして甘やかす程に可愛がりもせず、言はず寄らず觸らずにして居たやうです。

それで僕の氣象が生來今言つたやうなのであるか、或はさうでなく、僕が小兒の時、早く不自然な境に置いて、我知らず孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦しめました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の upper を愛ふるのとは異つて居たのです、それで父が「折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない」と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい



運命の穂先が見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が着きませんでした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時の間にか父が傍に来て、

『お前は何を考へて居るのだ、持つて生れた氣象なら致方もないが、乃公はお前のやうな氣象は大嫌だ、最少し確固しろ』と眞面目の顔で言ひますから、僕は顔も上げ得ないで黙つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

『オイ信造』と言つて急に聲を潜め『お前は誰かに何か聞きは爲なかつたか』

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に變り、益々聲を潜めて、

『隠すには及ばんぞ、聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃父には考案があるから。サア隠さずと言ふが可え。何か聞いたらう？』

此時の父の様子は餘程狼狽して居るやうでした。それで聲さへ平時と變り、僕は可

怖くなりましたから、しくしく泣き出すと、父は益々狼狽へ、

『サア言へ！聞いたら聞いたと言へ！隠すかお前は』と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

『御免なさい、御免なさい』とたゞ謝罪りました。

『謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞て、それで茫然考へて居るのぢやないかと思ふから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！』と今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な悪いことでも仕たのかと、おろ／＼聲で、

『御免なさい。御免なさい』

『馬鹿！大馬鹿者！誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く』

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熟と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

『泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え』と優しく言つた其言葉は少いが、慈愛に満ちて居たのです。

怖くなりましたから、しくしく泣き出すと、父は益々狼狽へ、

『サア言へ！聞いたら聞いたと言へ！隠すかお前は』と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

『御免なさい、御免なさい』とたゞ謝罪りました。

『謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞て、それで茫然考へて居るのぢやないかと思ふから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！』と今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な悪いことでも仕たのかと、おろ／＼聲で、

『御免なさい。御免なさい』

『馬鹿！大馬鹿者！誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く』

怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熟と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

『泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え』と優しく言つた其言葉は少いが、慈愛に満ちて居たのです。



其後でした、父が僕のことを餘り言はなくなつたのは。けれども又其後でした僕の心の底に一片の雲影の沈んだのは、運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の子供なら間もなく忘れて了つたゞらうと思ひますが、僕は忘れる處か、間がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問うたのか、父が斯くまでに狼狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に色々考へて、そして其大事は僕の身の上に関することだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のこと、自分で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見ると同じ事で、不自然なる境に置かれた少年は何時しか其暗さ不自然の底に潜んで居る黒點を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の真相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりな

がらも、これを父に問ひ返すことは出来ず、又母には猶更ら出来ず、小な心を痛めながら月日を送つて居ました。そして十五の歳に中學校の寄宿舎に入れられました、其前に一つお話しして置く事があるのです。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺の小な家がある、それに老人夫婦と其ころ十六七になる娘が住んで居ました。以前は立派な士族で、桑園は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善でしたが、或日僕に圍碁の遊戯を教へて呉れました。二三日経て夜食の時、このことを父母に話しました處、何處も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て、叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合した時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。

何故僕が圍碁を敵としなければならぬか、それも後に解りましたが、其が解つた時こそ、僕が全く運命の鬼に壓倒せられ、僕が今の苦惱を嘗め盡す初で御座いました。

## (四)

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舎に残されました。



僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけであつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢復し、悪運の手より脱れ、身の上の疑惑を懐くこと次第に薄くなり、沈鬱の氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快活な青年の氣を帯びて來ました。

然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な僕の心は急に擾亂され、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して、せめて今年卒業の日まで此儘に仕て置いて貰はうかと思ひました。思ひ返して直ぐ上京しました。麴町の宅に着くや、父は一室に僕を喚んで、『早速だがお前と能く相談したいことが有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね』

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたさう容易に口を開くことが出來ない。

『實は手紙で詳しく言つてやらうかとも思つたが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までとも志して居たらうけれど、人は一日も早

く獨立の生活を営む方が可えことはお前も知つて居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律學校に入るのぢや。三年で卒業する。辯護士の試験を受ける。とした曉は私と懇意な辯護士の事務所世話してやるから、其所で四五年も實地の勉強をするのぢや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となることが出来る。如何ぢやな、其方が近道ぢやぞ』といふ父の言葉を聽いて居る僕の心の全く顛倒したのも無理はないでせう。

これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。

大塚剛藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らず、其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年、其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天真に歸るべき門、墳墓に近くこと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認することが出來ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述べるどころではありませぬ。たゞこれ命これ從ふ



だけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の様子も一變して居たのです。日の經つに從がうて僕は僕の身の上一大秘密のあることを益々信するやうになり、父母の舉動に氣をつければつけるほど疑惑の増すばかりなのです。

一度は僕も自分の僻みだらうかと思ひましたが、生憎と想起すは十二の時、庭で父から問ひつめられた事で、彼を想ひ、これを思へば、最早自分の身の秘密を疑ふことは出来ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月を経ちましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を済ますや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、『何ぞ用か』と問ひ、やはり筆を執つて居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に坐つて、暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨て來たと見え、廂を打つ翼の音がバラ／＼聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、『何ぞ用でもあるか』と優しく問ひました。

『少し訊ねたいことが有りますので』と緩かに口を切るや、父は早くも様子を見て取つたが、

『何ぢや』と嚴かに膝を進めました。

『父様、私は眞實に父様の兒なのでせうか』と兼て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

『何ぢやと』と父の一言、其眼光の鋭さ！けれども直ぐ父は顔を柔けて、

『何故お前はそんなことを私に聞くのぢや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか』

『さういふ譯では御座いませませんが、私には昔から如何いふ者か此疑があるのです、始終胸を痛めて居るので御座います、知らして益のない秘密だから父上も黙つてお出でになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います』と僕は靜に、決然と言ひ放ちました。

父は暫時く腕組をして考へて居ましたが、徐ろに顔を上げて、

『お前が疑ぐつて居ることも私は知つて居たのぢや、私の方から言うた方がと思つた



ことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶ほ言うて了ふが可えから言ふことに仕よう』とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分、馬場金之助といふ基客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出来ないものと諦めて居ると、馬場が病で歿し、其妻も間もなく夫の後を追うて此の世を去り、残つたのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の子として養つたので、父からいふと半分は孤兒を救ふ義侠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生れ、其爲でせう、僕の出産届が未だ仕てなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の子として届けたのださうです。以上の事を話して大塚の父のいふには、

『其後私は間もなく山口を去つたから、お前を私の實子でないと知るものは多くないのぢや。私達夫婦は飽くまで實子の積でこれまで育て、來たのぢや。この先も同じことだからお前も決して僻み根生を起さず、何處までも私達を父母と思つて老先を見届けて呉れ。秀輔は實子ぢやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實の兄となつて生涯彼れの力ともなつて呉れ』と、老の眼に涙を見るより先に僕は最早泣いて居たのです。

其處で養父と僕とは此等の秘密を飽くまで人に洩さぬ約束をし、又た僕が此先何かの用事で山口にゆくと、たゞ餘所ながら父母の墓に詣で、決して公けにはせぬといふことを僕は養父に約しました。

其後の月日は以前よりも却つて穩かに過ぎたのです。養父も秘密を明けて却つて安心した様子、僕も養父母の高恩を思ふにつけて、心を傾けて敬愛するやうになり、勉學をも勵むやうになりました。

そして一日も早く獨立の生活を営み得るやうになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督を譲りたいものと深く心に決する處があつたのです。



三年の月日は忽ち逝き、僕は首尾よく學校を卒業しましたが、猶ほ養父の言葉に従ひ、一年間更に勉強して、さて辯護士の試験を受けました處、意外の上首尾。養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所へ周旋して呉れました。

兎も角も一人前の辯護士となつて日々京橋區なる事務所に通うて居ましたが、若し彼のまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて益々前途の幸福を樂んで居たでせう。

けれども、僕は何如しても惡運の兒であつたのです。殆ど何人も想像することの出來ない陥穽が僕の前に出來て居て、惡運の鬼は慘酷にも僕を突き落しました。

(五)

井上博士は横濱にも一ヶ所事務所を持て居ましたが、僕は二十五の春、此事務所に詰めることとなり、名は井上の部下であつても其實は僕が獨立でやるのと同じことでした。年齢の割合には早い立身と云つても可いだらうと思ひます。

處が横濱に高橋といふ雜貨商があつて、随分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名は梅、所夫は二三年前に亡なつて一人娘の里子といふを相手に、先づ贅澤な暮ら

しを仕て居たのです。

訴訟用から僕は此家に入ることとなり、僕と里子は戀仲になりました。手短かに言ひますが、半年経たぬうちに二人は離れることの出來ないほど逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒酌となり、遂に僕は大塚の家を隠居し高橋の養子となりました。

僕の口から言ふも變ですが、里子は美人といふほどでなくとも随分人目を引く程の容色で、丸顔の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいひますが全く僕を愛して呉れます。けれども此愛は却つて今では僕を苦しめる一大要素になつて居るので、若し里子が斯くまで僕を愛し、僕が又た斯うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しみは仕ないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た處、四十位にしか見え、小柄の女で美人の相を備へ、なか／＼立派な婦人です。そして情の烈しい正直な人柄といへば、智慧の方はやゝ薄いといふことは直ぐ解るでせう。快活で能く笑ひ能く語りますが、如何かすると恐しい程沈鬱な顔をして、半日何人とも口を交へないことがあります。僕は養



子とならぬ以前から此人柄に氣をつけて居ましたが、里子と結婚して高橋の家に寝起

することとなりて間もなく、妙なことを發見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王を一心不乱に拜むことで、口に何ごとか念じつゝ、床の間にかけた火炎の像の前に禮拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです。晝間の中、沈鬱いで居た晩は殊にこれが激しいやうでした。

僕も初めは黙つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを里子に訊ねると、里子は手を振つて聲を潜め、『黙つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大變機嫌を悪くしますから、成るべく知らん顔をして居たほうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣でせう』と別に氣にもかけぬ様なので、僕も強ては問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終へて雑談して居ると、養母は突然、

『怨靈といふものは何年経つても消えないものだらうか?』と問ひました。すると里

子は平氣で、

『怨靈なんて有るもんぢやアないわ』と一言で打消さうとすると、母は向になつて、

『生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ』

『そんなら母上は見えて?』

『見ましたとも』

『オヤさう、如何な顔をして居て? 私も見たいものだ』と里子は何處までも冷かしかつた。すると母は凄いほど顔色を變へて、

『お前怨靈が見たいの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なこといふよ此人は!』と言ひ放ち、つつと起つて自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

『母上如何か仕て居なさるよ、氣を附けんよ……』

里子は不安な顔をして

『私眞實に氣味が悪いわ。母上は必定何か妙なことを思つて居るのですよ』

『ちつと神経を痛めて居なさるやうだね』と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つたことはないのです。變つて居るのは唯々何時もの通り夜になると不動様を拜



むことだけで、僕等もこれは最早見慣れて居るから強ひて氣にもかゝりませんでした。處が今年の五月です。僕は平常よりか二時間も早く事務所を退いて家へ歸りますと、其日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内もせず襖を開けて中に入ると母は火鉢の傍にほつねんと坐つて居ましたが、僕の顔を見るや、

『ア、ア、アツ、アツ！』と叫んで突起つたかと思ふと、又尻餅を春いて熟と僕を見つた時の顔色！僕は母が氣絶したのかと喫驚して傍に駆寄りました。

『如何しました、如何しました』と叫んだ僕の聲を聞いて母は僅に坐り直し、

『お前だつたか、私は、私は……』と胸を撫すつて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚いて、

『母上如何なさいました』と聞くと、

『お前が出抜に入つて来たので、私は誰かと思つた。お、喫驚した』と直ぐ床を敷かして休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神経に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、僕な

どは名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて来て、自分の居間の所々に貼つけたものです。そして更に妙なのは、これまで自分だけで勝手に信じて居たのが、僕を見て驚いた後は、僕に向つても不動を信じろといふので、僕が何故信しなければならぬかと聞くと、

『たゞ黙つて信じてお呉れ。それでないと私が心細い』

『母上の氣が安まるのなら信仰も仕ませうが、それなら私よりもお里の方が可いのでせう』

『お里では不可ません。彼には關係のないことだから』

『それでは私には關係があるのですか』

『オアそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから』といふ母の言葉を里子も傍で聞いて居ましたが、呆れて、

『妙ねえ母上、不動様が如何して母上と信造さんとは關係があつて私には無いのでせう』

『だから私が頼むのぢやアありませんか、理由が言はれる位なら頼みはしません』



『だつて無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを言つたつて……』

『そんなら頼みません！』と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、

『イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母上もア其理由を話して下さいな如何なことが知りませんが、親子の間だから少しも明されない様なことは無いでせう』と求めました。それは母の言ふ處に由て迷信を壓へ神經を静める方法もあらうかと思つたからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、

『これ限りの話だよ、誰にも知してはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に縁づかない前に或男に言ひ寄られて執着追ひ廻されたのだよ。け共私は如何しても其男の心に従はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで色々なことを言つたさうです。それで私も可い心持は仕なかつたが、此處へ縁づいてから別に氣にもせんで暮して居ました。ところが所夫が死くなつてからといふものは、其男の怨靈が如何かすると現れて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を取殺さうとするのです。それで私が不動様を一心に念ずると其怨靈がだん／＼消えて無

くなりませす。それに』と、母は一増聲を潜め『この頃は其怨靈が信造に取つたついたらしくよ』

『まア嫌な！』里子は眉を擡めました。

『だつてね、如何かすると信造の顔が私には怨靈をつくりに見えるのよ』

それで僕に不動様を信じろと勧めるのです。けれども僕にはそんな真似は出来ないから、里子と共に色々怨靈などいふものゝ有るべきでないことを説いたけれど無益でした。母く堅く信じて疑はないので、僕等も持餘し、此の鎌倉へでも来て居て精神を静めたらと、無理に勧めて遂に此處の別荘に入れたのは今年の五月のことです

(六)

高橋信造は此處まで話して来て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪へぬ様であつたが、手早く杯をあげて一杯飲み干し、

『この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短かに話しますから、其以上は貴方の推察を願ふだけです。』

高橋梅、則ち僕の養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異



にした僕の妹であつたのです。如何です、是が奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも原因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知らず、此身を置かれた僕から言へば、此天地間にかゝる惨酷なる理法すら行はるゝを怨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡単に言へば、母が鎌倉に来てから一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくこととなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ましたから、見舞かたゞ鎌倉へ来て母に此事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口などへ寄るなど言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に參る積がありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。

兼て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出して、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤も唯だ所縁のものとのみ、僕の身の上は打明けなないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲更に重く

なつたのを氣の毒とも思はず、遂に乳飲兒を置きにして駆落して了つたのだと話ししました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死際に大塚剛藏に其一子を託したことまで語りました。

其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が即ちそれであることを確信したのです。

僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つたら、寧ろ僕は幸であつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一は何とかして確な證據を得たため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないのです。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝てないのです。僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたのは此事です。



僕は里子を擁して泣きました、幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくなりました。憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母と同じく怨靈を信するやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所夫を救はうとして居るのです。僕は成るべく母を見ないやうにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでせうよ。僕は怨靈の兒ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です。然し僕は母が僕の父を瀕死の際に捨て、僕を瀕死の父の病床に捨て、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るのです。僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞えるのです。僕の眼には疲れ果てた身體を起して、何も知らない無心の子を擁き、男泣きに泣き給うた様が見えるのです。そして此聲を聞き此様を見る僕には實に怨靈の氣が乗移るのです。

夕暮の空はの暗い時に、柱に靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝して天の一方を睨む様を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。

けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も消えて、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

處が此九月でした。僕は餘りの苦惱に平生殆ど酒杯を手にはせぬ僕が、里子の止めるのも聴かず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて来て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたのです。

一時間ばかり経つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸つて來ましたから、

『如何したのだ』と聞くと里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

『母上が僕を離婚すると云つたのだらう』と僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽て、

『だからね、母が何と言つても所夫決して氣にしないで下さいな。氣狂だと思つて投擲つて置いて下さいな、ね、後生ですから』と泣聲を振はして言ひますから、『さういふことなら投擲つて置く譯に行かない』と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間もなかつたので僕に續いて部屋に入つたのです。僕は母の前に坐るや、



「貴女は私を離婚すると里子に言つたさうですが、其理由を聞きませう。離婚するなら仕ても私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由を被仰い。是非其の理由を聞きませう」と酔に任せて詰寄りました。すると母は僕の劍幕の餘り銳いので喫驚して僕の顔を見て居るばかり、一言も發しません。

「サア理由を聞きませう。怨靈が私に乘移つて居るから氣味が悪いといふのでせう。それは氣味が悪いのでせうよ。私は怨靈の兒ですもの」と言ひ放ちました、見る／＼母の顔色は變り、物をも言はず部室の外へ駈け出て了ひました。

僕は其まゝ、母の居間に寝て了つたのです。眼が覺めるや酒の酔も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顔を見て坐つて居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に交つて此方に來て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は兩方を交る／＼介抱して、二人の不幸をば一人で正直に解釋し、ただ／＼怨靈の業とのみ信じて、二人の胸の中の眞の苦惱を全然知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう。此のやうな目に遇つて居る僕がブランドイの隠飲みをやるのは果して無理でせうか。

今や僕の力は全く悪運の鬼に挫かれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意氣地のないものと成り果て、居るのです。

如何でせう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の經過を考へて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ原因結果の理法に過ぎないと數學の式に對するやうな冷かな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが冷かなる事實です。そして僕の運命です。

若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹んで教を奉じます。其人は僕の救主です

(七)

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であるトツク／＼氣の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、

『斷然離婚なさつたら如何です』

『それは新らしき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えません』



『けれども其は止を得ないでせう』

『だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消えませんが。離婚した處で妹を妻として愛する僕の愛は變りません。人の力を以て過去の事實を消すことの出

来ない限り、人は到底運命の力より脱るゝことは出来ないでせう』

自分は握手して、黙禮して、此不幸なる青年紳士と別れた。日は既に落ちて餘光華やかに夕の雲を染め、願れば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺めて居た。

其後自分は此男に遇はないのである。

巡 査



この頃ふとした事から自分は一人の巡査、山田銃太郎といふのに懇意になつた。年齢は三十四五でもあらうか、骨格の逞しい、背の高い堂々たる偉丈夫である。

自分は人相のことはよく知らぬが、圓い顔の、口髭頬髯ともに眞黒で、鼻も眼も大きな、見た處は柔和の相貌とは言へないが、さて實際はなか／＼好人物なのが世間には随分ある。この巡査も其種類に屬するらしい。

若し其人が沈黙であつたなら斯ういふのは餘り受の可い人相ではない。處が能く語り能く笑ふ。笑ふ時は其眼元に一種の愛嬌がこぼれる。語る時は相手の迷惑もなにも無頓着で、のべつに行ふ。そこで思ひもつかぬ比喻など用ゐて、それを得意に二度も三度も繰返す。如何だらう、斯ういふ人物は他の憎悪を受けるだらうか。



或日、明日は非番で宅に居ますから是非入来しやいと頻りに促されたから、午後一時ごろ自分は山田巡査を訪ねて見た。

『ね、是非入来しやい、何も無いが寒いから……これをやつて饒舌りませう』とグイ飲の手真似をして見せた。

指物屋の二階の一室が先生の住居である。仕事場の横から急な狭い梯子段を上ると、直ぐ突當に炭俵が置いてある。靴が墓のやうに一隅に眠つて居る。太い棒が其傍に突立つて番をして居る。多分ステッキといふのだらう。別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れて居たが其前の薄暗い板間を通ると突當の部屋が山田巡査の宅。

『やッ、よく入来しやいませした。サア此方へ、サア』と言ひながら急に起つて押入から座蒲團を一枚、長火鉢の向うへ投出した。

先生一杯やりはじめて、や、酔の廻つて居る時分であつた。

『獨身者の生活は斯んなものでしてナ。御覽の通りで狭いも狭いし、世帯道具一切がこの一室にあるのだから、サア何のことはない豚小屋ですな、豚小屋で……』と其處らをさよろさよろ、何か探して居るやうであつたが、急に前の杯をグイと呑干し

て

『サア一ッ！御飯が濟んだのなら酒だけ一ッ、この酒は決して頭へ来るやうな酒ぢやア御座いませんから』

自分は受けてちやぶ臺に置いた。成程狭いが、狭いなりに一室がさちんと整理して居る。作出しの押入が一間、室内にはみ出して其唐紙は補修だらけ、壁はさたなく落書がしてある。疊は黒い。障子は煤けて居る。成程むさくしい部屋であるが、これ亦何處となく掃除が届いてサツパリして居る。どうして、豚小屋どころか！

窓の下に机、机の右に書籍箱、横に長火鉢、火鉢に并んでちやぶ臺、右手の壁に沿うて箆筒鼠入らず、其上に違棚、總てが古いが、總てが清潔である。烟草箱、菓子器、茶入、蓋物、帙入の書籍、總てが其處を得て、行儀よく并んで居る。書籍箱の上には盆栽の小鉢が三ツ四ツ置いてある。

自分は杯を返しながら

『流石警官だけに貴方は大變清潔ずきですな』

『ハ、ハ、ハ、イヤ清潔ずきといふ程のこともないが、これが私の性分ですな、















『これは或大臣の警衛をして居た時の作です、醜郎の満面、髯塵を帯ぶ——かね』  
『も一ツ』

『さうですなア』と草稿を繰返して居たが、突如として『故山の好景久しく相違ふ、斗米官遊未だ非を悟らず、杜宇呼び醒す名利の夢、聲々、復た不如歸を呼ぶ——。ハッハッ、——、到頭本音を吐いちやツた！』

『ハッハッ、——、到頭本音が出ましたね』

『ハッ、——、』と笑つたが山田巡査は眼を閉ぢたまゝ、何を考へるともなくうつらうつらとして居る様子であつた、半分居眠つて居るのである。突然、

『イヤ矢張この方が氣樂だ！』と叫んで、眼を見開き自分を見て莞爾笑つたが、直ぐ又居眠を始めた。

自分は暫時凝然として居たが起すのも氣の毒とそつと起つて室を出た。

指物屋の店から四五十間下ると四辻がある。自分は此處に來た時、後を振り向くと指物屋の二階の窓から山田巡査の髯髻だらけの顔が出て居た。頻りと點頭をして居た。自分は全然この巡査が氣に入つて了つた。

酒 中 日 記



五月三日(明治三十年)

『あの男は如何なつたか知ら』との噂、よく有ることで、四五人集まつて以前の話を  
出ると、消えて去くなつた者の身の上に、ツイ話に移るものである。

この大河今藏、恐らく今時分やはり同じやうに噂せられて居るかも知れない。『時に  
大河は如何したらう』『升屋の老人口をきく。』

『最早死んだかも知れない』と誰か、氣の無い返事を爲る。『全くあの男ほど氣の毒な  
人はないよ』と老人は例の哀れつばい聲。

氣の毒がつて下さる段は難有い。然し幸か不幸か、大河といふ男今以て生きて居  
る、而も頗る達者、此先何十年此世に呼吸の音を續けますことやら。憚りながら未だ三



十二で御座る。

まさか此小ほけな島、馬島といふ島、人口百二十三の一人となつて、二十人あるなしの子供を相手に、やはり例の教員、然し今度は私塾なり、アイウエオを教へて居るといふ事は御存知あるまい。無いのが當然で、斯く申す自分すら、自分の身が流れ流れて思ひもかけぬ此島で斯んな暮を爲るとは夢にも思はなかつたこと。

噂をすれば影とやらで、ひよつくり自分が現はれたなら、升屋の老人吃驚りして開いた口がふさがらぬかも知れない。『いつたい君は如何したといふんだ』と漸とこのこととで聲を出す。それから話して一時間も経つと又喫驚、今度は腹の中で『いつたい此男は如何したのだらう、五年見ない間に全然氣象まで變つて了つた』

驚き給ふな原因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上の有つたことや、有ることを、今日からポツ／＼書いて見ようといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

あゝ今は氣樂である。此島や島人はすつかり自分の氣に入つて了つた。瀬戸内にこ

んな島があつて、自分のやうな男を、兎も角も呑氣に過さして呉れるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節と言ひたくなる。

酒を飲んで書くと、少々手がふるへて困る。然し酒を飲まないで書くと心がふるへるかも知れない。『あゝ氣の弱い男！』何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

可愛い可愛いお露が遊びに来たから、今日はこれで筆を投げる。

五月四日

自分が升屋の老人から百圓受取つて机の抽斗に納つたのは忘れもせぬ十月二十五日事の初が此の日で、其後自分は此日に逢ふごとく頸を縮めて眼をつぶる。なるべく此日の事を思ひ出さないやうにして居たが、今では平氣なもの。

一件があり／＼と眼の先に浮んで来る。

あの頃の自分は眞面目なもので、酒は飲めても飲まぬやうに、謹厳正直、いやはや四角張つた男であつた。

老人連、全然惚れ込んでしまつた。一にも大河、二にも大河。公立八雲小學校の事



は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定るわけにゆかぬ次第。校長になつてから二年目の升屋の老人、遂に女房の世話まで焼いて、お政を自分の妻にした。子が出来た。お政も子供も病身、健康な自分ばかり。それでも一家無事平和に、これぞといふ面白くもない代り、又これぞといふ心配もなく日を送つて居た。

處が日清戦争、連戦連勝、軍隊連勝、軍隊萬歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いと、なつて、そして自分の母と妹とが墮落した。

母と妹とは自分達夫婦と同棲するのが窮屈で、赤坂區新町に下宿屋を開業。それも表向ではなく、例の素人下宿。いやに氣位を高くして、家が廣いから、それにどうせ遊んで居る身體、若いものを世話してやるだけのこと、もつとも性の知れぬお方は御免蒙るとの觸込み。

自體拙者は氣に入らないので、頻りと止めて見たが、もつと強情我慢な母親、妹は我儘者、母に甘やかされて育てられ、三絃まで仕込まれて自墮落者に首尾よく成りおほせた女。お前たちの厄介にさへならなければ可からうとの挨拶で、頭から自分の注意は取あけなす。

これぞといふ間違もなく半年経ち、日清戦争となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士。これが導火線、類を以て集り、終には酒、歌、軍歌、日本帝國萬々歳、そして母と妹との墮落。

『國家の干城たる軍人』が悪いのか、母と妹とが悪いのか、今更いふべき問題でもないが、たゞ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持ちし親々は、それが華族でも、富豪でも、官吏でも、商人でも、皆な悉く軍人を聲に持たたいといふ熱望を以て居たのである。

娘は娘で軍人を情夫に持つことは、寧ろ誇るべきことである、とまで思つて居たらしい。

軍人は軍人で、殊に下士以下は人の娘は勿論、後家は勿論、或は人の妻をすら翫弄して、それが當然の權利であり、國民の義務であるとなまで濟まして居たらしい。

三圓借せ、五圓借せ、母はそろ／＼自分を攻め初めた。自分は出来るだけ其の望に應じて、苦しい中を何とか工夫して出してやつた。

月給十五圓。それで親子三人が食つてゆくのである。なんで餘裕があらう。小學校



の教員はすべからく焼鹽か何かで三度のめしを食ひ、以て教場に於ては國家の干城たる軍人を崇拜すべく七歳より十三四歳までの兒童に教訓せよと時代は命令して居るのである。

唯々として自分は此命令を奉じて居た。

然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、更らに又、此十五圓の中から五圓三圓と割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思ひ、流石お人好の自分も頗る當惑したのである。

酒が醒めかけて来た！今日はこゝで上める。

五月六日

昨日は若い者が三四人押かけて来て、夜の十二時過ぎまで飲み、だみ聲を張上げて歌つたので疲れて了ひ、何時寐たのか知らぬ間に夜が明けて今日。それで昨日の日記がお休み。

さても氣樂な教員。酒を飲まうが歌はうが、お露を可愛がつて抱いて寐ようが、それで先生の資格なしとやかましく言ふ者は此島に一人もない。

特別に自分を尊敬も爲ない代りに、魚あれば魚、野菜あれば野菜、誰が持つて来たとも知れず臺所に投りこんである。一升徳利をぶらさげて先生、憚りながら地酒では御座らぬ、お露の酌で飲んで見させと縁先へ置いて去く老人もある。

あゝ氣樂だ、自由だ。母もいらぬ、妹もいらぬ、妻子もいらぬ。慾もなければ得もない。それで居てお露が無暗に可愛のは不思議ぢやないか。

何が不思議。可愛いから可愛いので、お露とならば何時でも死ぬる。

十日前のこと、自分は縁先に出て月を眺め、朧に霞んで湖水のやうな海を見おろしながら、お露の酌で飲んで居ると、ふと死んだ妻子のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思つて、我知らず涙を落すと、お露は見て居たが、その鈴のやうな眼に涙を見せたことにはないものである。さても可愛い此娘、此大河なる團栗眼の猿のやうな顔をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕慕ひ寄り、乙女心の限りを盡して親切にして呉れる不便さ。

自然生の三吉が文句ぢやないが、今となりては、外に望は何にもない、光榮ある歴



史もなければ國家の干城たる軍人も居ない此島。此島に生れて此島に死し、死しては彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の静かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土となりたればかり。

お露を妻に持つて島の者にならつせ、お前さん一人、遊んで居ても島の者が一生養なつて上げさせ、と六兵衛が言つて呉れた時、嬉しいやら情けないやらで泣きたかつた。

そして見ると、自分の周囲には何處かに悲惨の影が取巻いて居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない。自分の性質には何處かに人なつこいところがあつて、自と人の親愛を受けるのかも知れない。

何れにせよ、自分の性質には思ひ切つて人に逆らうことの出来る、ピンとした處はないので、心では思つても行に出すことの出来ない場合が幾多もある。

あゝ哀れ氣の毒千萬なる男よ！母の爲め妹のために可くないと思つた下宿の件も遂には止め終せなかつたも當然。母と妹の淺ましい墮落を知りつゝも思ひ切つて言ひだし得ず、言ひだしても争さうことの出来なかつたも當然。苦しい中を算段して、い

やいやながらも母と妹とに淫酒の料をさげたもこれ亦當然。

二十四日の晩であつた。母から手紙が来て、明二十五日の午後さかり出るから金五圓至急に調達せよと申込んで来た時、自分は思はず吐息をついて長火鉢の前に坐つたまゝ、拱手をして首を垂れた。

『如何なさいました？』と病身の妻は驚いて問うた。

『これを御覽』と自分は手紙を妻に渡した。妻は見て居たが、これも黙つて吐息したまゝ、手紙を下に置く。

『何故こんな無理ばかり言つて来るだらう』

『さうですね……』

『最早一文なしだらう？』

『一圓ばかり有ります』

『有つたつて其を渡したら宅で困つて了ふ。可いよ、明日母上が来たたら私かきつぱりお謝絶するから。さう／＼は私達だつて困らね。それも今日母上や妹の露命をつなぐ爲めとか何とか別に立派な費ひ途でも有るのなら、借金してだつて、衣類を質草に



爲たつて五圓や三圓位なら私の力にても出来て上げるけれど、兵隊に貢ぐのやら譯もわからない金だもの。可いよ、明日こそ私が思ひきり言ふから、それで聴かないなら如何にでも勝手になさいと言つてやるから』

『言ふのはお止しなさいよ』

『何故や、言ふよ、明日こそ言ふよ』

『だつてね母上のことだから又大きな聲をして必定お怒鳴になるから、近處に聞えても外聞が悪いし、それにね、貴方が思ひ切つたことを被仰ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はんから一所に居たくても爲方なしに別居して嫌な下宿屋までして居るんだつて言ひふらしておいでになるんですから』とお政は最早泣き聲になつて居る。

『然し實際明日母上が見えたとつて渡す金が無いぢやアないか』

『私が明日のお晝までに如何にか致します』

『如何にかつて、お前に出来る位なら私にだつて何とか爲りさうなものだが、實際始末にいけないうぢやないか』

『今度だけ私にまかして下さい、何とか致しますから。』と言はれて自分は強いて争はず、めいり込んだ氣を引きたて、改築事務を少しばかり執つて床に就いた。

五〇〇〇日

一寝入したかと思ふと、フト眼が覺めた。眼が覺めたのではなく可怕い力が闇の底から手を伸して揺り起したのである。

其頃學校改築のことで自分は其委員長。自分の外に六名の委員が居ても多くは有名無實で、本氣で世話を焼くものは自分の外に升屋の老人ばかり。豫算から寄附金のことで自分で先に立つて苦勞する。敷地の買上、其代價の交渉、受負師との掛引、割當てた寄附金の取立、現金の始末まで自分に爲せられるので、自然と算盤が机の上に置れ通し。持前の性分、間に合はして置くことが出来ず、朝から寝るまで心配の絶えない處へ、母と妹とが墮落の件。殊に又ぞろ母からの無理な申込で頭を痛めた故か、其夜は寝ぐるしく、怪しい夢ばかり見て我ながら眠つて居るのか、覺めて居るのか判然ぬ位であつた。

何か物音が爲たと思ふと眼が覺めた。さては盜賊と半ば身體を起してきよろくと



四邊を見廻したが、森として其様子もない。夢であつたか現であつたか、頭が錯亂して居るので判然しない。

言ふに言はれぬ恐怖さが身内に漲ぎつて如何しても其儘眼ることが出来ないで、思ひ切つて起上がった。

次の八疊の間の間の襖は故意と一枚開けてあるが、豆洋燈の火は其入口までも達かず、中は真闇。自分の寢て居る六疊の間すら煤けた天井の影暗く被ひ、靄霧でもかゝつたやうに思はれた。

妻のお政はすやゝと寝入り、其傍に二歳になる助が其顔を小枕に押着けて愛らし手母の腮の下に遠慮なく突込んで居る。お政の顔色の悪さ。さなきだに蒼ざめて血色悪しき顔に夜目には死人かと怪しまれるばかり。剩へ髪は亂れて頬にかゝり、頬の肉や、落ちて、身體の健かならぬと心に苦勞多きとを示して居る。自分は音を立てぬやうに其枕元を歩いて、長火鉢の上なる豆洋燈を取上げた。

暫時聴耳を聳て何を聞くともなく突立つて居たのは、猶ほ八疊の間を見分する必要が有るかと思ひ疑がつて居るので。しかし確に簾筒を開ける音がした。障子をするゝと

開ける音を聞いて、夢か現か兎も角と八疊の間に忍足で入つて見たが、別に異變はない。縁側から、臺所に出て真闇の中をそつと覗くと、臭氣のある冷たい空気が氣味悪く顔を掠めた。敷居に立つて豆洋燈を高くかゝげて眞暗の隅々を熟と見て居たが、竈の横にかくれて黒い風呂敷包が半分出て居るのに目が着いた。不審に思ひ、中を開けて見ると現はれたのが一筋の女帯。

驚くまいことか、これお政が外出の唯た一本の帯、升屋の老人が特に祝つて呉れた品である。何故これが此所に隠してあるのだらう。

自分の寢静まるのを待つて、お政はひそかに簾筒から此帯を引出し、明朝早くこれを質屋に持込んで母への金を作る積と思ひ當つた時、自分は我知らず涙が頬を流れるのを拭き得なかつた。

自分は其ま、帯を風呂敷に包んで元の所に置き、寢間に還つて長火鉢の前に坐り煙草を吹かしながら物思に沈んだ。自分は果して彼の母の實子だらうかといふやうな怪しい慘ましい考が起つて来る。現に自分の氣性と母及び妹の氣象とは全然異つて居る。然し父には十の年に別れたのであるから、父の氣象に自分が似て生れたといふ



ことも自分には解らない。かすかに覺えて居る所では父は柔和い方で、荒々しく母や自分などを叱つたことはなかつた。母に叱られて柱に縛りつけられたのを父が解いて呉れたことを覺えて居る。其時母が父にも怒を移して慳貪に口をきいたことをも思ひ出し、父のこと母のこと、それから其へと思を聯ね、果は親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛などいふことにまで考へ込んで、これまでに知らない深い人情の秘密に觸れたやうな氣にもなつた。

お政は痛ましく助は可愛く、父上は戀しく、懐かしく、母と妹は悪くもあり、痛ましくもあり、子供の時など思ひ起しては戀しくもあり、突然寄附金の事を思ひだしては心配で堪らず、運動場に敷く小砂利のことまで考へだし、頭はぐらぐらして氣は遠くなり、それで居て神經は何處かに焦々した氣味がある……

嗚呼！故何彼の時自分は酒を飲まなかつたらう。今は舌打して飲む酒、飲めば酔ひ、酔へば楽しい此酒を何故飲まなかつたらう。

五月八日

明くれば十月二十五日自分に取つて大厄日。

自分は朝起きて、日曜日のことゆゑ朝食も急がず、小兒を抱いて庭に出で、其處らをつらつら散歩しながら考へた、帯の事を自分から言ひ出して止めようかと。

然し止めて見た處で別に金の工面の出来るでもなし、さりとて斷然母に謝絶するところは妻の斷つて止める處でもあるし。つまり自分は知らぬ顔をして居て妻の爲すがまゝに任すことに思ひ定めた。

朝食を終るや直ぐ机に向つて改築事務を執つて居ると、升屋の老人、生垣の外から聲をかけた

『お早う御座い』と言ひつゝ、縁先に廻つて『朝つばらから御勉強だね』

『折角の日曜も此頃はつぶれで御座います』

『ハ、ッ何に今に遊ばれるよ、學校でも立派に出来あがつた處で、しんみりと戦ひたいものだ、私は今からそれを樂みに爲て居る』

座に着いて老人は烟管を取出した。此老人と自分、外に村の者、町の者、出張所の代診、派出所の巡查など五六名の者は筑碁の仲間、殊に自分と升屋とは暇さへあれば氣永な勝負を争つて楽しんで居たのが、改築の騒から此方、外の者は兎も角、自分



は殆ど何より嗜好、唯一の道樂である基すら打ち得なかつたのである。

『來月一ぱいは打てさうもありません』

『その代り冬休といふ奴が直ぐ前に控へて居ますからな。左右に火鉢、旨い茶を飲みながら打つ樂は又別だ』といひつゝ、老人は懷中から新聞を一枚出して、急に眞顔になり、

『ちよつと是を御覽』

披げて二面の電報欄を指した。見ると或地方で小學校新築落成式を擧げし當日、廊下の欄が倒れて四五十人の兒童庭に顛落し重傷者二名、輕傷者三十名との珍事の報道である。

『大變ですね。どうしたと言ふんでせう？』

『だから私が言はんことぢやあない。其通りだ、安普請をすると其通りだ。原などは餘り經費がかゝり過ぎるなんて理窟を弁べたが、斯いふ實例が上つて見ると文句はあまるまい。全體大切な兒童を何百人と集せるのだもの、丈夫な上にも丈夫に建るのが當然だ。今日一つ原に會つて此新聞を見せてやらなければならん』

『無闇な事も出来ませぬが、今度の設計なら決して高い豫算ぢや御座いませぬよ、何しろあの建坪ですもの、八千圓なら安い位なものです』

『いや其安價の私や氣に喰はんのだが、先づ御互の議論が通つて彼の豫算で行くのだから、さう安つぽい直ぐ欄の倒れるやうな險呑なものは出来上らんと思ふがね』と言つて氣を更へ、『其處で寄附金ぢやが未だ大きな口が二三残つては居ないかね？』

『未だ三口ほど残つて居ます』

『それぢやア私がこれから廻つて見よう』

『さうですか、それでは大井様を願ひます。今日渡すから人をよこして呉れると云つて來ましたから』

『百圓だつたね？』と老人は念を推した。

『さうです』

其處で、老人は程遠からぬ華族大井家の方へ廻るとして出行きたるに引きちがへてお政は外から歸つて來た。老人と自分が話して居る間に質屋に行つて來たのである。『金は出來たらうか』と自分は何處までも知らぬ顔で聞いた。妻は、



『出来ました』と言いつゝ小兒を脊から下して膝に乗せた。

『如何して出来たのだ』と自分は問はざるを得なかつた。

『如何してゝも可いぢやアありませんか、私が……』と言ひかけて淋しげな笑を洩した。

『やうぢ、お前に任したのだから……處で母上さんが見えたら最早下宿屋は止して一所になつて下さいと言つて見ようぢやないか』

『言つた處で無益で御座いますよ』

『無益といふこともあるまい。熱心に説けば……』

『無益ですよ、却つて氣を悪くなさるばかりですよ』

『それは多少か氣を悪くなさるだらうけれど、言はないで置けばこの後どんなことに成りゆくかも知れないよ』

『さうですねエ……然し兵隊さんと如何とかいふやうなことは被仰らんはうが可う御座いますよ』

『まさか其んなことまで言はれも爲まいけれど』

一時間立たぬうちに升屋の老人は歸つて来て、

『旨く行つたよ』と座に着いた。

『どうも御苦勞様でした』

『ハイ確かに百圓渡しましたよ。驗ためて下さい』と紙包を自分の前に。

『今日は日曜で銀行がだめですから貴所の宅に預かつて下さいませんか。私の家は用心が悪う御座いますから』と自分が言ふを老人は笑つて打消し、

『大丈夫だよ、今夜だけだもの、私宅だつて金庫を備へつけて置くほどの酒屋ぢやアなし、ハツハツ、……取られる時になりや私の處だつて同じだ。大井様は濟んだとして、後の二軒は誰が行く筈になつて居ます』

『午後私が廻る積りです』

升屋の老人は去り、自分は百圓の紙包を机の抽斗に入れた。

五月九日

自分は五年前の事を書いて居るのである。十月二十五日の事を書いて居るのである。厭になつて了つた。書きたくない。



けれども書く、酒を飲みながら書く。此頃島の若いものと一しよに稽古をして居る義太夫。さうだ『玉三』でも唸りながら書かう。面白い！

——晝飯を済まして、自分は外出けようとする處へ母が来た。母が来たら自分の歸るまで待つて貰ふ筈にして置いた處へ。

色の淺黒い、眼に劍のある、一見して一癖あるべき面魂といふのが母の人相。背は自分と異つてすらりと高い方。言葉に力がある。

此母の前へ出ると自分の妻などはみじめな者。妻の一言いふ中に母は三言五言いふ。

妻はもじ／＼しながらいふ。母は號令でもするやうに言ふ。母は三言目には喧嘩腰、

妻は罵倒されて蒼くなつて小さくなる。女でもこれほど異ふものかと怪しまれる位。

母者びとの御入來。

其處は端近先づ／＼これへとも何とも言はぬ中に母はつか／＼と上つて長火鉢の向へむづとばかり、

『手紙は届いたかね』との一言で先づ我々の荒膽をひしがれた。

『届きました』と自分は答へた。

『言つて來たことは都合がつくかね？』

『用意して置きました』とお政は小さい聲、母はそろ／＼機嫌を改めて、

『あ、其は難有う。毎度お氣の毒だと思ふんだけれど、ツイね私の方も請取る金が都合よく請取れなかつたりするものだから、此方も困るだらうとは知りつゝ、何處へも言つて行く處がないし、ツイね』と言つて莞爾。

能く見ると母の顔は決して下品な出来ではない。柔和に構へて、チンとすまして居られると、其劍のある眼つきが却つて威を示し、何處の高貴の御部屋様かと受取られるところもある。

『い、エ如何致しまして』とお政は言つたきり、伏目になつて助の頭を撫で、居る。

母はちよつと助を見たが、お世辭にも孫の機嫌を取つて見る母では無さうで、實はさうで無い。時と場合で其なことは如何にでも。

『助の顔色が如何も可くないね。いつたい病身な兒だから餘程氣をつけないと不可ませんよ』と云ひつゝ、今度は自分の方を向いて、

『學校の方は如何だね』



『如何も多忙しくつて困ります。今日もこれから寄附金のことを出掛ける處でした』  
 『さうかね、私にかまはないでお出かけよ、私は今日は日曜だから悠然して居られるな』

『さうでしたね、日曜は兵隊が澤山来る日でした』と自分は何心なく言つた。すると母は、やはり氣がとがめるかして、少し氣色を更へ、音がカンを帯びて、  
 『なに私どもの處に下宿して居る方は曹長様ばかりだから、日曜だつて平常だつてそんなに變らぬよ。でもね、日曜は兵が遊びに来るし、それに矢張上に立てば酒位飲まして返すからね、自然と私共も忙がしくなる勘定サ。軍人は如何しても景氣が可いね』

『さうですかね』と自分は氣の無い埃摺をしたので、母は愈々氣色ばみ。

『だつて左うちやないかお前、今度の戦争だつて日本の軍人が豪いから何時でも勝つちやないか。軍人あつての日本だアね、私共は軍人が一番好きサ』

この調子だから自分は遂に同居説を持たすことが出来ない。まして品行の噂でも爲て、忠告がましいことでも言はうものなり、母は何と言つて怒鳴るかも知れない。妻

が自分を止めたも無理でない。

『學校の先生なんて、私は大嫌ひサ、ぐずぐずして眼ばかりバチつかして居る處は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ』とは曾て自分を罵つた言葉。

疣蛙が出ない中にと、自分は、

『ちよつと出て來ます、御悠寛』とこそく出てしまつた。何と意氣地なき男よ！

思へば母が大意張で自分の金を奪ひ、遂に自分を不幸のどん底まで落したのも無理はない。自分達夫婦で最初から母に吞まれて居たので、母の爲ることを怒り、恨み、罵つては見る者の、自分達の力では母を如何することも出来ないものであつた。

酒を飲まない奴は飲む者に凹まされると決定つて居るらしい。今の自分であつて見ろ！文句がある。

『母上さん、そりやア貴女軍人が一番好きでせうよ』と、じろり其横顔を見てやる。母のことだから、

『オヤ異なことを言ふね、も一度言つて御覽』と眼を釣上げて詰寄るだらう。

『御氣に觸つたら御勘辨。一ツ差上げませう』と杯を奉る。『草葉の蔭で父上が



……』とそれからさはりで行く處だが、彼の時は如何して彼の時分はあんなに野暮天だつたらう。

濱を誰か唸つて通る。彼の節廻しは吉次だ。彼奴聲は全たく美しいよ。

五月十日

外から歸つたのが三時頃であつた。妻は突伏して泣いて居る。

『如何したのだ、如何したの？』と自分は驚いて訊いたが、お政のことゆゑ、泣くばかりで容易に言ひ得ない。泣くのは此女の持前で、少しの事にも涙をこぼす。然し今度のは餘程のことが有つたと見えて、自分が聞けば聞くほど益々泣入るばかり。かうなると自分は狼狽へざるを得ない。水を持って来てやりなどすると漸くのことですく事情が解つた。

お政の苦心は十分母の満足を得なかつたのである。折角の帯も三圓にしかならず、仕方なしにお政は自分の出て行つた後で此三圓を母に渡すと、母は大立腹。二人の間答は次のやうであつた。

『五圓と言つて來たのだよ』

『でも只今これだけしか無いのですから……』

『だつて先刻用意してあると言つたぢやないか』

『ですから三圓だけ漸々作らへましたから……』

『さう？、漸々作らへてお呉れだつたのか。お氣の毒でしたね、色々御心配をかけて。必定七屋からでも持て來たお金でせう。そんな思のとツ着いた金なんか借りたくないよ。何だね人面白くも無い。可いよ今藏が歸つて來るのを待つて居るから。今藏に言ふから』

『い、エ主人では知らないのですから……』

『オヤ今藏は知らないの？驚いた、それぢやお前さんが内證でお貸なの。嘘を吐きなさんな、嘘を。今藏の奴必定三圓位で追返せとか何とか言つたのだらう。だから自分は私を避けて出て行つたのだらう。可いよ。待つて居るから。晩まで待つて待つて居てやるから』

『宅のは全く、全く知らないの……』と妻は泣いて口がきけない。

『泣かないでも可いぢやアないか。お前さんは亭主の言ひつけ通り爲たのだから可い



ぢやアないか。フン何ぞと言ふと直ぐ泣くのだ。どうせ私は鬼婆だから私が何か言ふと可怕いだらうよ』

何と言はれても一方は泣くばかり、母は一人で並べて居る。

『だから出来なきや出来ないと云つて寄せせば可いんだ。新町から青山くんだりまで三圓ばかりのお金を取りに来るやうな暇はない身體ですよ。意氣地がないから親一人妹一人養ふことも出来ずさ。下宿屋家業までさして置いて忠孝の道を兒童に教へるなんて、随分變つた先生様もあるものだね。然しお政さんなんぞは幸福さ。いくら親に不孝な男でも女房だけは可愛がるからね。お光などのやうに兵隊の機嫌まで取つて漸漸御飯を戴いていく女もあるから、お前さんなんぞ決して不足に思つちやなりませんよ』

皮肉を言ひ盡して、暫らく烟草を吹かしながら坐つて居たが、時計を見上げて、

『どうせ避けた位だからちよつくら歸つて来ないだらう。歸りませう、私も多忙しい身體だからね。お客様に御飯を上げる支度も爲なければならんし』と急に起上がつて、

『紙と筆を借りるよ。置手紙を書くから』と机の傍に行つた。

此時助が劇しく泣きだしたので、妻は抱いて庭に下りて生垣の外を、自分も半分泣きながら、ふら／＼歩いて子供を寝かしつけようとして居た。暫くすると急に母は大

聲で、  
『お政さん！お政さん！』と呼んだ。妻は座敷に上ると母は眼に角を立て睨むやうにして、

『お前さんまで逃げないでも可いよ。人を馬鹿にしてらア。手紙なんぞ書かないから、歸つたら左う言つてお呉れ。此三圓も不用いよ』と投げだして『最早私も決して來ないし、今藏も來ないが可い、親とも思ふな、子とも思はんからと言つてお呉れ！』  
非常な劍幕で母は立ち去り、妻は其まゝ泣伏したのであつた。

自分は一々聞き終つて、今の自分なら、

『宜しい！不用きや三圓も上げんばかりだ、泣くな、泣くな、可いちやないか母上さんの方から母でもない子でも無いといふのなら、致かたもないさ。無理も大概にして貰はんとな』



然し彼の時分はさうでなかつた。不孝の子であるやうに言はれて見るとひどく其が氣にかゝる。氣にかゝるといふには種々の意味が含まんで居るので、世間體もあるし、教員といふ第一の資格も缺けて居るやうだし、即ち何となく心に安んじないのである。それに三圓といふことは自分も知らなかつたのだ。其點は此方が悪いやうな氣もするので、

『困つたものだ』と腕組して暫く嘆息をして居たが、

『自分で勝手に下宿屋を行つて居ながら、そんなことを言はれて見ると、全然私共が悪いやうに聞える。可いよ、私が今夜行つて来よう。そして三圓だけ渡して来る。』

五月十一日

今日は朝から雨降り風起りて、湖水のやうな海も流石に波音が高い。山は鳴つて居る。

今夜はお露も来ない。先刻まで自分と飲んで居た若者も歸つてしまつた。自分は可い心持に酔うて居る、酔うては居るもの、如何も孤獨の感に堪へない。要するに自分は孤獨である。

人の一生は何の爲だらう。自分は哲學者でも宗教家でもないから深い理窟は知らないが、自分の今、今といふ今感ずる所は唯だ憊さだけである。

如何も人生は憊いものに違ひない。理窟は抜にして眞實の處は憊いものらしい。

若し果敢いものでないならば、たとひ人は如何な境遇に墮ちるとして自分が今感ずるやうな深い深い悲哀は感じない筈だ。

親とか子とか兄弟とか、朋友とか社會とか、人の周圍には人の心を動かすものが出来て居る。まぎらす者が出来て居る。若しこれ等が皆な消え去せて山上に樹つて居る一本松のやうに、たゞ一人、無人島の荒磯に住んで居たらどうだらう。風は急に雨は暗く海は怪しく叫ぶ時、人の生命、此地の上に住む人の一生を楽しいもの、望めるものと感ずることが出来ようか。

だから人情は人の食物だ。米や肉が人に必要物なる如く親子や男女や朋友の情は人の心の食物だ。これは比喩でなく事實である。

だから土地に肥料を施す如く、人は色々な文句を作つて此等の情を培ふのだ。

さうして見ると神様は盲く人間を作つて御座る。ではない人間は盲く猿から進化し



て居る。

「オヤ！戸をたたく者がある、此雨に、お露だ。可愛いお露だ。」

さうだ。人間は盲く猿から進化して居る。

五月十二日

心細いことを書いてる中にお露が来たので、昨夜は書き續きの本文に取りかゝらなかつた。さて――

若しお政が氣の勝つて居る女ならば、自分が其夜三圓持て母を尋ねると言へば、

『質屋から持つて来たお金なんか厭だと被仰つたのだから持つて行かなくつたつて可う御座いますよ』と言ひ放つて口惜し涙を流す處だが、お政にはそれが出来ない。母から厭味や皮肉を言はれて泣いたのは唯悲くつて泣いたので、自分が優しく慰むれば心も次第に静まり、別に文句は無いのである。

處で母は百圓盗んで歸つた。自分は今これを冷かに書くが、机の抽斗を開けて見て百圓の紙包が紛失して居るのを知つた時は、『オヤ！』と叫んださう容易に二の句がなくなつた。

『お前此抽斗を開けや爲なかつたか』

『否』

『だつて先刻入れて置いた寄附金の包みが見えないよ』

『まア！』と言つて妻は眞蒼になつた。自分は狼狽して二の抽斗を抜き放つて中を一々驗めたけれど無いものは無し。

『先刻母上さんが置手紙を書くつてお開けになりましたよ！』

『さうだ！』と自分は膝を拍つた時、頭から水を浴びたやう。唾を踏外さうとした刹那の心持。

自分は暫らく茫然として机の抽斗を眺めて居たが、我知らず涙が頬をつたうて流れる。

『餘り酷すぎる』と一語僅に洩し得たばかり、妻は涙の泉も涸れたか唯だ自分の顔を見て血の氣のない唇をわな／＼と戦はして居る。

『ぢやア母上さんが……』と言ひかけるのを自分は手を振つて打消し、

『黙つてお出で、黙つてお出で』と自分は四圍を見廻して『これから新町まで行つて』



来る」

『だつて貴所……』

『否や、母上さんに會つて取返して来る、餘りだ。餘りだ。親だつて此事だけは黙つて居られるものか。然しどうして其な淺ましい心を起したのだらう……』

自分は涙を止めることが出来ない。妻も遂に泣きだした。夫婦途方に暮れて實に泣くばかり。思へば母が三圓投出したのも、親子の縁を切るなど突飛なことを怒鳴つて歸つたのも皆な其心が見えすく。

『直ぐ行つて来る。親を盗賊に爲ることが出来ない。お前心配しないで待つてお出で、是非取りかへして来るから』と自分は大急ぎで支度し、手箱から亡父の寫眞を取り出して懐中した。

小春日和の日曜として、青山の通りは人出多く、大空は澄み渡り、風は砂を立てぬほどに吹き、人々行樂に忙がしい時、不幸の男よ、自分は夢地を辿る心地で外を歩いた。自分は今も此時を思ひだすと、東京なる都會を憎む心を起さずには居られないのである。

東宮御所の横手まで来ると突然『大河君、大河君』と呼ぶ者がある。見れば齋藤といふ、これも建築委員の一人。莞爾しながら近づき、

『如何も相濟まん、僕は全然遊んで居て。寄附金は大概集まつたらうか』

寄附金といはれて我知らずどがまざしたが『大略集まつた』と僅に答へて直ぐ傍を向いた。

『廻る所があるなら僕廻つても可いよ』

『難有う』と言つたぎり自分が躊躇して居るので齋藤は不審さうに自分を見て居たが、『イヤ失敬』と言つて去つて終つた。十歩を隔て、彼は振り返つて見たに違ひない。自分には思はず頸を縮めた。

母に會つたら、何と切出さう。新町に近づくにつれて、これが心配でならぬ。母から反對に怒鳴つけられたら、如何しようなど思ふと、母の劍幕が目先に浮んで来て、足は自と立縮む。『若し如何しても返さなかつたら』の一念が起らうとする時、自分は胸を壓つけられるやうな氣がするので其一念を打消し打消し歩いた。

『大河とみ』の表札。二階建、格子戸、見た處は小官吏の住宅らしく、女姓名だけに



金貸でも爲さうに見える。一度は引返して手紙で言はうかとも思つたが、何しろ一大事と、自分は思切つて格子戸を潜つた。

五月十三日

勝手の間に通つて見ると、母は長火鉢の向うに坐つて居て、可怕的顔して自分を迎へた。鐵瓶には徳利が入れてある。二階は兵士どもの飲んで居る最中。然も思つたより静で、妹お光の浮いた笑聲と、これに伴ふ男の太い聲は二人か三人。母はじろり自分を見ればかり一言も言はず、大きな聲で、

『お光、お銚子が出来たよ』と二階の上口を向いて呼んだ。『ハイ』とお光は下りて来て自分を見て、

『オヤ兄様』と言つたが笑ひもせず、唯だ意外といふ顔付き、其風は赤いものずくめ、如何見ても居酒屋の酌婦としか受取れない。母の可怕的顔と自分の眞面目な顔とを見比べて居たが、

『それからね母上さん、お鮎を取つて下さうつて』

『さう。幾價ばかり?』

『幾價だか。可い加減で可いでせう。それから母上さんにもお出でなさいつて』

『あア』と母は言つて妙な眼つきでお光の顔を見たが、お光は其儘自分の方は見向もしないで二階へ上つて了つた。自分は唯だ坐つたきり、母の何とか言ひだすのを待つて居た。

『何しに來たの』と母は突慥食に一言。

『先刻は失禮しました』と自分は出来るだけ氣を沈着けて左あらぬ體に言つた。

『いゝえ如何しまして。色々心配をかけて濟まなかつたね。歸る時お政さんに言つて置いたことがあるが聞いてお呉れたつたかね?』と何處までも冷やかに、憎々しげに言ひながら起上がつて、『私はお客様の用で出て來るが、用があるなら待つて居てお呉れ』と臺所口から出て去つて了つた。

自分は腕組みして熟つとして居たが、我母ながら是れ實に惡婆であるといつて、情なく、あゝまで濟まして居る處を見ると、言つたところで、無益だと思ふと寧ろそのと公けの沙汰にして終はうかとの氣も起る。然し現在の母が子の抽斗から盗み出したので、假令公金であれ、子の情として訴へる理由には如何してもゆかない。訴へるこ



とは出来ず、母からは取返すことも出来ないなら、竊かに自分で辨償するより外の手段はない。八千圓ばかりの金高から百圓を帳面で胡魔化すことは、たとひ自分に爲し得ても、直ぐ後で發覺する。又自分には左る不正なことは思つて見るだけでも身が戦へるやうだ。自分が辨償するとして其金を自分は何處から持つて来る？

思へば思ふほど自分は如何して可いか解らなくなつて來た。これは如何なことでも母から取返す外はと、思ひ定めて居ると母は外から歸つて來て、無言で火鉢の向うに坐つたが、

『如何だね、聞いてお呉れたか？』と言つて長い烟管を取上げた。

『何をですか』と自分は母の顔を見ながら言つた。

『まあ可いサ聞かなかつたのなら。然しお前の用といふのは何だね？』

自分は懷中から三圓出して火鉢の横に置き、

『これは二圓不足して居ますが、折角お政が作へて置いたのですから、取つて下さい。さう爲せんと……』

『最早不用ないよ。だから私も二度とお前達の厄介にはなるまいし。お前達も私のや

うなもの親と思はないが可い。その方がお前達のお徳ぢやアないか』

『母上さん。貴女は何故そんなことを急に仰被るのです』と自分は思はず涙を呑んだ。

『急に言つたのが悪けりや謝ります。さうだつたね、一年前位に言つたらお前達も幸福だつたのに』

何といふ皮肉の言葉ぞ。今の自分ならば決然と、

『さうですか、宜しう御座います、それぢや御言葉に従ひまして親とも思ひますまい、

子とも思つて下さいますな。子とお思ひになると飛んだお恨みを受けるやうな事も起

るだらうと思ひますから。就いては今日私の机の抽斗に百圓入れて置きました其が、

貴女のお歸りになると同時に紛失したので御座いますが、如何がでせう、若しか反古

と間違つてお袂へでもお入になりませんでしたらうか、一應お聞申します』と腹から

出た聲を使つて、グツと急所へ一本。

『何だと親を捕へて泥棒呼はりは聞き捨てになりませんぞ』と來る所を取つて押へ、

片頬に笑味を見せて、

『これは異なこと！親子の縁は切れてる筈でせう。イヤお持歸りになりませんなら其



で可う御座います、右の次第を届け出るばかりですから」と大きく出れば、いかな母でも半分落城する所だけれど、彼の時の自分に何でこんな芝居が打てよう。

悪々しい皮肉を聞かされて、グツと行きづまつて了ひ、手を拱んだまゝ、暫時は頭も得あげず、涙をほろ／＼こぼして居たが、

『母上さん、それは餘りで御座います』とやう／＼に一言、母は何所までも上手、

『何が餘りだね。それは此方の文句だよ。チョツ泣蟲が揃つて、面白くもない！』  
自分は形無し。又も文句に塞つたが、氣を引きたて、父の寫眞を母の前に置きなが

ら  
『父上さんをお伴れ申しての願で御座います。母上さん、何卒……お返しを願ひます、それでないと私が……』と漸との思で言ひだした。母は直ぐ血相變へて、  
『オヤそれは何の真似だえ。可笑なことをお爲だねえ。父上さんの寫眞が何だといふの？』

『どうか左う被仰らずに何卒お返しを。今日お持返りの物を……』

『先刻からお前可笑なことを言ふね、私お前に何を借りたえ？』

『何にも申しませんから、何卒左う被仰らずにお返しを願ひます、それでないと私の立つ瀬がないのですから……』と言はせも果てず母は火鉢を横に膝を進めて、

『怪しからんことを言ふよ、それでは私が今日お前の所から何か持つていも歸つたと  
言ふのだね、聞き捨てになりませんよ』と聲を高めて乗掛る。

『ま、ま、さう大きな聲で……』と自分はまご／＼。

『大きな聲が如何したの、いくらでも大きな聲を出すよ……さア今一度言つて御覽。事とすべに依ればお光も呼んで立合はすよ』といふ劍幕。此時二階の笑聲もびたと止んで、下を覗がひ聞耳をたて、居る様子。自分は狼狽へて言葉が出ない。もぢもぢして居ると臺所口で、『お待遠さま』といふ聲がした。母は、

『お光、お光お鮨が来たよ』と呼んだ。お光は下りて来る。格子が開いたと思ふと、『今日』と入つて来たのが一人の軍曹。自分をちよつと尻目に向け、

『御馳走様』とお光が運ぶ鮨の大皿を見ながら、ひよろついて尻餅をついて、長火鉢の横にぶつ坐つた。

『おやまあ可いお色ですこと』と母は今自分を睨みつけて居た眼に媚を浮べて、『何處



で

『ハッハッ……其は軍事上の秘密に屬します』と軍曹酒氣を吐いて、『お茶を一ぱら頂戴』

『今入れて居るぢやありませんか、性急ない兒だ』と母は湯呑に充滿注いでやつて自分の居ることは、最早忘れたかのやう。二階から大聲で、

『大塚、大塚！』

『貴所下りてお出でなさいよ』と母が呼ぶ。大塚軍曹は上を向いて、

『お光さん、お光さん！』

外所は豆腐屋の賣聲高く夕暮近い往來の氣勢。とても此様子ではと自分は急に起つて歸らうとすると、母は柔和い聲で、

『最早お歸りかえ。まア可いぢやアないか。そんなら又お來でよ』と軍曹の前を作ろつた。

外へ出たが直ぐ歸ることも出來ず、さりとて人に相談すべき事ではなく、身に降りかゝつた災難を今更の如く悲しんで、氣拔けた人のやうに當もなく歩いて溜池の傍

まで來た。

全たく思案に暮れたが、然し何とか思案を定めなければならぬ。日は暮れかゝり夕飯時になつたけれど何を食はふとも思はない。

ふと山王臺の森に鳥の群れ集まるのを見て、暫く彼所のベンチに倚つて靜かに工夫しようといふと日吉橋を渡つた。

哀れ氣の毒な先生！『見すばらしげな後影』と言ひたくなる。酒、酒、何で彼の時、蕎麥屋にでも飛込んで、景氣よく一二本も倒さなかつたのだらう。

五月十四日

寂寥として人氣なき森蔭のベンチに倚つたまゝ、何時間自分は動かなかつたらう。日は全く暮れて四圍は眞暗になつたけれど、少しも氣がつかず、たゞ腕組して折り折り嘆息を洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。

實地に就ての益に立つ考案は出ないで、斯うなると種々な空想を描いては打懐はし、又た描く。空想から空想、枝から枝が生へ、殆んど止度がない。

痴情の果から母とお光が軍曹に殺される。と一つ思ひ浮かべると、其悲劇の有様が



目の先に浮んで来て、母やお光が血だらけになつて逃げ廻る様があり〜と見える。今藏々と母は逃げながら自分を呼ぶ。自分は飛び込んで母を助けようとする。一人の兵が自分を捉へて動かさない……アツと思ふと此空想が破れる。

自分が百圓持つて銀行に預けに行く途中で、掬兒に取られた體にして届け出よう、さう爲ようと考へた、すると嫌疑が自分にかゝり、自分は拘引される。お政と助は拘引中に病死するなど又々淺ましい方に空想が移る。

校舎落成のこと、其落成式の光景、升屋の老人のよろこぶ顔までが目に見えて来る。

あゝ百圓あつたらなアと思ふと、これまで金銭のことなど左まで自分を悩ましたことのないのが、今更の如く其怪しい、恐ろしい力を感じて来る。たゞ百圓、その金銭さへあれば、母も盗賊にはなるまいものを。よし母は盗みを爲した處で、自分に其金銭が有るならば今の場合、自分等夫婦は全く助かるものをなど考へると、金銭といふ者が欲しくもあり、悪くもあり、同時に其金銭のために少しも悩まされないので、長閑かに此世を送つて居る者が羨ましくもなり、又實に憎々しくもなる。總て是等の苦々しい情は、これまで勤勉にして信用厚き小學教員、大河今藏の心には起つたことはない

ので、あゝ金銭が欲しいなアと思はず口に出して、熟と暗い森の奥を見つめた。

するとがやく〜と男女打雑じつて、ふざけながら上つて来るものがある。

『淋しいぢや有りませんか、歸りませうよ。最早こんな處つまりませんわ』といふ女の聲は確にお光。自分はぎよつとして起あがらうとしたが、直ぐ其處に近づいて来たので其儘身動きもせず様子を窺がつて居た。人々は全く此處に人あることを氣がつかぬらしい。お光が居れば母もと覗つたが女はお光一人、男は二人。

『ねえ最早歸りませうよ、母上さんが待つて居るから』と甘つたるい聲。

『何故母上さんは一所に出なかつたのだらう、君知らんかね』と一人の男が言ふと、一人、

『頭が痛むとか言つて居たつけ』といふや三人急に何か小さな聲で囁き合つたが、同時にどつと笑ひ、一人が『ヨイショ』と叫んで手を拍つた。

面白くない事が至る處、自分に着纏つて来る。三人が行き過ぐるや自分は舌打して起ちあがり、そこ〜と山を下りて表町に出た。

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たへて

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たへて



見、一方には愈々といふ最後の處置は如何するか妻とも能く相談しよう、進まぬながらも東宮御所の横手まで来て、土手について右に廻り青山の原に出た。原を横ぎる方が近いのである。

原を横ぎる時、自分は一個の手提鞆を拾つた。

五月十五日

如何して手提鞆を拾つたか其手續までくはしく書くにも當るまい、たゞ拾つたので、足にぶつかつたから拾つたので、拾つて取上げて見ると手提鞆であつたのである。

拾ふと直ぐ、金錢！といふ一念が自分の頭にひらめいた。占たと思つた、そして何となく夢ではないかとも思つた。といふものは實は山王臺で種々の空想を描いた時、若し千兩も拾つたらなど、恥かしい事だが考へたからで、それが事實となつたらしいからである。鞆は容易く開いた。

紙幣の束が三つ、他に書類などが入つて居る。星光にすかしてこれを見た時、其時自分は全く夢ではないかと思つた。それで自分が届け出るとか、横奪すること

が破廉恥の極だとか、さういふことを考へることは出来なかつた。

たゞ手短に天の賜と思つた。

不思議なもので一度、良心の力を失ふと今度は反對に積極的に、不正なこと、思ひがけぬ大罪を成るべく爲し遂げんと務めるものらしい。

自分はそつと其鞆を私宅の横に積んである材木の間に、而も巧に隠匿して、紙幣の一束を懐中して素知らぬ顔をして宅に入った。

自分の足音を聞いた。けで妻は飛起きて迎へた。助を寝かし着けて其まゝ横になつて自分の歸宅を待ちあぐんで居たのである。

『如何でした』と自分の顔を見るや。

『取り返して来た！』と問はれて直ぐ。

この答も我知らず出たので、嘘を吐く氣もなく吐いたのである。

既に斯うなれば自分は全くの孤立。母の秘密を保つ身は自分自身の秘密に立籠らねばならなくなつた。

『まア如何して？』と妻のうれしさうに問ふのを苦笑で受けて、手軽く、



『能く事わけを話したら渡した』とのみ。妻は猶ほ其様子まで詳しく聴きたかつたらしいが自分の進まぬ風を見て、別に深くも訊ねず、

『どんなに心配しましたらう。若しも渡さなかつたらと思つて取越苦勞ばかり爲てゐました』と萬斤の重荷を卸したよろこび。自分は懐に片手を入れて一件を握つて居たが未だ夢の醒めさらぬ心地がして茫然として居る。

『御飯は？』

『食つて来た』

『母上さんの處で？』

『あア』

『大變お顔の色が悪う御座いますよ』と妻は自分の顔を見つめて言ふ。

『餘り心配したせぬだらう』

『直ぐお寝みなさいな』

『イヤ帳簿の調査もあるからお前へ寝てお呉れ』と言つて自分は八疊の間に入り机に向つた。然し妻は容易に寝さうもないので、

『早くお寝みといふに』

自分はいままで、これほどの角のある言葉すら妻に向つて發したことはないのである。妻は不審さうに自分の方を見て居るやうであつたが、其中床に就いてしまつた。

自分は一度特更に火鉢の傍に行つて烟草を吸つて、間の襖を閉め切つて、漸く秘密の左右を得た。

懐からそつと盗むやうにして紙幣の束を出したが、出様子は母が机の抽斗から、紙幣の紙包を出したのと同じであつたらう。

一圓紙幣で百枚！全然註文したやう。これを數へる手はふるへ、數へ終つて自分は洋燈の火を熱と見つめた。直ぐこれを明日銀行に預けて帳簿の表を飾らうと決定したのである。

又盗まれてはと、篋筒に納うて錠を卸すや、今度は提鞆の始末、これは妻の寢静まつた後ならではと一先素知らぬ顔で床に入つた。

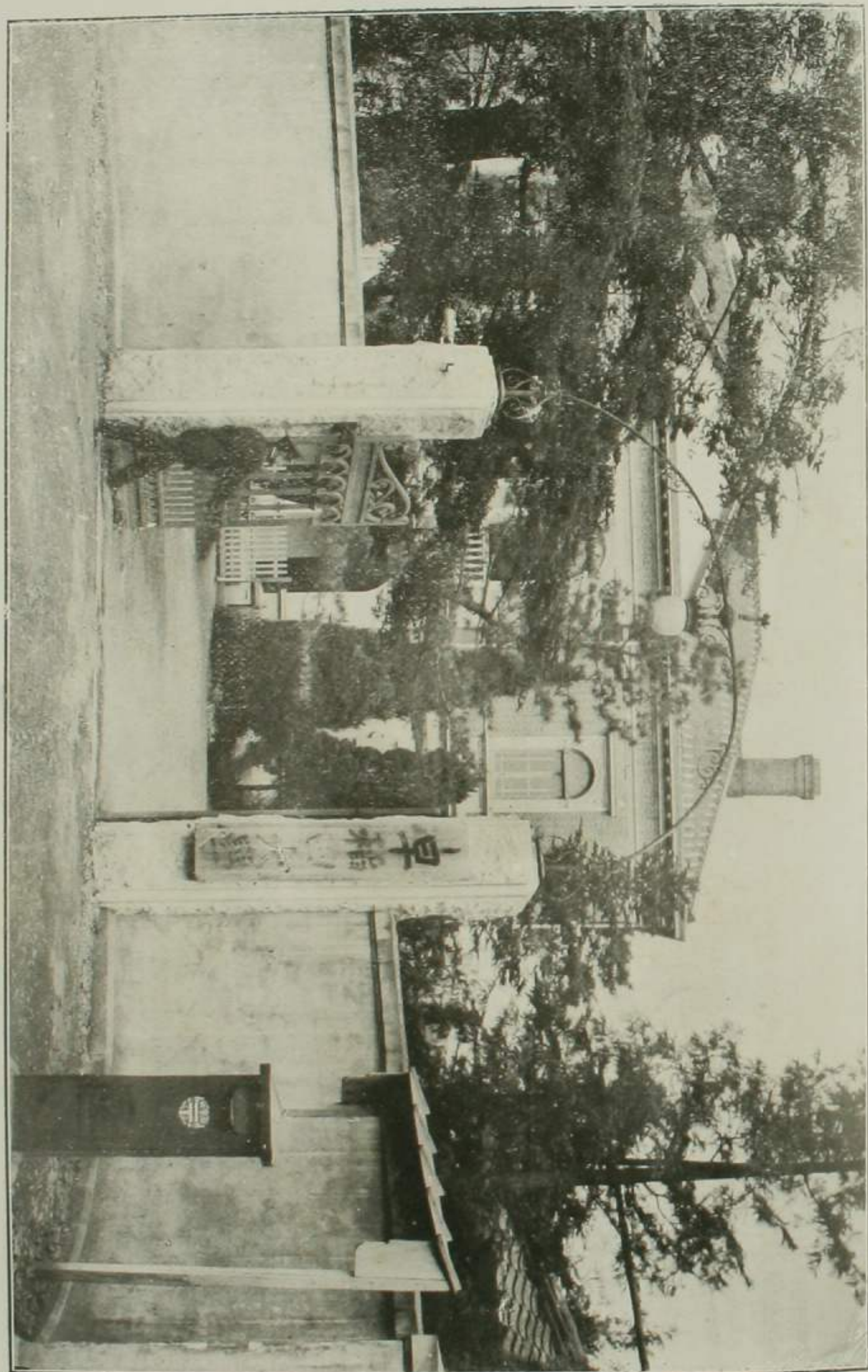
床に入つて眼を閉ちて居る時、この時には多少か良心の眼は醒めさうなものだが、實際はさうでなかつた。魔が自分に投げ與へた一の目的の爲めに、良心ならぬ猛烈の



意志は冷やかに働いて、一に妻の鼻息を覗がつて居る。斯うして二時間経ち、十二時  
 が打つや、蒼い顔のお政は死人のやうに横たはつて居るのを見届けて、前夜は盗賊を  
 疑うて床を脱け出た自分は、今度は自身盗賊のやうに前夜よりも更に静に、更に巧に、  
 寝間を出て、縁側の戸を一分又た一分に開け、跣足で外面に首尾能く出た。

星は冴えに冴え、風は死し、秋の夜の静けさ、蟲は鳴さしきつて居る。不思議なる  
 は自分が、此時かゝる目的の爲に外面に出ながら、外面に出て二歩三步あるいて暫時  
 佇立んだ時この寥々として静肅且つ壯嚴なる秋の夜の光景が身の毛もよだつまでに眼  
 に染込んだことである。今も其時の空の美しさを忘れない。そして見ると、善にせよ  
 惡にせよ人の精神凝つて雑念の無い時は、外物の印象を受ける力も亦強い者と見える。  
 材木の間から靴を取出し、難なく座敷に持運んで見ると、他の二束も同じく百圓  
 束、都合三百圓の金高が入つて居たのである。書類は請取の類。薄い帳面もあり、名  
 刺もある。遺失した人は四谷區何町何番地日向某として殺類の間屋を業として居る者  
 といふことが解つた。

心の弱い者が悪事を働いた時の常として、何かの言譯を自分が作らねば承知の出来



(練馬門東京東元) 學大田稻早しび學が步獨



ないが如く、自分は右の遺失た人の住所姓名が解るや直ぐと見事な言譯を自分で作つて、そして殆ど一道の光明を得たかのやうに喜んだ。

一先拜借！一先拜借して自分の急場を救つた上で、其中に母から取返すとも、自分で工夫して金を作るとも、何とでもして取つた百圓を再び鞆に入れ、其まゝ人知れず先方に届ける。

天の賜とは實にこの事と、無上によるこび、それから二百圓を入れたまゝの鞆を隠す工夫に取りかゝつた。然し元來狭い家だから別に安全な隠し場の有らう筈がない。思案に盡きて終に自分の書類、學校の帳簿などばかり入れて置く筆筒の抽斗に入れて其上に書類を重ねるして鍵は晝夜自分の肌身より離さないことに決定して漸つと安心した。

床に就いたと思ふと二時が打ち、がっかりして直ぐ寢入つて終つた。

五月十六日

忘れることの出来ない十月二十五日は過ぎた。翌日から自分は平時の通り授業もし改築事務も執り、表面は以前と少しも變らなかつた、母からも亦た何とも言つて來ず、



自分も母に手紙で迫る事すら放棄して丁ひ、一日一日と無事に過ぎゆいた。

然し自分は到底悪人ではない、又度胸のある男でもない。さればこそ母からも附込まれ、遂に母を盗賊にして丁ひ、遂に自分までが賊になつてしまつたのである。であるから賊になつた上で又もや悶き初めるのは當然である。總て自分のやうな男は皆な同じ行き方をするので、運命といへば運命。蛙が何時までも蛙であると同じ意味の運命。別に不思議はない。

良心とかいふ者が次第に頭を擡げて來た。そして何時も身に着けて居る鍵が氣になつて堪らなくなつて來た。

殊に自分は兒童の教員、又た倫理を受持つて居るので常に忠孝仁義を説かねばならず、善惡邪正を説かねばならず、言行一致が大切ぢやと眞面目な顔で説かねばならず、其度毎に怪しく心が騒ぐ。生徒の質問の中で、折り／＼胸を刺れるやうなのがある。中には自分の秘密を知つてあんな質問をするのではあるまいかと疑ひ、思はず生徒の面を見て直ぐ我顔を負向けることもある。或日の事、十歳ばかりの兒が來て、

「校長先生、岩崎さんが私の鉛筆を拾つて返しませんでした」と訴へて來た、拾つたとか、

失つたとか、落したとかいふ事は多數の兒童を集めて居ることゆゑ常に有り勝で怪むに足らないのが、今突然此訴へに接して、自分はドキリ胸にこたへた。

「貴所が氣をつけんから落したのだ、待てお居で、今岩崎を呼ぶから」と言つたのは全然これまでの自分にないことで、兒童は喫驚して自分の顔を見た。

岩崎といふ十二歳になる兒童を呼んで「あなたは鉛筆を拾ひはしなかつたか」と聞くと顔を赤らめてもぢ／＼して居る。

「拾つたでせう。他人の物を拾つたら直ぐ私の所へ持て出るのが當前だのに其を自分の物に爲るといふことは盗んだも同じことで、甚だ善くないことですよ。其鉛筆を直ぐ此人にお返しなさい」と嚴かに命つけた。

そんならば何故自分は他人の鞆を自分の筆筒に隠して置くのであるか。

自分は其日校務を了ると直ぐ宅に歸り、一室に踞居で、悶き苦しんだ。自首して出ようかとも考へ、夫れとも學校の方を辭職して了はうかとも考へた。此の二を撰ぶ上に就いて更に又苦しんだ。けれどいづれとも決心することが出来ない。自首した後での妻子のことを思ひ、辭職した後での衣食のことを思ひ、衣食のことよりも更に自分を



動かしたのは折角これまでに經營して校舎の改築も美々しく落成するものを捨て終ふは如何にも残念に感じたことである。

其處で一日も早く百圓の金を作るが第一と、今度はそのみに心を砕いたが、當もなんにもない。小學教員に百圓の内職は荷が勝ち過ぎる。たゞ空想ばかりに耽つて居る。起されば金銭、寝ても百圓。或日のことで自分は女生徒の一人を連れて郊外散歩に出た。其以前は能く生徒の三四人を伴うて散歩に出たものである。

美しき秋の日で身も軽く、少女は唱歌を歌ひながら自分よりか四五歩先を左も愉快さうに跳ねて行く。路は野原の薄を分けてや、爪先上の處まで来ると、ちらと自分の眼に映つたは草の間から現はれて居る紙包。自分は駆け寄つて拾ひあげて見ると内に百圓束が一個。自分は狼狽て懷中にねぢこんだ。すると生徒が、

『先生何アに?』と寄つて来て問うた。

『何でも宜しう!』

『だつて何に? 拜見な。よう拜見な』と自分にあまへてぶら下つた。

『可けないと言ふに!』と自分は少女を突飛ばすと、少女は仰向けに倒れかゝつたの

で、自分は思はずアツと叫んで之を支へようとした時、覺れば夢であつて、自分は晝飯後教員室の椅子に凭れたまゝ、轉寢をして居たのであつた。

拾つた金の穴を埋めんと悶いて又夢に金銭を拾ふ。自分は醒めた後で、人間の心の淺ましさを染々と感じた。

〇〇〇〇〇〇  
五月十七日

妻のお政は自分の様子の變つたのに驚いて居るやうである。自分は心にこれほどの苦悶のあるのを少しも外に見せないなどいふことの出来る男でない。のみならず若し妻が此秘密を知つたなら如何しようかと宅に在ては其が亦た苦勞の苦勞の一で、妻の顔を見ても、感付いては居まいかと其眼色を讀む。絶えずキョトキョトとして、そはくして安んじないばかりか、心に爛た處が有るから何でもないことで妻に角立つた言葉を使ふことがある。無言で一日暮すこともあり、自分の性質の特色ともいふべき溫和な人なつて、いとところは殆ど消え失せ、自分の性質の裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ばかり潮の退いた後の岩のやうに、ごつ／＼と現はれ残つたので、妻が内心驚いて居るのも決して不思議ではない。



温和で正直だけが取柄の人間の、其取柄を失なつたほど、不愉快な者はあるまい。澁を抜いた柿の腐敗りか、つたやうなもので、とても近よることは出来ない。妻が自分を面白からず思ひ氣味悪う思ひ、そして鬱いでばかり居て、折り／＼左も氣の無さうな嘆息を洩すのも決して無理ではない。

これを見るに就けて自分の心は愈々爛れるばかり。然し運命は永く此不幸な男女を弄ばず、自分が鞆を隠した日より一月目、十一月二十五日の夜を以つて大切と爲て呉れた。

此夜自分は學校の用で神田までゆき九時頃歸宅つて見ると、妻が助を背負つたまゝ、火鉢の前に坐つて蒼い顔といふよりか凄い顔をして居る。そして自分が歸宅つても挨拶も爲ない。眼の邊には泣きたゞらした痕の残つて居るのが明々地と解る。

此の様子を見て自分は驚いたといふよりか懼れた。懼れたといふよりか戰慄した。

『オイ如何したの？お前如何したの？』と急ぎ込んで問うたが、妻は其凄い眼で自分をちらりと見たばかりで一語も發しない。ふと氣が着いて見ると、箆笥を入た押込の襖が開け放して、例の秘密の抽斗が半分開いて居た。自分は飛び起つた。

『誰が開けたのだ』と叫んで抽斗に手をかけた。

『私が開けました』と妻の沈着き拂つた答。

『何故開けた。如何して開けた』

『委員會から帳簿を貸して呉れると言つて來ましたから開けて渡しました』とちらり自分の顔を見た。

『何だつて私の居ないのに渡した、え何だつて渡した。怪からんことだ』と喚きつゝ、抽斗の中を見ると鞆が出て居て而も口を開けたまゝである。

『お前これを見たな！』と叫んで『可し私にも覺悟がある、覺悟がある』と怒鳴りながら其儘抽斗を閉めて錠を卸し、非常な劍幕で外面に飛び出して了つた。

無我夢中で其處らを歩いて何時か青山の原に出たが矢張當もなく歩いて居る。けれども結局、妻に秘密を知られたので、別に覺悟も何にも無いのである。たゞ喫驚した餘りに怒鳴り、狼狽へた餘に喚いたので、外面に飛び出したのは逃げ出したるに過ぎない。

であるから歩いて居る中に次第に心が静まつて來た。斯うなつては何もかも妻に打



明けて、この先のことも相談しよう、さうすれば却つて妻と自分との間の今の面白くない有様から逃れ出ることも出来る、急いで宅に歸つた。

何故そんならば鞆を捨て歸つて時に相談しなかつた。と問ふを止めよ。大河今藏の筆法は萬事これなのである。

歸つて見ると妻の姿が見えない。見えないも道理、助を背負つたまゝ、裏の井戸の中に死んで居た。

お政はこれまで決して自分の錠を御して置いた處を開けるやうなどは爲なかつた。

然し何時しか自分の舉動で箆筒の中に秘密のあることを推し、帳簿を取りに寄こされたを幸に無理に開けたに相違ない。鍵は用箆筒のを用ゐたらしい。鞆の中を見て如何なにか驚いたらう。思ふに自分が盗んだものと信じたに違ひない。然し書置などは見當らなかつた。

何故死んだか。誰一人この秘密を知る者はない。升屋の老人の推測は、お政の天性憂鬱である上に病身で兎角健康勝れず、其が爲に氣がふれたに違ひないといふことである。自分の秘密を知らぬものゝ推測としては之が最も當つて居るので、お政の天性

の瘦弱なことは確に幾分の原因を爲して居る。若しこれが自分の母の如きであつたなら決して自殺など爲ない。

自分は直ぐ辭表を出した。言ふまでもなく非常に止められたが遂には、此場合無理もない、強て止めるのは却つて氣の毒と、三百圓の慰勞金で放免して呉れた。

實際自分は放免して呉れると否とに關らず、自分には最早何を爲る力も無くなつて了つたのである。人々は死んだ妻よりも生き残つた自分を憐んだ。其處で三百圓といふ類稀なる慰勞金まで支出したので、升屋の老人などの發起に成つたのである。

妻子の葬儀には母と妹も來た。そして人々も當然と思ひ、二人も當然らしく舉動つた。自分は母を見ても妹を見ても、普通の會葬者を見るのと何の變もなかつた。

三百圓を受けた時は嬉しくもなく難有くもなく又厭とも思はず、其中百圓を葬儀の經費に百圓を鞆に返し、殘の百圓及び家財家具を賣り拂つて金を旅費として飄然と東京を離れて了つた。立つ前夜密に例の手提鞆を四谷の持主に送り届けた。

何時自分が東京を去つたか、何處を指して出たか、何人も知らない。母にも手紙一つ出さず、建前が濟んで内部の雜作も半ば出来上つた新築校舎にすら一瞥も呉れない



で夜竊かに迷ひ出たのである。

大阪に、岡山に、廣島に、西へ西へと流れて遂に此島に漂着したのが去年の春。

妻子の水死後全然失神者となつて東京を出てこの方幾度自殺しようと思つたか知れない。衣食のために色々の業に従ひ、種々の人間、種々の事柄に出會ひ、雨にも打たれ風にも揉まれ、往時を想うて泣き今に當つて苦しみ、そして五年の歲月は淀み乍らも絶えず流れて遂に此今の泡の塊のやうな輕石のやうな人間を作り上げたのである。

三年前までは死んだ赤兒の泣聲がやゝもすると耳に着き、蒼白い妻の水を被つた凄<sup>あは</sup>い姿が眼の先にちらついたが、酒のお蔭で遂に追拂つて了つた。然し今でも真夜中にふと眼を覺ますと酒も大略醒めて居て、眼の先を兒を背負つたお政がぐる／＼廻つて遠くなり近くなり遂に暗の中に消えるやうなことが時々ある。然し別に可怕しくもない。お政も今は横顔だけ自分に見せるばかり。思ふに遠からず彼方向いて去つて了ふだらう。不思議なことには真面目にお政のことを想ふ時は決して其淺ましい姿など眼に浮ばないで現はれる時は何時も突然である。

可愛いお露に比べて見るとお政などは何でもない。母などは更に何でもない。

五月十九日

昨夜は六兵衛が来て遅くまで飲んだ。六兵衛の言ひ草が面白いでないか。

『お露を妻に持たせえ』

『持つても可いなわ』

『持つても可えなんチウことは言はさん、おれほど可愛いがつて居つて未だ文句があるのか』

『全く彼の女は可愛いよ、何故斯う可愛いだらう、ハハ、……』

『先方でも其えに言ふてら、如何で斯う先生が可愛いのか解らんチウて』

『左やうさ、私見たやうな男の何處が可いのかお露は無暗と可愛いがつて呉れるが妙だ。これは私にも解らんよ』

『さうで無えだ、先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。お露が可愛がるのは無理が無えだ』

『ハハ、何故や、何故や』

『何故チウて問はれると困るが、一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白い處



があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも四十年も前の情話でも爲て見たくなる、先生なら黙つて聽いて呉れさうに思はれるぜ。島中先生を好かんものは有りましねえで。お露や私を初め」

自分は如何して斯う老人の氣に入るだらう。老人といへば升屋の老人は今頃誰を對手に碁を打つて居ることやら。

六兵衛は又斯う言つた。

『先生は一度妻を持つたことが有るに違ひなからう』

『如何して知れる』

『如何してチウて、それは老人の眼には知れる』

『全く有つたよ、然し餘程以前に死んで了つた』

『ハアそれは氣の毒なことをなされました』

『けれどもね六兵衛さん、死んだ妻はお露ほど可愛くなかつたよ、何でも無かつたよ』

『それは不實だ。先生もなか／＼浮氣だの、新らしいのが可えだ』と言つて老人は笑つた。

自分も唯だ笑つて答へなかつた。不實か浮氣か、そんなことは知らない。お露は可愛い。お政は氣の毒。

酒の上の管ではないが、夫婦といふものは大して難有いものではない。別してお政なんぞ、あれは升屋の老人が呉れたので、呉れたから貰つたので、貰つたから子が出たのだ。

母もさうだ、自分を生だから自分の母だ、母だから自分を育てたのだ。そこで親子の情があれば眞實の親子であるが、無ければ他人だ。百圓盗んで置きながら親子の縁を切るなど文句が面白い。初から他人なのだ。

自分は子供の時から母に馴染まなんだ。母も自分には極めて情が薄かつた。

明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

大河今藏の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。酔に任せ起つて踊り居たるに突然水の面を見入りつ、お政々と連呼して其まゝ顛落せるなりといふ。



記者去年歸省して舊友の小學校教員に會ふ。此日記は彼の手に秘藏され居たるなり。馬島に哀れなる少女あり大河の死後四月にして兒を生む。これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。

猶ほ友の語る處に依れば、お露は美人ならねども其眼に人を動かす力あふれ、小柄なれども強健なる體格を具へ、島の若者多くは心ひそかに之を得んものと互に争ひ居たるを、一度大河に少女の心移るや、皆大河のためにこれを祝して敢て嫉むもの無かりしといふ。

お露は兒のために生き、兒は島人の何人にも抱かれ、大河は其望む處を達して島の奥、森蔭暗き墓場に眠るを得たり。

記者思ふに不幸なる大河の日記に依りて大河の總を知ること能はず、何となれば日記は則ち大河自身が書き、而して其日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さなければなり。故に余輩は彼を知るに於て、彼の日記を通して彼の過去を知るは勿論、馬島に於ける彼が日常をも推測せざる可らず。

記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ、其を言ふに忍びず、彼も亦た自己を

憐れみて、やゝもすれば曰く、あゝ不幸なる男よと。

酒中日記とは大河自から題したるなり。題して酒中日記といふ既に悲惨なり、況んや實際彼の筆を採る必ず酔後に於てせるをや。此日記を讀むに當つて特に記憶すべきは實に又この事實なり。

お政は兒を負うて彼に先ち、お露は彼に残されて兒を負ふ。何れか不幸、何か悲惨。



富岡先生



## (一)

何公爵の舊領地とばかり、詳細い事は言はれない。侯伯子男の新華族を澤山出しただけに、同じく維新の風雲に會しながらも妙な機から雲梯をすべり落ちて、遂には男爵どころか縣知事の椅子一にも有つき得ず、空しく故郷に引込んで老朽ちんとする人物も少くはない。斯ういふ人物に限つて變物である、頑固である、片意地である、尊大である、富岡先生も其一人たるを失はない。

富岡先生、と言へば其界限で知らぬ者のない許りでなく、恐らく東京に住む侯伯子男の方々の中にも、「ウン彼奴か」と直ぐ御承知の、そして眉をひそめらるゝ者も随分あるらしい程の知名な老人である。



さて然らば先生は故郷で何を爲て居たかといふに、親族が世話するといふのも拒んで、廣い田の中の一軒屋の、五間ばかりあるを、何々塾と名け、近所の青年七八名を集めて、漢學の教授をして居た。一人の末子を對手に一人の老僕に家事を任して。

此一人の末子は梅子といふ未だ六七の頃から珍らしい容貌佳しで、年頃になれば非常の美人になるだらうと衆人から噂されて居た娘であるが、果して其の通りで、年行く毎に益々美しく成る、十七の春も空しく過ぎて十八の夏の末、東京ならば學校の新學期の初まるも遠くはないといふ時分のこと、法學士大津定二郎が歸省した。

富岡先生の何々塾から出て(無論小學校に通ひながら漢學を學び)遂に大學まで卒業した者が其頃三名ある、此三名とも梅子嬢は乃公の者と自分で決定て居たらしいことは略世間でも嗅ぎつけて居た事實で、これには誰も異議がなく、但し三人の中何人が遂に梅子嬢を連れて東京に歸り得るか、他所ながら指を啣へて見物して居る青年も少くはなかつた。

法學士大津定二郎が歸省した。彼は三人の一人である。何峠から以西、何川邊までの、何町、何村、字何の何といふ處々の家の、種々の雑談に一つ新しい興味ある問題

が加はつた。愈々大津の息子はお梅さんを貫ひに歸つたのだらう。旨く行けば後の高山の文さんと長谷川の息子が失望するだらう。何に田舎でこそお梅さんは美人ぢやが東京に行けば彼の位の女は澤山にありますから後の二人だつてお梅さんばかり狙うても居らんよ、など躍鬼になりて討論する婦人連もあつた。

或日の夕暮、一人の若い品の佳い洋服の紳士が富岡先生の家の前に停止まつて、頻りと内の様子を窺つてはもぢ〜して居たが遂に門を入つて玄關先に突立つて、

『お頼みします』といふ聲さへ少し顫へて居たらしい。

『誰か來たぞ!』と怒鳴つたのは確に先生の聲である。

襖が靜に開いて現はれたのが梅子である。紳士の顔も梅子の顔も一時にさつと紅をさした。梅子はわづかに會釋して内に入つた。

『何だ、大津の定さんが來た?、ずん〜お上りんさいと言へ!』先生の太い聲がかり〜と聞えた。

大津は梅子の案内で久しぶりに富岡先生の居間、即ち彼が其昔漢學の素讀を授つた室に通つた。無論大學に居た時分、一夏歸省した時も訪うた事はある。



老漢學者と新法學士との談話の様子は大概次の如くであつた。

「ヤア大津、歸省つたか」

「兎も角法學士に成りました」

「それが何だ、エ？」

「内務省に出る事に決まりました、江藤さんのお世話で」

「フンさうか、其で目出度いといふのか。然し江藤さんとは全體誰の事ぢや」

「江藤侯のことで……直文さんのことで」

「ウーン三輔のことか、さうか、三輔なら三輔と早く言へば可えに。時に三輔は達者かな」

「相變らず元氣で御座います」

「フンさうか、其は結構ぢや、狂之助は？」

「御丈夫のやうで御座います」

「さうか、今度逢つたら乃公が宜く言つたと言つとくれ！」

「承知致しました」

「ちつと手紙でもよこせと言へ。エ、侯爵面して古い士族を忘れんと言へ。全體彼奴等に頭を下げてペコ〜と頼み廻るなんちふことは富岡の塾の名汚しだぞ。乃公に言へば乃公から彼奴等に一本手紙をつけてやるのに。彼奴等は乃公の言ふことなら聽かん理由にいかん」

先づこんな調子。それで富岡先生は平氣な顔して御座る。大津は間もなく辭して玄關に出ると、梅子が送つて來た。大津は梅子の顔を横目で見て、「また其内」とばかりすたこらと門を出て吻と息を吐いた。

「だめだ！、まだ彼の傲慢狂氣が治らない。梅子さんこそ可い面の皮だ。フン人を馬鹿にして居る」と薄暗い田圃道を辿りながら呟やいたが胸の中は餘り穩でなかつた。

五六日経つと大津定二郎は黒田の娘と結婚の約が成つたといふ噂が立つた。これを聞いた者の多くは首を傾けて意外といふ顔色をした。然し事實全くさうで、黒田といふ地主の娘玉子嬢、容貌は梅子と比べると餘程落ちるが、縣の女學校を卒業して丁度歸郷つたばかりの所を、友人某の奔走で遂に大津と結婚することに決つたのである。妙なもので斯う決定ると、サアこれからは長谷川と高山の競争だ、お梅さんは何方の



物になるだらうと、大聲で喋舌る馬面の若い連中も出て来た。  
 所で大津法學士は何でも至急に結婚して歸京の途中を新婚旅行といふことにしたいと申出たので大津家は無論黒田家の騒動は尋常でない。此兩家とも田舎では上流社會に位するので、祝儀の禮が引きもきらない。村落に取つては都會に於ける岩崎三井の祝事どころではない、大變な騒ぎである。兩家は必死になつて婚儀の準備に忙殺されて居る。

其の愈々婚禮の晩といふ日の午後三時頃でもあらうか。村の小川、海に流れ出る最近の川柳繁れる小陰に釣を垂る、二人の人がある。其一人は富岡先生、其一人は村の校長 細川繁、これも富岡先生の塾に通つたことのある二十七歳の成年男子である。二人は間を二三間隔て、糸を垂れて居る。夏の末、秋の初の西に傾いた鮮やかな日影は遠村近郊小丘樹林を隈なく照らして居る、二人の背は此夕陽をあびて其傾いた麥藁帽子と其の白い浴衣地とを真ともに照りつけられて居る。

二人とも餘り多く話さないで何となく物思に沈んで居たやうであつたが、突然校長の細川は富岡老人の方を振向いて、

『先生は今夜大津の婚禮に招かれましたか』

『ウン招ばれたが乃公は行かん！』と例の太い聲で先生は答へた。實は招かれて居ないのである。大津は何と思つたか其舊師を招かなかつた。

『貴様は如何ぢや？』

『大津の方から此頃は私を相手にせんやうですから別に招もしませぬ』

『招んだつて行くな。彼な輕薄な奴の處に誰が行く馬鹿があるか。彼な奴にやア黒田の娘でも惜い位だ！、彼から見ると同じ大學を出ても高山や長谷川は人間が一等上だのう、其中でも高山は餘程見込がある男だぞ』

細川繁は黙つて何にも言はなかつた、たゞ水面を凝視めて居る。富岡老人も黙つて了つた。

暫くすると川向の堤の上を三三人話しながら通るものがある。川柳の蔭で姿は能く見えぬが、帽子と洋傘とが折り々々木間から隠見する。そして聲音で明らかに一人は大津定二郎、一人は友人某、一人は黒田の番頭といふことが解る。富岡老人も細川繁も思はず聞耳を立てた。三人は大聲で笑ひ興じながら丁度二人の對岸まで来た。二人



の此處に蹲踞んで居ることは無論氣がつかない。  
 「だつて貴方は富岡のお梅嬢に大變熱心だつたと言ひますぜ」これは黒田の番頭の聲である。

「嘘サ、大嘘サ、お梅さんは善いにしても彼頑固爺の婿になるのは全く御免だからなア！ハツハツ……お梅さんこそ可憐さうなものだ。彼の高慢狂氣のお蔭で世に出ることが出来ない！」これは明らかに大津法學士の聲である。

三人は一度に「ハツハツハツ……」と笑つた。富岡老人釣竿を投出してぬツくと起上がった。屹度三人の方を睨んで「大馬鹿者！」と大聲に一喝した。此物凄い聲が川面に鳴り響いた。

對岸の三人は喫驚したらしく、其と又氣がついたかして忽ち聲を潜め大急ぎで通り過ぎて了つた。

富岡老人は其儘三人の者の足音の聞こえなくなるまで對岸を白眼んで居たが、次第に眼を遠くの禿山に轉じた。姫小松の生えた丘は靜に日光を浴びて居る、其鮮やかな光の中にも自然の風物は何處ともなく秋の寂寥を帯びて人の哀情をそゝるやうな氣味

がある。背の高い骨格の逞しい老人は凝然と眺めて、折り／＼眼をしばたゝいて居たが、何時しか先きの氣勢にも似ず左も力なさうに細川繁を振り向いて、

「オイ貴公此道具を宅まで運んでお呉れ、乃公は歸るから」

言ひ捨て、去つて了つた。校長の細川は取殘されて見ると面白くないが、それも糸を垂れて居た。實は頻りと考へ込んで居たのである。暫時するとこれも力なげに糸を巻き籠を水から上げて先生の道具と一緒に肩にかけ、程遠からぬ富岡の宅まで行つた。庭先で、

「老先生如何かしたのか喃」と老僕倉藏が聲を潜めて問うた。

「イヤ如何もなさらん」

「でも様子が少し違ふから私又如何かなされたかと思つて」

「先生今何をしてお出でる？」

「寝て居なさるが枕頭に嬢様呼んで何か細い聲で話してお出でるやうで……」

「どうか」

「まア上つて晩まで遊んでお出でなされませえの」



『晩にでも来る!』

細川は自分の竿を擔いで籠をぶら下げて、浮かぬ顔をして、我家へと歸つた。この時が四時過ぎでもあらう。家では老母が糸を紡いで居た。

其夜の八時頃、丁度富岡老人の平時晩酌が済む時分に細川校長は先生を訪うた。田圃道をちらちらする提燈の數が多いのは大津法學士の婚禮があるからで、校長も其席に招かれた一人二人に途で逢つた。逢ふ度毎に皆な知る人であるから二言三言の挨拶はしたが、可い心持はしなかつた。

富岡の門まで行つて見ると門は閉つて、内は寂然として居た。校長は不審に思つたが門を叩く程の用事もないから、其處らを、物思に沈みながらぶら下げて居るともなく老僕倉藏が田圃道を大急ぎで遣つて來た。

『オイ倉藏、先生は最早お寝になつたのかね?』

『オヤ!、細川先生、老先生は今東京へお出發になりました!』と呼吸をはずまして老僕は細川の前へ突立つた。

『東京へ?!』細川は聲も喉に塞つたらしい。

『ハア東京へ!』

『マア如何したのだらう!お梅さんは?』

『御一緒に』

『マア如何したのだらう!』校長は喫驚すると共に、何とも言ひ難き苦惱が胸を壓して來た。心も空に、氣は氣でない。倉藏は門を開けながら、

『マアお入りなされの』

校長は後について門を入り縁先に腰をかけたが、それも殆ど夢中であつたらしい。

『マア先生は何にも知らないのかね?』

『乃公が何を知るものか、今日釣に行つて居たが老先生は何にも言はんからの』

『さうかの?』と倉藏は不審な顔色をして煙草を吸ひ初めた。

『貴公理由を知らんかね?』

『私唯だ倉藏これを急いで村長の處へ持つて行けと命令りましたから其手紙を村長さん處へ持つて行つて歸宅つて見ると最早支度が出来て居て、私直ぐ停車場まで送つて今歸つた處ぢやがの、何知るもんかヨ』



『フーン』と校長考へて居たが『何日頃歸ると言はれた？』

『老先生は十日許りしたら歸る。それも能くは解らんちうて……』

『さうか……』と校長は嘆息をして居たが、

『また来る』と細川は突然富岡を出て、其足で直ぐ村長を訪うた。村長は四十何歳といふ分別盛りの男で村には非常な信用があり財産もあり、校長は何時も此人を相談相手にして居るのである。

『貴方富岡先生が東京へ行つた事を知つて居るか』と校長細川は座に着くや着かぬに問ひかけた。

『知つて居るとも、先刻倉藏が先生の手紙を持つて來たが、不在中家の事を頼むと書いてあつた』と村長は夜具から頭ばかり出して話して居る。大津の婚禮に招かれたが風邪をひいて出ることが出来ず、寝て居たのである。

『如何いふ理由で急に上京したのだらう？』

『そんな理由は手紙に書いてなかつたが、大概想像が着くぢやアないか』と村長は微笑を帯びて細川の顔をじろく見ながら言つた。彼は細川が梅子に人知れず思を焦が

して居ることを看破て居たのである。

『私には解せんア』と校長は嘆息を吐いた。

『解せるぢやアないか、大津が黒田のお玉さんと結婚したいらう、富岡先生少し當が外れたのサ、其處で宜しい此處にも其積りがあるとお梅嬢を連れて東京へ行つて江藤侯や井下伯を押廻してオイ井下、娘を頼む位なことだらうヨ』

『さうか知らん？』

『さうとも！それに先生は平常から高山々と贊めちぎつて居たから多分井下伯に言つてお梅嬢を高山に押付ける積りだらう、可いサ高山もお梅嬢なら兼て狙つて居たのだから』

『さうか知らん』と細川の聲は顫へて居る。

『さうとも！それで大津の鼻をあかしてやらうと言ふんだらう。可いサ、先生も最早あれで餘程弱つて御座るから早くお梅嬢のことを決めたら肩が安まつて安心して死ぬるだらうから』

村長は理の當然を平氣で語つた。一つには細川に早く思ひあきらめさしたい積り



で。

『全くさうだ、先生も如彼見えても長くはあるまい！』と力なまゝうに言つて、校長は間もなく村長の宅を辭した。

憐むべし細川繁！彼は全く失望して了つた。其失望の中には一の苦惱が雜つて居る。彼は『我若し學士ならば』といふ一念を去ることが出来ない。幼時は小學校に於て大津も高山も長谷川も凌いで居た。富岡の塾でも一番出來が可かつた。先生は常に自分を最も愛して御座つた。然るに自分は家計の都合で中學校にも入る事が出來ず、遂に官費で事が足りる師範學校に入つて卒業して小學教員となつた。天分に於ては決して彼等二三子には劣らないが、今では富岡先生すら何とかかんとか言つても矢張り自己よりか大津や高山を非常に優つた者のやうに思つてお梅嬢に熨斗を附けようとする！残念なことだと彼は戀の失望の外の言ひ難き恨を呑まなければならぬことゝなつた。然し彼は資性篤實で又能く物に堪へ得る人物であつたから、此苦惱の爲めに校長の職務を怠るやうなことは爲ない。平常のやうに平氣の顔で五六人の教師の上に立ち數百の兒童を導いて居たが、暗愁の影は何處となく彼に伴うて居る。

## (111)

富岡先生が突然上京してから一週間のことであつた。先生は梅子を伴うて歸つて來た。校長細川は『今歸つたから今夜遊びに來い』との老先生の手紙を讀んだ時には思はず四邊を見廻した。

自分勝手な空想を描きながら急いで往つて見ると、校長は最早座に居て酒が初まつて居た。梅子は例の如く笑を含んで老父の酌をして居る。

『ヤ細川！突如に立つたので驚いたらう。何急に東京を娘に見せ度くなつてのう、十日許りも居る積りぢやつたが癢に觸ると許りだつたから三日居て立つて了つた。今も話して居る所ぢやが東京に居る故國の者は皆なだめだぞ、碌な奴は一匹も居らんぞ！』校長は全然何のことだか、煙に捲かれて了つて言ふべき言葉が出ない、たゞ富岡先生と村長の顔を見比べて居るばかりである。村長は怪しげな微笑を口元に浮べて居る。『えエまア聞いて呉れ斯うだ。乃公は娘を連れて井下聞吉の所へも江藤三輔の所へも行つた、えエ、故國からわざわざ、乃公が久しぶりに娘まで連れて行つたのだから何とか物の言ひ方も有らうぢやア、其を何だ！候爵顔や伯爵顔を遠慮なくさらけ出して其傲



慢無禮な風たら無かつた。乃公もグイと癪に觸つたから半時も居らんでずん／＼宿へ歸つてやつた」と一杯一呼吸に飲み干して校長に差し、

「それも彼奴等の癖だからまあ可えわ、辛棒出来んのは高山や長谷川の奴らの様子だ。オイ細川、彼等全然でだめだぞ、大津と同じことだぞ、生意氣で猪小才で高慢な顔をして、小官吏になれば斯も増長されるものかと乃公も愛憎が盡きて了うた。業が衰えて堪らんから乃公は直ぐ歸らうと支度を爲て居ると、丁度高山がやつて来て驚いた顔をして斯う言ふのだ。折角連れて来たのだから娘だけは井下伯にでも預けたら如何だらう、井下伯もせめて娘だけでも世話をしてやらんと富岡が可憐さうだと言つて、大變乃公を氣の毒がつて居たと斯う言ふぢやアないか、乃公は突然彼奴の頭をばかり一本參つてやつた。何だ貴様まで乃公を可憐さうだとか何とか思つて居るのか、其な積りで娘を預けると言ふのか、大馬鹿者！と怒鳴つけて呉れた」

「そして高山は如何しました」と校長は僅かに一語を發した。  
 「如何するものか眞赤な顔をして逃げて去つて了うた、それから直ぐ東京を立つて何處へも寄らんでずん／＼歸つて來た」

「それは詰りませんでしたね、折角おいになつて」と校長はをす／＼しながら言つた。

先生の氣焔は益々昂まつて、例の昔日譚が出て、今の侯伯子男を片端から罵倒し初めたが、村長は折を見て辭し去つた。校長は先生が饒舌り疲ふれ酔ひ倒れるまで辛棒して氣焔の的となつて居た。歸る時梅子は玄關まで送つて出たが、校長何となくこついて居た。田圃道に出るや、彼は此數日の重荷が急に輕くなつたかのやうに、いそいそと路を歩いたが、我家に着くまで殆ど路を如何來たのか解らなんだ。

## (三)

其翌々日の事であつた、東京なる高山法學士から一通の書狀が村長の許に届いた。其文意は次の如くである。

富岡先生が折角上京されたと思ふと突然歸國された。夫れに就て自分は心に胸を痛めて居る、先生は相變らず偏執して居られる。我々は勿論先輩諸氏も決して先生を冷遇するのではないが先生の方で勝手にさう決めて怒つて居られる、實に困つた者で手の着けようがない。實は自分は梅子嬢を貰ひたいと兼ねて思つて居たのであるから、



井下伯に頼んで梅子嬢だけ滞めて置いて後から交渉して貰ふ積りで居た。然るに先生の突然の歸國で其計畫も晝餅になつたが残念でならぬ。自分は容貌の上のみで梅子嬢を思つて居るのでない。御存知の通り實に近頃の若い女子には稀に見る處の美しい性質を以て居られる。自分は随分東京で種々の令嬢方を見たが梅子嬢ほどの癖のない、すらりとした、すなはなる女を見たことはない。女子の特質とも言ふべき柔らかな何處までも優しい處を梅子嬢は十二分に有つて居られる。これには貴所も御同感と信ずる。若し梅子嬢の缺點を言へば剛といふ分子が少い事であらう。併し完全無缺の人間を求めるのは求める方が愚である。女子としては梅子嬢の如き寧ろ完全に近いと言つて宜しい。或は剛の分子の少い處が却つて梅子嬢の品性に一段の奥ゆかしさを加へて居るのかも自分と思ふ。自分は決して浮きたる心でなく眞面目に此少女を敬慕して居る、何卒、貴所も自分のため一臂の力を貸して、老先生の方を旨く説いて貰ひたい。彼老人程舵の取り難い人はないから貴所が其所を巧にやつて呉れるなら此方は又井下伯に頼んで十分の手順をする、何卒宜しく御頼みします。

此の邊は貴所に於て決して遺漏はないと信ずるが、元來老先生と雖も人並の性情を有つて居るから了解することは能く了解する人である。たゞ其資質に一點我慢強い處のある上に、維新の際妙な行きが、りから脇道へそれて遂に成るべき功名をも成し得ず、同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舎の老先生たるを見、且つ思ふ毎に其性情は益々荒れて來て、其が慣ひ性となり遂には煮ても焼いても食へぬ人物となつたのである。であるから老先生の心底には常に二個の人が相戦つて居る、其一人は本來の富岡氏、其一人は其經歷が造つた富岡先生。そして富岡先生は常に猛烈に常に富岡氏を壓服するに慣れて居る。其結果として富岡氏が希望し承認し或は飛びつき度い程に望んで居ることも、彼の執拗れた焦熬して居る富岡先生の御機嫌に少しでも觸らうものなら直ぐ一撃のもとに破壊されて了ふ。此邊の處は御存知でもあらうが能く御注意あつて、十分機會を見定めて話して貰ひ度い。

といふ意味を長々と熱心に書いてある。村長は委細を吞込んで、何卒機會を見て旨く此縁談を纏めたいものだと思つた。

三日ばかり経つて夜分村長は富岡老人を訪うた。機會を見に行つたのである。然る



に座に校長細川あり、酒が出て居て老先生の氣焔頗る凄じかつたので長居を爲すに歸つて了つた。

其後五日経つて、村長は午後二時頃富岡老人を訪ふ積りで其門まで來た。さうすると先生の聲で、

『馬鹿者！貴様まで大馬鹿になつたか？何が可笑しいのだ、大馬鹿者！』

と例の大聲で罵るのが手に取るやうに聞えた。村長は驚いて誰が叱咤られるのかと其まゝ足を停めて聞耳を聳て居ると、内から老僕倉藏がそつと出て來た。

『オイ倉藏、誰だな今怒鳴られて居るのは？』村長は私語いた。倉藏は手を以て之を止めて、村長の耳の傍に口をつけて、

『お嬢様が叱咤られて居るのだ』

『エッお嬢様が？』と村長は眼を開腫つた。其筈で、梅子は殆ど富岡老人に從來一言たりとも叱咤れたことはない。梅子に對しては流石の老先生も全で子供のやうで、其父子の間の如何にも平穩にして情愛こまやかなるを見る時は富岡先生實に別人のやうだと誰しも思つて居た位。

『マア如何して？』村長は驚いて訊ねた。

『如何してか知らんが今度東京から歸つて來てからといふものは、毎日酒ばかり飲んで居て、今まで御嬢様にはあんなに優しくかつた老先生が此二三日はちよつとしたことにも大きな聲をして怒鳴るやうにならしやつた。私も手の着けやうがないので困つて居た處で御座りますよ』さも情なさうに言つて、

『あの様子では最早先が長くは有りませぬえ、不吉なことを言ふやうぢやが……』と倉藏は眼を瞬たいた。此時老先生の聲で

『倉藏！倉藏！』と呼ぶ聲が座敷の縁先でした。倉藏は言葉を早めて、益々小さな聲で、

『然し晩になると大概校長さんが來ますから其時だけは幾分か機嫌が宜えだが校長さんも感心に如何なんと言はれても逆らはないで温和うして居るもんだから何時か老先生も少しは機嫌が可くなるだ……』

『倉藏！倉藏は居らんか！』と又も老先生の太い聲が響いた。

倉藏は目禮したまゝ、大急ぎで庭の方へ廻つた。村長は腕を組んで暫時考へて居た



が歎息をして、自分の家の方へ引返した。

## (四)

村長は高山の依頼を言ひ出す機會の無いのに引きかへて校長細川繁は殆ど毎夜の如く富岡先生を訪うて十時過ぎ頃まで談して居る。談話をすると言ふよりか寧ろ其思痴やら悪口やら氣焰やら自慢嘸やらの的になつて居る。先生は此頃になつて酒を被ること益々甚だしく倉藏の言つた通り其言語が益々荒らしく其機嫌が愈々難かしくなつて來た。殊に變つたのは梅子に對する舉動で、時によると『馬鹿者！死んで了へ、貴様の在るお蔭で乃公は死ぬことも出來んわ！』とまで怒鳴ることがある。然し梅子は能くこれに堪へて愈々從順に介抱して居た。其處で倉藏が、

『お嬢様、マア貴嬢のやうな人は御座りませぬぞ、神様のやうな人とは貴嬢のことで御座りませぬぞ、感心だなア……』と老の眼に涙をほろ／＼こぼすことがある。

斯な風で何時しか秋の半となつた。細川繁は風邪を引いて居たので四五日先生を訪ふことが出來なかつたが熱も去つたので或夜七時頃から出かけて行つた。

家内が珍らしくも寂然として居るので細川は少し不審に思ひつゝ座敷に通ると、先

生の居間の次ぎの間に梅子が一人裁縫をして居た。細川が入つて來ても頭を上げないので、愈々訝かしく能く見ると蒼ざめた頬に涙が流れて居るのが洋燈の光にあり／＼と解る。校長は喫驚りして、

『お梅さん如何かしたのですか』と驚惶しく訊ねた。梅子は猶も頭を垂れたまゝ、運ばす針を凝視めて黙つて居る。此時次の室で、

『誰だ？』と老先生が怒鳴つた。

『私で御座います。細川で御座います』

『此方へ入らんで何をして居るのか、用があるからちよつと來い！』

『唯今』と校長が起たうとした時、梅子は急に細川の顔を見上げた、そして涙がはらはらと其膝にこぼれた。ハツと思つて細川は躊躇うたが、一言も發し得ない。止まることも出來ないで其儘先生の居間に入つた。何とも知れない一種の戰慄が身うちに漲つて、坐つた時には彼の顔は眞蒼になつて居た。富岡老人は床に就いて居て其枕許に薬櫃が置いてある。

『オヤ何所かお悪う御座いますか』と細川は搾り出すやうな聲で漸と言つた。富岡老



人一言も發しなさい。一間は寂として居る。細川は呼吸も塞るべく感じた。暫くすると、

『細川！ 貴公は乃公の所へ元來何をしに来るのだ、エ？』

寝たまゝ、富岡先生は人を壓しつけるやうな調子、人を嘲けるやうな聲音で言つた。

細川は一語も發し得ない。

『エ、元來何をしに来るのだ？ 乃公の見舞に来るのか。娘の御機嫌を取りに来るのか、エ？ 返事をせえ！』

校長は眼を閉り齒を喰ひしばつたまゝ、頭を垂れ兩の拳を膝に乗せて居る。

『貴公は娘を狙つて居るナ！ 乃公の娘を自分の物にしたいと狙つて居るナ！ ふん』

細川の拳は震へて居る。

『貴公よく考へて見ろ！ 貴公は高が田舎の小學校の校長ぢやアないか。同じ乃公の塾に居た者でも高山や長谷川は學士だ、それにさへ乃公は娘を與らんのだぞ。身の程を知れ！ 馬鹿者！』

校長の顔は見る／＼紅をさして來た。其握りしめた拳の上に熱涙がはら／＼と落ちた。侯爵伯爵を罵る口から能くも其な言葉が出る。矢張り人物よりも人爵の方が先生

には難有いのだらう。見下げてた方だと口を衝いて出ようとする一語を彼はじつと俵へて居る。此先生の言としては怪むに足らない、若し理窟を言つて對抗する積りなら初めから此家に入をしないのである。と彼は思ひ返した。

『エ、それとも如何しても娘が欲しいと言ふのか、コラ！』

校長は一語を發しなさい。

『判然と言へ！ 如何しても欲しいと言ふのか、男らしく言へ、コラ！』

細川はきつと頭をあげた。

『左様で御座います！ 梅子さんを私の同伴者に貰ひたいと常に願つて居ります！』

『きつぱりと言ひ放つて老先生の眼睛を正視した。』

『若し乃公が與らぬと言つたらどうする？』

『致し方が御座いません！』

『歸れ！ 招喚にやるまでは來るな、歸れ！』と老人は言放つて寢返りして反對を向いて了つた。

細川は直ちに起つて室を出ると、突伏して泣いて居た梅子は急に起つて玄關まで送



つて来て、

『貴下何卒父の言葉を氣になさらないで……御存知の通りな氣性で御座いますから！』とをろく／＼聲で言った。

『イ、エ決して氣には留めません、何卒先生を御大切に、貴嬢も御大事……』終まで言ふ能はず、急いで門を出て了つた。

其夜細川が自宅に歸つたのは十二時過ぎであつた。何處を徘徊して居たのか、眞蒼な顔色をして左も困憊して居る様子を寝ないで待つて居た母親は不審さうに見て居たが、

『お前又た風邪を引きかへしたのぢやアないかの、未だ十分でないのに餘り遅くまで夜あるきをするのは可くないよ』

『何に格別の事は御座いません』と細川は何氣なく言つて其の儘自分の居間へ入つた。母親は其後姿を見送つてそつと歎息をした。

(五)

其翌日より校長細川は出勤して平常の如く職務を執つて居たが、彼の胸中には生れ

落ちて以來未だ経験したことのない苦惱が燃えて居るのである。

若し富岡先生に罵られたばかりなら、彼は何とかして思切るはうに悶いたであらう。其煩悶も苦痛には相違ないが、これ戦である、彼の意力は克く此惱に堪へたであらう。

然し今の彼の苦惱は自ら解く事の出来ない惑である、『何故梅子は彼晩泣いて居たらう。自分が先生に呼ばれて其居間に入る時、梅子は何故あんな相貌をして涙を流して自分を見たらう。自分が先生に向つて自分の希望を明言した時に梅子は隣室で聞いて居たに違ひない。若し自分の希望を全く否む心なら自分が歸る時あんなに自分を慰める筈はない……』

『梅子は自分を愛して居る。少くとも自分が梅子を戀ひて居ることを不快には思つて居ない』との一念が執念くも細川の心に盤居まつて居て彼は如何しても之を否むことが出来ない。然し梅子が平常何人に向つても平等に優しく何人に向つても特種の情態を示したことの無いだけ、細川は十分この一念を信ずることが出来ぬ。梅子が泣いて見あげた眼の訴ふるが如く謝るが如かりしを想起す毎に細川はうつとりと夢見心地に



なり狂はしきまでに戀しさの情燃えたつのである。戀、惑、そして恥辱、夢にも現にも此苦惱は彼より離れない。

或時は斷然倉藏に頼んで竊かに文を送り、我情のまゝを梅子に打明けんかとも思ひ、夜の二時頃まで眠らないで筆を走らしたことがある。然し彼は思返して其手紙を破つて了つた。斯ういふ風で十日ばかり経つた。或日細川は學校を終へて四時頃、丘の麓を例の如く物思に沈みつゝ歸つて來ると、倉藏に出遇つた。倉藏は手に藥櫃を持つて居た。

『先生！如何して此頃は全然お見えになりませんか？』倉藏はない／＼様子を知りながら素知らぬ風で問うた。

『老先生の御病氣は如何かね？』と校長も亦た倉藏の間に答へないで富岡老人の様子を訊ねた。

『此頃はめつきりお弱りになつて始終床にばかり就いて入らつしやるが、別に此處と云うて悪い風にも見えねえだ。然し最早長くは有りませぬえよ！』と倉藏は歎息をした。

『ふうん、さうかな、一度見舞に行きたいのだけれど……』と校長の聲も様子も沈んで了つた。

『お出なされませ、關ふもんかね、疳癩まぎれに何言うたて……』

『それも然うだが……お梅さんの様子は如何だね？』と思切つて問うた。

『何だか此頃は始終鬱いばかり御座るが、見て居ても可哀さうでなんねえ、ほんとに嬢さんは可哀さうだ……』と涙にもろい倉藏は傍を向いて田圃の方を眺め最早眼をしばたゝいて居る。

『困つたものだナ、先生は相變らず喧ましく言ふかね？』

『ナニ此頃は老先生も何だか床の中で半分眠つてばかり居て餘り口を利かねえだ』

『妙だねえ』と細川は首をかしげた。

『これまで病つたことは有つても今度のやうに元氣のないことは無えが、矢張り長くない徴であるらし』

『さうかも知れん！』と細川は眉を擧げた。

『それに何だか我が折れて愚に還つたやうな風も見えるだ。それを見ると私も氣の毒



でならん。喧ましい人は矢張喧しうして居て呉れる方が可えと思ひなされ」

『今夜見舞に行つて見ようか知らん』

『是非來なざるが可え、關ふもんか！』

『うん……』と細川は暫時く考へて居たが、『お梅さんに宜しく言つてお呉れ』

『かしこまりました、是非今夜來なざるが可え』

細川は軽く點頭き、二人は別れた。いろ／＼と考へ、種々に悶いて見たが校長は遂に其夜富岡を訪ふことが出来なかつた。

それから三日目の夕暮、倉藏が眞面目な顔をして校長の宅へ來て、梅子からの手紙を細川の手に渡した。細川が喫驚して目を圓くして倉藏の顔を見て居るうちに彼は挨拶も爲ないで歸つて了つた。

梅子からの手紙！細川繁の手は慄へた。無理もない、曾て例のないこと、又有り得べからざること、細川に限らず、梅子を知れる青年の何人も想像することの出来ないことである！

封を切つて讀み下すと、頗る短い文で、たゞ父に代つて此手紙を書く。今夜直ぐ來て

貰ひたい是非とのことである。何か父から急にお話したいことがあるさうだとの意味。

細川は直ぐ飛んで往つた。『呼びにやるまで來るな！』との老先生の言葉は今更のやうに怪しう思つて、彼は途々この一言を胸に幾度か繰返した。そして一念端なくも其夜の先生の怒罵に觸れると急に足が縮むやうに思つた。

然し『呼びに來た』のである。不思議の力ありて彼を前より招き後より推し忽ち彼を走らしめつ、彼は躊躇ふことなく門を入つた。

居間に通つて見ると、村長が來て居る。先生は床に起直つて布團に倚掛つて居る。

梅子も座に着いて居る。一見一座の光景が平常と違つて居る。眞面目で、沈んで、のみならず何處かに悲哀の色が動いて居る。

校長は懇懇に一座に禮をして、さてあらためて富岡老人に向ひ、

『御病氣は如何で御座いますか』

『如何も今度の病氣は爽快せん』といふ聲さへ衰へて沈んで居る。

『御大事になされませんと……』

『イヤ私も最早今度はお暇乞ぢやらう』



『そんなことは！』と細川は慰める積りで微笑を含んだ。しかし老人は眞面目で、『私も自分の死期の解らぬまでには老耄せん、兎ても長くはあるまいと思ふ。其處で實は少し折入つて貴公と相談したいことがあるのぢや』

斯くて其夜は十時頃まで富岡老人の居間は折々談聲が聞え折々寂と静まり、又折々老人の咳拂が聞えた。

其翌日村長は長文の手紙を東京なる高山法學士の許に送つた。其文の意味は次の如くである、――

御申越し以來一度も書面を出さなかつたのは、富岡老人に一條を話すべき機會が無かつたからである。

先日の御手紙には富岡先生と富岡氏との二個の人が此老人の心中に戦つて居るとのお言葉が有つた。實に其の通りで拙者も左様思つて居た。然るに丁度御手紙を頂いた時分以來は、所謂富岡先生の暴力益々つものり、二六時中富岡氏の顔出する時は全く無かつたと言つて宜しい位、恐らく夢の中にも富岡先生は荒れ廻つて居たやうと思はれる。

これには理由があるので、此秋の初に富岡老人の突然上京せられたのは全く梅子嬢を貴方に貰はず目算であつたらしい。拙者は左う鑑定して居る。所が富岡先生には「東京」が何より禁物なので、東京にゆけば是非、江藤侯井下伯其他故郷の先輩の堂々たる有様を見聞せぬわけにはいかぬ。富岡先生に取つては是れ即ち不平、頑固、偏屈の原因であるから、忽ち青筋を立て、了つて、的にして居た貴方の舉動すらも疝癢の原因となり、遂に自分で立てた目的を自分で打壊して歸つて了はれたものと拙者は信ずる。然るに歸つて考へて見ると、梅子嬢の爲めに老人の描いて居た希望は殆んど空になつて了つた。先生何が何やら解らなくなつて了つた。其所で疝は益々起る、自暴にはなる、酒量は急に増す、氣は益々狂ふ、眞に言ふも氣の毒な淺猿しい有様となられたのである、と拙者は信ずる。

現に拙者が貴方の希望に就き先生を訪うた日などは、先生の梅子嬢を罵る大聲が門の外まで聞えた位で、拙者は機會悪しと見、直に引返したが、倉藏の話に依れば其頃先生は彼秘藏子なる彼温順なる梅子嬢をすら頭をなして叱り飛ばして居たとのことである。以て先生の様子を想像し玉は、貴方も意外の感あることと思ふ。



拙者ばかりでなく斯ういふ風であるから無論富岡を訪ねる者は滅多になかつた。ただ一人、御存知の細川繁氏のみは殆ど毎晩のやうに訪ねて怒鳴られ乍らも慰めて居たらしい。

然るに昨夕のこと富岡老人近頃病床にある由を聞いたから見舞に出かけた、若し機會が可かつたら貴方の一條を持出す積りで。老人は成程床に就いて居たが、意外なのは暫く會はぬ中に全然元氣が衰へたことである、元氣が衰へたと云ふよりか殆ど我が折れて了つて貴方の所謂富岡氏、極く世間並の物の能く通曉した老人に爲つて了つたことである、更に意外なのは拙者の訪問をひどく喜んで實は招びにやうかと思つて居た處だとのことである。それから段々話して居るうちに老人は死後のことに就き色いろと拙者に依託せられた。其様子が死期の遠からぬを知つて居らるゝやうで拙者も思はず涙を呑んだ位であつた。其處で貴方の一條を持出すに又とない機會と思ひ既に口を切らうとすると、意外も意外、老人の方から梅子嬢のことを言ひ出した。其は斯うで、娘は細川繁に配する積りである。細川からも望まれて居る。私も初めは進まなかつたが考へて見ると娘の爲め細川の爲め至極良縁だと思ふ。何卒貴方其媒酌者になつ

て呉れまいかとの言葉。胸に例の一條が在る拙者は言句に塞つて了つた。然し直ぐ思ひ返して此依頼を快く承諾した。

と云ふのは、貴方に對して濟まぬやうだが、細川が先に申込み老人が既に承知した上は、最早貴方の希望は破れたのである。拙者とても致し方がない。更に深く考へて見ると、此縁は貴方の申込が假し先であつても其は成就せず、矢張細川繁の成功に終るやうになつて居たのである、と拙者は信ずる。其理由は一に貴方の推測に任ず、富岡先生を十分に知つて居る貴方には直ぐ解るであらう。

且つ拙者は貴方の希望の成就を欲する如く細川の熱望の達することを願ふ。これに就き少しも偏頗な情を持つて居ない。貴方と雖も既に細川の希望が達したと決定れば細川の爲に喜ばれるであらう。又梅子嬢の爲にも喜ばれるであらう。

そして拙者の見た處では梅子嬢も亦た細川に嫁することを喜んで居るやうである。これが良縁でなくて何うしよう。

拙者が媒酌者を承諾するや直ぐ細川を呼びにやつた、細川は直ぐ來た、其處で梅子嬢も一座し四人同席の上、老先生からあらためて細川に向ひ梅子嬢を許すことを語り



れ、又梅子嬢の口から、父の處置に就いては少しも異議なく喜んで細川氏に嫁すべきを誓ひ、婚禮の日は老先生の言ふがまゝに來十月二十日と定めた。鬮は遂に殘者に落ちた。

貴方からも無論老先生及細川に向つて祝詞を送らるゝことゝ信ずる。

## (六)

婚禮も目出度く濟んだ。田舎は秋晴拭ふが如く、校長細川繁の庭では姉様冠りの花嫁中腰になつて張物をして居る。

さて富岡先生は十一月の末終に此世を辭して何國は名物男一人を失つた。東京の大新聞二三種に黒梓二十行ばかりの大きな廣告が出て門人高山文輔、親戚細川繁、友人野上子爵等の名がずらり並んだ。

同國の者は此廣告を見て『先生到頭死んだか』と直ぐ點頭いたが新聞を見る多數は、何人なれば斯くも大きな廣告を出すのかと怪むものもあり、全く氣のつかぬ者もある。然し此の廣告が富岡先生の此の世に放つた最後の一喝で不平滿腹の先生がせめてもの遺囑を知人に由つて洩らされたのである。心ある同國人の二三はこれを見て泣いた。

## 空 知 川 の 岸 邊



## (一)

余が札幌に滞在したのは五日間である、僅に五日間ではあるが余は此間に北海道を愛するの情を幾倍したのである。

我國本土の中でも中國の如き、人口稠密の地に成長して山をも野をも人間の力で平げ盡したる光景を見慣れたる余にありては、東北の原野すら既に我自然に歸依したるの情を動かしたるに、北海道を見るに及びて、如何で心躍らざらん、札幌は北海道の東京でありながら、満目の光景は殆ど余を魔し去つたのである。

札幌を出發して單身空知川の沿岸に向つたのは、九月二十五日の朝で、東京ならば猶は残暑の候でありながら、余が此時の服装は冬着の洋服なりしを思はゞ、此地の秋



既に老いて木枯しの冬の間に迫つて居ることが知れるであらう。目的は空知川の沿岸を調査しつゝある道廳の官吏に會つて土地の撰定を相談することである。然るに余は全く地理に暗いのである。且つ道廳の官吏は果して沿岸何れの邊に屯して居るか、札幌の知人何人も知らないものである。心細くも余は空知太を指して汽車に搭じた。

石狩の野は雲低く迷ひて車窓より眺むれば野にも山にも恐ろしき自然の力あふれ、此處に愛なく情なく、見るとして荒涼、寂寞、冷厳にして且つ壯大なる光景は恰も人間の無力と儻さとを冷笑ふが如くに見えた。

蒼白なる顔を外套の襟に埋めて車窓の一隅に默然と坐して居る一青年を同室の人々は何と見たらう。人々の話柄は作物である、山林である、土地である、此無限の富源より如何にして黄金を握み出すべきかである、彼等の或者は饅頭の酒を傾けて高論し或者は煙草をくゆらして談笑して居る。そして彼等多くは車中で初めて遇つたのである。そして一青年は彼等の仲間に加はらずたゞ一人其孤獨を守つて、獨り其空想に沈んで居るのである。彼は如何にして社會に住むべきかといふことは全然其思考の問題

としたことがない。彼は唯何時も何時も如何にして此天地間に此生を託すべきかといふことをのみ思ひ悩んで居た。であるから彼には同車の人々を見ること殆ど他界の者を見るが如く、彼と人々との間には越ゆ可からざる深谷の横はることを感ぜざるを得なかつたので、今しも汽車が同じ列車に人々及び彼を乗せて石狩の野を突過してゆくことは、丁度彼の一生のそれと同じやうに思はれたのである。あゝ孤獨よ！彼は自ら求めて社會の外を歩みながらも、衷心實に孤獨の感に堪へなかつた。

若し夫れ天高く澄みて秋晴拭ふが如き日であつたならば余が鬱屈も大にくつろぎを得たらうけれど、雲は益々低く垂れ林は霧に包まれ、何處を見ても光一閃だもないので余は殆ど堪ふべからざる憂愁に沈んだのである。

汽車の歌志内の炭山に分るゝ某停車場に着くや、車中の大半は其處で乗換へたので残るは余の外に二人あるのみ。原始時代そのまゝで幾千年人の足跡をとゞめざる大森林を穿つて列車は一直線に走るのである。灰色の霧の一團又一團、忽ち現はれ忽ち消え、或は命あるものゝ如く黙々として浮動して居る。

「何方までお出で、すか」と突然一人の男が余に聲をかけた。年輩四十幾つ、骨格の



逞ましい、頭髪の延びた、四角な顔、鋭い眼、大なる鼻、一見一癖あるべき人物で、其風俗は官吏に非ず職人にあらず、百姓にあらず、商人にあらず、實に北海道にして始めて見るべき種類の者らしい、即ち何れの未開地にも必ず先づ最も跋扈する山師らしし。

「空知太まで行く積りです」

「道廳の御用で？」彼は余を北海道廳の小役人と見たのである。

「イヤ僕は土地を撰定に出掛けるのです」

「ハハア。空知太は何處等を御撰定か知らんが、最早目星い處は無いやうですよ」

「如何でせう空知太から空知川の沿岸に出られるでせうか」

「それは出られませうとも、然し空知川の沿岸の何處等ですか其が判然しないと……」

「和歌山縣の移民團體が居る處で、道廳の官吏が二人出張して居る、其處へ行くのですがね、兎も角も空知太まで行つて聞いて見る積りで居るのです」

「さうですか、それでは空知太にお出になつたら三浦屋といふ旅人宿へ上つて御覽な

さい、其處の主人がさういふことに明ら御座いますから聞いて御覽なつたら可うがす、どうも未だ道路が開けないので一寸其處までの處でも大變大廻りを爲なければならんやうなことが有つて慣れないものには困ることが多うがすテ」

それより彼は開墾の困難なことや、土地に由つて困難の非常に相違することや、交通不便の爲めに折角の收穫も容易に市場に持出すことが出来ぬことや、小作人を使ふ方法などに就いて色々話出した。其等の事は余も札幌の諸友から聞いては居たが、彼の語るがまゝに受けて唯だ其好意を謝するのみであつた。

間もなく汽車は蕭條たる一驛に着いて運轉を止めたので余も下りると、此列車より出た客は總體で二十人位に過ぎざるを見た。汽車は此處より引返すのである。

たゞ見る此一小驛は森林に圍まれて居る一の孤島である。停車場に附屬する處の二三の家屋の外人間に縁ある者は何も無い。長く響いた汽笛が森林に反響して賑々として遠く消え去せた時、寂然として言ふ可からざる静けさに此孤島は還つた。

三輛の乗合馬車が待つて居る。人々は黙々としてこれに乗り移つた。余も先の同車の男と共に其一に乗つた。



北海道馬の驢馬に等しさが二頭、選ましき若者が一人、六人の客を乗せて何處へともなく走り初めた。余は「何處へともなく」といふの心持が爲たのである。實に我が行先は何處ぞ、自から問うて自から答へることが出来なかつたのである。

三輛の馬車は相隔つる一町ばかり、余の馬車は殿に居たので前に進む馬車の一高一低、凸凹多き道を走つて行く様子が能く見える。霧は林を掠めて飛び、道を横つて又た林に入り、眞紅に染つた木の葉は枝を離れて二片三片馬車を追うて舞ふ。御者は一鞭強く加へて、

『最早降りるぞ!』と叫んだ。

『三浦屋の前で止めてお呉れ!』と先の男は叫んで余を顧みた。余は目禮して其好意を謝した。車中何人も一語を發しないで、皆な屈託な顔をして物思に沈んで居る。御者は今一度強く鞭を加へて喇叭を吹き立てたので體は小なれども強力なる北海の健兒は大駈に駈けだした。

林がやゝ開けて植民の小屋が一軒二軒と現れて來たかと思ふと、突然平野に出た。幅廣き道路の兩側に商家らしきが飛びくゞに並んで居る様は新開地の市街たるを欺か

ない。馬車は喇叭の音勇ましく此間を駈けた。

## (二)

三浦屋に着くや早速主人を呼んで、空知川の沿岸にゆくべき方法を問ひ、詳しく目的を話して見た。處か主人は寧ろ引返して歌志内に廻り、歌志内より山越えした方が便利だらうといふ。

『次の汽車なら日の暮までには歌志内に着きますから今夜は歌志内で一泊なされて、明日能くお聞合せになつて其上でお出かけになつたが可うが。歌志内なら此處とは違つて道廳の方も居ますから、其井田さんとかいふ方の今居る處も多分解るでせう』斯ういはれて見ると成程さうである。されども余は空知川の岸に沿うて進まば、余が會はんとする道廳の官吏井田某の居所を知るに最も便ならんと信じて、空知太まで來たのである。然るに空知太より空知川の岸をつたふことは案内者なくては出來ぬとのこと、而も其道らしき道の開け居るにはあらずとの事を、三浦屋の主人より初めて聞いたのである。其處で余は主人の注意に従ひ、歌志内に廻ることに定めて、次の汽車まで二時間以上を、三浦屋の二階で獨りポツ然と待つことゝなつた。



見渡せば前は平野である。伐り残された大木が彼處此處に衝立つて居る。風當りの強きゆゑか、何れも丸裸體になつて、黄色に染つた葉の僅少ばかりが枝にしがみ着いて居るばかり、それすら見て居る内にバラバラと散つて居る。風の加はると共に雨が降つて来た。遠方は雨雲に閉ざされて能くも見え分かず、最近に立つて居る柏の高さ三丈ばかりなるが、其太い葉を雨に打たれ風に揺られて、けうとき音を立て、居る。道を通る者は一人もない。

かゝる時、かゝる場所に、一人の知人なく、一人の話相手なく、旅人宿の窓に倚つて降りしきる秋の雨を眺めることは決して楽しいものでない。余は端なく東京の父母や弟や親しき友を想ひ起して、今更の如く、今日まで我を圍みし人情の如何に温かであつたかを感じたのである。

男子志を立て理想を追うて、今や森林の中に自由の天地を求めんと願ふ時、決して女々しくはならぬと我とわが心を引立てるやうにしたが、要するに理想は冷やかにして人情は温かく、自然は冷厳にして親しみ難く人寰は懐しくして巢を作るに適して居る。

余は悶々として二時間を過した。其中には雨は小止になつたと思ふと、喇叭の音が遠くに響く。首を出して見ると斜に絲の如く降る雨を突いて一輛の馬車が馳せて来る。余は此馬車に乗込んで再び先の停車場へと、三浦屋を立つた。

汽車の乗客は數ふるばかり。余の入つた室は余一人であつた。人獨り居るは好まじきことに非ず。余は他の室に乗換へんかとも思つたが、思ひ止まつて雨と霧との爲めに薄暗くなつて居る室の片隅に身を寄せて、暮近くなつた空の雲の去來や輪をなして回轉し去る林の立木を茫然と眺めて居た。斯る時、人は往々無念無想の裡に入るものである。利害の念もなければ越方行末の想もなく、恩愛の情もなく憎惡の惱もなく、失望もなく希望もなく、たゞ空然として眼を開き耳を開いて居る。旅をして心身共に疲れ果て、猶は其身は車上に揺られ、縁もゆかりもない地方を行く時は往々にして此の如き心境に陥るものである。かゝる時、はからず目に入つた光景は深く腦底に彫り込まれて多年これを忘れないものである。余が今しも車窓より眺むる處の雲の去來や、樺の林や丁度それであつた。

汽車の歌志内の溪谷に着いた時は、雨全く止みて日は將に暮れんとする時で、余は



宿るべき家のあてもなく停車場を出ると、流石に幾千の鑛夫を養ひ、幾百の人家の狭き溪に簇集して居る場所だけありて、宿引なるものが二三人待ち受けて居た。其一人に導かれ礫多く燈暗き町を歩みて二階建の旅人宿に入り、妻女の田舎なまりを其儘、愛嬌も心からしく迎へられた時は、余も思はず微笑したのである。

夜食を済すと、呼ばずして主人は余の室に来てくれたので、直に目的を語り彼より出来るだけの方便を求めた。主人は余の語る處をにこついて聞いて居たが、

「一寸お待ち下さい、少し心當りがありますから」と言ひ捨て、室を去つた。暫時くして立還り、

「だから縁といふは奇態なものです。貴方最早御安心なさい、すつかり分りました」と我身のことの如く喜んで座に着いた。

「わかりましたか」

「わかりましたとも、大わかり。四日前から私の家にお宿りのお客様があります。この方は御料地の係の方で先達から山林の見分けてお廻りになつたのですか、ソラ野宿の方が多がせう、だから到頭身體を傷して今手前共で保養して居らつしやるので

す。篠原さんといふ方ですがね。何でも宅へ見える前の日は空知川の方に居らつしやつだといふことを聞きましたから、若しやと思つて唯今伺つて見ました處が、解りました。ウン道廳の出張員なら山を越すと直ぐ下の小屋に居たと仰しやるのです、御安心なさい此處から一里位なもので譯は有りません。朝行けばお晝前には歸つて來られますサ」

「どうも色々難有う、それで安心しました。然し今も其小屋に居て呉れ、ば可いが始終居所が變るので其れで道廳でも知れなかつたのだから」

「大丈夫居ますよ。若し變つて居たら先に居た小屋の者に聞けば可うがす、遠くに移るわけは有りません」

「兎も角も明日朝早く出掛けますから案内を一人頼んで呉れませんか」

「さうですな、山道で岐路が多いから矢張り案内が入るでせう。宅の俵を連れて入らつしやい。十四の小僧ですが、空知太までなら存じて居ます。案内位出來ませうよ」と飽くまで親切に言つて呉れるので、余は實に謝する處を知らなかつた。成程縁は奇態なものである。余にして若し他の宿屋に泊つたなら決してこれ程の便宜と親切とは



得ることが出来なかつたらう。

主人は何處までも快活な男で、放膽で、而も眼中人なきの様子がある。彼の親切、見ず知らずの余にまで惜気もなく投げ出す親切は、彼の人物の自然であるらしい。世界を家となし到る處に其故郷を見出す程の人は、到る處の山川、接する處の人が即ち朋友である。であるから人の困厄を見れば、其人が何人であらうと、憎悪するの因縁さへ無くば、則ち同情を表する、十年の交友と一般なのである。余は主人の口より其略傳を聞くに及んで彼の人物の余の推測に近さを知つた。

彼は其生れ故郷に於て相當の財産を持つて居た處が、彼の弟二人は彼の相續したる財産を羨むこと甚だしく、遂には骨肉の争まで起る程に及んだ。然るに彼の父なる七十の老翁も亦た小弟二人を愛して、やゝもすれば兄に迫つて其財産を分配せしめようとする。若しこれを三等分すれば三人とも一家を立つることが出来ないのである。

『だから私は考へたのです、これつばかしの物を兄弟して争ふなんて餘り量見が小さい。宜しいお前達に與つて了はう。たゞ五分の一だけ呉れる、乃公は其を以て北海道に飛ぶからつて。其處で小僧が九の時でした、親子三人でホイと此方へやつて來たので

す。イヤ人間といふものは何處にでも住まは住まれるものですよハッハッハッ』と笑つて『處が妙でせう、弟の奴等、今では私が分けてやつて物を大概無くしてしまつて、それで居て矢張り小ぼけな村を此上もない土地のやうに思つて私が何度も北海道へ來て見ると手紙ですゝめても出て來得ないんでサ』

余は此男の爲す處を見、其語る處を聞いて、大に得る處があつたのである。よしや此一小旅店の主人は、余が思ふ所の人物と同一でないにせよ、よしや余が思ふ所の人物は、此主人より推して更らに余自身の空想を加へて以て化成したる者にせよ、彼はよく自由によく獨立に、社會に住んで社會に壓せられず、無窮の天地に介立して安んずる處あり、海をも山をも原野をも將た市街をも、我物顔に横行濶歩して少しも屈託せず、天涯地角到る處に花の香しきを嗅ぎ人情の温かさに住む、げに男はすべからず此の如くして男といふべきではあるまいか。

斯く感ずると共に余の胸は大に開けて、札幌を出で、より歌志内に着くまで、雲と共に結ばれ、雨と共にしほれて居た心は端なくも天の一方深碧にして窮りなきを望んだやうな氣がして來た。



夜の十時頃散歩に出て見ると、雲の流急にして絶間々々には星が見える。暗い町を辿つて人家を離れると、溪を隔て、屏風の如く黒く前面に横はる柳山の上に月現はれ、山を掠めて飛ぶ浮雲は折り々、其前面を拭うて居る。空氣は重く濕り、空には風あれども地は肅然として聲なく、たゞ溪流の音のかすかに聞ゆるばかり。余は一方は山一方は涯の爪先上りの道を進みて小高き廣場に出たかと思ふと、突然耳に入つたものは絃歌の騒である。

見れば山に沿うて長屋建の一棟あり、これに對して又一棟あり。絃歌は此長屋より起るのであつた。一棟は幾戸かに分れ、戸々皆な障子をこざし、其障子には火影花やかに映り、三絃の亂れて狂ふ調子放歌の激して叫ぶ聲、笑ふ聲は雜然として起つて居るのである。牛部屋に等しき此長屋は何ぞ知らん鑛夫どもが深山幽谷の一隅に求め得し歡樂境ならんとは。

流れて遊女となり、流れて鑛夫となり、買ふものも賣るものも、我世夢ごとく狂歌亂舞するのである。余は進んで此長屋小路に入つた。

雨上の路はぬかるみ、水溜には火影うつる。家は離れて見しよりも更に哀れな建て

ざまにて、新開地だけにな、軒先障子などの白木の夜目にも生々しく見ゆるばかり、床低く屋根低く、立てし障子は地より直に軒に至るかと思はれ、既に歪みて隙間よりは鉤ランプの笠など見ゆ。肌脱の荒くれ男の影鬼の如く映れるあり、亂髪酌婦の頭の夜叉の如く映るかと思へば、床も落つると思はる、音が爲て、ドツとばかり笑聲の起る家もあり。『飲めよ』、『歌へよ』、『殺すぞ』、『撲るぞ』、『洪笑、激語、惡罵、歡呼、叱咤、艶ある小節の歌の文句の腸を斷つばかりなる、三絃の調子の咽ぶが如き、忽ちにして暴風、忽ちにして春雨、見來れば、歡樂の中に殺氣をこめ、殺氣の中に血涙をふくむ、泣くは笑ふのか、笑ふのは泣くのか、怒は歌か、歌は怒か、嗚呼儂々人生の流よ！數年前までは熊眠り狼住みし此溪間に流れ落ちて、こゝに澱み、こゝに激し、こゝに沈み、月影冷やかにこれを照らして居る。

余は通り過ぎて振り顧り、暫し停立んで居ると、突然間近なる一軒の障子が開いて一人の男がつと現はれた。

『や、月が出た！』と振上げた顔を見れば年頃二十六七、背高く肩廣く屈強の若者である。さよろく四邊を見廻して居たが吻と酒氣を吐き、舌打して再び内によろめき



込んだ。

## (三)

宿の子のまめくしさが先に立ちて、明くれば九月二十六日朝の九時、愈々空知川の岸へと出發した。

陰晴定めなき天氣、薄き日影洩る、かと思へば忽ち峰より林より霧起りて峰をも林をも路をも包んでしまふ。山路は思ひしより樂にて、余は宿の子と様々の物語しつ、身も心も軽く歩んだ。

林は全く黄葉み、蔦紅葉は眞紅に染り、霧起る時は霞を隔て、花を見るが如く、日光直射する時は露を帯びたる葉毎に幾千萬の眞珠碧玉を連ねて全山燃ゆるかと思はれた。宿の子は空知川沿岸に於ける熊の話を爲し、續いて彼が子供心に聞き集めたる熊物語の幾種かを熱心に語つた。坂を下りて熊笹の繁れる所に來ると彼は一寸立どまり、「聞えるだらう、川の音が」と耳を傾けた。「ソラ……聞えるだらう、あれが空知川、もう直ぐ其處だ」「見えさうなものだ」

『如何して見えるものか、森の中に流れて居るのだ』

二人は、頭を没する熊笹の間に僅に通ふ帯ほどの徑を暫く行くと、一人の老人の百姓らしきに出遇つたので、余は道廳の出張員が居る小屋を訊ねた。

『此徑を三町ばかり行くと幅の廣い新開の道路に出る、其右側の最初の小屋に居なさるだ』と言ひ捨て、老人は去つて了つた。

歌志内を立つてから此處までの間に人に出遇つたのは此老人ばかりで、途中又小屋らしき物を見なかつたのである。余は此老人を見て空知川の沿岸の既に多少かの開墾者の入込んで居ることを事實の上を知つた。

熊笹の徑を通りぬけると果して、思ひがけない大道が深林を穿つて一直線に作り出されてある。其幅は五間以上もあらうか。然も兩側に密茂して居る林は、二丈を越え三丈に達する大木が多いのだ、此幅廣き大道も、堀割を通ずる鐵道線路のやうであつた。然し余は此道路を見て拓殖に熱心なる道廳の經營の、如何に困難多きかを知つたのである。

見れば此道路の最初の右側に、内地では見ることの出来ない異様な掘立小屋があ



る。小屋の左右及び後背は林を倒して、二三段歩の平地が開かれて居る。余は首尾よく此小屋で道廳の屬官、井田某及び他の一人に會ふことが出来た。

植民課長の可憐なる紹介は、彼等をして十分に親切に余が相談相手とならしめたのである。更に驚くべきは、彼等が余の名を聞いて、早く既に余を知つて居たことで、余の蕪雜なる文章も、何時しか北海道の思ひもかけぬ地に其讀者を得て居たことであつた。

二人は余の目的を聞き終りて後、空知川沿岸の地圖を披き其經驗多き鑑識を以て、彼處此處と、移民者の爲めに區劃せる一區一萬五千坪の地の中から六箇所ほど撰定して呉れた。

事務は終り雑談に移つた。

小屋は三間に四間を出でず、屋根も周圍の壁も大木の皮を幅廣く剥ぎて組合したもので、板を用ゐしは床のみ。床には藁を敷き、出入の口はこれ又樹皮を組みて戸としたるが一枚被はれてあるばかりこれ開墾者の巢なり家なり、いな城廓なり。一隅に長方形の大きな爐が切つて、これを火鉢に竈に、煙草盆に、冬ならば煖爐に使用する

るのである。

『冬になつたら堪らんでせうね。こんな小屋に居ては』

『だつて開墾者は皆なこんな小屋に住んで居るのですよ。どうです辛棒が出来ますか』と井田は笑ひながら言つた。

『覺悟は爲て居ますが、イザとなつたら随分困るでせう』

『然し思つた程でもないものです。若し冬になつて如何しても辛棒が出来さうもなかつたら、貴所方のことだから札幌へ逃げて来れば可いです。どうせ冬籠は何處でしても同じことだから』

『ハッハッハッ、其なら初めから小作人任せにして御自分は札幌に居る方が可からう』

と他の屬官が言つた。

『さうですとも、さうですとも冬になつて札幌に逃げて行くほどなら寧ろ初めから東京に居て開墾した方が可いんです。何に僕は辛棒しますよ』と余は覺悟を見せた。井田は、



『さうですな、先づ雪でも降つて來たら、此爐にドン／＼焚火をするんですな、薪木ならお手のものだから。それで貴所方だからウンと書物を仕込んで置いて勉強なさるんですな』

『雪が解ける時分には大學者になつて現はれるといふ趣向ですか』と余は思はず笑つた。

談して居ると、突然バラ／＼と音がして來たので余は外に出て見ると、日は薄く光り、雲は静に流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであつた。

余は宿の子を残して、一人此邊を散歩すべく小屋を出た。

げに怪しき道路よ。これ千年の深林を滅し、人力を以て自然に打克たんが爲めに、殊更に無人の境を撰んで作られたのである。見渡す限り、兩側の森林これを覆ふのみにて、一個の人影すらなく、一縷の輕煙すら起らず、一の人語すら聞えず、寂々寥々として横はつて居る。

余は時雨の音の淋しさを知つて居る、然し未だ會て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深

林の底に居て、此音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感ぜざらん。怒濤、暴風、疾雷、閃電は自然の虚喝である。彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も静かなる時である。高遠なる蒼天の、何の聲もなく唯だ黙して下界を視下す時、曾て人跡を許さざりし深林の奥深き處、一片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠呻して曰く『あゝ我一日も暮れんとす』と、而して人間の一千年は此刹那に飛びゆくのである。

余は兩側の林を覗きつる行くと、左側で林のやゝ薄くなつて居る處を見出した。下草を分けて進み、ふと顧みると、此身は何時しか深林の底に居たのである。とある大木の朽ちて倒れたるに腰をかけた。

林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上を時雨がサラ／＼と降つて來た。來たかと思ふと間もなく止んで森として林は静まりかへつた。

余は暫くジツとして林の奥の暗くなつて居る處を見て居た。

社會が何處にある、人間の誇り顔に傳唱する『歴史』が何處にある。此場所に於て、此時に於て、人はたゞ『生存』其者の、自然の一呼吸の中に託されてをることを感ずる



ばかりである。露國の詩人は曾て深林の中に坐して、死の影の我に迫るを覺えたと言つたが、實にさうである。又た曰く『人類の最後の一人が此地球上より消滅する時、木の葉の一片も其爲にそよがざるなり』と。

死の如く靜なる、冷やかなる、暗き、深き深林の中に坐して、此の如きの威迫を受けないものは誰も無からう。余我を忘れて恐ろしき空想に沈んで居ると、

『旦那！旦那！』と呼ぶ聲が森の外でした。急いで出て見ると宿の子が立つて居る。

『最早御用が濟んだら歸りませう』

其處で二人は一先づ小屋に歸ると、井田は、

『どうです今夜は試験のために一晚此處に泊つて御覽になつては』

余は遂に再び北海道の地を踏まないで今日に到つた。たとひ一家の事情は余の開墾の目的を中止せしめたにせよ、余は今も尙ほ空知川の沿岸を思ふと、あの冷嚴なる自然が、余を引つけるやうに感ずるのである。

何故だらう？

郊 外



(一)  
 時田先生、名は立派なれど村立小學校の教員である。其も四角な顔の、太い眉の、  
 大きい口の、骨格の逞ましい、背の低い、言ふまでも無く若い女などには餘り好かれ  
 ない方の男。

其くせ生徒にも父兄にも村長にも極めて評判のよいのは、何處か言ふに言はれぬ優  
 しい處が有るので、口數の少い代りには嘘を言ふことの出来ない性分、其は眼で了解  
 る、何時も笑を含んで居るので。

嫁の世話を爲よう一人好いのがあると勧めた者は村長ばかりではない。併し眞面目  
 な挨拶をしたことなく、今年三十一で下宿住居、このころは人も之を怪まない程にな



つた。

梅ちゃん、先生の下宿は此の娘の居る家の、別室の中二階である。下は物置で、土間から直ぐ梯子段が附いて居る、八畳一間ぎり、食事は運んで上げませうといふのを其には及ばないと、母屋に食べに行く、大概は皆なと一同に膳を並べて食ふので、何を食べさうれうと頓着しない。

梅ちゃんは十歳の年から世話に爲つたが、卒業しないで退校しても先生別に止めもしなかつた。今は弟の時坊が尋常二年で、先生の厄介に爲つて居る。宅へ歸ると甘へてしかたがないが學校では畏れて居る。

先生の中二階からは其屋根が少しばかりしか見えないう音が音はよく聞える水車、其處に幸ちやんといふ息子がある。これも先生の厄介になつた一人で、卒業してから先生の宅へ夜分外史を習ひに來たが今は止して水車の方を働いて居る。尤も水車といつても都の近在だけに山國の小さな小屋とは一つにならない。月に十四五兩も上る白が幾個とかが有つて米を運ぶ車を曳く馬の六七頭も飼つて有る。たいしたものだと梅ちゃん母親などは始終羨んで居る位で。

『そんなら此方でも水車をやつたら如何だらう』と先生に似合はないことを或時眞面目で言ひだした。

『幸ちやん處のやうにですか、だつて彼は株ですものう、水車がさう何時だつて出来るもんなら誰だつてやりませう』おかみさんは情なさうに笑つて言つた。

『成程場處がないからねエ』先生は眞面目に感心して其で水車の話は止んで幸ちやんの噂に移つた。

お神さんは頻りと幸ちやんを譽めて、實はこれは毎度のことであるが、而して今度の繼母はどうやら人が悪るさうだから必定、幸ちやんには難く當るだらうと言つた。

『いゝ歳をして最早今度で三度めですよ、第一子供が可哀さうでさア』

『三度め！』先生は二度めと計り思つて居たのである。

『尤も幸ちやんの母親は亡くなつたんですけども』  
此時、のそり挨拶なしに土間に現はれたのが二十四五の、小づくりな色の淺ぐろい眼元の優しい男。

『ヲヤ幸ちやんが！今お前さんの噂をして居たのよ』實はお上さん少し驚いて狼狽い



たのである。

「先生今日は」

「この二三日見えないやうで有つたね」

「相變らず多忙いもんですから」

「マアお上んなさいな、今日は何方へ」お上さんは幸吉の衣装に目をつけて言った。

「神田の叔父の所へ一寸行つて來ました、先生今晚お宅でせうか」幸吉の言葉は何となく沈んで居る。

「居るとも、何か用だらうか」

「ナニ別に、唯だ少しばかり……」

「今夜宅で浪花節をやらす筈だから幸ちやんもお出なさいな、そら何時かの梅龍」お上さんは卒然言葉を挟んだ。

「さうですか、來ませう、其れぢやあ又た晩に」と言つて幸吉は歸つて了つた。

「幸ちやん今日はどうかして居るよ」とお上さんは言つたが、先生別に返事を爲さないで立膝を爲ながらお上さんの手元を眺めて居た。お上さんは時田の襦衣の破綻を繕つ

て居る。

夜食が済むと座敷を取片づけるので母屋の方は騒いで居たが、それが済むと長屋の者や近所の者がそろそろ集まつて來て、がやがや饒舌るのが聞える。日はとつぷり暮れたが月は未だ登らない。時田は燈火も點けないで片足を敷居の上に延し、柱に倚かかりながら茫然外面を眺めて居る。

「先生！」梅ちやんの聲らしい。時田は黙つて返事をしない。「オヤ居ないのだよ」と去て了つた。それから五分も経つた歟、其間身動きもしないで東の森を眺めて居たが、月の光がちらりと洩れて來たのを見て、彼は悠然起つて着物の前を叮嚀に合はして、床に放棄つて有た烏打帽を取るや、すたこらと梯子段を下りた。

生垣を廻ると突然に出くはしたのがお梅である。お梅はきやんな聲で、

「知らないよ、宜いぢやア無いか私が誰の噂を爲ようがお前さんの關つた事ぢやアなしよ、ねエ先生！」

時田は驚いて木下間を見ると、一人の男が立つて居たが、ツイと長屋の裏の方へ消えて了つた。



「誰れ」時田は訊ねた。

「源公の野郎、眞實に此節は生意氣になつたよ。先生散步？」お梅は時田の傍に寄つて顔を覗くやうに見た。

「あの幸ちやんが來たら散歩に行つたつて、而して直ぐ歸るからつて言つてお呉れ」と時田は門を出た。お梅は後に從いて來て、

「直ぐお歸んなさいナ最早梅龍が來ましたから。あらお月さま！」お梅は立止まつた。時田は橋を渡つて野の方へ行つて了つた。

二時間も経つたらうか、時田の歸つて來たのは。月影にすかして見ると橋の上に立つて居るのはお梅である。

「先生何處を歩いて居ました今まで、幸ちやんが先刻から待つて居ますよ」

「梅ちやん此處で何してたの」

「先生を待つて居ました、幸ちやんの用ツて何でせう」

「何だか知らない。何だつて宜いぢやア無いか」

「だつて何だか沈鬱いで居るやうだから……若しかと思つて」

「あゝ少し寒くなつて來た」

二人は連だつて中二階の前まで來たが、母屋では浪花節の二切めで、太夫の聲がするばかり、皆耳を澄まして居ると見えて肅然として居る。

「幸ちやんに今歸つたからつて、そ言つてお呉れ」と時田は庭の耳門へ入つた。お梅はばた／＼と母屋の方へ駆け出して土間へそつと入ると、幸吉が土間の入口に立つて居る。

「歸つて？」幸吉は低い聲で言つた。

「今歸つてよ、用が濟んだら又お寄んなさいナ」お梅の聲も呟くやう。

「難有う」幸吉は急いで中二階の方へ行つた、併し頭を垂れたまゝ。お梅は座敷の隅の方の薄暗い所に蹲んで浪花節を聞いて居たが、皆なが笑ふ時でも笑顔一つしなかつた。二切めが濟むと座敷は俄に賑かに爲つて煙草を吹ふやら便所に立つやら大騒ぎ。

「お梅」母親がきよ／＼と見廻すと、

「何アに」お梅は大きな聲で返事をした。

「何所に居たの先刻から」



『此所で聴て居たのよ、そして頭が痛くッて……』と顔を擧めて頭をこつくと軽く叩く。

『奥へ行つて寝みな、寝てたッて聞こえるよ』母親は心配さうに言ふ。それでもお梅は返事を爲ないで其儘蹲んで居た。其中三切めが初まるとお梅は暫時聴いて居たが、そつと起つて土間へ下りると母親が見付けて、低い聲で、

『奥でお寝みな』半ば叱るやうに言つた。お梅は泣き出しさうな顔をして頭を振つて外面へ出た。月は冴えに冴え、全で秋かとも思はれるやう。庭木の影が明白と地に印して居る。足を爪立るやうにして中二階の前の生垣の傍まで来て垣根越しに上を見あげた。二階は寂然として居る。此時母屋でドツと笑聲が爲た。お梅は忌々しさうに舌打をして、ほんとに何時までやつてるんだらうと呟やき乍ら道へ出た。橋の上で話聲が聞えるやうだから、若しかと思つて來ると先生一人、欄干に倚つか、ッて空を仰いで居た。

『オヤお一人?』

『あア』氣の無い返事。

『幸ちやん歸りましたの?』お梅も欄干に倚つて時田の顔をぢつと見て居る。  
『今歸つたよ』と大欠伸をして『梅ちやん如何して浪花節聴かないの、僕一つ聴いて來ようか』

『お止しなさいよつまらない! 私聴いてたけど頭が痛くなつて逃出したの』

二人は少時黙つて居た。水車へ水を取るの橋から少し下流に井堰が有る。其ため水が濺んで細長い池のやうになつて居る。其岸は雜木が茂つて水の上に差出て居るのが暗い影を映し又た月の光が落ちて居る處は鏡のやう。多分羽蟲が飛ぶのであらう折り折り小さな波紋が消えては又た現はれて居る。お梅はぢつと水を見て居たが、遂に『幸ちやんの話は何でした』

『神田の叔父の方へ暫時往つて居たいが如何したもんだらうと相談に來たのサ』

『先生何と言つてやりました』お梅は時田の顔を見て言つたが其聲は少し震へて居た。然し時田はそんなことには氣が注がないかして、頗る平氣で、

『成るべくは家に居た方が善からう、左様しないと猶の事繼母との間が難かしく成るからッて、留めてやつた、可哀さうに泣いて居たよ』



『泣いて？まア可哀さうに』お梅は涙ぐんで黙つて了つた。それも時田には氣が付かない。

『なんでも詳細い事は聞かなんだが、今度の繼母に娘が有つて其れが海軍少將とかに奉公して居る。其娘を幸ちやんの嫁にしたいと思つて居るらしい。幸ちやんは其れが嫌で堪らない、其を繼母が感付いて難く當るらしい、此故幸ちやんの身に成つて見ると堪らないサ』

『さうなのよ、私も其事を一寸聞いてよ、さうなのよ、だつて餘り其は無理だわ……』未だ何か言ひさうな時、突然橋の上を通り掛つた男、お梅の顔を覗き込んで、『オヤ梅ちやん、今晚は』と意味ありげに聲を掛けて行き過ぎた。橋を渡つたと思ふと一寸振り向いて、

『忘れて居た、幸ちやんに宜しく』

『知らないわ、お菊さんが待つてるよ』

『ハ、ハ、難有う』いふうち姿が見えなくなつた。

『お菊さんで踏切の八百屋の娘だらうか』時田は訊ねた。お梅は首肯いたさき黙つて

居た。

(三)

此日は近頃珍らしい好天氣であつたが、次の日は梅雨前のことゝて、朝から空模様怪しく、午後はじめ／＼降りだした。普通の人なら折角の日曜をめちゃ／＼にしてつたと不平を並べる處だが、時田先生、全く無頓着である。机の前に端坐して生徒の清書を點検したり、作文を觀たり、出席簿を調べたり、倦ふれた時はごろりと其處に寝ころんで天井を眺めたりして居る。

午後二時、此降るのに訪ねて来て、中二階の三段目から『時田！』と首を出したのは江藤といふ畫家である。時田よりは四五年前の、これも何處か變物らしい顔付、語調と體度とが時田よりも快活らしいばかり、共に青山御家人の息子で子供の時から親の代からの朋輩同志である。

時田は朱筆を投げやつて仰向けになりながら、

『君先達頼んで置たのは出来たかね』

江藤は火鉢の傍に坐つて勝手に茶を飲み、佯爲けた顔をして、



『何んだつたか知ら』

『そら手本サ』

『すつかり忘れて居た。失敬々々。それよりか君に見せたい物が有るのだ』と風呂敷に包んで其下を又新聞紙で包んである畫板を取り出して時田に渡した、時田は黙つて見て居たが、

『何處か見たやうな所だね、うまく出来て居る』

『そら、彼の森の處サ御料地の、彼所から向うの畑と林とを見た處サ』

『成程さうだ』といひながら時田は壁に下げて有る小さな水彩畫と見比べて居る。

『無論この方が不味いサ。處がこの繪には面白い話があるから其で持つて来たが、これから又た此を持つて行く處があるのだ』

時田は起上がつて火鉢の傍へ来て、『ふうん』と甚だ氣のない返事をして聞いて居る。これは、此人の癖だから對手は何とも感じない。

『昨日はあの好天氣だから平時のやうに出かけて例の森、僕は未だ彼處は畫いたことが無いからどうせ碌な者は出来まいが、一つ試みて見ようと、いつもの細い徑を例の

如く空想にふけり乍ら歩いた。實は——最早白狀しても宜いから言ふが——實は僕近頃自分で自分を疑ひ初めて、果して己に美術家たるの天才が有るだらうか、果して己は一個の畫家として成功するだらうかなんて頻りと自脈を取つて居たのサ。斷然此希望を擲つてしまはうかとも思つたが其時思當つたのは君の事だ。君が斯うやつて村立尋常小學校の校長それも最初は唯の教員から初めて十何年といふ長い間、汲々乎として勤め御互の朋輩には最早大尉になつた奴も居れば法學士で判事になつた奴も居るのを知らん顔で羨ましいとも思はず平氣で自分の職分を守つて居る。勿論此は君の性分にも依るだらう、併し其は何方でも宜い、兎も角一心専念にやつて居るといふ事が僕は君の今日成功して居る所以だと信ずる。成功とも！教育家として此上の成功はないサ。父兄からは十二分の信用と尊敬とを得て何か込入たことは皆な君の處へ相談に来て君の判斷を仰ぐ。僕は今の教育家に斯ういふ例は餘り無からうと思ふ。其處で僕は思つた、僕に天才が有らうが無からうが、成功しようが爲なからうがそんな事は今願るに當らない。何でも此儘で一心不乱にやれば宜いんだ。といふ風に考へて來ると氣が清々して來た。昨日も丁度そんな事を考へ乍ら歩いて、つまる處がペンキの看板か



きにならうが稻荷や八幡様の奉納繪を畫かうが關はない。やる處までやると決心したからには、傍目もふれないなど頻りに思續けて例の森まで行つた。

何處を畫かうかと撰んで見たが、森その物は無論畫いた處で畫としては却つて面白くないから、何でも森を斜に取つて西北の地平線から西へかけて、低い處にもしやくと生へてる檜林あたりまでを寫して見ることに決めた。

道は随分暑かつたが、森へ来て少し休むと薄暗い奥の方から冷たい風が吹いて來て宜い心地になつた。青葉の影の透明るやうな光を仰いで身體を横に足を草の上に投出して熟と向うを見て居ると、何といふ靜な美しい、のび／＼した景色だらう。僕は何もかも忘れて暫く眺めて居た。

出來上つたのが此だ。我ながらお話にならない拙サ加減、併し僕は幾度でも之を畫く、まづ僕の方でこれならと思ふ奴が出來るまでは何度でも寫しにくると決心して着手つたのだ。所で此拙い奴をこゝまで畫き上げるのに妙なことが有つたのサ。

頻りと畫いて居ると、實景が餘りよくつて僕の手が如何にも拙いので、畫いて居ながら又もや變な氣になつて何といふ拙さだらう、是か畫といはれうか。己はとても駄

目なのか知らん、と思ふと畫くのが嫌になつて最早止さうか最早よさうかと思ひながらやつて居た。すると後の森の方でガサゴンと妙な音がした。此時サ、僕は振向いて見ようとしたが、待て！こんな事では到底だめだ、たとひ拙からうが拙いからこそ勉強して畫くのだ。奉納繪を畫いても宜いといふ決心はどうした、一心不亂とは此處の事だ、假令耳の傍で狼が吠えようが心を取亂し氣を散じない位でなければ成らないのが、森の奥で一才音がしたつて、すぐ其に氣を取られるやうでどうするかと、今度は拙くても何でもずん／＼畫いて居ると、ゴツツ、ガサツといふ音が漸々近づいて來るやうで氣になつて成らない、其音が又頗る妙なので、丁度僕が一心に畫いて居るのをつけてんで後から何者か忍足に僕を狙ふ様に思はれる。さア左様思ふと振向いて見たくつて堪らない、併し一旦見まいと決心したからには意地が出て振向くのが愧かしく、又た振向くと向かないのとで僕が美術家たり得るや否やの分れ目のやうな氣がして來た。

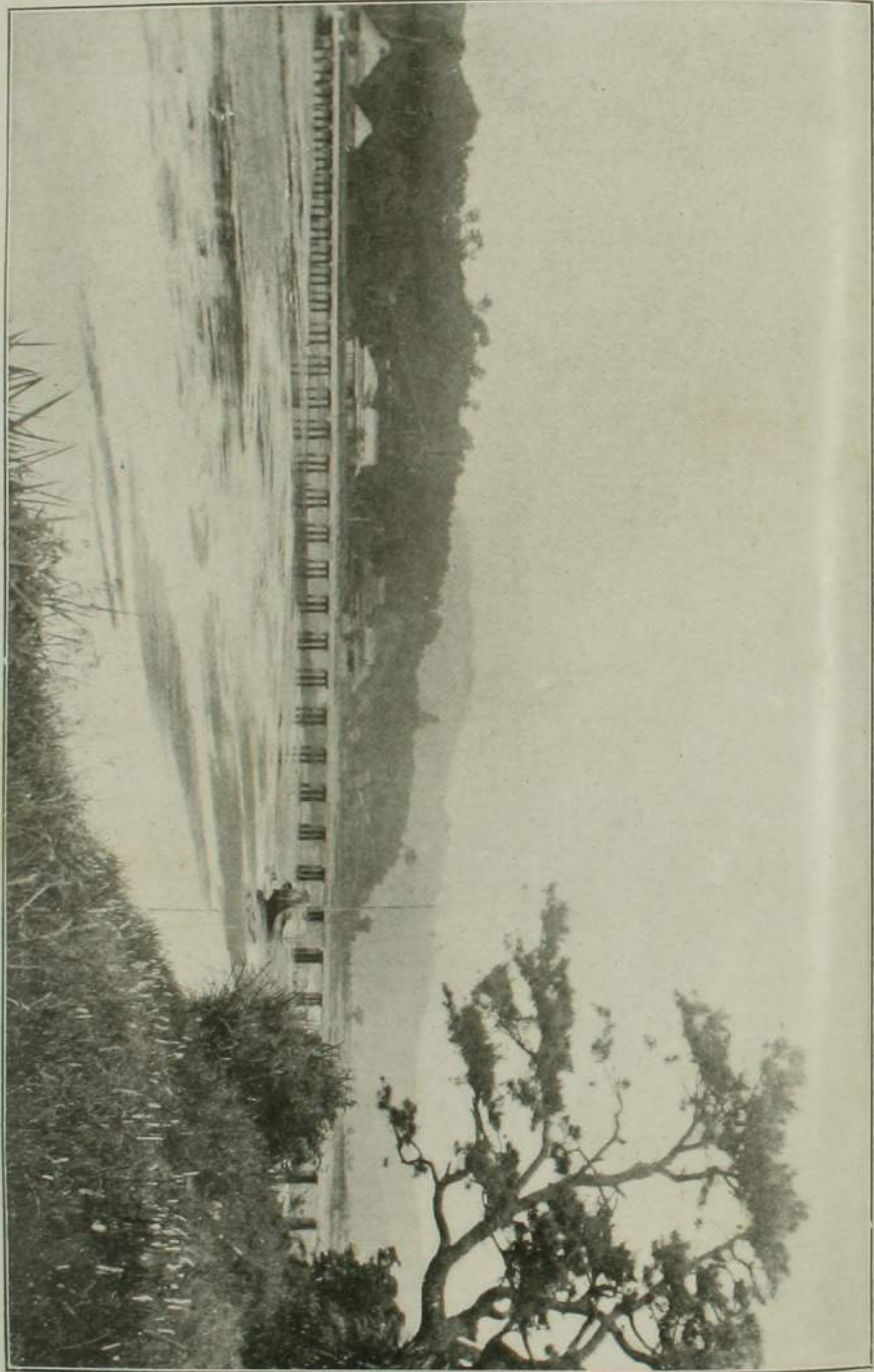
又た斯うも思つた。見る見ないは別問題だ。てんで彼んな音が耳に入るやうで其が氣になるやうで其爲に氣を揉むやうでは駄目なんだ。若し眞に我一心を此畫幅と此自然とに打込むなら大砲の音だつて聞えないだらうと。其所で畫板に啣りつくやうにし



て畫きはじめた。併し何の益にも立たない、僕の心は七分がた後の音に奪はれて居るのだから。

其處で又斯うも思つた。何もさう固まるには及ばない、氣になるならならんで、一寸見て鳥か狐か盜賊か鬼か蛇か若くは一目小僧か大入道か其を確かめて、安心して畫いたらよさうなものだ。宜しいさうだと振向ふとしたが、殘念で堪らない。若しこゝで己が後へ振向くなら最早今日かぎり畫家は止めるのだぞ。よし、其でよければ向けて若し此森に居るとか噂のある狂犬であつて己の後から突然頸筋へ喰ひつくなら着いても宜ではないか。其で死んでも關はない。斯うなれば最早意地だ！この意地が通されない位なら美術家たるは愚何一ツ仕出さずものかと今度は喧嘩腰になつて、人を後へ向かさうつて、誰が向くか、さまを見ろと今から思へば可笑いが眞實にさう獨語を言ひながら畫き續けた。

音が近づくにつれて大きくなる。下草や小藪を踏み分ける音が最早すぐ後で聞える。僕の身體は冷水を浴びたやうになつて、疎縮んで來る、其で腋下からは汗がだらだら流れる、何のことはない一種の拷問サ。



村生平郡毛熊防周しり途を代時年青が步獨



僕は唯だ夢中になつて書いて居たが目と手は器械的に動くのみで全身の注意は後に集つて居た、すると何者か、確に僕の背中に附着くやうにして足を止めた。そして耳の傍で呼吸の氣勢がする。天下何人か縮み上らざらんやだ。君の様な神経の少し遲鈍の方なら知らないこと——失敬失敬——僕は最早呼吸が塞りさうになつて、目がぐらくして來た。これが三十分も續いたら僕は氣絶したらう。處が間もなく、旦那は旨えなアと耳元で大聲に叫んだ奴がある。

喫驚して振向くと六十ばかりの老爺が腰を屈めて僕の肩越しに覗込んで居るんだ。僕は餘りのことに、何だ喫驚したぢやアないかと怒鳴つてやつた、渠一向平氣で、背負て居た枯木の束を其處へ卸して、旦那は繪の先生かとさくから先生ぢやアない未だ生徒なんだといふと頗る感心したやうな顔つきで繪を見て居た』

此處まで話して來て江藤は急に口を噤んで、相手の顔を熟と見て居たが、思ひ出したやうに、

『さうだッけ、彼老爺さんを寫生すると宜かつた』と言つて膝を拍つた。此近在の百姓が御料地の森へ入つて、枯枝を集めるのは、其は多分禁制であらうが、彼等は及び



らでやつて居るのである。其事は無論時田も江藤も知つて居たので、江藤も能く考へたら森の奥のガサ／＼する音は必ず其と氣の付く筈なんだ。

『其はさうとして君、それから僕は内心頗る慙かしく思つたから、今度は大に熱心になつて畫きだしたが、略々出来たから巻煙草を出して吸ひ初めたら、其時まで老爺さん黙つて見て居たが、何と思つたか、眞面目な顔で、其繪を呉れないかと言ひだした。其言草が面白いちやアないか、斯ういふんだ、今度代々木の八幡宮が改築になつたから其へ奉納したいといふんだ。其から老爺頻りと八幡宮の新築の立派なことなんか饒舌つて居るから、僕は聴ながら考へた。此畫は兎も角も我が爲には紀念すべき者である、そして、此老爺も我が爲には紀念すべき人である。だから此畫をこの老爺にくれてやつて八幡に奉納すれば、我に若し此後また退轉の念が生じたとき、その八幡に行つて此畫を見て今日のことを思ひ出せば、成程さうだと又た猛進の精神を喚起さすだらう。さうだと斯う考へて老爺にくれてやることにした。老爺大變喜んで直ぐ持つて歸るといふから、それは困る。明日まで待つてくれる。今日は自宅へ持つて歸つて少は手を入れたいからと言ふと、そんなら一寸私が宅へ寄つてくれる直ぎ其處だからつて、

僕が行くとも言はないに先に立つてずん／＼ゆくから、僕も面白半分に従いていつたサ。思つたより大きな家で庭に麥が積んで有つて、婆さんと若夫婦らしいのが頻に抜いで居たが、それから皆集つて繪を見るやら茶を出すやら大騒ぎを初めた。それで、僕は明日自分で持つて来てやると約束して来たんだ。今日は降るから閉口したが待つて居ると氣の毒だからこれから行つて来ようと思ふ』

時田は殆ど一口も入れないで黙つて聽いて居たが、江藤が漸と止めたので、

『其百姓家に娘は居なかつたか』と眞顔で問うた。

『ア、居た／＼八才ばかりの』何心なく江藤は答へる。

『そいつは惜かつた十六七で別嬪でモデルになりさうだと來ると小説だつたツけ』と言つて『ウフ、』と笑つた。此先生に不似合なことを時々言つて而して自分で斯んな風な笑ひかたをするのが此人の癖の一つである。

『さう旨くは行かないサ、ハ、ハ、ハ、イヤそんなら行つて来ようか、御苦勞な話だ』と江藤が立ち上らうとする時、生垣の外で、

『昨夜またやつたよ。聞いたかね最早、今度は三十ばかりの野郎よ、野郎ぢやアねッ



からお話になんねエ、十七八の新造と來なきア、さうよ漸々暑くなるから逆上せるかも知んねエ」と大きな聲で言ふのは「踏切の八百屋」である。

「さうよ懐が寒くなると血が皆な頭へ上つて、それで氣が狂ふんだらうよ」と言つたは長屋の者らし。

「旨い言を云つてらア」と江藤は吐いた。

「己等は毎晩逆上せる薬を四合瓶へ一本づ、升屋から買つて飲むが一向鐵道往生をやらかす氣にならねエハ、」

「薬が足りないのだらうよ、今夜あたりお上さんにさう言つて二合も増してお貰ひな」  
「違へねエ、懐が寒くならアヒ、」と妙な聲で笑つた。

## (三)

其夜八時過ぎでもあらうか、雨は蕭々降つて居る。踏切の八百屋では早く店を了ひ、主人は長火鉢の前で大胡坐をかいて、例の四合の薬をぐびりぐびり飲つて居る。女房は其手つきを見て居る。娘のお菊は傍で針仕事をしながら時々頭を上げて店の戸の方を見る。

「成程四合では足りねエ」

「何が成程だよ」女房は最早不平らしい。

「逆上の薬が足りないッてことよ」

「馬鹿言つてらア」女房には何のことだか解らない。

「お菊、最早二合取つて來て呉んねエ」

「お止しよ嘘だよ、馬鹿々々しい」女房は叱るやうに言つて、爛徳利を一寸取つて見て、

「未だ有るくせに」

「有つても宜いよ、二合取て來て呉んねエ、明日口がさけねえから」

「誰にさ、誰に口がさけねえんだよ。馬鹿々々しい」

「成程旨いことを言ふぢやアないか、今日己等が葛屋へ行つて今朝の一件を話すと、長屋の者が、懐が寒くなるから頭へ逆上るだつて言やアがる、旨いことを言ふぢやアないか。そいで己等ア四合づ、毎晩逆上薬を飲むが鐵道往生する氣になんねエッて言たらお上さんにさう言つて最早二合も買つてもらへッてやアがる」

「大きなお世話だつて言つてやれば宜いに」と女房は言て見たが、笑はざるを得な



つた、娘も笑つた

『だから二合取つて来て呉んねえッてんだ』

『眞實に今夜はお止しよ、道が悪くつてお菊が可哀さうだから』女房は優しく言つた。

『宜いよ私行つて来ても』娘は針を置いた。

主人は最後の酒杯を熟と見て居たが、其眼はとろんこに爲つて、身體がふらふらして居る。

『矢張四合かな』

三人とも暫時無言、外面は寂として雨の音さへ能くは聞えぬ。

『お前さん薬が利いたぢやアないか』

『ハ、ハ、ハ、ハ』主人は快く笑つて、併し己等ア何程逆上ても鐵道往生は御免だ。ドラ床の中で朝まで安樂成佛と爲ようかな、今朝の野郎なんか未だ浮ばらねエで鐵軌の上を迷つてるだらうよ』

『チョツ薄氣味の悪イ！ねエ最早斯な處は引越して了ひたいねエ』女房は心細く言つた。

『馬鹿言つてらア死ぬる奴は勝手に死ぬるんだ。此方の爲ぢやアねエ、踏切の八百屋で顔が賣れてるのを引越して何處へ行くんだイ。死にたい奴は此踏切で遠慮なしに行つて呉れるがい、や、方々へ觸れ廻してやらア、此方の商賣道具だ』

飽まで太い事を云つて、立上つて便所へ行きながら『其代り便所の窓から念佛の一つも唱へてやらア』

『あれだ者』女房は苦い顔をして娘と顔を見合はした。娘は頗る眞面目で黙つて居る。

主人は便所の窓を明けたが、外面は雨でも月があるか、薄光で其處らが朧に見える。

窓の下は直ぐ鐵道線路である、此時傘を指した一人の男、線路の傍に立つて居たのが主人が窓の明けたので、ソツと避けて家の壁に身を寄せた。それを主人はちらと見て、『何としても命あつての物種だ』と大きな聲で獨言を初めた。『どうせ自分から死ぬるてエなアよくくくだらうが死んぢまへば命が無エからなア』

此時クスリと一聲、笑を壓殺すやうな氣勢がしたが、主人は其には氣が付かない。

『命せえ有れば又た如何な事でも出来らア、錢が無エなら稼ぐのよ。情人が不實なら別な情人をみつけるのよ。命が無くなりやア種なしだ』



娘が来て、

『何言つてるの？』氣味悪るさうに言ふ。

『命あつての物種だてエ事よ、さうぢやアねエか。まあ、今夜なんか死神に取付かれさうな晩だから、早く歸つて能く氣を落着けて考へるんだなア』

『何言つてるの？』

『まあ出直した方が宜いねエ、どうせ死ぬなら、月でも好い晩の方が未だ酒落てらア』

『厭やな』と娘は言つて座敷の方へどたばたと逃げ出してつた。

『出直した、出直した。其方が宜い。あばよ』と言つて主人は躊躇き乍ら出て來たが、火鉢の横にころりと寐たかと思ふと直ぐ大駟聲を聞いて居る。

『眞實に斯んな處ア早く越して了ひたいねえ、薄氣味の悪い。終には碌なことはないよねえお菊』母親は矢張り針仕事を始めながら、其も朝が早いから最うそろ／＼眠さうな眼つきで云ふ。

『さうねえ』娘はさほどにも思はぬやう。

『此月になつてからでも今朝で三人目だよ、よく／＼此踏切はけちが付いて居ると

見える』

娘は黙つて相手にならない。二人は無言で仕事をして居たが、母の手は折々止んで、その度毎にこくり／＼と居眠をして居る、娘は此様を見て見ない振をして居たが暫時してソツと起上つて土間へ下りた。表の戸は二寸ばかり細目に開けてあるのを、音のせぬやうに開けて、身體を半分出して四邊を見廻はすやうで有つたが、ソと外に出た。軒下に立つて居るのが昨夜お梅から『お菊さんに宜しく』と冷やかされた男。

『オヤ磯さん？何故そんな處に立つてるの、お入りな』と娘は小聲でいふ。

『入りそこねて變だから今夜は止さうよ、先刻親父さんが出直せつて言つたから』とにや／＼笑ひ乍ら言ふ。

『アラお前さんだつたの？何だか妙なことを言つてたと思つたよ。まあお入りな、關はないから』

『出直さうよ、愚圖／＼していると又た鐵道往生と間違へられるから』と行きかける。

『人を馬鹿々々しい』と娘は未だ何か言ひかけると内から母親が欠伸聲で、

『お菊最早寐るから外をお閉め』



「何だか雲ぎれがして晴れさうだよ」と嘘を言つてたまかす。  
「オヤ外に居たの、何してゐんだねえ、早くお閉めよ」と慳貪に言ふ。  
「星が見えるよ」と言つて娘は肩をすばめて、男の顔を見て莞爾笑ふ。  
「早くお入りよ」と言つて男は踏切の方へすたこら行つて了つたが、忽ち姿が見えなくなつた。娘は軒の外へ首を出して、今度は眞實に空を仰いで見たが、晴れさうにもない。霧のやうな雨がひや／＼と襟頸に入るので、舌打して「星どころか」と微かに言つたが、荒々しく戸を閉めたと思ふ間もなく、家の内は寂然となつて了つた。

鎌倉婦人



## (上)

此頃病氣保養のため鎌倉に滞在して居る友人柏田勉から次のやうな手紙が来た。自分  
 分は此手紙を読んで痛く感じたことがある。然し今それを此處では言はない、た  
 田が文學者でもなく小説家でもなく、純粹の數學家であるだけ、書くことが餘り露骨  
 で、艶も飾りもなく時に讀者をして觀望せしめは爲ないかを恐れる許り。けれども自  
 分は美文家の手にならざる此蕪雜な手紙の中にこそ却つて多くの眞實を含んで居るや  
 うに思ふから敢てこれを公にしたのである。

僕は昨日滑川に鯉を釣りに行つた。釣りにゆくといふと大變おほげさであるが、釣



れても釣れなくても、たゞ大公望然と絲をたれて居て、時間さへ経てば其で僕の目的は達して居るのであるから、小さな滑川の畔でも僕の釣には澤山なのである。

君も御存知の橋、長谷から海濱院の前を通つて材木座の方へゆく道にある橋、あの橋の下で、亂杭の上に蹲まつて釣つて居ると、橋の上を折々人が通る、然し最早秋の中程であるから、通る者は多く地の者で、珍らしさうに他人の釣を橋の上から見物する悠長な都人士は殆ど居ない。

處が午後三時頃であつた、長谷の方から材木座の方へと橋の半までコロコロ下駄を引ずりながら来た二人連、一人は男、一人は女といふことは其聲で分る。立ちどまつて、『貴女は久しく鎌倉に住つたことが有るとか言ひましたね』と男が問うた。

『ハイ、半年餘り住んで居ました。もう古いことです』といふ女の聲を聞いて僕は愕然とした。僕は此女の聲を聞かざること既に六年、しかも遂に此聲を全く忘れて了はなかつたのである。

橋の高さが二間半もあり、僕は其の直ぐ下に居るのであるから、上から下を見下す時、下から上を見上げなければ互の顔は見合すことは出来ない。

杉愛子の名を言へば君も亦た且つ領き且つ驚くであらう、六年前、僕の妻であつた女、而も青春の戀燃ゆるが如く互に死をも辭せないで總ての故障を排し、僅に結び得たる夫妻の縁、それをすら半年ならずして自ら打ち断つた女、其女が六年の後會て愛する夫と共に住んで居た鎌倉に来て、他の男子と共に昔を語る、其物語を橋の下で昔の夫が聞いて居る、これが小説ならば讀者の嘲笑を恐れて君も書くことは出来まいと思ふ。

けれども、僕の驚いたのは、橋の上に立つて居る女が杉愛子であるといふ一事のみではない。實は先日一寸上京した時に、愛子の身の上に就いて容易ならぬ事を傳へ聞いた。其以前から僕の耳には愛子に就いて甚だ面白からぬ噂を傳へられて居たのである。僕は最早彼の女のことを何とも思つてゐないから、強ひて彼の女の其後の成行など聞かうとも思はぬに、不思議にも其噂が時々僕の耳に入る。一口に言へば杉愛子は到る處で情夫を作へると云ふ淺ましい事實である。去年の事と記憶するが、或日僕は所用あつて數學新報社を訪ひ外山先藏に會つた。用談が終ると外山は急に様子を變へて、卓上に指を立て、『珍聞を聞かさうか』と言ふ。『君に關する事だ。君は鎌倉夫人の



其後の事を知つて居るか」と聞くから「知らない」と僕は答へた。「大きな聲では言はれぬが鎌倉夫人はこの頃音楽學校へ通つて居るよ。まあそれも可いサ、それが真面目なら祝すべしだが、實は音楽は附たりだといふ事だぜ。情夫が三人。如何だ驚いたらう」「さうさか」「さうサ、君は無論まさかと思ふだらう。僕も餘りのことだから段々様子を聞いて見ると全く事實らしい、ひどい女だね、僕はそんな人とは思はなかつた」それから今年の春であつた。義妹が赤坂の或教會から歸つて來ての話に今日兄上の鎌倉夫人に遇つたといふ。「如何して其が分つたか」と聞くと、「私の知つて居る或奥様が一人の若い方をそつと指して、あれが貴兄の義兄の以前の夫人ですと教へて呉れたから分りました。そしてね、兄上、其奥様の被仰るには彼の人は貴女の義兄を酷い目に遇はしたばかりか、其後さんく男を欺して歩いて彼人の爲に幾人困らされたか知れはしない。抑々教會などに足踏みの出来る人ぢやアないのが何といふ圖々しい人だらうツて呆れて居ましたよ」

右の一つの噂で僕は愛子の身の上を十分想像することが出來たのである。處が最後に先日上京した時、更に甚だしい事を聞いた。君も御存知ならん、僕の同郷の友に

沖といふ畫家が居る。暫く會はんので上京した序に訪ねて見ると寢て居るから、如何したと聞くと妻麻質斯で困つたといふけれども、氣分に變りはないので二人は雑談を爲て居ると、沖は急に思ひ出したやうに、

「さうだ、君に會つたら話さうと思つて居たが、僕は思ひがけない處で面白い事を聞いたよ、面白いと言つては君へ失禮かも知れないが」

「何だらう、僕に失禮なことで面白いこと、いふのは？」

「鎌倉夫人のことサ。君の彼の人の洋行一件を知つて居るか」

「噂で聞いたばかりで實際の事は少しも知らんよ」

「さうか、それなら僕の方が少しは詳しさうだ、實は彼人は先方へ着くや直ぐと同行者から追ひかへされたのだ。其理由は船中で船長と怪しい仲になつたのを看破されたのださうな。驚くぢやあないか、彼人の渡米の目的はボストンとかに約束した男が行つて居て、其人の許にゆくべく某夫人に旨く取入つて同行さして貰つたのださうな。處が途中で早くも亂行の沙汰、某夫人は驚いて了つて、船が桑港に着くや否や直ぐと歸國さしたといふのも當然な處置サ。けれども君、未だく酷いことがある、其



は其歸國の途中を監督する筈で汽船會社の寛某といふ男を彼人に附けた。すると、彼人は又寛と怪しい仲になつて了ひ、今では麻布聖坂の下で夫婦然と暮して居るさうな。其寛には細君が有つて兒が二人も有るのだけ、如何だ驚いたらう』

『イヤ其は容易ならぬことだが君は如何して其を知つて居る？』

『だから不思議な話サ、僕の醫者が以前から彼人を知つてゐて、何かの話の序に僕に以上の次第を話して聞かしたのだ。ハイカラ毒婦とは彼人のことだらうと憤激して居たよ。寛の妻の兄は非常に怒つて裁判沙汰にしてやると言つて居るさうだ！、寛は遂に其爲會社の方も首になつたさうな』

『それで寛先生は愛子と一所になつて満足して居るのだらうか』

『さうと見えるねえ。何しろ妻子を捨てたといふのだから、愛子さんの腕も凄まじいよ』との話を聞いて僕は其時は左までにも思はなかつたが、其翌日鎌倉に歸る汽車の中で、其昔を思ひだし、言ふ可からざる痛ましい思に悩まされたのである。であるから橋の上の女を杉愛子と知るや、直ぐ其同伴の男は寛某であると推測した。

で二人の話を下で聞いて居た。まさか六年前、此鎌倉で一所に暮した昔の夫が釣を

垂れながら聞いて居るとは愛子も思はなかつたらう。

## (中)

『一人ですか』と男は聞いた。

『いゝえ母とです』と女は何氣なく答へ、直ぐと『母は其頃から病身で困つて居ましたから度々鎌倉へは轉地に參つて居ました』

『どうです、東京は煩いから我々も二三ヶ月此方へ来て長閑に暮しませうか』

『さうですね、出来ることならさう仕たいもので御座います』

『さう仕ませう。そして釣にでも出掛けませう。何だとか、かんだとか東京は煩くつて仕やうがない』

『眞實です。今日は私も氣がのび／＼しました』

『ア、佳い景色だ。この川ですか青砥藤網が錢を落したといふのは』

『さうださうです』と愛子は例の如く言葉が少ない。

『何が釣れるのだらう？』と男は僕を見下す様子。愛子も僕を見て居るに違ひない。僕は海水浴用の鍔の廣い麥藁帽を被つて居るから横顔すら上からは見えないのである。



僕は鯊ですと言つて帽子を取つて見上げてやらうかと思つたが止した。

「何が釣れるのだらうね」と男は又言つたが愛子は黙つて居る。愛子は其以前僕と二人で此川に鯊を釣つたことが有るから能く知つて居る筈。

「貴方は釣がお好きですか」と今度は愛子が問うた。

「別に好きといふんでもないが、こんな處でのんきに釣つて居たら面白からうと思ひます。貴女は如何です釣は」

「私は釣を仕たことはありません」

「さうでせうね、婦人の遊ぢや無いのだから」

「でも亞米利加あたりでは貴婦人が釣を致さうぢやア御座いませんか」

「さうかも知れませんが、銃獵さへ爲るといひますから然し日本でも愛子さんのやうな氣象の方なら何だつて出来ますよ」

「今度此河に釣に来て見ませうか」と愛子は初心らしい聲で言つた。

「明日だつて可う」

「さうですね」

間もなく二人は材木座の方に去つて了つた。僕は帽子の廂を少しあげて一寸二人の後姿を見た。愛子は十九の昔も二十五の今も様子が全然同じである。男は背の高い肩の怒つた體格、ステッキを曳ずつて體軀を揺つて歩く様子は其心頭、妻もなく子もなく唯今の樂みに夢中になつて居るらしい。

僕は絲を巻き、竿を擔いで濱に出た。秋の空高く晴れ、沖なる海は果もなく空に連なり、大島の影鮮やかに波の上に浮び、眞帆片帆は西に傾く日を受けて白く、成程佳い景色である。砂山の下に腰を下して、僕は色々考へた。いふまでもなく愛子のこゝに就いて、冷やかに考へた。そして透明に、恰度秋の其の如くに。

何故自分は其昔、彼女にあゝまで夢中になつたらう。

彼女の心は彼の時も今も同じことであらうか。今も戀して居るだらうか。

覺といふ男の心は自分の昔と同じであらうか。戀に燃えて居るだらうか。

戀といふものは幾度相手が變つても同じやうに熱し且つ樂しいものであらうか。

僕は種々の問を出して其答を得ようとしたけれどもななく、數學のやうに式が立たない。其處で僕は先づ杉愛子の十八の時、僕と相知つてから後、二人が戀で夢中にな



つた時のことを想ひ起した。

それからそれと想ひ起すに連れて、當時二人の情の清くして深く、高くして哀しきを思ひ、二人とも未だ世の塵に染まないうで偏へに理想の境を仰ぎつゝ、或時は歌ひ、或時は月光流水の如き下に相擁して泣いたことなどを思ひだした。

當時の愛子を思ふと、罪のない少女といふの外、如何に冷やかに考がへても別に鑑定の下しやうがない。どうせ人間だから彼女としても當時既に種々の邪惡を有して居ただらう。しかし其爲に其時の戀の純潔なると熱誠なるとを疑ふことは出来ない。外の人には出来ても僕には出来ない。僕は其頃のことを思ひだすと今でも楽しい夢路を辿りつゝ、何處よりもなく風に送られて来る哀しい懐かしい優しい笛の音を聞くやうな氣がして来る。

其處で僕は一の斷案を下し得る、曰く柏田勉と杉愛子の戀は所謂る神聖なるものであつたと。で自分が愛子に夢中になつたのも決して怪しむに足りないのみならず、愛子も亦た自分に夢中になつたのも當然である。

けれども、それならば愛子と何故結婚後半年も経つが經たぬに其戀人を捨てたか。

曰く、戀が醒めたからである。外來の事情は色々あつたに違ひないが、其事情に動かされたのは心の力、則ち戀が消えたからである。何故消えたらう。

其處までは解らない。恰度何故戀したといふことが解らぬ如く、これは解るものではないけれども愛子の其後の舉動に就いて推測すれば、僕は一つ言ふことがある。曰く僕が鼻について來たのだ。

其處で愛子の性質がやゝ解つて来る。命をかけて？少くとも少女心の後先を考へないで無我夢中に突進して漸く遂げた戀すらも、時が経てば其男が鼻に付いて堪らなくなる女、其女が其後、男を作らへては又鼻につき忽ち得て忽ち捨てるは怪しむに足りないものである。

そして男といふ奴は元來助平に出來て居るから愛子のやうな、外見極めて柔和温順貞淑に見えて、實は大膽不敵な女が、靜かに近づいて來れば、直ぐ自惚れて了ひ、忽ち捕獲せられて了ふ。

僕のは戀であつた。然し愛子はそれを世間でいふ情の如くに打壞して了つた。そして其後愛子は情を戀の如く見せかけて、多くの眞面目な青年や、浮氣男を旨くあや







其處で材木座なら多分光明館と當をつけ今朝早く長谷なる我宿を出た。若し濱で出遇ひでもするなら猶ほ妙と、毎朝散歩するやうに、波打際を歩き滑川の川口まで來ると二人が此方に向けてやつて來る。

僕は川の此方に立ち、二人は彼方の水際に立ち川幅三四間を隔て、僕と愛子は顔を見合はした。

僕は黙つて居る、愛子も黙つて居る。喜怒哀樂を容易に顔に出さない彼女は、眞面目な顔をして僕を見て居たが、靜に踵を轉じかゝつた。

『愛子さん！』と僕は一聲呼んで、直ぐさま膝までも届かない此川口の瀬を渡つた。寛ならんと思ふ男は驚いて僕を見て居る。

僕は三年前、新橋の停車場で一度愛子に遇つたことが有る。その時愛子は笑味を含んで僕に近づき、

『しばらくで御座いました』と言ひさま、手を伸して握手した。そして僕と愛子は二言三言挨拶の言葉を交し平然として別れた。僕は其時の愛子の度胸を知つて居るから川を渡るや、

『愛子さん如何しました、暫くですわね』と言ひながら其傍につかゝと寄つた。

『まア珍らしい處でお目にかゝりました。其後お變りも御座いませんですか』と愛嬌ある言葉、例の如く手を差出したから僕も握手した。

『難有う、相變らずよぼくして居ます』と言ひ終るや直ぐと傍の男に向ひ、

『イヤ初めてお目にかゝります。僕は青木と申しまして、愛子さんとは子供の時から朋友で御座います』と出たらめをやつてのけた。

『私は寛と申します。宜しく』と言葉少なに物慣れた舉止、そして頗る澄まして御座る。お見受申すに紙治氏三十三四。

『どうでせう。甚だ失禮ですが愛子さんを五分間ほど貸して戴きたら御座いますか、實は二人だけで話したい馬鹿々々しい可笑な話もあるので』と思ひきつて無縁に言ふと、愛子は少し狼狽へて、

『青木さん、何の話です、二人で話すつて、可いちやアありませんか寛さんが入らしたつて！』と笑を帯びて言ふ處は巧いもの。

『處が不可ないのですよ』と僕も笑つて言ふと、



「愛子さん、それでは私散歩して居るから、青木さんと悠然お話しなさいな、別に私共は用事があるわけでもないのだから」と言ひつゝ、寛は二三歩踏み出した。愛子も其後に従つて行きかけたから僕は目でこれを止めた。寛は大股に歩いて材木座の方に引きかへし、忽ち數十歩の間が離れた。波の音で最早何を言つても聞えない。僕と愛子は緩かに歩きながら。

「愛子さん眞實に暫くでしたねえ」と僕は親しく言ひかけた。

「眞實ですね、何時か新橋でお目にかゝつたさきですね」と言ひつゝ、砂ばかり見て居る。

「貴女と此處に住んで居た時から最早六年になりましたよ」

「最早そんなになりますかね、此間のやうですが早いものですね」と言つて愛子は嘆息をした。

「以前のことを思ふと夢のやうですね」

「けれども彼の夢は楽しい御座いましたね」

と云つて愛子は一寸僕の顔を見たが又直ぐ下を向いて終つた。

「しかし最早醒めて了つたから仕方がありません。其後貴女は度々楽しい夢を見たでせう面白い夢を？」

「貴方はさうお思ひになつて？」

「たゞ聞いて見るのですよ」

「それなら申しますが私は、貴方と二人で見た夢ほど楽しい夢を見たことはありませんよ、其後」

「それは當然です。あの時は眞實の戀ですもの浮氣の沙汰ちやアなかつたのです。

だから楽しみの裏に深い哀しみがあり、能く貴女も泣いたちやありませんか、その戀を泥の中に沈めたのは貴女ちやありませんか」

「だから私は今でも時々思ひだして悔んで居るのですよ」

「浮氣を爲る暇々にですか」

「貴方は酷いことを言ひますね」

「それぢやア彼の寛とかいふ人は彼方の何ですか？」と切り込んだ。愛子は暫く黙つて居たが、



「そんなことを聞いて私を苦しめんでも可いぢやア御座いませんか。私は最早一生獨身と決定して居るのですよ」

「それが可いでせう、自由で」

「さうですよ、死にたい時に死ねますから」

と言ふ聲は半分泣いて居る。僕も何時しか釣りにまかれて、

「けれども、愛子さん！ 獨身でも何でも可いから早く生涯の目的を定めて眞面目な生活を送るやうになさうと、終には眞實に死んでも足りないほどの淺ましいことになりませうよ」

「難有う御座います。如何かね貴方、此の先私の力になつて下さいな、ね」と言つて僕に寄り添つた。力になることは情人になることである。僕が第三の紙治になることであるけれども僕は不幸にして愛子の御意に應じ兼ねたね。

「だつて寛さんが力になつて居るぢやア有りませんか」

「あんな人、力にも何にもなるもんですか」

「最早鼻に着きましたか」と言ふや直ぐ大聲を揚げて、

「寛さん〜」と呼んだ。寛は砂に引上げた船の横に腰をかけて二人を待つて居たのである。僕は愛子におかまひなく、其傍に急いでゆき、

「イヤ大變お待たせ申しました」

「どう致しまして」

二人とも無言で居る所へ愛子が來たので僕は笑ひながら寛に向ひ、

「愛子さんが今、力になつて呉れる人がないとこぼして居ましたから、貴方何卒何分宜しくお願ひ致します。左様なら」と言つて僕は直ぐ踵を轉らした。

滑川を渡る時振り返つて見ると、二人は並んで歩いて居る。

君、君は小説家である。人間の研究者である。だから以上詳しく申上げて問ふ、鎌倉婦人は毒婦だらうか、ハイカラ毒婦だらうか。

僕は君等の所謂本能満足主義の勇者だと思ふ。以て冥すべきであらう。



神

の

子



## (上)

「君は能く死といふことをいふが、僕は死なんといふことは思つたこともない。思つた處で仕方がないではないか、生あるもの必ず死あり、當りまへのごとで別に不思議は爲さうなものだ。如何だね」と仔細らしい顔付をして髭を撫でながら一人が言つた。對手は年頃二十七八、神経質らしい顔付をした色白の男である。

「さうさ、不思議はないと思ふものには不思議はなく、不思議だと感ずるものには不思議なのだ。けれども聞くが君は果して死を不思議でないと思つたことがあるだらうか」

「無論ある、何時もさう思つて居る」と、髭の男は身を反して自信の厚さを示した。



『眞實に思ふか？』

『眞實に思ふかは情ないね』と微笑を含んで言つた言葉は眞實に情なさうである。

『イヤ別に情ながるにも及ばない。世の中に死を不思議とも不思議でないとも思はず實は初から死など、いふことを思つたこともない癖に、死のことを語るを一概に無用の辯としてこれを嘲る輩が随分少くないからね』

『實は僕もそれなのだ』と髭は頭を掻いた。

『さうだらう、だから眞實に思つたかと聞いたのだ』

『それなら言を更めるが僕は死など思はないでも澤山だと思ふ。全く無益なことだと思ふ』

『眞實にさう思ふかね』

『眞實にさう思ふかね』

『眞實にさう思ふ、今度こそ眞實にさう思ふ』

『さうか、それならいいが、世の中には死を思ふことの無益か有益か、そんなことを眞實心から思ひめぐらしたこともない癖に、自から欺いて自分は左様いふ思想を持つて居ると公言する輩が幾多もある。さういふ輩は死の不思議など無論思つたこともな

く、又死と思ふことの如何をも實は思ひめぐらしたこともなく、てんで死などいふことには一切無頓着なので君もその一人ではないかと僕は思ふのだが、如何いふものか知らん』と色白の男は何處までも冷かにいふ。

『さうだ、さうだ、全く無頓着なのだ』

『寧ろ無感覺といつた方が適切だらう』

『可し、可し、無感覺でも宜しい。全く死なんといふことには無感覺なのだ。けれど

も僕は無感覺結構と思ふ』

『眞實に思ふかね？』

『又か』と髭は苦笑して、『よろしい！今度は眞實にさう思ふ、以前は知らず、今さう

思ふ』

『何故さう思ふのだ』

『理窟は知らない、たゞ無感覺結構と思ふのだ』

『それは強辯に過ぎない！君の眞實のことは僕の方が能く知つて居る。君はたゞ夫れ無感覺なので、君はそれを識認すれば可いのだ、結構も結構でないも入らんことだ。



「理窟を知らない者が是非をいふ権利はない」

「それでは君は如何だ。君が僕に反對する理由を承らう」と政治問題でも討論するやうな口調で毘は卓をトンと敲いた。對手は靜かに、

「反對なものにも爲ない。君は死に無感覺、僕は其反對、此二個の事實を正直に認識した丈だ」

「宜しい、それでは君が死なるものを思ふことの利益なる理由を承らう」

「死は事實だよ。僕は利益が有るからこれを思ふのではない。たゞ此事實を視て、これが不思議を感じざるを得ないのだ。君は此事實を視ず、これを感じないのだ。無感覺か結構か不結構か、そんなことは問題となり得ないのだ」

「問題になるとも、大になる。そして僕は無感覺なるが故に一の不利を來したことの無い證據に依つて、無感覺結構を賛成し主張する」

「何故君等の心はさう不正直で、自ら欺き且つそれを誇らうとするのだらう。死なる事實を感じないものが、如何して無感覺の利や不利を研究するだらう。若し僕が君ならば、『成程自分は死なる事實に無感覺であつた』と自分の心の状を認識するだけでそ

れが利か不利かは問題とならない、といふのは自分が死なる事實を感じたる心の状を経験しないから、第一比較することが出来ない。比較することの出来ないのに如何して結論することが出来る」

「負けた、負けた、君は豪いよ！哲學者だ、けれども終に望んで一言するが、全くの處僕はたゞ生を思ふばかり、死を思ふの暇がないのだ」と兩手で腮を支へ、靴の爪先で床をコツ／＼と鳴らす。

「生を思ふとは？」と若い男は眞面目である。

「生とは生命さ、現にお互、斯うやつて生きて居るぢやアないか」

「それを君は思ふと言ふのか」

「さうサ、生きて居るうちは生きて居ることを思ふの外、別に妙案もないやうだ」

「矢張君は自ら欺いて居る」

「何故や、何故や。正直なんぢやアないか。君だつて現に生命を有して此天地に存在して居るぢやないか」

「勿論。然し君はその存在を自覺して居るかね？。恐くさうであるやう」



『これは怪しからんことを言ふ。生きて居るものが生きて居ることを自覚しないで如何するものか。君は妙にひねくつて僕をからかふね』

『決してからかはない。僕は常に思つて居る、千萬人の中生存を自覚するものは殆ど稀だらうと。人は死を感じる者の少い如く人は自己の生存を自覚する者もめつたにないのである』

『けれども現に生きて居て、生きて居ることを知つて居るぢやアないか』

『たゞ生きて居るから生きて居るので、犬もさうだ』

『人と犬とは一所にならない』

『さうサ、幾干か違ふだらう。けれども犬も動物、人も動物、犬は生命の約束に従つて生命を保つことを力め、人も其通である。たゞ人は社會を作つて居るから、生命を保つ上に多少複雑になつて居るばかりだ』

『君の言ふことは何のことだか解らない、今日は失敬しよう、何れ其中高論名説を承はりたいものだ』

『それぢやア止さう』

(下)

若い男は髭の友に別れて一人家路に辿りながら色々と考へたのである。

『成程自分の言ふ處は人に解るまい。殊に彼の友などには解るまい。然しこれは到底人から人へ、心から心へ傳へることの出来ない感じではあるまいか、若しそれならば辯を費す程無益で黙つて彼の人達の言はうまゝに言はして置く外に仕方がない』と思つた。けれども彼はさう思ふや、言ふべからざる孤獨を感じたのである。

其夜は殊に月が冴えて居たので、彼は家を出て野を歩いた。林の間の小路を行くと、行く手遙に笛の音がするので、其音を當に林を分け入ると、小な湖水の潭へ出た。冬枯の林は鏡のやうな水面に其の影を涵し、湖水の奥は銀色の霧に包まれて朧に光つて居る。

彼は最初、笛の音の起る處は湖の底深き神秘の宮居ならんと思ひ、耳を澄して水際に立つて居ると其音の妙なる、彼は魂を動かし、永遠の俤を見る心地し、今更我生存の嚴然として動かすべからざる事實に感じ、無窮の天地に介立する此生の孤なるを感じて思はず岸に伏して聲を放つて泣いた。



暫くして頭を上げると、一艘の小舟が此方を指して漕ぎ寄せるのを見た。近づくとまに見る船には一人の翁と一人の少女とが乗込んで居る。

船は岸に着いた。翁と少女は彼の傍に来た。翁は笑味を含んで、

『泣いて居たのはお前かな』と優しく問うた。

『さうです、私です』と彼は静かに答へつゝ、少女を見ると、手に一管の笛を持って居たのである。

『何故泣いたのかね、何が悲しいのだね』と翁の言葉は何處までも柔和なれど、其顔には犯す可からざる威厳が備はつて居るので、彼は畏敬の念に打たれつゝも、

『私は天地生存の感に堪へないので泣きました』

『何時でも其感に堪へないかね?』

『何時でもでは御座いません、時々で御座います。けれど其時々之感は恰も電のやうに小子の心を射るので御座います』

『そしてお前は其電光に照らして日常の生活の暗黒を見るだらう。そしてお前は何時も此電光の中に住んで居たと思ふだらう』

『さうで御座います。若し私を此先に導いて呉れるものがあるなら、それこそ私の神で御座います』

翁は此言葉を聞いて微笑し、

『まづお前に聞きたいのはお前が時々打たれるといふ其電の模様だ。それを詳しく話してお呉れ』

『刹那の感で御座いますから一口で申されます。或夜のことでした。真夜中にふと眼が覚めました。夜は更け萬籟寂として居ました。私は眼を開いて床の上に身動きもしませんでした。其時です、私は卒然、我生命の此大いなる、此無限無窮なる宇宙に現存して居るのを感じたのです。そして言ふべからざる畏懼の念に打たれたので御座います。』

又或時です、小子は友の家から途を急いで町を行くと、秋の日は西に傾いて斜にその鮮かな光を家並に投げ、町をゆく人々の影長く地に這うて居ました。子供は群で遊び飴賣の太鼓は虚空に響き渡り、道普請の男は鶴嘴を振つて居ます。私は此間を何心なく歩いて居ましたが、思はず我を顧みて、我も亦た此生を此天地に享け、消えてゆ



く此世の一片として此悠久にして不思議なる宇宙に生きて居る魂ぞといふ感に打れたのです。あの時の私の眼には目に見る世の様を直に過去に移し、此身をも過去の人として見たのであらうと思ひます。其外、或は高山の頂に立つて落日の光を送る時或は多人数の席上に坐して衆人の喋々と共に喋々し、ふと窓外の白雲に眼を轉じた時、或は砂山を歩いて種々の空想に耽つた後、卒然我に復つた時私は此生を此の天地の間に見出すのです。

老翁は聞き終つて嚴かなる面持し、

『それならば平常は如何だね？』

『紛々たる世の中に身を入れて、月が美だとか、敵とか味方とか、意志とか感情とか、獨立とか自由とか、英雄とか凡夫とか、戀とか夫婦とか申して、感じて、唱へて、酒に酔ひ、肉の味を嘆美へ、富とか貧とか、彼の人は堅いとか、彼の人は感心だとかいふことを話し合つて暮して居るのです。けれども要するに死は冷笑して總てを支配し、私共はそれを忘れて可い氣になつて居るのです』

『犬と相去る一步とお前が今日友に話したのは其處だ。お前は未だ幸福だ、泣け、泣

け、社會生存の暗室から、天地生存の事實を直視する人は、人の中の最も進んだ人で、やがてそれは神の子だ』

『總てを捨て、乃公に従へ！』



源

を

ぢ



(上)

都より一人の年若き教師下り來りて佐伯の子弟に語學を教ふることに殆ど一年、秋の中頃來りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海邊にとゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人識りしは片手にて數ふるにも足らず。其重なる一人は、宿の主人なり、或夕雨降り、風起ちて磯打つ波音もや、荒きに、獨を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し縁先に來りぬ、夫婦は燈つけんともせず薄暗き中に團扇もて蚊やりつ、語れり、教師を見て珍しやと、坐を譲りつ、夕闇の風、軽く雨を吹けば一滴二滴、面を拂ふを三人



は心地よげに受けて四方山の話に入りぬ。

其後教師都に歸りてより幾年の月日経ち、或冬の夜、夜更けて一時を過ぎしに獨小机に向ひ手紙認めぬ。そは故郷なる舊友の許へと書き送るなり。其物案じがほなる蒼さ色、此夜は頬の邊少し赤らみて折々何處ともなく睥視るまなざし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。

霧の中には一人の翁立ちたり。

教師は筆おきて読みかへしぬ。読みかへして目を閉ぢたり。眼、外に閉ぢ内に開けば現れしはまた翁なり。手紙の中に曰く『宿の主人は事もなげに此翁が上を語りぬ。げに珍からぬ人の身の上のみ、かゝる翁を求めんには山の蔭、水の邊、國々には澤なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思す、こは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばあれ、われ此翁を懐く時は遠き笛の音さゝて故郷戀ふる旅人の情、動きつ、又は想高き詩の一節讀みをはりて限りなき大空を仰ぐが如き心地す』と。

されど教師は翁が上を委しく知れるにわらず。宿の主人より聞き得しは其あらましのみ。主人は何故に此翁の事を斯くも聞きたゞさるゝか、教師が心解し兼ねたれど問はるゝまゝに語れり。

『此港は佐伯町に恰好かるべし。見給ふ如く家といふ家幾干ありや、人数は二十にも足らざるべく、淋しさは何時も今宵の如し。されど源叔父が家一軒たゞ此磯に立ちし其以前の寂しさを想ひ給へ。渠が家の横なる松、今は幅廣き道路の傍に立ちて夏は涼しき蔭を旅人に借せど十餘年の昔は沖より波寄せて折々其根方を洗ひぬ、城下より來りて源叔父の舟頼さんものは海に突き出し巖に腰を掛けし事は、今は火薬の力もて危き崖も裂かれたれど。

『否、渠とてもいかで初より獨り暮さんや。』

『妻は美しかりし。名を百合と呼び、大入島の生れなり。人の噂を半偽と見るも、この事のみは信なりと源叔父が或夜酒に吞まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九の頃、春の夜更けて妙見の燈も消えし時、ほととくと戸たたく者あり。源起きいで誰れぞと問ふに、島まで渡し玉へといふは女の聲なり。傾きし月の光にすかし見れば兼て見知りし大入島の百合といふ小娘にぞありける。』



『その頃渡船を業となすもの多きうちにも、源が名は浦々にまで聞えし。そは心たしかに俠氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、げに君にも聞かし度きは其頃の源が聲にぞありける。人々は彼が櫓こぎつゝ、歌ふを聴かんとして撰びて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も變らず。

『島の少女は心ありて斯くも晩く源が舟頼みしか、そは高きより見下し給ひし妙見様ならでは知る者なき秘密なるべし。舟とめて互に何をか語りしと問へど、酔うても言葉少なきは彼はたゞ額に深き二條の皺寄せて笑ふのみ、其笑は何處となく悲しげなるぞうたてき。

『源が歌ふ聲牙えまさりつ。斯くて若き夫婦の樂しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。獨子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くして遂にみまかりぬ。城下の者にて幸助を引取り、ゆくゆくは商人に仕立てやらんと言ひいでしがありしも、可愛き妻には死別れ、更に獨子と離るゝは忍び難しとして辭しぬ。言葉少きは此頃より愈言葉少くなりつ、笑ふことも稀に、櫓こぎにも酒の勢ならでは歌はず、醍醐の入江を夕月の光碎きつ、明らかに歌ふ聲さへ哀をそめたり、こは聞くものゝ心にや、あらず、妻失ひ

し事は元氣よかりし彼が心を半ば碎き去りたり。雨のそぼ降る日など、淋しき家に幸助一人をのこし置くは不憫なりとて、客と共に舟に乗せゆけば、人々哀れがりぬ。されば子供への土産にと城下にて買ひし菓子の袋開きて此孤兒に分つ母親も少からざりし。父は見知らぬ風にて禮も言はぬが常なり、これも悲しさの餘なるべしと心にとむる者なし。

『斯くて二年過ぎぬ。此港の工事半ば成りし頃吾等夫婦、島より此處に移りて此家を建て今の業をはじめぬ。山の端削りて道路開かれ、源叔父が家の前には今の車道でき朝夕二度に汽船の笛鳴りつ、昔は網だに干さぬ荒磯は忽ち今の様と變りぬ。されど源叔父が渡船の業は昔のまゝなり。浦人島人乗せて城下に往來すること前に變らず、港開けて車道でき人通り繁くなりて昔に比ぶれば此處も浮世の仲間入りせしを渠はうれしとも將た悲しとも思はぬ様なりし。

『斯くて又三年過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供等と海に遊び、誤りて溺れしを、見てありし子供等、畏れ逃げて此事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の歸り來ぬに心づき、驚きて吾等も共に捜せし時は言ふまでもなく事遅れて、哀れの骸は不思議にも



源叔父が舟底に沈み居たり。

『渠は最早や決してうたはざりき。親しき人々にすら言葉かはすことを避くるやうになりぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年月を送るうちには如何なる人も世より忘れらる、者と見えたり。源叔父の舟ごとく事は昔に變らねど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうになりぬ。斯く語る我身すらをり、源叔父が彼の丸き眼を半ば閉ぢ槽擔ひて歸り來るを見る時、源叔父はまた生きてあるやなど思ふことあり。渠は如何なる人ぞと問ひ玉ひしは君が初めなり。』

『さなり、呼びて酒吞ませなば、遂には歌ひもすべし。されど其歌の意解し難し。否、渠はつぶやかず、操言ならべす、たゞをり、太き嘆息するのみ。あはれとおぼさずや——』

宿の主人が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は都に歸りて後も源叔父が事忘れず、燈下に坐りて雨の音さく夜など、思ひはしはく、此あはれなる翁が上に飛びぬ。思へらく、源叔父今は如何、波の音さく、古き春の夜の事思ひて獨り爐の傍に丸き目ふさぎてやあらん、或は幸助が事のみ思ひつけてや居らんと。されど教師は知

らざりき、斯く想ひやりし幾年の後の冬の夜は翁の墓に雲降りつゝありしを。年若き教師の、詩讀む心に記憶のページ翻へしつゝある間に、翁が上には更に悲しき事起りつ、既に此世の人ならざりしなり。斯くて教師の詩は其最後の節を缺きたり。

(中)

佐伯の子弟が語學の師を桂港の波止場に送りし年も暮れて翌年一月の末、或日源叔父は所用ありて晝前より城下に出でたり。

大空曇りて雪降らんとす。雪は此地に稀なり。其日の寒さ推して知らる。山村水廓の民、河より海より小舟泛べて城下に用を辨ずるが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はのゝしり、最と賑々敷けれど今日は淋しく、河面には漣たち灰色の雲の影落ちたり。大通何れもさび軒端暗く往來絶え、石多き横町の道は凍れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苦白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は魚住まぬ湖水の真中に石一個投げ入れたる如し。



祭の日などには舞臺据ゑらるべき廣辻あり、貧しき家の兒等血色なき顔を曝して戯れつ、懐手して立てるもあり。此處に來かゝりし乞食あり。子供の一人「紀州々々」と呼びしが振向きもせで行過ぎんとす。打見には十五六と思はる、蓬なす頭髪は頸を被ひ、顔の長きが上に頬肉こけたれば額の骨尖れり。眼の光濁り腫動くこと遅く何處ともなく睥視るまなざし鈍し。纏ひしは袷一枚、裾は短く襠樓下り濡れしを、僅に脛を隠せり。腋よりは蟋蟀の足めきたる臍現はれつ、わな／＼と戰慄ひつ／＼ゆけり、此時又彼方より來かゝりしは源叔父なり。二人は辻の真中にて出遇ひぬ。源叔父は其丸さ目睜りて乞食を見たり。

『紀州』と呼びかけし翁の聲は低けれども太し。

若き乞食は其鈍き目を顔と共にあげて、石などを見るやうに源叔父が眼を見たり。二人は暫時目と目見合はして立ちぬ。

源叔父は袂をさぐりて竹の皮包取出し握飯一つ振みて紀州の前に突きだせば、乞食は懐より椀をだしてこれを受けぬ、與へしものも言葉なく受けしものも言葉なく、互に嬉しとも憐しとも思はぬやうなり、紀州はそのまゝ行き過ぎて後振り向きもせず、源

叔父は其後影角をめぐりて見えなくなるまで目送りつ、大空仰げば降るともなしに、降りくるは雪の二片三片なり、今一度乞食のゆきし方を見て太き嘆息せり。子供等は笑を忍びて臍つゝさ合へど翁は知らず。

源叔父家に歸りしは夕暮なりし。渠が家の窓は道に向へど開かれしことなく、さなきだに闇さを燈つけず、爐の前に坐り指太き兩手を顔に當て首を垂れて、嘆息つきたり。爐には枯枝一捆くべあり。細き枝に蠟燭の焰ほどの火燃え移りて代る／＼消えつ燃えつす。燃ゆる時は一間の中暫時明し。翁の影太く壁に映りて動き、煤けし壁に浮びいづるは錦繪なり。幸助五六歳のころ妻の百合が里歸りして貰ひ來しを其時貼りつけしまゝ、十年餘の月日経ち今は薄墨塗りしやうなり、今宵は風なく波音聞えず。家を轉りてさら／＼と私語く如き物音を翁は耳をばだて、聽きぬ。こは雲の音なり。源叔父は暫時此さびしき音を聞入りしが、太息して家内を見まはしぬ。

豆洋燈つけて戸外に出れば寒さ骨に沁むばかり、冬の夜寒に櫓こくをつらしとも思はぬ身ながら粟だつを覺えさ。山黒く海暗し。火影及ふ限りは雪片さらめきて降つるが見ゆ。地は堅く凍れり。此時若き男二人物語りつゝ、城下の方より來しが、燈持ちて



門に立てる翁を見て、源叔父よ今宵の寒さは如何にといふ。翁は、さなりとのみ答へて目は城下の方に向へり。

や、行き過ぎて若者の一人、何時もながら源叔父の今宵の様は如何に、若き女彼顔を見れば其儘氣絶やせんと囁けば相手は、明朝あの松が枝に翁の足のさがれるを見出さんも知れずといふ。二人は身の毛の彌堅つを覺えて振向けば翁が門には最早燈火見えざりき。

夜は更けたり。雪は霰と變り霰は雪となり降りつ止みつす。灘山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原の如し。山々の麓には村あり、村の奥には墓あり、墓は此時覺め、人は此時眠り、夢の世界にて故人相まみえ泣きつ笑つす。影の如き人、今しも廣辻を横りて小橋の上をゆけり。橋の袂に眠りし犬頭をあげて其後影を見たれど吠えず。あはれ此人墓よりや脱け出でし、誰に遇ひ誰れと語らんとて斯はさまよふ。渠は紀州なり。

源叔父の獨子幸助海に溺れて失せし同年の秋、一人の女乞食日向の方より迷ひ來て佐伯の町に足をとめぬ。伴ひしは八歳ばかりの男子なり。は此子を連れて家々の

門に立てば、貴物多く、此地の人の慈悲深きは他國にて見ざりし程なれば、子の爲に行末よしと思ひはかりけん、次の年の春、母は子を殘して何處にか影を隠したり。太宰府詣でし人歸來ての話に、彼の女乞食に肖たるが襦袢着し、力士に伴ひて鳥井の傍に袖乞ひするを見しといふ、人々皆思ひ當る節ありといへり。町の者母の無情を憎み殘されし子をいや増してあはれがりぬ。斯くて母の計當りしと見えし。あらず、村々には寺あれど人々の慈悲には限あり。不憫なりとは語りあへど、眞面目に引取りて末永く育てんといふものなく、時には庭先の掃除など命じ人らしく扱ふものありしかど、永くは續かず。初は童は母を慕ひて泣きぬ、人々物與へて慰めたり。童は母を思はずなりぬ、人々の慈悲は童をして母を忘れしめたるのみ。物忘れする子なりともいひ白癡なりともいひ、不潔なりともいひ、盗すともいふ、口實は様々なれど此童を乞食の境に落しつくし人情の世界の外に葬りし結果は一つなりき。

戯れにいろは教ふればいろはを覺え、戯れに讀本教ふれば其一節二節を暗誦し、子供等の歌聞て又歌ひ、笑ひ語り戯れて、世の常の子と變らざりき、げに變らず見えた。生國を紀州なりと童が言ふがまゝに「紀州」と呼びなされて、はては佐伯町附屬の



品物の様に取扱はれつ、街に遊ぶ子は此童と共に育ちぬ。斯くて渠が心は人々の知らぬ間に亡び、人々は渠と朝日照り炊烟棚引き親子あり夫婦あり兄弟あり朋友あり涙ある世界に同居せりと思へる間、渠は何時しか無人の島に其淋しき巢を移し此處に其心を葬りたり。

渠に物與へても禮言はずなりぬ。笑はずなりぬ。渠の怒りしを見んは難く渠の泣くを見んは容易からず、渠は恨みも喜びもせず。たゞ動き、たゞ歩み、たゞ食ふ。食ふ時傍より旨きやと問へばアクセント無き言葉にて旨しと答ふ、其聲は地の底にて響くが如し。戯れに棒振りあげて渠の頭上に翳せば、笑ふとき面持してゆるやかに歩を運ぶ様は主人に叱られし犬の尾振りつゝ逃ぐるに似て異り、渠は決して媚を人にさげず、世の常の乞食見て憐れと思ふ心もて渠を憐れといふは至らず。浮世の波に漂うて溺るゝ人を憐れと見る眼には渠を見出さん事難かるべし。渠は波の底を這ふ者なれば。紀州が小橋を彼方に渡りてより間もなく廣辻に來かゝりて四邊を見廻すものあり。手には小さき舷燈揚げたり。舷燈の光射す口を彼方此方と轉らす毎に、薄く積みし雪の上を末廣がりし火影走りて雪は美しく閃き、辻を圍める家々の暗き軒下を丸き火影

飛びぬ。此時本町の方より突如と現はれしは巡查なり。づか／＼と歩み寄りて何者ぞと聲かけ、燈をかゝげて此方の顔を照らしぬ。丸き目、深き皺、太き鼻、逞ましき舟子なり。

『源叔父ならずや』、巡查は呆れし様なり。

『さなり』、噎れし聲にて答ふ。

『夜更けて何者をか捜す』

『紀州を見給はざりしか』

『紀州に何の用ありてか』

『今夜は餘りに寒ければ家に伴はんと思ひはべり』

『されど渠の寢床は犬も知らざるべし、自ら風ひかぬがよし』

情ある巡查は行きささりぬ。

源叔父は嘆息つきつゝ、小橋の上まで來しが、火影落ちし處に足跡あり。今踏みしやうなり。紀州ならで誰か此雪を素足のまゝ歩まんや。翁は小走に足跡向さし方へと馳せぬ。



(下)

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知れ渡り、傳へきし人初は眞とせず次に呆れ終は笑はぬものなかりき。此二人が差向ひにて夕餉に就く様こそ見たければ滑稽芝居見まほしき心にて嘲る者もありき。近頃は有るか無きかに思はれし源叔父又もや人の噂にのぼるやうになりつ。

雪の夜より七日餘り經ちぬ。夕日影あざやかに照り四國地遠く波の上に浮びて見ゆ。鶴見崎の邊眞帆片帆白し。川口の洲には千鳥飛べり。源叔父は五人の客乗せて纜解かんとす。二人の若者駈け來りて乗りこめば舟には人滿ちたり。島にかへる娘二人は姉妹らしく、頭に手拭かぶり手に小さき包持ちぬ。残り五人は浦人なり。後れて乗りこみし若者二人の外三人は老夫婦と連の小兒なり。人々は町の事のみ語りあへり芝居の事を若者の一人語りいでし時、この度のは衣裳も格別に美しき由島には未だ見物せしもの少けれど噂のみはいと高しと姉なる娘いふ。否さまでならず、たゞ去年のものには少く優れりと打消すやうにいふは老婦なり。俳優の中に久米五郎とて稀なる美男まじれりてふ噂島の娘等が間に高しとき、ぬ、いかにと若者姉妹に向つて言へ

ば二人は顔赤らめ、老婦は大聲に笑ひぬ。源叔父は櫓こぎつゝ眼を遠き方にのみ注ぎて、此處にも浮世の笑聲高きを空耳に聞き、一言も雜へず。

『紀州を家に伴へりと聞きぬ、信にや』若者の一人、何をか思ひ出て問ふ。

『さなり』翁は見向もせて答へぬ。

『乞食の子を家に入れしは何故ぞ解し難しと怪むもの少からず、獨は餘に淋しければにや』

『さなり』

『紀州ならずとも、共に住む程の子鳥にも浦にも求めんには必ず有るべきに』

『げに然り』と老婦口を入れて源叔父の顔を見上げぬ。源叔父は物案じ顔にて暫時答へず、西の山懷より眞直に立のぼる烟の末の夕日に輝きて眞青なるを見詰しやうなり。

『紀州は親も兄弟も家も無き重なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠の父とならば、渠我の子となりなん、共に幸ならずや』獨語のやうに言ふを人々心のうちにて驚きぬ此翁が斯く滑らかに語りいでしを今迄聞きしことなれば。



「げに月日経つことの早さよ、源叔父。ゆり殿が赤兒抱きて磯邊に立てるを視しは、われには昨日の様な心地す」老婦は嘆息つきて、

「幸助殿今無事ならば何歳ぞ」と問ふ。

「紀州よりは二ツ三ツ上なるべし」さりげなく答へぬ。

「紀州の歳ほど推し難きはわらず、垢にて歳も埋れはてしと覺ゆ、十にや將十八にや」

人々の笑ふ聲暫時止まざりき。

「われも能は知らず、十六七とかいへり。生の母ならで定に知るものあらんや、哀とおぼさずや」翁は老夫婦が連れし七才計の孫とも思はるゝ兒を見返りつゝ言へり。

其聲さへ震へるに、人々氣の毒がかりて笑ふことを止めつ。

「げに親子の情二人が間に發らば源叔父が行末樂しかるべし。紀州とても人の子なり。源叔父の歸り遅しと門に待つやうならば涙流すものは源叔父のみかは。」夫なる老人の取繕ひげにいふも眞意なきにわらず。

「さなり、げに其時はうれしかるべし」と答へし源叔父が言葉には喜充ちたり。

「紀州連れて此度の芝居見る心はなきか」斯く言ひし若者は源叔父嘲らんとにはあらで、島の娘の笑顔見たきなり、姉妹は源叔父に氣兼ねて微笑みしのみ。老婦は舷たさこそは極めて面白からんと笑ひぬ。

「阿波十郎兵衛など見せて我子泣かすも益なからん」源叔父は眞顔にていふ。

「我子とは誰ぞ」老婦は素知らぬ顔にて問ひつ。

「幸助殿は彼處にて溺れしと聞きしに」振り向いて妙見の山影黒き邊を指しぬ、人々皆彼方を見たり。

「我子とは紀州の事なり」源叔父は暫時こぐ手を止めて彦岳の方を見やり、顔赤めて言放ちぬ。怒とも悲とも恥とも將た喜ともいひわけ難き情胸を衝きつ、足を舷端にかけ櫓に力加へしと見るや、聲高らかに歌ひいでぬ。

海も山も絶えて久しく此聲を聞かざりき。うたふ翁も久しく此聲を聞かざりき。夕風の海面をわたりて此聲の脈ゆるやかに波紋を描きつゝ消えゆくぞ見えし。波紋は渚を打てり。山彦は微に應へせり。翁は久しく此應をきかざりき。三十年前の我、長き眠より醒めて山の彼方より今の我を呼ぶならずや。



老夫婦は聲も節も昔の如しと讚め、年若き四人は噂に違はざりけりと聽きはれぬ。源叔父は七人の客わが舟に在るを忘れたたり。娘二人を舟に揚げし後は若者等寒しとして毛布被り足を縮めて臥しぬ。老夫婦は孫に菓子與へなどし、家の事どもひそくと語りあへり。浦に着きし頃は日落ちて夕烟村を罩め浦を包みつ。歸舟は客なかりき。醍醐の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、願れば太白の光連に碎け此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。静に櫓こぐ翁の影黒く水に映れり、舳軽く浮べば舟底た、く水音、あはれ何をか囁く人の眠催す様なる此水音を源叔父は聞くともなく聞きて様々の樂しき事のみ思ひつけ、悲しき事、氣がりの事、胸に浮ぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。物を追ひやるやうなり。

家には待つものあり。渠は爐の前に坐りて居眠りてや居らん。乞食せし時に比べて我家のうちの樂しさ煖かさに心溶け、思ふこともなく燈火打見やりてや居らん、わが歸るを待たで夕餉了へしか、櫓こぐ術教ふべしといひし時、うれしげに點頭きぬ、言葉少く絶えず物思はしげなるは此迄の慣なるべし。月日経ば肉付きて頬赤らむ時もあるん。されどされど、源叔父は頭を振りぬ。否々渠も人の子なり、我子なり、吾に習ひ

て巧にうたひ出る渠が聲こそ聞かまほしけれ、少女一人乗せて月夜に舟こぐ事もあらば渠も人の子なり、其少女再び見たき情起さでやむべき、われに其の情見ぬく眼あり必らず他所には見じ。

波止場に入りし時、翁は夢みる如きまなざし、問屋の燈火、影長く水にゆらぐを見たり。舟繋ぎ了れば臥席捲きて腋に抱き櫓を肩にして岸に上りぬ。日暮れて間もなきに問屋三軒皆な戸さして人影絶え人聲なし。源叔父は眼閉ぢて歩み我家の前に來りし時、丸き眼睜りて四邊を見廻はしぬ。

『我子よ今歸りしぞ』と呼び櫓置可き處に櫓置きて内に入りぬ。家内暗し。

『こは如何に、わが子よ今歸りぬ、早く燈點けずや』寂として應なし。

『紀州々々』竈馬のふつゝかに啣くあるのみ。

翁は狼狽して、懷中よりまづち取出し、一摺すれば一間のうち俄に明くなりつ、人らしき者見えず、暫時して又暗し。陰森の氣床下より起りて翁が懷に入りぬ。手早く豆洋燈に火を移し四邊を見廻はすまなざし鈍く、耳そばだて、『我子よ』と呼びし聲噎れて呼吸も迫りぬと覺し。



爐には灰白く冷え夕餉たべしぬとだになし。家内捜すまでもなく、たゞ一間の裡を翁はゆるやかに見廻はしぬ。煤し壁の四隅は光屈き兼つ、心ありて見れば人あるに似たり。源叔父は顔を両手に埋め深き嘆息せり、此時もしやと思ふ事胸を衝きしに、つと起てば大粒の涙流れて頬をつたふを、拭はんとはせず、柱に掛けし船燈に火を移していそがはしく家を出で、城下の方指して走りぬ。

蟹田なる鍛冶の夜業の火花闇に散る前を行過んとして立どまり、日暮の頃紀州此前を通らざりしかと問へば、氣つかざりしと槌持てる若者の一人答へて訝しげなる顔す。こは夜業を妨げぬと笑面作り、又急ぎゆけり。右は畑、左は堤の上を一列に老松並ぶ真直の道を半ば來りし時、行先をゆくものあり。急ぎて燈火さし向くるに後姿紀州にまぎれなし。渠は兩手を懐にし、身を前に屈めて歩めり。

『紀州ならずや』呼びかけて其肩に手を掛けつ、

『獨り何處に行かんとはする』怒、はた喜、はた悲、はた限りなき失望をたゞ此一言に包みしやうなり。紀州は源叔父が顔見て驚きし様もなく、道ゆく人を門に立ちて心なく見やる如き様にて打守りぬ。翁は呆れて暫時言葉なし。

『寒からずや、早く歸れ我子』いひつゝ紀州の手取りて連れ歸りぬ。みちく源叔父は、わが歸りの遅かりしゆゑ淋しさに堪へざりしか、夕餉は戸棚に調へ置きしものなどをいひくへ行けり。紀州は一言もいはず、生憎に嘆息もらずは翁なり。

家に歸るや、爐に火を盛に燃さて其傍に紀州を坐らせ、戸棚より膳取り出して自身は食はず紀州にのみたべさす。紀州は翁の言ふがまゝに翁のものまで食ひ盡しぬ。其間源叔父はをりく紀州の顔見ては眼閉ち嘆息せり。たべ了りなば火にあれといひて、うまかりしかと問ふ。紀州は眼氣なる眼にて翁が顔を見て微にうなづきしのみ。源叔父は此様見るや、眠くば寝よと優しくいひ、自から床敷きて布圍かけて遣りなとす。紀州の寝し後、翁は一人爐の前に坐り、眼を閉ぢて動かさず。爐の火燃えつきんとすれども柴くべず、五十年の永き年月を潮風にのみ晒せし顔には赤き煙の影覺東なく漂へり。頬を傳ひてさらめくものは涙なるかも。屋根を渡る風の音す、門に立てる松の梢を嘯きて過ぎぬ。

翌朝早く起き出て源叔父は紀州に朝飯たべさせ自分は頭重く口渴きて堪へ難しと水のみ飲みて何も食はざりき。暫時して此熱を見よと紀州の手取りて我額に觸れしめ、



少し風邪ひきしやうなりと、遂に床のべて打臥しぬ。源叔父の疾みて臥するは稀なる事なり。

『明日は癒えん、此處に來れ、物語して聞かすべし』強て打ゑみ、紀州を枕邊に坐らせ、といきつくく、色々の物語して聞かしぬ。爾は饒てふ恐ろしき魚見し事なからんなど七ツ八ツの兒に語るが如し。や、ありて、

『母親戀しくは思はずや』紀州の顔見つ、問ひぬ。此の間を紀州の解し兼ねし様なれば。

『永く我家に居よ、我を爾の父と思へ』

尙ほ言ひ續がんとして苦しげに息す。

『明後日の夜は芝居見に連れゆくべし。外題は阿波十郎兵衛なる由き、ぬ。そなたに見せなば親戀しと思ふ心、必ず起らん、其の時われを父と思へ、そなたの父はわれなり』

斯くて源叔父は昔見し芝居の筋を語りいで、巡禮謠を微なる聲にてうたひ聞かせつ、あはれと思はずやといひて自ら泣きぬ。紀州には何事も解し兼ねる様なり。

『よし、話のみにては解し難し、目に見なば爾も必ず泣かん』

言ひ了りて苦しげなる息、ほと吐きたり。語り疲れて暫時まどろみぬ。目さめて枕邊を見しに紀州あらざりき。紀州よ我子よと呼びつゝ、走りゆく程に顔の半を朱に染めし女乞食何處よりか現はれて紀州は我子なりといひしが見る内に年若き娘に變りぬ。ゆりならずや幸助を如何にせしぞ、わが眠りし間に幸助何處にかは逃げ亡せたり。來れ來れ來れ共に捜せよ、見よ幸助は芥溜のなかより大根の切片掘出すぞと大聲あげて泣けば、後より我子よといふは母なり。母は舞臺見ずやと指し玉ふ。舞臺には蠟燭の光眼を射る計り輝きたり。母が眼のふち赤らめて泣き玉ふを訝しく思ひつ、自分は菓子のみ食ひて遂に母の膝に小さき頭載せ其儘眠入りぬ。母親ゆり起し玉ふ心地して夢破れたり。源叔父は頭をあげて、

『我子よ今恐ろしき夢みたり』いひつゝ、枕邊を見たり。紀州居ざりき。

『わが子よ』と嗚がれし聲にて呼びぬ。答なし。窓を吹く風の音怪しく鳴りぬ。夢なるか、現なるか。翁は布團翻のけ、つと起ちあがりて、紀州よ我子よと呼びし時、目眩みて其の儘布團の上に倒れつ、千尋の底に落入りて波わが頭上に碎けしやうに覺え



ぬ。

其日源叔父は布團被りしまゝ起出でず、何も食はず、頭を布團の外にすらいださりき。朝より吹きそめし風次第に荒らぐ磯打つ浪の音すごし。今日は浦人も城下に出でず、城下より島へ渡る者もなければ渡船頼みに来る者もなし。夜に入りて波益々狂ひ波止場の崩れしかと怪なる、音せり。

朝まだき、東の空漸く白みし頃人々皆起きいで、合羽を着、提灯つけ舩燈携へなどして波止場に集りぬ。波止場は事なかりき。風落ちたれど波尚は高く沖は雷の轟くやうなる音し磯打波碎けて飛沫雨の如し。人々荒跡を見廻るうち小舟一艘岩の上に打上げられて半ば碎けしまゝ残れるを見出しぬ。

『誰の舟ぞ』問屋の主人らしき男問ふ。

『源叔父の舟にまされなし』若者の一人答へぬ。人々顔見合はして言葉なし。

『誰れにてもよし源叔父呼び来らずや』

『われ行かん』若者は舩燈を地に置いて走りゆきぬ。十歩の先已に見るべし。道に差出でし松が枝より怪しき物さがれり。膽太き若者はづかゝと寄りて眼定めて見たり

縊れるは源叔父なりき。

桂港に程近き山ふところに小き墓地ありて東に向ひぬ。源叔父の妻ゆり獨子幸助の墓みな此處にあり。『池田源太郎之墓』と書きし墓標亦此處に建てられぬ。幸助を中にして三つの墓並び、冬の夜は曇降ることもあれど、都なる年若き教師は源叔父今も尚一人淋しく磯邊に暮し妻子の事思ひて泣つゝありと偏に哀れがりぬ。

紀州は同く紀州なり。町のものよりは佐伯附屬の品とし視らるゝこと前の如く、墓より脱け出でし人のやうに此古城市の夜半にさまよふと前の如し。或人渠に向ひて、源叔父は縊れて死たりと告げしに、渠はたゞ其人の顔を打まもりしのみ。



星



都に程近き田舎に年わかき詩人住みけり。家は小高き丘の麓に在りて、其庭は家  
 ふさはしからず廣く、清き流丘の木立より走り出で、此れを貫き過ぐ、木々は野生のま  
 まに育ち、春は梅櫻亂れ咲き、夏は緑陰深く繁りて小川の水も暗く、秋は紅葉の錦み  
 ごとなり、秋や、老いて風鳴りそむれば物淋しさ限りなく、冬に入りては木の葉落ち  
 盡して庭の面のみ見すかざる、中にも松杉の類のみは緑に誇る。詩人は朝夕に此庭  
 を樂みて暮らしき。

或年の冬の初、此庭の主人は一人の老僕と、朝な夕な箒執りて落葉掃集め、これを  
 流の岸の七個所に積み、積みたるまゝに二十日あまり経ちぬ。霜白く置きそむれば、  
 小川の水の凍るも遠からじと見えたり。斯くて日曜日の夕暮、詩人外より歸り來りて



暫時が間庭の中を彼方此方と歩み、清き聲にて歌ふは樂しき戀の歌ならめ。此詩人の身うちには年わかき血温く環りて、冬の夜寒も物の數ならず、何事も樂しく且つ悲しく、悲しく且つ樂し。自から詩作り、自から歌ひ、自から泣きて樂めり。

此夕は空高く晴れて星の光もひときは鮮かなればにや、夜に入りてもや、暫くは流の灣を逍遙してありしが、終に老僕をよびて落葉つみたる一つへ火を移さしめて己は内に入りぬ。かくて人々深き眠に入り夜更けぬれど、此火のみは能く燃えつ、炎は小川の水にうつり、煙は眞すぐに立ちのぼりて、杉の叢立つあたりは青煙一抹、霧の如くに重し。

夜は愈更け、大空と地と次第に相近けり。星一つく梢に下り、梢の露一つく空に歸らんとす。萬籟寂として聲なく、たゞ詩人が庭の煙のみ愈高くのぼれり。

天に年わかき男星女星ありて、相隔つる遠けれど戀路は千萬里も一里として、此のふたり何時しか深き愛の夢に入り、夜々の樂しき時を地に下りて享け、或は高峰の岩角に或は大海原の波の上に、或は細溪川の流の灣に、つきぬ睦語かたり明し、東雲の空に驚きては天に歸りぬ。

女星は早くも詩人が庭より立上る煙を見つけ、今宵は殊の外寒く、天の河にも霜降りたれば、彼の煙たつ庭に下りて、たき火かきたて、語りてんといふに、男星は、ゑみつ、相抱きて煙辿りて音もなく庭に下りぬ。女星の額の玉は紅の光を射、男星の水色の光を放てり。天津乙女は戀の香に酔ひて力なく男星の肩に依れり。かくて二人は一山の落葉燃え盡るまで、つきぬ心を語りて黎明近くなりて西の空遠く歸りぬ。其次の夜も亦た詩人は積みし落葉の一つを燃かしむれば、男星女星も亦た空より下りて昨夜の如く語りさ。かくて土曜の夜まで、夜々詩人の庭より煙たち、夜更れば水色の光と紅の光と相並びて此庭に下れど、詩人は少も之れを知ることなし。

七つの落葉の山、六まで焼きて土曜日の夜はたゞ一つを餘しぬ。此一つより立つ煙ほそくと天にのぼれば、淡紅色の霞につゞまれて乙女の星先に立ち靜に庭に下れり。詩人が庭のたき火も今夜をかぎりなれば残り惜しく二人は語り、さて歸るさ、庭の主人に一語の禮なくてあるべからずと、打連れて詩人の室に入れば、浮世のほかなる尊き顔の色のわかしく、罪なき眠に入れる詩人が寝顔を、二人は暫時見とれぬ、枕邊近く取り亂しあるは國々の詩集なり。其一つ開きしまゝに置かれ、西詩「わが心高



原にあり』てふ詩の處出で、其中の、

「いざさらば雪を戴く高峯」

なる一句赤き線ひかれぬ。乙女の星はこれを見ても早くも露の涙うかべ、年わかき君の心のけだかさことよと言ひ、さて何事か詩人の耳に口寄せて私語さ、私語さ了れば戀人達相顧みて打ちゑみつ、詩人の優しき頬に交るゝ接吻して、安けく眠り給へと言ひゝゝ出で去りたり。

あくれば日曜日の朝、詩人は寢ざめの床に昨夜の夢を思ひ起しぬ。夢に天津乙女の、額に紅の星戴けるが現はれて言葉なく打招くまゝに誘はれて丘にのぼれば、乙女は寄りそひて私語く様、君は戀を望み玉ふか、はた自由を願ひ玉ふかと問ふに、自由の血は戀、戀の翼は自由なれば、われ其一を缺く事を願はずと答ふ。乙女ほゝゑみつ、されば先づ君に見するものありと遠く西の空を指し、能く眼定めて見玉へと言ひすてて何處ともなく消失せたり。詩人は此夢を思ひ起すや、跳起て東雲の空漸く白きに、獨り家を出で丘に登りぬ。西の空うち見やれば二つの小さき星、ひくゝ地にたれて薄き光を放てり。暫時して東の空金色に染まり、かの星の光自から消えて、地平線の

上に現はれし連山の影黨の如く峰々に戴く雪の色は夢よりも淡し、詩人が心は恍惚の境に鎔け、其眼には涙あふれぬ。これ壯年の者ならでは知らぬ涙にて、此涙呑む者は地上にて望むも甲斐なき自由にあこがる、然るに壯年の人より此涙を誘ふものゝ内にも、天外に聳ゆる高峰の雪の淡々しく戀の夢路を俤に寫したらん如きに若くものあらじ。

詩人は聲はり上げて『わが心高原にあり』をうたひ「いざ去らば雪をいたゞく高峰」の句に至りて、其聲ひときは高く、其眼は遠く連山の方を見やりて戀ふるが如く、憤るが如く、肩に垂るゝ黒髪風にゆらぎ昇る旭に全身かゝやけば、蒼空をかざして立てる彼が姿はさながら自由の化身とぞ見えにき。



園  
遊  
會



## (一)

自分は園遊會が何よりの好物。招待されて謝絶つたことはない。處が今度、淺田老侯の澁谷の別邸で催される園遊會は空前の大仕掛と聞きながら、二週間前から風邪の心地で床に就いて居るため、十の七八迄は出席出来ないものと諦めて居たのである。

二三日前から無類の好天氣、例の秋高く馬肥ゆとかいふので當日の盛況も思ひやられながら、自分は頗る瘦せが見え、この分では到底出席覺束なしと落膽して障子にうつる華やかな秋の夕日影を床の中で眺め、眼ばかりバチつかして居たのである。處へ妹の國子が入つて来て、

「兄様御氣分は」



『甚だ快くないね』と言つて少し考へ『死にたくなつた』

『マア！兄上は眞實に病弱いよ、風邪位で死んでどうなりますか』

『だから風邪で死ぬとは言はないよ、死にたいといふのだよ』

『マア！、如何して』と首尾よく妹を驚かした。

『だつて淺田侯の園遊會に出られさうもないもの、此の分ぢやア』

『では私だけ出ませう。兄上はお留守居していらつしやいな』と妹も左るもの、眞面目で言つて横を向いて編物を爲て居る。

二人とも暫く無言。自分は何とか巧いことを言つて妹をつゝいてやらうと考へて居ると妹が、

『兄上』自分の返事を爲ないのを見て、

『兄上！』

『何で御座います』

『兄上はそんなに園遊會が嗜好ですか』

『如何いたしまして、大嫌ひで御座います』

『だつて園遊會に行かれないから死にたいとおつしやつたぢや有りませんか』

『最早死ぬことは見合せました』

『左様で御座いますか、それで私も安心致しました、先刻から心配で／＼なりませんでしたが』と言ひさま、つと起つて部屋を出て去つた。引きちがへて女中が運ぶ夕の牛乳。池の鴉鳥が俄に騒ぎ立つて鳴くのは妹が餌でも與るのであらう。

其夜は静に眠り、翌日からは氣分大に快くなつたので、明後日は押しても出てやらうと腹では決めても顔には出さず、間際になつて妹を狼狽かし、舌戦に敗けた敵打ちと獨り微笑んで居た。

自分に取りて淺田侯は舊藩主である。言ふまでもなく侯は中國の大諸侯其財産の幾百萬なるを知らず、澁谷別邸の如き實に小公園ほどの廣サ、而も其善美の點はとも東京市の公園と稱する不完全な空地とは比べものにならない。自分一家は常に侯爵邸に出入し、老侯は殊の外自分と妹國子とを愛して居られるので、今度の園遊會には假令自分が園遊會を好まぬにしても、是非出席しなければならなかつたのである。況て自分は園遊會が何より嗜好、場所は淺田侯自慢の澁谷別邸といふ次第。少しばかりの



病を押す位、自分には當然であつた。

愈々今日といふ日の朝、自分は服を着更へて居ると、妹が入つて来て。

『オヤ兄上お出かけ？』とや、驚いた風。しめたと自分は眞面目な顔で、

『わア一寸と出で来る』

『だつて未だお顔の色が悪う御座いますよ』

『出て来たら却つて気分が復るだらう。喜助に支度しろと言つてお呉れ』

妹は何處までも自分が園遊會に行くとは思つて居ないらしい。

『どうせお出かけになるなら園遊會にいらつしやいな』

『イヤ行くまい、餘り人ごみに出ることには可くあるまいから。然しお前は如何しても

行かないと悪いよ。姫様に悪いから』

『兄上が行つしやらないと面白くないけれど……』

『だつて二人とも行かなくちや老侯にも悪いよ。十時からといふんだから最早支度し

たら可らう。私のことは病氣と傳へてお呉れ』

自分は車を飛ばして直ぐと澁谷村へ。

## (二)

時は一時間早かつた。老侯は山の吾妻屋と聞いて山に登つて見ると、二十七貫肥満の老人老て益々健、今しも假山とは言へ老松繁りて眞山を欺く小高い丘の吾妻屋に倚りて、心持よげに庭園の準備の行届けるを打眺めて居らるゝ處である。傍には三三人、家従とお庭師。

『ヤア廣澤、早い喃、先登第一ぢや。』と自分を見るや、何時も變らぬ寛濶の高聲なり。自分は先づ招待の禮を述べ、次に今日の好天氣を祝すると、

『天氣は無類ぢや、この鹽梅なら大概な無精者も出て来るだらう。時に國子は如何した、来たか？』

其處で自分は國子を出抜いたことを語り、老侯にも國子が来た時、未だ自分を見ない風に挨拶し給へといふや、

『ハツハツハツ、……これは面白い、一つ國子を口惜らせて泣かしてやらう、この節は急に大人びて乃公が調戲つても中々泣かなくなつたから喃』

老侯上機嫌。我策成れり、自分は嬉しくつて堪らない。斯なると感心なことには自



分平常の心掛空しからず、全然有頂天になつて了ひ、風邪も何處へやら『さうだ』と更に一策を案出して時こそ來れと待ち受けて居た。

十時を打つや、馬車、人車、掛聲勇ましく來るはく。なにしろ招待状を出した數が一千枚を越ゆる二百。二百は來ないと見ても千人の客である。貴族、大臣、政事家實業家、新聞記者、文學者、學者、官吏、軍人の數々、貴婦人令嬢も亦た少からず、一々これを迎へて庭口より直ちに庭園へと通す老侯以下の骨折も尋常ではない。

自分は老侯等の後に隠れて居ると十時を過ぐる三十分頃妹の國子は大めかしにめかしこんで威勢よく乗り込んで來た。老侯は率直に、

『兄上は如何した?』と何所までも知らぬ顔に爲て御座る。自分は人々の蔭からそつと妹の様子を覗がつて居るとも知らず、國子は最も慇懃に、

『兄は先日來風邪氣で床に就て居まして、今日はとうとう參ることが出來ませんで御座います。大變残念がつて居りました。御前へも宜しくといふことで御座います』とさわやかに述べたので、老侯、

『イヤ其は残念。格別のこともなければ可いが』と、飽くまでしらはくれて居らるゝ。

『難有う御座います』と妹はしほらしく挨拶して庭へ廻り四五人の令嬢連に加はつた。

さて是から自分の番だと急いで自分も庭口へ廻り松林の横なるベンチに倚かゝつて二三の知人と世間話を爲ながら、心ひそかに妹の仲間がやつて來るのを待つて居た。

庭園に入る前に人々は接待員からプログラムの綺麗に印刷されたのを貰つて居る。これには庭園の略圖まで加へてあるので初めてこの廣大な庭園に足を入れたものも決してまごつく心配はない。どの林の角へゆけばビーヤホールが有る。どの隅へゆけば蕎麥屋が有る、シャンパンは何處、果物は何處、鮪は何處、其他所謂酒池肉林の何れなりとも人々の好むに従つて受用することの出來るやう、明細に其場處が誌してある。七八人の令嬢の一组が近づいて來た。思ふに池の畔にゆく積だらう。其中に國子が雜つて居る。

『廣澤君見給へ、揃つて居るね、四邊眩ゆきばかりなりだ。イヤ君の令妹も居るぜ』と友の一人が眼をむき出して言ふ。自分は空嘯いて控へて居たが、愈々間近く來たのでベンチから離れ、

『イヤ皆さんお揃ひですな』と軽く禮して美子といふ十七歳ばかりの令嬢に向ひ、



『美子さん、兄上も見えましたか』

『参りました。今其處等に居ましたよ。貴所何時お來になりました』

『最早先刻來ました。さうですな九時時分でした』

『オヤ、だつて今國子さんが貴所はお風邪氣で今日はおいでにならないと被仰いましたよ』と言つて、不思議さうに自分と妹の顔を見比べた。自分は此處ぞと、

『さうですか、それは妹が未だ寝ぼけて居るのでせう。能く顔を見てやつて下さ』と言つて更に妹に向ひ、

『國さん、顔も洗はないで白粉をつけちゃア困りますね』

『オヤさう、私の顔に白粉がついて居て？』と靜かに言つて反對に自分の顔をのぞき、

『兄上未だ大變お顔の色が悪う御座いますよ、無理を爲さらないで早く歸つてお休みになつたが可う御座いませう』

『眞實にさうで御座いますね、お大事になさいまし』と今度は雪子嬢が大眞面目で口を入れたので亦もや大敗北。

『難有う御座ります』と情ない聲を出してベンチに腰を下すや、花の雲は靜かに動き

だして谷に下りてしまつた。

自分は口惜くて堪らんけれど如何も爲かたがない。左右から友が、

『如何したのだ、妙な光景だぜ、君、如何したのだ』と問ひかけた。

『ナニ如何も爲ないよ。』と自分は平氣で、

『どうだ、シャンバンでもやらうか』

自分は先に立つて向の天幕を目指して歩いた。天幕の上には燃るばかりの楓が枝を翳して居る。二十名ばかりの紳士が其前に群がつて居る。

(三)

さしにも広い庭が十二時頃になると何方を向て見ても一團又一團の人。酒氣の加はるに連て歡笑の聲が處々で高まつて來た。樂隊の奏するマーチは忽ち絶え忽ち起り、煙火は時々思ひ出したやうにボン／＼揚る。

餘興が初まるや舞臺の前の大天幕の下には見る間に人山を築かれたが、併し是れは來賓の半數にも足りないの殊に婦人のお慰に過ぎず。酒を飲んで氣焰を吐く年若の連中や斯ういふ場所に於ても尤もらしい顔付をして實務を談じなければ氣が濟まぬと



いふ老紳士どもは相變らず組を作つて談笑して居る。

自分は病後だけに稍々疲勞を覺えたので仲間から外れて木蔭に休んで居ると、戸塚といふ新聞記者が其ひよるとした身體を妙に振りながら前を通つて行く。自分は度この男には出遇つたことがあるので、

『戸塚君、戸塚君』と呼び止めた。

『ヤア廣澤君か、如何しました。少し凹んだといふ形ですな』

『さうだ少々凹んでるのだ。まア此處へ来てお話しなさい』

戸塚は其五尺七寸五分なる長い身體を芝生の上にごろり。

『イヤ實は僕も少々ばかりシャンパンに足を取られた形です』

『君のやうな大兵の癖に食堂も開かない中から左う凹んぢやア困るね』

『園遊會へ來ると僕は何時でも是れ。眞實の御馳走は食はないで歸るのです』

『其代り鮨は食ふこと五十二』

『ハツハツ、、、まざさか』

『時に面白い種が有りましたか』

『斯ういふ場所は種が有りさうで無いものですよ、つなり畑を見て置くに過ぎませんな。畑とは種の有りさうな人を見て置くだけです』

『これは驚いた。さうすると君は其畑なるものを見立て置かうといふのですね』

『さうです』

『さうすると君等の方の畑にもやはり肥えたのと瘦せたのと自から分れて居るのですか』

『さうですとも。無論です』

『僕なんぞ瘦せて居て始末にならんぞせう』

『ところが大違ひです。君は餘り肥え過ぎてます。肥え過ぎて居るのも困りますな。葉ばかり大きくて收穫は却つて少いから』

『これは驚いた、何故僕は肥え過ぎて居るだらう、こんなに瘦せて居るのに』

腕をまくつて見せた、戸塚は見向も爲ないで。

『君のやうな方は色々のことを喋ります。さも仔細らしく議論まで爲て僕等に聞かせます。そして結局餘り種になりさうなことを言はないのです。煽れば煽動に乗るや』



うな顔をして見せるし。此方が十言いへば二十言で返すし、議論を吹きかければ議論で答へるし、嘲ければ嘲けり返すし、酒を飲ば借に愉快に飲むし、新聞記者の對手として申分はないのです。けれども遂に僕等を空手で返すのは君のやうな人なのです」と述立て、微笑を洩らした。

「さうすると僕のやうなのは頗る質が悪いのだね。君等の鼻つまみだね」

「決してさうで無い。君の如きは最も愉快なんで、收穫の有無にかゝらず、吾等の敬愛する處です」

「いや之は難有い、さう褒められては黙つて居られない。彼の店へ行つて君の爲めに一杯健康を祝しませう」

「大賛成！」と戸塚は起上つた。二人は二歩三歩行くと、一人の軍人、年齢は四十前後大佐の禮服を着たのが、眞赤な顔をして昂然とやつて來るのに遇つた。

「大將！ではない大佐。如何です、お顔の色が大分可いやうですな」と戸塚は少し嘲ける氣味で呼びかけた。すると軍人、厳格な顔を速製して戸塚の顔を見たが黙禮して行き過ぎて了つた。

「何人だね、餘り見かけない軍人だが」と自分は訊ねた。

「森川虎五郎と云ふ先生です。僕も二度はかし遇つたゞけです」

「どうです、あゝ言ふ畑は肥えて居さうだね」

「なか〜以て」

「瘦地かね？」

「決して〜」

「僕等の仲間だらうか」

「如何して。あれは巖です」

「ハツハツ、、、齒も立たない代物かね」

「さうですな。例へて言へば海中の孤巖ですな。僕等は鳥です。翼を休めるために棲ることもありません。そして其頭に糞を爲てやるから、まんざら捨てたものでもない」

「さうすると君は信天翁だ」

「馬鹿言つちや不可ない。ハツハツ、、、信天翁は面白い！可愛がり給へ、罪のない鳥だ！」



二人は天幕に入つて葡萄酒の杯をあげ、自分は心から戸塚の健康を祝して、さて傍を見ると、木蔭の圓卓を圍んで七八人の洋服紳士、中には田舎出と見ゆるも雜つて頻りと放言大笑して居る。今しも小太川といふハイカラ紳士が古めかしい倫敦通を振り廻して居る真最中らしい。雑返して居るもの、謹聽して居る者、一人は居眠つて居る。『先づ日曜には公園にゆくのですな。月曜には町を見物する。火曜日にはウエストミンスターアツペイとかセントポール寺とかを見物するのです。それから水曜日にはナショナルギャラリー……』

『ギャラリーとは』とは一人の男が眞面目で聞く。

『畫堂です。たいした者が有りませぬ。二十二室に分つて美術の粹をあつめてありませぬ。有名なるターナーは最後の一室を獨占して居ますが、ターナーの風景畫を見ると日本の畫など全然見られませぬ。室の左方の壁には一見、壯重沈鬱の畫が並んでゐます、これはターナー初期の畫で一口に言ふと自然の外形を描いたものです。右方の壁は光り煌やいた畫ばかり、これはターナー後年の作で、所謂空氣を畫いたものです』とのべつに饒舌る鼻先を、

『僕だつて空氣なら畫けら』と一人の男が雑返しを入れる。

『さうサ白紙にガラス板を張つて額縁を着ければ空氣の畫だ』と一人が合槌を打つ。

小太川躍起になつて、

『無益だ、君等に美術の話をして無益だ。豚に眞珠を投ずる如しだ』

『相成るべくは有名なるターナーよりか、有名なる倫敦のピフテキを投じて貰ひたいものだ』

『さうだ君等には食物の談話の方が可いだらう。牡蠣のことを話さうか。』と何處までも罪のないハイカラ先生。

『西洋にも牡蠣が有りませるか』と眞剣に問ふ人もあるので世は持てたものなり。

『有りませとも。大ありでさア。而も日本のよりか幾干美味いか知れん。オイスターシヨップと言つて牡蠣ばかり食はす店が澤山あります、芝居小屋の傍など最も此店が多い。代價も其代り馬鹿に高いね……』とこれから日本人の蠣の失敗談に入らうとする處を、聞き飽きたといふ顔色で一人の男、

『けれども君、品川の牡蠣を食つたことが有りませるか』



「食ひましたとも」と小太川は正直に言ひかへす。

「何處で食ひました」

「賣りに來たのを買ひました」

「だから話せない。日本にだつてオイスターショップがありますよ、品川にあります。

朝日の昇るのを見ながら酢牡蠣で一杯傾むける心地つたら有りませぬぜ」

「ハハハ、馬鹿を言つてる！」と戸塚が大聲を上げたので、彼の一組は一度に此方に向いた。二三人知つた顔もあつたが、互に黙禮したまゝ、近よらず、我等は直ぐ天幕を出てふら／＼歩きだした。

「小太川の畑は如何だね」

「あれは肥えたり、瘦せたり」

「時と場合で違ふといふ代物だね」

「得意の時は肥え、失意の時は瘦せ、得意の時は問はないでも種を下し、失意の時は出さうにも種を持つて居ませぬね」

二人はふら／＼と池の畔に出た。すると岸に臨んで建てた蕎麥屋の中で何者か可笑

な調で義太夫を唸つて居る。

「僅なれ共、志、此銀を路銀にして、早う國へいに行。必々煩うてはしたもんなと銀を渡せば押し戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたんと持てをります、そんなりやもうさんじます、忝うござりますと、なく／＼立つを引とゞめ、夫はさうでも是はわしが志と、無理に持たして塵打ち拂ひ——」

「ヨウ！ヨウ！」と戸塚は外から掛聲をして行き過ぎる。

「驚いた向を見たまへ。そら橋の傍の仲間を。英雄が揃つて居る」と戸塚の示す方を見ると、成程豪傑の手合七八人。

「廣澤君は人物論が嗜好ですか」

「嫌でも有りませぬ」

「處が其處の連中となると人物論で持切だから恐れる。古今東西の人物を品評して掌を指さすが如しですからね。人物論の一つも爲ないものは語るに足らぬと心得てるから面白い。見給へ必定やつて居るから」

果して然り——、五紋の三十七八の大男、威猛高になつて、



「曹操を奸雄だとか何とか言ふが要するにニーツエの所謂超人だ！」

自分とは思はず吹き出した、曹操とニーツエ、餘り其取合せが可笑いので流石に大男其人も可笑かつたか少し笑を含んで、

「全く超人だ、奸雄もくそも有つたものか。見給へ能く豪傑の士を得てこれを自在に用ゐた手腕を。荀攸が袁紹を去つて操に投ずるや、操は何と言つた「吾が子房なり」荀攸を得ては「公達は常人にあらざるなり、吾之れと與に事を計るを得ば當に何をか憂ふべけん」郭嘉を得ては曰く「孤をして大業を成さしむるもの必ず此人ならん」如何だね、愉快ぢやないか。僕は嘘にでも斯う言はれ、ば其人の爲に身を擲つね。支那の文人どもは内々曹操の大英雄なることを知りながらも必定難癖をつけたがるから癪だ」

氣焰當る可からずとは此事、二人はそこへ立去り、直ぐ山に登つた。

やはり此處にも五六人の一組吾妻屋に入つて居る。見れば自分の知つた文學者が一名大學教授の理學博士が一名、それに一人の僧侶が雜つて居る。さすがに談話が穩かである。自分達も其中に加はつた。談話の題目は禪、旅行、俳諧、小説、天文など、

あれよりこれへ、雲の深み如く軽く移つてゆく。僧侶が理學博士に向つて、

「若し山中で虎に遇ひ、逃路が無かつたら如何なさる」

理學博士は眞面目な顔で考へて居たが、

「さうですな。それは猛虎ですか病氣の虎ですか」と問うた。

「勿論猛虎です、所謂金毛白面の虎です」

「僕は岩蔭に隠れます」

「めつけたら如何なさる」

「なるべく見付けられぬやうに小さくなつて息を凝らして居ます」

「如何しても見付かつて、虎が齒をむき出して來たら」

「そいつは困りますな。逃げられるまで逃げます」

「逃げられなかつたら如何なさる」

「困りましたな。仕方がないから敵はんまでも對つて見ます」

「そいつは不可ん。それでは食はれて了ひます。殺されます」

「是非に及びません」



『禪の奥義が其處にあるのです。若し今言つたやうな場合には此方も虎になるのです』と禪僧は得意の眉をあげた。博士は何處までも眞面目で、

『如何して人間が虎になりますか』

『そこが禪です、自分を虎だと觀念して四這になつて、虎を睨み返すのです。さうすると虎の神が此方に移り眞實の虎が畏縮します。則ち猛虎に當るに猛虎の威を以てするのです』

『つまり虎の眞似をするんですな』

『さうです』

『失禮ですが貴僧のお顔なら虎と見えるかも知れませんが、僕の顔は少し長過ぎるから無益でせう』と言つて博士は其清かな温順な顔をつるりと撫でたのを見て、今まで可笑さを忍んで聞いて居た連中が一度に吹出し、禪の談話も立消えさうにした時、突然山の下で先の豪傑連が何に激してか大聲を上げて喚きだした。見下すと直ぐ下で、

『君は君の好む所の人物を崇拜しろ、僕は僕の好む處に従ふ。お互の自由だ』と一人がさふ。

『宜しい、それから何故ガルバルジを攻撃する？ガルバルジを攻撃するのは僕を攻撃するやうなものだ失敬だ？』

『君はそんならガルバルジか』

『勿論僕はガルバルジだ！』

と言ふや、山の上の自分等は思はず笑ひかけると、禪僧大眞面目で、

『今言つた人は今の今、ガルバルジに爲つて居るのです。決して笑ひごとちやありません。虎の神に合すれば虎となり、英雄の神に合すれば英雄となる。不思議はないのです』

と説つけた。

けれども氣の毒のことには、忽ち響く食堂へ案内の鐘！下の豪傑連は一度に聲をひそめ、ガルバルジも曹操も相擁して食堂の方へ繰込んだ。これより鳥肉、獸肉、魚肉の神に合して鳥となり獸となり魚となるべく吾々も山を下りて、芝生に建て連ねてある大天幕の食堂に入った。

園遊會の食堂が静肅であつた例を自分は知らない。天長節の夜會ですらナイフとフ



オークの戦鬪だから、況て園遊會をよと思へども、自分は何時ながら不快の感を催すのである。彼處に曹操の智を以て他の折角運び來つた一皿を奪ふれば、此方にガルバルジの勇を奮つて豚の丸焼を一人で占領せんと眞赤になる紳士あり。シャンパンで杯を洗ひ半分飲んで餘を捨るほどの男が如何して食堂に入ると斯うも醜體を演じて一片の肉を争ふだらう。

自分は辟易して一隅に立つて居ると、戸塚が何時の間にか大皿に山ほど積んで來て、

「廣澤君、來給へ、來給へ！」と先に立つて食堂を出るから自分も續いて外に出る。

「禪僧の教を奉じ猛虎の氣合で、ウンと取つて來ました。二人でも食ひきれない」と戸塚は木蔭の圓卓に座を占めた。

「待ち給へ、それぢや僕が飲料を取つて來るから」と自分は食堂に引返し、給仕に命じて葡萄酒二本を得て歸つた。

二人は且つ飲み且つ食ひ談話を續けた。

「貴婦人令嬢の姿が見えないが如何したのだらう」と戸塚はきよろ／＼する。

「婦人の食堂は別になつて居るから見えないのだ」

「成程さうか。猛虎の群に婦人を投ずるは我淺田侯の爲さゝる處だ！時に令妹も今日は見えてるでせう」

「來て居ますとも」とそれから自分は二三日前からのことを話し、今日の敗北を白狀に及ぶや、

「いや其は近頃の珍話です。家兄顔色なしといふ處だが、實は男子一同の面白に關するから僕が是非敵を打ちませう」

「宜しい！今少し待ち給へ、食堂から出て來るから、彼の森蔭に待受けて僕も今一戦試みる」

「助太刀には僕が出ます！高が女でサ、舌頭の戦なら憚りながら戸塚相模守、多年の手練を以て一撃の下に國子さんを破つて見せませう」と先生シャンパンの酔未だ醒めざるに更に赤酒の酔を加へて來たので大氣焔なり。

皿も罌も首尾よく平らげて了ひ、時を見計らつて起上がり、婦人食堂に近き林の横なる休憩所に入つて國子の出て來るのを今や遅しと待ち受けて居た。

暫時すると、四五人の貴婦人天幕の外に現はれ、引續いて一組、一組、現はれて來







「久しぶりで御自慢の詩吟を聞かして頂戴な」と美子嬢の横槍。  
斯うなつてはやぶれかぶれ、自分は、

「宜う御座いますとも。詩吟でも何でもやりませう。先づお得意の唱歌から願ひませう」

「戸塚さんは兄と異つて必定何でもお出来るにせう。兄の詩吟も聞きあきまし  
たから戸塚さんのお得意をお願ひ致します」と國子は正面より一本。戸塚はとつかは  
と。

「イヤ是は恐れ入りました。僕の無風流は廣澤君がよく御存知です。どうでせう、皆  
さんの唱歌を願ひたいものです」

「雪子さん御一同に歌ひませう」と國子は先づ椅子を起つた。雪子嬢も續いて立ち、  
「秋の空晴れて」といふ唱歌を歌ひだした。聲も態度も申分なき出来。歌の半に至り、  
美子嬢、富子嬢、文子嬢續いて起ち上り合唱の節面白く歌ひ終つて席に着いた。

「いづれ又お眼にかゝります」と國子は戸塚に挨拶し、しとやかに禮をして先に立ち  
天幕を出たので、令嬢達も續いて起ち、静々と彼方へ歩み去つた。

二人は茫然と其後を見送つて居たが、ズドンと揚る烟火の音をきつかけに戸塚は可  
笑な身振をして、

「チエーツ残念ぢやなわ」



春  
の  
鳥



## (一)

今より六七年前、私は或地方に英語と數學の教師を爲て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。

頂上には城趾が残つて居ます。高い石垣に蔦葛からみ附いて其が眞紅に染つて居る鹽梅など得も言はれぬ趣でした。昔は天主閣の建つて居た處が平地になつて、何時しか姫小松疎に生ひたち夏草隙間なく茂り、見るからに昔を偲ばす哀れな様となつて居ます。

私は草を敷いて身を横たへ、數百年斧の入れたことのない鬱たる深林の上を見越し



に近郊の田園を望んで楽しんでたことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持つて來た書物を讀んで居ますと、突然人の話聲が聞えましたから石垣の端に出て下を見下しました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして澤山背に負たまゝ、猶も四邊をあさつて居る様子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌ひながら拾つて居ます、それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でせう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書物の方に眼を移して何時か小娘のことは忘れて了ひました。するとキヤツといふ女の聲、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝ、アタフタと逃げ出して忽ち石垣の彼方に其姿を隠して終ひました。可怪なことゝ、私は其近處を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分ながら道もない處を此方へやつて來る者があります。初は何物とも知れませ

んでしたが、森を出て石垣の下に現はれた處を見ると十一か十二歳と思はるゝ男の兒です。紺の筒袖を着て白木綿の兵兒帯をしめて居る様子は農家の兒でも町家の者でもなさうでした。

手に太い棒切を持つて四圍をきよろろ見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時思はず二人は顔を見合しました。子供は熟と私の顔を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑が尋常でないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろろとした様子までが唯の子供でないといふ私に直ぐ見取りました。

『先生。何を爲て居るの？』と私を呼びかけましたので私も一寸驚きましたが、元來私の當時教師を務めて居た町は極く小さな城下ですから、私の方では自分の教兒の外の人を餘り知らないでも土地の者は都から來た年若い先生を大概知つて居るので、今此子供が私を呼びかけても實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや私も聲を優しうして、

『書籍を讀んで居るのだよ、此處へ來ませんか』と言ふや、兒童はイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。高五間以上もある壁のやうな石垣ですから私



は驚いて止めようと思つて居る中に早くも中程まで来て、手近の葛に手が届くとすらすらとこれを手繰つて忽ち私の傍に突立ちました。そしてニヤ／＼と笑つて居ます。「名前は何と云ふの？」と私は問ひました。「六六六？六さんといふのかね」と問ひますと、児童は點頭いたまゝ例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまゝ私の顔を氣味の悪いほど熟視して居るのです。

『何幾かね、歳は？』と私が問ひますと、怪訝な顔を爲て居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが、急に両手を開いて指を折つて、一、二、三と讀んで十、十一と飛ばし、顔をあげて眞面目に、

『十一だ』といふ様子は漸と五歳位の兒の、やう／＼數を覺えたのと少しも變らないのです。そこで私も思はず『能く知つて居ますね』『母上さんに教つたのだ』『學校へのきさすか』『往かない』『何故往かないの？』

児童は頭を傾げて向うを見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然児童はワ／＼と唾のやうな聲を出して駈出しました。「六さん六さん」と驚いて私が呼止めますと、

『烏々』と叫びながら後も振りむかないで天主臺を駆け下りて忽ち其姿を隠してしまひました。

## (二)

私は其頃下宿屋住でしたが何分不自由で困りますから色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構へて有福に暮して居ましたので此二階を貸し私を世話して呉れたのは少からぬ好意で在つたのです。

處で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとするや城山で逢つた児童が庭を掃いて居たことです。私は、

『六さん、お早う』と聲をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑つたまゝ草箒で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の経つ中に此怪しい児童の身の上次第に解つて來ました、と言ふのは畢竟私氣をつけて見たり聞いたりしたからでせう。

児童は名を六藏と呼びまして田口の主人には甥に當り、生れついでに白痴であつた



のです。母親といふは四十五六、早く夫に分れまして實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのであります。六藏の姉はおしげと呼び其時十七歳、私の見る處ではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隠して居るやうでしたが、何をいふにも隠し得ることで無いのですから、終に或夜のこと私の室に来て教育の話の末に甥と姪の白痴であることを話しだし、如何にかしてこれに幾分の教育を加へることは出来ないものかと私に相談をしました。

主人の語る處に依ると此哀れなきやうだいの父親といふは非常な大酒家で、其爲に生命をも縮め、家産をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たが、二人とも何一つ學び得ず、いくら教師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に教へることは出来ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりです。すから、却て氣の毒に思つて退學をさせたのださうです。

成程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であることが愈々明白になりました。然るに主人の口からは言ひませんが、主人の妹、即ちきやうだいの母親といふも普

通から見ると餘程抜けて居る人で、二人の子供の白痴の原因は父の大酒にもよるでせうが、母の遺傳にも因ることを私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから私も田口の主人の相談には浮かと思ひませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞけで止しました。

けれども其後だん／＼おしげと六藏の様子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尚ほ思ふことは出来ません。思つて感ずることは出来ません。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形をして居るのですから全く感じがない譯ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が整つて居ればまじりませんが、更に歪になつて出来て居るのですから、様子子が餘程變です、泣くも笑ふも喜ぶも悲むも皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。



おしげは兎も角、六藏の方は兒童だけに無邪氣なところが有りますから、私は一倍哀れに感じ、人の力で出来ることならば如何にかして少しでも其智能の働きを増してやりたいと思ふやうになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も経つた後のこと、夜の十時ごろでした、最早床に就かうかと思つて居る處へ、

『先生、お寝ですか』と言ひながら私の室に入つて来たのは六藏の母親です。背の低い、瘦形の、頭の小さい、凸の顔、何時も齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよさゝらな、たわいのない笑を何時も其眼尻と口元に現はして居るのが此人の癖でした。

『そろ／＼寝ようかと思つて居る處です』と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて、『先生、私は少しお願が有るのですが』と謂つて言ひ出しにくい様子。『何ですか』六藏のことで御坐います。あのやうな馬鹿ですから將來のことも案じられて、其を思ふ私は自分の馬鹿を棚に上げて、六藏のことが氣にかゝつてならないので御坐います』

『御尤です。けれどもさうお案じなさるほどのことも有りませぬ』とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張人情でせう。

## (三)

私は其夜だん／＼と母親の言ふ處を聞きましたが何よりも感じたのは親子の情といふことでした。前にも言つた通り此婦人とても餘程抜けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも變らないのです。

そして母親も亦た白痴に近いだけ、私は益々憐れを催ふしました。思はず私も貰ひ泣きをした位でした。

其處で、私は六藏の教育に骨を折つて見る約束をして氣の毒な婦人を歸し、其夜は遅くまで、いろ／＼と工夫を凝らししました。さて其翌日からは散歩ごとに六藏を伴ふことにして、機に應じて幾分かづ、智能の働きの加へることに致しました。

第一に感じたのは六藏に數の觀念が缺けて居ることです。一から十までの數が如何しても讀めません。幾度も繰返して教へれば、二、三と十まで口で讀み上げるだけのことは爲ますが、路傍の石塊を拾うて三個并べて、幾個だときゝますと考がへてばか



り居て返事を爲さないのです。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を敷へて昇り、一、二、三と進んで七で止り、七だよと言ひ聞して、さて今の石段は幾個だときさしますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の并木を敷へても、菓子を褒美に其數を教へても、結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、其言葉が示す數の觀念とは、此兒童の頭に何の關係をも有つて居ないのです。

白痴の數の觀念の缺けて居ることは聞いては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思ひ、兒童の顔を見つめたまゝ、涙が自然に落ちたこともありません。

然るに六藏はなか／＼の腕白者で、悪戯を爲るときは随分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を駆廻るなどまるで平地を歩くやうに、道のあるところ無い處、サツサと飛ぶのです。ですから從來も田口の者が六藏は何處へ行つたかと心配して居ると晝飯を食つたまゝ、出て日の暮方になつて城山の峠から田口の奥庭にひよつ

くり飛び下りて歸つて來るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃げ出したのは必定これまで幾度となく此白痴の腕白者に嚇されたものと私も思ひ當つたのであります。

けれども又た六藏は直きに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて折り／＼痛く叱るところがあり、手の平で打つこともあります、其時は頭をかゝへ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑つて居る様は打たれたことを全然忘れて終つたらしく、これを見て私は猶更此白痴の痛いことを感じました。

かゝる有様ですから六藏が歌など知つて居る筈も無さうですが知つて居ます。木拾ひの唄ふやうな俗歌を暗んじて、をり／＼低い聲でやつて居ます。

或日私は一人で城山に登りました、六藏を伴れてと思ひましたが姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖かで、空氣は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天主臺の下までゆくと、寂々として満山聲なき中に、



何者か優しい聲で歌ふのが聞えます、見ると天主臺の石垣の角に六藏が馬乗に跨がつて、兩足をふら／＼動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城趾、そして少年、まるで晝です。少年は天使です。此時私の眼には六藏が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな對照でせう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるかと、つく／＼感じました。

今一ツ六藏の妙な癖をいひますと、此兒童は鳥が好きで、鳥さへ見れば眼の色を變へて騒ぐことです。けれども何を見ても鳥といひ、いくら名を教へても憶えません。『もず』を見ても『ひよどり』を見ても鳥といひます。可笑いのは或時白鷺を見て鳥といつたことで、鷺を鳥にいひ黒めるといふ俗諺が此兒だけには普通なのです。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると六藏は口をあんぐり開けて熱と眺めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る様は、頗る妙で、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘程不思議らしく思はれました。

## (四)

『さて私もこの憐れな兒の爲めには随分骨を折つて見ましたが眼に見えるほどの效能は少しも有りませんでした。

彼是するうちに翌年の春になり、六藏の身の上の不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六藏の姿が見えませんが、晝過になつても歸りません、遂に日暮になつても歸つて来ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起つても居られん様子です。

其處で私は先づ城山を探すが可からうと、田口の僕を一人連れ、提灯の用意をして、心に怪しい想を懐きながら平常の慣れた徑を登つて城趾に達しました。

俗に蟲が知らすといふやうな心持で天主臺の下に来て、

『六さん！六さん！』と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたやうに耳を聳てました。場所が城趾であるだけ、又た索す人が普通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主臺の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行く中に北の最も高い角の眞下に六藏の死骸が墜ちて居るのを發見しました。



怪談でも話すやうですが實際私は六藏の歸りの餘り遅いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六藏の墜落して死んだやうに感じたのであります。

餘り空想だと笑はれるかも知れませんが、白状しますと、六藏は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に来て六藏の眼のまへまで枝から枝へと自在に飛んで見せたら、六藏は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死骸を葬つた翌々日、私は獨り天主臺に登りました。そして六藏のことを思ふと、いろ／＼と人生不思議の思に堪へなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との關係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深い／＼哀を起しました。

英國の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立つて、兩手の指を組み合はして、鼻の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は樂にして居ましたが遂に死にまして静かな墓に葬られ、其靈は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きで常に讀んで居ましたが、六藏の死を見て、其生涯を思つて、其

白痴を思ふ時は、この詩よりも六藏のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣の上に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其一つは六藏ではありませうか。よし六藏でないにせよ。六藏は其鳥とどれだけ異つて居ましたらう。

憐れな母親は其兒の死を却て、兒のために幸福だといひながらも泣いて居ました。

或日のことでした、私は六藏の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に來て居て頻りと墓の周圍をぐる／＼廻りながら、何か獨語を言つて居る様子です。私の近づくのを少しも知らないと思つて、

『何だつてお前は鳥の眞似なんぞ爲た、え、何だつて石垣から飛んだの？…だつて先生がさう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞似をする人がありませんかね』と言つて少し考へて『けれどもね、お前は死んだはうが可いよ。死んだはうが幸福だよ…』

私に氣がつくや、

『ね、先生。六は死んだはうが幸福で御座いますよ、』と言つて涙をハラ／＼とこぼし



ました。

『さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ……』

『けれど何故鳥の真似なんぞ爲たので御座いませう』

『それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の真似を爲て死んだのだから解るものぢやありません』

『だつて先生はさう言つたぢや有りませぬか』と母親は眼をすゑて私の顔を見つめました。

『六さんは大變鳥が嗜であつたから、さうかも知れないと私が思つたわけですよ』

『ハイ、六は鳥が嗜好でしたよ。鳥を見ると自分の兩手を斯う廣げて、斯して』と母親は鳥の搏翼の真似をして『斯して其處らを飛び歩きましたよ。ハイ、さうして鳥の啼く真似が上手でした』と眼の色を變へて話す様子を見て居て私は思はず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二聲三聲鳴きながら飛んで、濱の方へ

くや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の鳥を六藏の母親が何と見たでせう。



少年の悲哀



少年の歡喜が詩であるならば、少年の悲哀も亦た詩である。自然の心に宿る歡喜にして若し歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦た歌ふべきであらう。

兎も角、僕は僕の少年の時の悲哀の一ツを語つて見ようと思ふのである。(一人の男が話した。)

僕は八歳の時から十五の時まで叔父の家で育つたので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。

叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。



僕は僕の少年の時代を田舎で過さして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない、若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は餘程違つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の心は zeroes 一巻より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつたやうと信ずる。

僕は野山を駆け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓に在り、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處に瀬戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも溪にも海にも川にも僕は不自由を爲なかつたのである。

處が十二の時と記憶する、徳二郎といふ下男が或日僕に今夜面白い處に伴れてゆくが行かぬかと誘うた。

『何處だ』と僕は訊ねた。

『何處だと聞つしやるな、何處でも可えちや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白い處はない』と徳二郎は微笑を帯びて言つた。

此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈強な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤兒である。色の淺黒い、輪廓の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、

飲まざるも亦唄ひながら働くといふ至極元氣の可い男であつた。常も樂しさうに見えるばかりか、心事も至つて正しいので孤兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に、感心せられて居たのである。

『然し叔父さんにも叔母さんにも内證です』と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つてしまつた。

頃は夏の最中、月影鮮やかなる夜であつた。僕は徳二郎の後について田圃に出で、稲の香高き畦路を走つて川の堤に出た。堤は一段高く、此處に上れば廣々とした野面一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで、冴えた光を野にも山にも漲らし、野末には霧かゝりて夢の如く、林は烟をこめて浮ぶが如く、背の低い川楊の葉末に置く露は珠のやうに輝いて居る。小川の末は間もなく入江、汐は満ちふくらんで居る。船板をつぎ合はして懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので、川柳は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繋いである小舟の纜を解いて、ひらりと



乗ると今まで静まりかへつて居た水面が俄に波紋を起す。徳二郎は、

『坊様早く早く！』と僕を促しながら櫓を立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入江の方へと下りはじめた。入江に近づくにつれて川幅次第に廣く、月は川面に其清光を涵し、左右の堤は次第に遠ざかり、願れば川上は既に霧に隠れて舟は何時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕等の小舟ばかり。徳二郎は平時の朗かな聲に引きかへ此夜は小聲で唄ひながら静かに櫓を漕いで居る。潮の退ちた時は沼とも思はるゝ入江が高潮と月の光とでまるで様子が變り、僕には平時見慣れた泥臭い入江のやうな氣がしなかつた。南は山影暗く倒に映り北と東の平野は月光蒼茫として何れか陸、何れか水のけじめさへつかず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狭くして深く、陸迫りて高く、此處を港に錨を下ろす船は數こそ少いが形は大きく大概は西洋形の帆前船で、其積荷は此濱で出来る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に従事する者の持船も少からず、内海を往來する和船もあり。兩岸の家低く高く、山に據り水に臨む其數數百戸。

入江の奥より望めば燈籠高くかゝりて星かとはかり、燈影低く映りて金蛇の如く、寂寞たる山色月影の裡に浮んで恰も畫のやうに見えるのである。

舟の進むにつれて此小さな港の聲が次第に聞えだした。僕は今此港の光景を詳しく説くことは出来ないが、其夜僕の眼に映つて今日尙ほあり〜と思ひ浮べることの出来る丈を言ふと、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は甲板に出で家の者は戸外に出で、海にのぞむ窓は悉く開かれ、燈火は風にそよげども水面は油の如く、笛を吹く者あり、歌ふものあり、三絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青樓より起るなど、如何にも樂しさをな花やかな有様であつたこと、然し同時に此華やかな一幅の畫圖を包む處の、寂寥たる月色、山影水光を忘るゝことが出来ないものである。

帆前船の暗い影の下を潛り、徳二郎は舟を薄暗い石段の下に着けた。

『お上りなさい』と徳は僕を促した。堤の下で『お乗なさい』と言つたがり彼は舟中僕に一語も交へなかつたから、僕は何の爲めに徳二郎が此處に自分を伴うたのか少しも解らない、然し言ふまゝに舟を出た。

纜を繋ぐや徳二郎も續いて石段に上り、先に立つてずん〜登つて行く、其後から



僕も無言で從て登つた。石段は其幅半間より狭く、兩方は高い壁である。石段を登りつめると或家の中庭らしい處へ出た。四方板塀で圍まれ隅に用水桶が置いてある、板塀の一方は見越に夏蜜柑の木らしく暗く繁つたのが其頂を出して居る、月の光はくつきりと地に印して寂として人の氣勢もない。徳二郎は一寸立ち止つて聽耳を立てたやうであつたが、つか／＼と右なる方の板塀に近づいて向へ押すと、此處は潛門になつて居て黒い戸が音もなく開いた。見ると戸に直ぐ接して梯子段がある。戸が開くと同時に足音靜に梯子段を下りて來て、

『徳さんかえ。』と顔をのぞいたのは若い女であつた。

『待つたかね?』と徳二郎は女に言つて、更に僕の方を顧み、

『坊様を連れて來たよ』と言ひ足した。

『坊様お上んなさいな。早くお前さんも上つて下さい。此處でぐず／＼して居ると可けないから』と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段を登りはじめ、

『坊様暗う御座いますよ』と言つたさき、女と共に登つて了つたから僕も爲方なしに其後に從いて暗い、狭い、急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は青樓の一で、今女に導かれて入つた座敷は海に臨んだ一室、欄に凭れば港内は勿論入江の奥野の末、さては西なる海の涯までも見渡されるのである。然し座敷は六疊敷の、疊も古び、見るからして餘り立派な室ではなかつた。

『坊様、さア此處へ入つしやい』と女は言つて座布団を欄の下に運び、夏橙其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と徳二郎は差向に坐つた。

徳二郎は平常にない愧しい顔をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸に呑み干し、『愈々何日と決定つた?』と女の顔を熟と見ながら訊ねた。女は十九か二十の年頃、色青ざめて左も力なげなる様は病人ではないかと僕の疑つた位。

『明日、明後日、明々後日』と女は指を折つて、『明々後日に決定つたの。然しね、私は今になつて又氣が迷つて來たのよ』と言ひつゝ、首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた様子、其間に徳二郎は手酌で酒をグイ／＼煽つて居た。

『今更如何と言つて爲方がないぢやアないか』

『それはさうだけれど——考へて見ると死んだはうが何程増したか知らないと思つて』



「ハツハツ、坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しませうか。……オイ、約束の坊様を連れて来たのだ、能く見て呉れないか」

「先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのよ」と女は言つて笑を含んで熟と僕の顔を見て居る。

「誰に似て居るのだ」と僕は驚いて訊ねた。

「私の弟にですよ、坊様を弟に似て居るなど、もつたいない事だけれど、そら、これを御覧なさい」と女は帯の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。

「坊様、此姉様が其寫眞を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら是非連れて来て呉れと頼みますから今夜坊様を連れて来たのだから、澤山御馳走を爲て貰はんと可けませんぞ」と徳二郎は言ひつゝも止め度なく飲んで居る。

女は僕に摺寄つて、

「サア何でも御馳走しませうとも、坊様何が可う御座いますか」と女は優しく言つて莞爾笑つた。

「何にもいらな」と僕は言つて横を向いた。

「それぢや舟へ乗りませう、私と舟へ乗りませう、え、さう爲ませう」と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に從いて梯子段を下りた、徳二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。

「先の石段を下りるや若き女は先僕を乗らして後、纜を解いてひらりと飛び乗り、さも軽々と櫓を操りだした。少年ながらも僕は此女の舉動に驚いた。

岸を離れて見上げると徳二郎は欄に倚つて見下ろして居た、そして内よりは燈が射し、外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える。

「氣をつけないと危難いぞ」と、徳二郎は上から言つた。

「大丈夫！」と女は下から答へて「直ぐ歸るから待つて居てお呉れ」

舟は暫く大船小船六七艘の間を縫うて進んで居たが、間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕ぐ手を止めて僕の傍に坐つた。そして月を仰ぎ又四邊を見廻しながら、

「坊様、あなたはお何歳？」と訊ねた。

【十二】



「私の弟の寫眞も十二の時のですよ、今は十六……さうだ十六だけれど十二の時に別れたがり會はないのだから今でも坊様と同じやうな氣がするのですよ」と言つて僕の顔を熟と見て居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顔は猶更蒼ざめて見えた。

「死んだの？」

「否、死んだのなら却て斷念がつかますが別れた限、如何なつたのか行方が知れないのですよ。両親に早く死別れて唯つた二人の姉弟ですから互に力にして居たのが今では別れゝになつて生死さへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮に伴れて行かれるのだから最早此世で會ふことが出来るか出来ないか分りません」と言つて涙が頬をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顔を見たまゝ、すゝり泣に泣いた。

僕は陸の方を見ながら黙つて此話を聞いて居た。家々の燈火は水に映つてきらゝと揺曳いで居る。櫓の音をゆるやかに軋らせながら大船の傳馬を漕いで行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は此時、少年心にも言ひ知られぬ悲哀を感じた。

忽ち小舟を飛ばして近づいて來た者がある、徳二郎であつた。

「酒を持って來た！」と徳は大聲で二三間先から言つた。

「嬉しいのねえ、今坊様に弟のことを話して泣いて居たの」と女の言ふ中徳二郎の小舟は傍に來た。

「ハッハッ、大抵そんなことだらうと酒を持って來たのだ、飲みな〜私が歌つてやる！」と徳二郎は既に酔つて居るらしい。女は徳二郎の渡した大コップに満々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎が注いでやつたのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向つて酒氣を吻と吐いた。

「サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる」

「イ、エ徳さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな、思ひ切つて泣かして下さいな」

「ハッハッ、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑つた。

女は突伏して大泣に泣いた、さすがに聲は立て得ないから背を波打たして苦しさを



であつた。徳二郎は急に面真目な顔をしてこの有様を見て居たが、忽ち顔を背向け山の方を見て黙つて居る。僕は暫くして、

『徳、最早歸らう』と言ふや女は急に頭を上げて、

『御免なさいよ、眞實に坊様は私の泣くのを見て居てもつまりません。私坊様が

来て下さつたので弟に會つたやうな氣が致しました。坊様も御達者で早く大きくなつ

て豪い方になるのですよ』とおろ／＼聲で言つて、『徳さん眞實に餘り遅くなるからお宅

に悪いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日からくさ／＼して居た

胸がすいたやうだ』

女は僕等の舟を送つて三四町も來たが、徳二郎に叱られて漕手を止めた、其中に二

艘の小舟はだん／＼遠ざかつた。舟の別れんとする時、女は僕に向つて何時までも『私

の事を忘れんで居て下さいましナ』と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と憶えて居て忘れようとしても忘るゝ

ことが出來ないのである。今も尙ほ憐れな女の顔が眼のさきにとらつく。そして其夜、

淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情は年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪へ難い、深い、静かな、やる瀬のない悲哀を覺えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兒の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處の果に漂泊して其果敢ない生涯を送つて居

るやう、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅なる死の國に赴いたことやら、僕は無論

知らないし徳二郎も知らんらしい。



夫

婦



(一)

自分の最も親しくする友、坂本熊男から突然次のやうな手紙が來た。其頃自分は鎌倉に居たのである。

『犬養君足下——』

僕はこの頃、言ふに言はれぬ苦を有て居る。今までこれを君にすら洩さなかつた。實は君を欺いて居たのである。君は度々僕等夫婦の上を尋ねて呉れたが其都度僕は何と答へたゞらう。

平和、此二字！この二字を繰返し々君に書き送つた。そして實際は如何であらう。決して平和ではないのである。若し平和と言ふならば、冷やかなる平和である。溪間



の湖水の、雪どけの氷水を湛へて一碧鏡の如き平和！僕等夫婦は果してこの如きの平和を望んで行末永き家庭を作つたやうか。

今日と雖も若し君以外の人が僕等夫婦の上を聞いたならば、僕は「至極平和で御座りませうお蔭さまで」と答へる。昨日も妹が小聲で、

「兄様如何か爲さいましたの」と聞くから、

「イヤ別に如何も爲さないよ、何故」

「だつて何だか此頃は浮かぬ顔をして居なされるから變だと思つて。それに姉上の様子も妙だし、若しかと思つて」

「母上も其様ことを言つて居らつしやるかい」

「はア」

「だつて別に喧嘩も爲ないし卿の見て居る通りぢやないか」と僕が言つたので、妹も、「ぢやうねえ」とのみ深くは訊ねなかつた。然し君、僕等夫婦の心の不安は互の顔や様子に何時となく現はれて居るのである。たゞ僕は此不安をば今や唯だ君にのみ打明け

原因は何だ。これ君が第一に問ふところだらうと信ずる。そして僕は知らないと思へるの外はない。

若し原因が解つて居るならば、僕は如何なる障害があらうと、これを取除くことに躊躇しない。

僕は僕等夫婦の兼ねて望んで居た如き生活、否、結婚してから四個月間の生活のやうな生活を續けて行くことの出来る爲めならば、何物をも犠牲にすることを厭はな

い。然しながら理由の知れぬ不安を如何しよう。何故吾等夫婦の平和は氷結して了つたか、其原因の知れないのに如何することが出来る。

二三日前のことであつた。僕は庭の四阿のベンチに腰をかけて林に残る夕日影を眺めて居ると、ソツと傍に腰をかけたものがある、振向くと妻であつた。

「何を見て居らつしやるの」と聞くから、

「たゞ茫乎して居たのだ」

「佳い景色ですことねえ」



「あア佳い景色だねえ」

「あの煌々と光つて居るのは何んでせう、そら向の森の中で」

「何處かのガラス窓でも光つて居るのだらうよ」

「さうでせうかねえ」

僕は黙つて居ると妻も黙つて了つた。僕はまじく前の林を見て居る。妻は遠方の森の方を見て居る。空氣は澄み渡つて、日は西に傾いて、天外遠く低く白い雲が流れて居る。

「愈々秋になつたねえ」

「さうで御座いますねえ」

と答へた妻の聲は如何にも心細さうに僕に聞えた。そして二人は又黙言つて了つた。

この時僕は言ひ知れぬ悲哀が胸を衝て起り、若し傍らに妻が居なかつたら聲を呑んで圓卓に顔を押あて、泣いたゞらうと思ふ。

「貴方このごろ大變氣を痛めてお居でなさるやうですが如何か爲さいましたのですか」と妻は僕の顔を見て訊ねた。

「別に如何も爲ないよ。顔色でも悪いかね」と何氣なく言つた、則ち妻を欺いたのである。

「お顔の色は格別平常と變りませんが……」

「卿こそ如何か爲やアしないかね」

「別に如何も致しませんが」と妻は何氣なく答へた、則ち僕を欺むいたのであらう。

僕は、妻も亦た僕と同じやうな不安の念に胸を痛めて居ることを看破して居るのである。恐らく妻もさうであらう。果して然らば互に欺いて而も互に欺かれたことを知つて居るのである。

女中が來て食事を知らしたから二人は其儘急いで家に入つた。即ち互に此問題に觸れたくないことが解る。少なくとも二人の間で公然と此問題を研究することを懼れて居ることが解る。

全く僕は懼れて居るのである。僕は如何にもして此僕の苦みを妻に知らしたくない。然し妻が既に僕の苦しんで居ることを看破して居るならば、せめて此ことをお互の口に出さない前に、此苦惱から免れたいのである、お互の胸より不安の念を取除きたい



のである、以前の楽しい温かい交情に立還りたいのである。

二人の間には確に溝が出来た。げに傷まじき事實。

互の愛が薄らいだのであらうか、決して然でない、断じて然でない！其證據には互に此溝を埋て了はうと願うて居るのである。

何故此溝が出来たか。不安であるから溝が出来たのか、溝が出来たから不安であるのか。何が何であるのか僕には一切解らなくなつて了つた。

僕は初め冷やかなる平和と言つたが寧ろ熱心なる不安と言つたはうが適切である。

時々寒風一陣、頭上を吹き過ぎるやうな心地がする。これ失望に襲はれた時である。

時々蒸すが如き熱の全身に漲ることがある。これ吾等夫婦を此現狀から救ひ出さんと悶く時である。

今は君の深き友情と智慧とに任すの外はない』

(三)

自分は此手紙を讀んで大に驚いたが然し又頗る要領を得なかつたのである。

互の不安とは何ぞや。其原因が解らないとは如何だらう。何故あゝまでして結婚し

て、あんなに交情の可かつた夫婦が斯ういふことになつたものか、自分にも此手紙だけでは何が何やら一切解らなかつたのである。

坂本熊男が最初若代千代子と相知つたのは七年前、坂本が二十四、千代子が十八の春で、相知ると間もなく二人は戀に陥つたのである。

春の末であつた。或日坂本が高等商業學校の制服のまゝで突然自分の下宿を訪ねて来て、

「これから大森に往かないか」と誘ふから、

「何を爲に往くのだ」

「僕の下の級に若代といふ男が居る。實は一週間ほど前に運動場で懇意になつたのだが面白い奴で僕に頻りに遊びに來いといふから往つて見よと思ふんだ、一所に往つて見よう、何でも八景園の裏あたりで大變庭が廣い家だつて自慢して居たつけ」

春の日曜日を下宿の二階で煤ぶるでもあるまいと自分は同意して二人直ちに大森に出かけた。

若代の家は成程庭が廣くつて小高き岡あり林あり芝生あり、所謂庭といふ園藝の



方からいふと決して人工の行届いた立派なものではないが、自然の風致は十分に具へて居るのである。若代はにこやかに自分達を迎へて、座敷には上げず直に庭へと案内し岡の上に立つて居る吾妻屋に導いた。

若代は坂本より一歳若い青年で、背のすらりと高い色の白い柔和な容貌の、何となく小兒らしい快活な男であつた。

父は地方長官を勤めて居た人であるが、清廉な人物で又理財に頓着しなかつた爲に、妻と二人の子に遺した財産としては以前から持つて居た公債證書と鐵道株を少しばかり、其外には此大森の屋敷だけで、退隱後三年ばかり大森に住んで死去したのである。

それで若代は母と妹と三人で此屋敷に住み、此處から神田の高等商業學校に通學して銀行の方を學んで居たが其成績は可もなく不可もなく、たゞ性質の應揚で、温順で愛嬌があつた爲めに教師からも生徒仲間からも可愛がられて居たのである。

我等は吾妻屋のベンチに腰かけて勝手な事を饒舌り散らして居ると一人の十七八の品のよい少女が葡萄酒と果物を運んで來た。

『ヤ卿はなか〜氣がさいて居るね』と若代は例のにこやかに言つて、更に我等に向

ひ『妹の千代です。この方が坂本さん、それから犬養さん』と手軽に紹介した。千代子は兄に似て色の白い、少し丸顔の、眼のすゞしい少女で、其舉動も沈着いて居て無理のないスラリと爲た氣味が有つて、總てが兄に似て居たが、唯だ女だけに何處か大人びた所があつた。

間もなく正午になつて妹は又もや使者。

『兄上お食事御座います』

『此處で食るといふ譯にはいかぬか知らん』

『お二階でお支度が出来て居ますから』

『左様か、可からう』

其處で我等は家に導びかれた。見たところ廣さうにもないが小綺麗で別荘風に出來て居て、二階からは東京灣を見渡し眺望は無類であつた。

食事が済むと我等は直ぐ散歩に出かけ、羽根田に出て川崎に廻はり、川崎からは汽車で坂本と自分は新橋まで、若代は大森で下りて了つた。

其後二三度坂本は自分を誘ひ出したが、千代子は何時もたゞ用事の時に現はれるは



かり、決して談話の仲間には加はらず、又母なる人は挨拶を爲るばかりであつた。  
或日、日の暮が、りに坂本がやつて来て、

『今日大森へ往つた』

『如何ぢや、面白かつたか』

『千代子女史のヴァイオリンといふのを聴かされちやつた』

『公式で待遇したね。上手いかね』

『上手いだらうね、僕には解らんが、何しろ上手さうぢやつた』

『君は軍歌でもやれば可かつた』

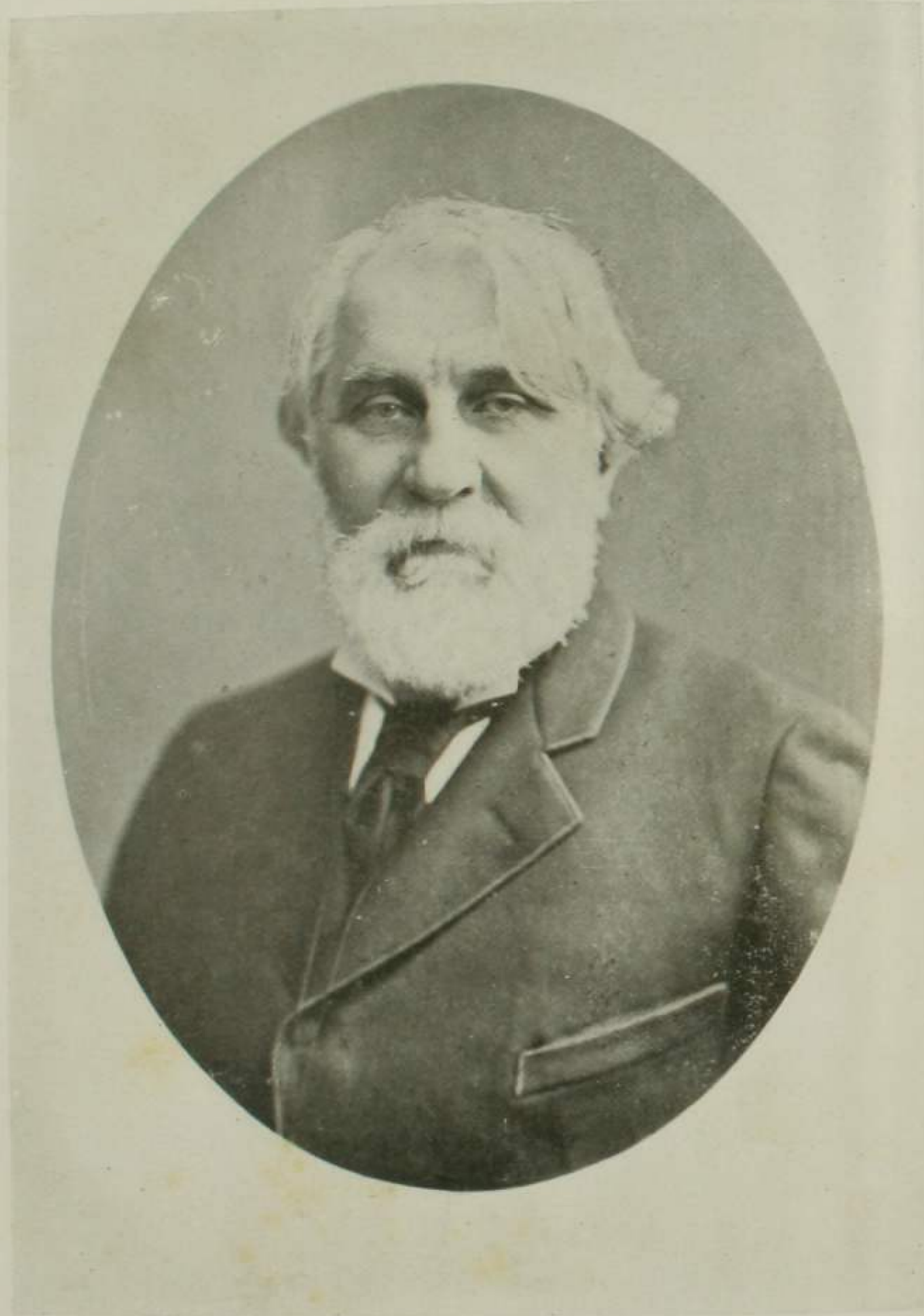
『剣舞を行つてやつた』

坂本の大森通は益々繁くなつて、自分と同道するのは五度に一度ぐらゐとなり、學校が退けると若代と一所に行つて夜の十時ごろまで遊ぶこともあつたらしい。

其中自分は坂本と千代子の關係の尋常ならぬに氣がついたから或時、

『大分御熱心のやうだね』

『何が』



獨歩の作品に影響を與へたるツネネ



「大森通が」

「君は感づいたね」

「何を」

「何をつて、君妙なことをいふぢやないか」と坂本がどきまぎするので自分は可笑しく、

「ヴァイオリンが餘程お氣に入つたと見えるね」

「悪からうか」

「善悪は別問題、兎に角、事實だらう」

「事實だ、眞面目なる事實だ！」

「而して樂しき事實だ。羨やむべき事實」

「秘密だよ」

坂本は極めて率直な男で、堅造であるが、裏に燃ゆるばかりの熱情を有つて居て、思ひこむと容易に後へ退かない、自分とは同郷、中學校時代から親友で、自分はよく彼の性質を知つて居るから、此戀の成行を注意しない譯に行かなかつたのである。



『明後日の日曜には僕も大森に行つて見よう、無論君は行くだらう』

『わア行く。一所に行かう』

夏近く、學校は試験前で吾等は随分忙がしい時であつたが二人は朝から宿を出て若代を訪うた。二階で雑談を爲て居ると何時の間にか坂本は下に下りて了つた。暫時して若代と自分は庭へ出て吾妻屋に行つて見たが、坂本の姿は見えない。すると若代が、『君、君』と小さな聲で自分を呼んで林の方を指すから自分は氣をつけて其方を見ると、坂本は制服の上着を脱いで傍の枝に掛け、白シャツばかりになつて芝生の上に臥ころんで靴の爪先で土を蹴りながら何か読んで居るらしい、前に洋綴の本が置いてあつて彼は一心に其を見て居る。千代子は其横に坐つて編物を爲て居るやうであるが顔は木の枝にさへられて能く見えない。涼しい緑蔭は二人の上を覆うて居る。

『旨くやつて居るよ！』と若代は言つて首をちよつと縮めて莞爾した。

『呼んで見ようか』と自分が言ふや、若代は手を振つて、

『止し給へ、止し給へ』と止め『君は如何思ふ、彼の二人を』

『お楽しみだと思ふ』

『妹も全然夢中だよ。可いサ僕は知らん顔をして居るんだ』

『然し母上は何と思つて居なさる』

『知らんよ、母は母、僕は僕だから』

『然し知つて居なさるだらう』

『どうだか。母は僕に何とも言はないから』

『坂本は母上の氣に入つて居るか知ら』

『母は決して人の噂を爲ん人で、おまけに無口だから解らない。然し坂本が來ると毎時でも御馳走するよ』

自分は話を轉じた。暫くすると坂本が一人ひよろりと吾妻屋にやつて來て、

『ビールが一杯飲みたい！』

『贅澤を言つてる！』と思はず自分が言ふと、

『飲まさうか』と言つて若代は家の方へ走つて行つた。

『何を讀んで居たのだ』と自分は故意と眞面目で聞いた。坂本は澄ましたもので、

『銀行論』



『馬鹿を言へ！』

『ぢやア見給へ！』とポケットから取出したのは成程教科書であつた。『君は見て居たね』

『若代が見つけたのだよ』

『何とか言つてたか』

『笑つて居た』

といふ内、若代は自身でビールの罈を提げ女中にコップなどを持たして來たので、二人は此談話を止めて飲み初めた。饒舌るのは若代と自分ばかり、坂本は黙つて遠く郊外の樹林を眺め、自分達の笑ふ時彼も笑つたが、恐らく將來の楽しい事ばかり考へて居たのであらう、それとも現今の樂に酔うて無念無想の境に其心を溶して居たのだらう。

試験は無事に済み坂本は優等で卒業した。某銀行に招かれ直に上海の支店詰を命ぜられたので、一寸歸郷するや間もなく上京して、愈々渡航といふ前の晩、自分はそれとなく千代子のことを聞くと、彼は眞面目で下を見て居たが其儘談話を轉じて了つた

ので自分も少し意外では有つたが別に何も言はなかつた。さうすると神戸の消印で次のやうな手紙を寄こしたのである。

『僕は千代子を受し、千代子も亦た僕を受した。然し決して二人は口に出して將來を約束することは爲なかつた。僕は今度上海に行くに就いて、君に相談して公然約束を申込んで置かうかとも思つた。

けれども僕は非常に考へて見合すことにしたといふ理由は、僕が今の若さに妻を持つことは到底出来ないし、又たこゝ四五年の後の約束を爲ることは千代子嬢のために甚だ不利であると考へたからである。十八といへば既に婚期、若し強ひて公然の約束をするならば徒らに彼女を束縛することになると考へたからである』

自分はこの手紙を見て坂本の處置に至極感心し、同時に彼が内心の苦惱を思ひやつて少からず同情を表したのである。坂本の出立た後で、自分は時々若代を尋ねたが千代子は見だ處別に變つた處もないやうに思はれた。若代も亦た平氣な風で坂本とは絶えず手紙を取りかはして居たらしう。

翌年若代も學校を卒業して、直に大阪の或會社に招かれたから、大森の家は他人に



貸して、母と妹を連れて赴任して了つた。

五年の歳月は忽ちゆき、其間坂本熊男は一度も歸國せず、自分も亦た大阪なる若代には一度も會はず、三人の間はたゞ手紙の往復に過ぎなかつた。

六年目に坂本は東京の本店詰となり、東京に歸るや彼は郷里の父母及び妹を迎へ取つて本郷に家を持ち、自分は小石川に居たので二人の往來は又もや書生時代と變らなくなつた。自分は其頃すでに妻帯して居たが或日のこと、坂本がやつて来て、

『妻を迎へようと思ふが如何だらう』と突然言ひだしたから自分は、

『其事なら僕も言はうと思つて居たのだ、候補者があるかね』

『千代子嬢サ』

と答へたので自分は驚き且つ喜んだのである。

『大賛成！直ぐ申込み給へ』

『僕は直接に千代子さんの意中を聞いて見る』

『その必要があるだらうか』

『あるとも。僕は別れてから後、直接には手紙を出さず、千代子さんからも直接には

何にも言つてよこさなかつたのだから、今となつては一應本人の心を僕から確める必要があると思ふ』

千代子は其時まで尙ほ兄の許に居たのである。二十四になるまで結婚しないで居た理由は何であるか、其邊は能く解らなかつたので、これまで何人からも結婚の申込を受けなかつた筈は無く、受けても謝絶して居たのかも知れない、若し然らば何故謝絶して居たのか、斯う考へて來ると成程坂本から直接に本人の意中を確めて見る必要があつたのである。

坂本は直ぐ手紙を出したらしく、四五日経つと彼は自分の家へ飛んでやつて來て、『さア此手紙を見て呉れ給へ！』

と投げ出したのは千代子よりの返事である、其文句の意味は斯うであつた、「お言葉は難有存じます。されど最早樂さ夢はさめ、花は散りたる後、小妹の心には少しの温氣無之、いつその事獨身と決めて居るのであります。幸し兄は御存知の氣象ゆゑ小妹の決心の程を探らうともせず、母は承知し居れどこれ亦た強ひて小妹の心を動かさうともせず、一家は至極無事平穩に其日を送り居るので御座ります。此段何卒惡からず



思召して、兄と一樣、行末永き友としお交際ひくだされたし」としてある。自分は讀み了つて、

「君は此手紙を如何思ふのだ」

「如何つて、さるで夢のやうだ」

「可憐さうにお千代さんは絶望して居るのだぜ」

「だから僕は如何して可いか解らなくなつて了つた」

「君は未だお千代さんを愛して居るかね」

「無論のことだ、だから申込んだのだ」

「大阪へ行つて來給へ！」

「さうだ！」

彼は其夜の汽車で大阪に立つた。三日目に寄した手紙に——「案ずるより産むが易いとは此事だ！ 初の中は千代子嬢も兎や角う言つて居たが、僕はとう／＼口説落した。局面がガラリ一變すると千代子嬢は依然たる千代子嬢。僕等は直に大森時代に立還つて了つた。」

大森時代に立還つたといふだけで僕等の幸福を想像して呉給へ、多くは言はない。

母御も若代も喜んで僕の申込みを承諾した。さて結婚は何時に爲たものか、これが今の問題である」

然るに又もや意外の障害が發つたといふのは坂本の父が病氣になつたことで、其爲め結婚の日を延ばし病氣全快の上と決めて居た處が不幸にも父は遂に倅の花嫁を見ないで此世を辭して了ひ、坂本は若代と同様、母と妹と三人になつて了つた。

亡父の百ヶ日が濟むと、其歳が暮れ二月中旬になつて漸く結婚の式を擧げ、七年前の戀が遂に目出度く成就したのである。若代は祝意を表する爲め大森の家、屋敷を新婚夫婦に贈り、新婚の夫婦は其最も樂しかりし昔の夢を現となして記念深き家に住むことゝなつたのは半年前のこと。

(三)

であるから自分は坂本の手紙を讀んで驚きもし、怪しみもし、遂に要領を得なかつたのは當然のことである。其處で自分は坂本に次のやうな返事を出した。

「當局者の君にすら解らない原因は容易に僕に知れる理由がない。原因が知れなけれ



ば策の施しやうはない。  
然し原因のない現象は有るべき筈が無い。君は能く心を平かにしてこれを研究しなければならぬ。

兎も角、三四日の中に君の家を訪ねて僕は二三日滞留することに爲る。其上で又た相談の爲やうも有らうと思ふ。何しろ痛ましき事實。意外千萬の事實。これを若代にでも聞かしたら如何に無頓着の彼でも喫驚して如何なに心配するであらう。

先づ今まで通り何人にも秘密にして置き給へ』

右の手紙を出すと共に引きちがへて今度は千代子からの手紙が届いた。

『不快なることを貴方のお耳に入れること、相成りいかにも残念には候へども一應おさ、取り下され度候。我等夫婦のこのごろの有様は其以前と打つてかはり、二人の間何となう日々に隔たりゆくを覺え候。これを思へば實に胸も張りさくばかりに候。』

さればとて夫の愛の冷めしにはあらで拙なき小妹を思ひくる、こと益々深く候。小妹とても其通り夫を愛する心は少しも昔に變らず候。斯くてもなほ我等夫婦の間の昔の如くならず成行くは情なき次第に候はずや。

今のまゝにて押し進まば、二人が仲は如何になりゆくべき、このことを思ひて昨夜もよもすがら泣き明し候。

所天もいたく心を悩まし居候やうなれど、打明けては何も申さず、私も亦た所天の前にては、力めて心楽しく氣を引立て居候。

されど之にてはとて二人とも長くは忍び得まじく候。思へば七年前の夏こそ戀しく候』

とあり、何分宜しく頼むから何とか工夫をして呉れるとの依頼である。

自分は此手紙を見て愈々容易ならぬことに思ひ、いろ／＼考へたが、考へれば考へる程解らなくなつて来る。兎も角一日も早く大森に行つて實際の様子を見るより外差當つて手段もないと決心し、爲かゝつて居た調査物を大急ぎで片付けて明日は朝早く立たうと準備して居た晩、突然又た坂本から手紙が来た。

『お手紙難有拜見した。』

成程お言葉の如く、當局者の僕等夫婦にすら解らない原因が君に判定の出来る理由はない。然も君に向つて救助を求めたのは僕の愚であつた。たゞ情の窮する處、遂に



君に泣きついたのは許して呉れ給へ。

お言葉に従つて僕は此頃頻りにいらだつ我心を壓へ、とくと考へて見た。昨日の晩夕闇静かに庭の面に下りしころ、僕はそつと部屋を脱け出て庭に出で暫時林の間をぶらぶら行きそれから例の吾妻屋に行つた。

あ、秋の夕暮の静けさ！月は既に林の上に出て其薄い光を放ち、村々は煙り、森は浮び、大空は澄み渡つて軽く夕づゝを支へて居る。僕は腰かけたまゝで物思ひに沈んで居ると端なく思ひ起したのは七年前の樂しかつた時である。

あの時分にはお互に未だ若かつた。今とても若い。然し今の若さと彼の時分とは文學者の口調を使ふやうだが詩と散文との相違がある。あの時分は何事も自由に快活に大膽で、而も神韻を帯びて居たのが、今は如何だらう。今の事は多く言ふを要しない。

然しこれが自然の成行とならば致し方もないことで、たゞ人性のしかく造られて居る者とあきらめるの外はない。よろしい、よろしい、どうでも宜しい！

よろしくないのは僕等の上の成行である！僕は夫れからそれへと、昔のことを想ひ

だすとたまらなくなつた。君忍んで聞いて呉れ給へ、斯ういふことがあつた。イヤ書くまい、書いた處で爲かたがない。恰度音楽を聞いた人が聞かない人に向つて、あゝであつた斯うであつたと話すと同じことで、とても他の者に自分の深い感情の曲折を傳へ得る者ではない。しかし僕は曾て有りしことも想ひ起し、天より吹き落して我が胸に傳へた戀の譜をたどるに従つて、其時の様があり／＼と眼の先に現はれ、日は光り木の葉は煌めき、なまぬるき風は草の香をこめて面をかすめる……あゝ、彼の時、此時、千代子も僕もどんなに樂しかつたらう。

卒然今に還つて、今の二人の上を思ふと同時に僕は身ぶるひをして立つた。

「どうしよう！如何したら可からう」と思はず口に出すと、啜泣の聲が耳に入つた。驚いて四邊を見廻はすと、妻である！千代子である！何時の間に来たのか、薄暗い吾妻屋の柱に倚つて顔を覆うて居た。

「オイ卿如何したのだ」と僕は驚いて近よつて訊ねた。妻は一語も發しないで益泣く。

「エ、如何したのだ、如何したのだ」と僕はいよ／＼急込で訊ねたが返事を爲ない。何で返事が出来よう、千代子も亦た今の二人が上を泣くのである、君よ、かゝる慘



澹たる光景が又と有らうか。あゝ之が二人の終か知らんと思つた時は僕の胸は張りさくばかりであつた。

「あの時は楽しい御座いましたねえ」と千代子は突然顔をあげて、舊歡の悲みを一語にふくめて言つた。

「さうだ！私も今昔のことを想出して居た處だ。卿、何卒今も彼時のやうに爲たいものだね」

「眞實にさうで御座いますよ」

「卿だつて私だつて今も彼時も少しも變らず斯やつて思合つて居るのだから決して彼時のやうな楽しい心持で暮せない譯はないよ」

絶望の裏は希望である。僕はこれより先の二人の會話を多く言ふを須ひないと思ふ。千代子語り僕語るうちに、二人の心の不思議なる重荷はだん／＼と軽くなつて来て、月の光の冴ゆると共に二人の心は冴え、喜びの餘り二人は相擁して泣いた。

そして今となりては何故二人が斯くまでに心を痛めたのか解らないのである。風の吹き廻しで月の光を覆うた雲が亦た天風に由て吹き拂はれたと言つて可からう。

明月に乗じて二人は楽しく林の間を散歩し、散歩しながらも七年前の昔を語りつ。

「此處でしたよ所天が土龍を捕へるつてシャツをまくりあげて、棒で穴をお掘りになつたのは」

「あの時の土龍が未だ生きて居るだらうか」

「最早死んじまひましたわ」

「イヤ未だ生きて、又彼の亂暴人が來たつて驚いてるだらうよ」

月影がちら／＼と木の間を洩れて下草に置いた露がきらめく。林の奥はほの暗く森として居る。

「久しぶりで歌ひませうか唱歌を」

「イヤそれよりは久しぶりでヴァイオリンを聞きたい」

「さう爲ませう」

其處で二人は内に入つた。千代子は一曲を弾いて「これは所天が初めて單獨で遊びにおいでになつた時弾いた曲ですよ」

さう聞いて僕は繰返して二度も三度も弾いて貰つた。



さてこれで澤山だらう、いかに忍耐強き君も、此以上甘つたるい處を聞かされるのは辛からうと信ずる』

## (四)

信ずるも無いもんだと自分は以上の手紙を讀み了つて思はず呟いた。

然し友の上の傷しい話に眉を顰めて同情を表するよりも、甘つたるい話を聞かされて笑つて呟くはうがお互に如何に幸かも知れない。自分も先づこれならば安心と、翌日の訪問を見合して次のやうな手紙を出した。

『浮雲一過して何よりの事。實は明日お訪ね致す積りで居たが、お手紙の様子では別に事情視察の必要もあるまいと思つて止めた。

僕も信ずる、土龍は定めし驚いたらう。お二人の談話を聞かされて。

いづれ其内僕も驚かされに行く。其時の御馳走をお二人で今から相談熟議して置いて貰ひたいものだ』

自分は引續いて他の調査に取かゝり二週間で其を終へ、直ぐ又要務で關西に旅行し序に若代を訪ねた。相變らずの好人物、二人は面白く語り面白く飲んだが自分は無論

坂本夫婦の上にあつたことは話さない。たゞ益々仲が可さうだとのみ傳へると。

『ちよいと喧嘩でも爲ると可いんだ、さうすると面白いんだ』

『とんだ兄貴だ、彌次馬兄貴だ』

『何に僕も女房を持たら一月に一度位はわざと喧嘩を爲てやるんだ。僕の妹も坂本もイヤに戀がつて居るだらうと思ふと可笑つて堪らない』と言つて若代は更に『まあ可いサ、お目出度いサ、蔭ながら祝杯でも舉げてやらう』と杯を差上げて飲み干し、例の優しい顔に罪のない笑を湛へた。

關西の用務は一週間で終り、自分は鎌倉にかへるや、一日置いて大森を訪うた。坂本夫婦の様子は別にこれぞといふ變つた處も見出さなかつたが、さりとて甘つたるい處も見せられず。食事中の雑談も普通の世間話か大阪の若代の事などで、先日來の問題に就ては自分も口を開かず、夫婦も避けて居るやうであつた。其避けて居る中にどうも多少の霽霧がかゝつて居るやうに思はれて自分はやゝ意外の感があつたのである。

食事を終るや坂本と自分は庭に出て歩きながら、  
『どうだね其後の経過は』と自分は遂に口をきつた。



「御覽の通りだ。不思議だらう」

「別に變りはないぢやアないか」

「さうサ無いと言へば無し、有ると言へば有る。この前の初は斯な風であつた」

「だつて先達の手紙ぢやアだいふお安くない處を聞かされたが」

「イヤ實に恥入る、あのことなら言はないで置いて呉れ給へ」と坂本は下を向いたまゝ言ふ。

「妙だな、不思議だな」

「僕は浮雲一過したやうに言つたが、ある時はどうもさうで無いらしい、僕等の見たのはたゞ雲の絶え間の月であつたのだ」

「これは驚いた。それぢやア何か深い原因が有りは爲ないかね。君の思ひもつかん處に」

「或は然らんだ。しかし君、今度の傾向は先のより少し違ふやうだ、つまり問題は二人の心持にあるのだ。その心持が二人にも少し先のとほ變つて居る」

「どんな風に」

「それがちよいと言葉に言ひ現はし難いがね」

「兎も角善い方に變つて居るのか悪いほうか」

「善くも悪くもない。見やうに依つて何とでも言へるがね。實は僕この頃、或る小説を讀んだのだ、日本のだよ、別に大したことも書いて無かつたが、自分でいろ／＼と思屈して居ると人の立話すら胸に中ることがあるやうに、其小説の中のちよつとした文句から色々僕に考へさせたのだ。やゝ發明する處があるのだがね……」

「如何いふのだ」

「イヤ今はいふまい、もう少し考へさし給へ、いよ／＼斯うと僕が斷案を下したら例のやうに詳しく書いて送るから見て呉れ給へ」と靜かに言つて莞爾笑つた。

「よからう。書いて送り給へ、それに就いて僕も所感を言はうから。つまりは、原因が解つたと言ふんだらうね」

「さア然らだ」と言つた彼の言葉は信ずる所あるらしかつた。其夜は一泊して遅くまで笑ひ興じて翌日自分は鎌倉に歸つた。

(五)



一週間目であつた、坂本から手紙の來たのは――

『犬養君足下』

千代子も僕も自分と自分を知らなかつたのである。この以前君に送つた手紙を今一度見てくれ給へ。

あの時僕は何と書いた。僕は千代子に向つて今も昔とお互の心は變らないから今を昔に爲ることの出来ない筈はないと言つたと書いてあるだらう。思へば我等は全く自ら知らなかつたのである。總の原因は茲に在る。僕等は自ら求めて苦しんだのである。十八の少女と二十四歳の青年と、燃ゆるばかりの戀に身も魂も打こんだ時と、爾來七星霜、それがお互に昔と同じといふことが如何して言へようか。

僕は結婚するとき七年前の戀を戀して居たのである。

千代子とも同じこと、一度は僕を怨みもしたらう、失望も爲たらう、然し矢張それは戀の作用である、だから愈々僕と結婚する時はこれ又昔の戀を戀して居たのである。戀して直ぐ結婚してすら戀其物は持續しないのが常なるを、何で七年前の戀を戀して結婚した我等が、結婚後に於て戀せし昔を今に爲ることが出来よう。

而も我等は結婚の當座、たゞ夫れ結婚の樂しさに、戀そのもの、夢を再演したと誤認し、其夢の永久なれかしと念じたのである。結婚の當座の酒はさめて、戀を戀する切なる情は失せざるが爲めに、二十五歳の妻と、三十一歳の夫は何となく物足りなく感じて來たのである。

僕は先の手紙に、昔の若さは詩で、今の若さは散文であると書いたが、何故彼の時、昔の戀は詩で、今の夫婦は散文であると發明することが出来なかつたらう。

青春の夢年と共にさめゆくが自然の成行ならば、戀も又燃えたる火の其と同じく必ず消え失する時があるであらう。これ悲しむべきことに相違ない、然し人性は矢張さういふ風に出來て居るならば致方もないのである。たゞ此處に人情の盡きざる火ありて永久に人の胸中に燃えて居る。詩にも散文にも詩想は宿る如くに、夫婦には夫婦の情が宿るべきである。何も強て戀の音響が何時までも二人の心に其微妙の樂を奏で、居なければならぬことはないといふ僕は信ずる。

十年ふりに小兒の時の友達に出會つた人がある、久しぶりだから二人は徹宵其の昔を語り、語つて居る内は、二人とも小兒の時の心持になつて、或は其昔流行つた歌の



片言雜に記憶えて居たのを今更想ひ出して聲を合せて、杯をあげて唄つたかも知れない。然し二人は遂に「あ、彼時はお互に面白かつた」と言ふに過ぎなからう。且つ彼等は其後昔の如くに相交はつて、共に楽しく流行歌を唄つて同じ工場に働いて行き得るや否やは別問題であらう。

幸に僕等夫婦は夫婦として缺くる處なく、相信と相愛して居るのであるから、其詩たるを求めずして散文たるに満足し、散文の中に詩をもとめなば、これより幸福なことはないのである。

先夜、僕等夫婦が吾妻屋で相擁して泣いたり、林を歩いて昔を語つたり、ヴァイオリンを弾いて昔の譜を繰返したりした、あれは要するに狂花に過ぎなかつたので、其を無上に喜んだのは愚の至りであつた。

今こそ初めて浮雲一過した、といふと君は又かといふかも知れないが、以上の發明は畢竟普通のこと、何でもないことで、人情の老巧者に聞かせば一笑に附するだけのことであらうが、僕等夫婦に取つては非常な發明である。僕等の身に取つては實に浮雲一過したと云つて可からうと思ふ。

若し僕等夫婦と雖も、これまでの不安のまゝで、物足ないまゝで過ぎ行くならば、遂には知らず／＼世間並の夫婦となつて、別に離婚もせず喧嘩もせず、夫婦は夫婦らしく面白可笑く暮すやうになつたであらう。然し其故を以て僕の以上の發明の利益を無視することは出来ない、ぐず／＼で泣き寝入ると、さてはと膝を拍つて悟るのは、人の意力を用ゐる上に於て大變な相違があると思ふ。消極的と積極的との相違があると思ふ。

僕は常に希ふ、人は何事にまれ常に積極的に意力、智力、及び情熱を用ゐて一生を送りたいと。

今一度言ふ、浮雲一過した、否な僕は雲を追拂つてしまつた。愉快で堪らない」此手紙に對する自分の返事は頗る簡單で「當局者の發明は假令其事が如何に小さいことであらうが、大なる成功である、情の世界に於て常に自から發明して行くといふことは智力の勝利である。其發明が美はしく發展するといふことは意力の勝利である。僕は君の如き友を有することを誇る」といふだけであつた。



秋の末冬の初、大阪から若代が上京して大森に三四日滞在したので自分も妻を伴れて大森を訪うた。若代の用向の一つには、坂本の妹を同僚の一人に世話する相談もあつたのである。相談は首尾よく收つたらしい。

あゝ、楽しい集合よ！殊に若代の一名加はると我等の圓居は別様の光を添へて来る。彼の性情は酸味苦味がない、彼は戦闘の人でない代に、戦闘ふ必要のない人である。自分は若代の顔を見て、其談話を聞いて、其の無限の愛嬌に對して、何時も思ふ、斯ういふ人が若し社會に一人も居なかつたら、さぞ世の中がぎくしゃくして住み心地の悪いことであらうと。人を人生必要の器具にたとへたら彼は樂器である。

さなきだに樂い筈の集合に此人が加はつたので、我等は如何な愉快に此一日を樂しんだらう。

夜食前一同は庭に出て且つ笑ひ且つ語り、林に入り、落葉を踏み、縦横になつて居る小路を各自に歩いて居ると、坂本夫人は自分の妻と隣の路を歩いて居たが、突然自分達の方を向いて、

「所天眞實に未だ土龍が生きて居るでせうかね」と言つたので坂本は自分をちよつと

顧みて笑ひながら、

「未だ卿あんなことを言つて居る、大變土龍が氣になると見えるね」

「だつて可笑いんですもの、所天の掘た穴がちやんと残つて居ますから」

「何だ何だ、其の土龍といふのは」と若代が振りかへつて訊くから、自分が其由來を手短に話すと、

「何のことだ其土龍なら三年前に死んで了つて今は子息の代になつて居る」

坂本は「子息と言へば僕等もそろゝ小兒があつて可い時分だね、ね君」と自分を顧みた。自分は笑つて答へなかつたが腹の中で、「聯想まで違つて來たわい」

夜食が済むや、坂本と若代、自分と三人で久しぶりに海岸の方へ散歩に出た。

夕和の海暮れんとして沖の白帆は朦朧と其影を倒映し、岸に沿うた家々には既に灯を點けて居る。夕烟地を這ひ軒を罩め、小兒の群は往來を駆け廻つて居た。

すると往來から横に入つた露路で、突然けたゝましい人聲がして、小兒が二三人駆け込んだ。何事かと露路の口まで行つて見ると、低い長屋が四五軒並んで居て、其一軒の前に幾人かの男女が立つて居る。



「ヤイ殺すなら殺せ、サア殺せ。てめえのやうな者と一所になつて居るとナ、終局にはどんな目に遇しやあがるか知れたものぢや無い」と叫ぶのは女の聲である、叫ぶ中にも人の寛める氣勢がする。

「何だ此死ぞこないめ、大きな口をき、やアがんな、心中の爲ぞこないめ、人殺しめ、誰がてめえのやうな奴を殺すものがあるか、死にたきやア勝手に死ね、よう死ねまい、心中の爲ぞこないめ！」

「死んでやるから見ろ、きつと死んでやるから見ろ、化けて出ててめえを取殺して呉れるから」と女が叫んだので外面に立て居る者がクスリと笑つた。

「死ね、死ね、死んで鐵五郎の跡でも追駈ける功德になるわ、人殺め、心中の爲ぞこないめ！」

「餘計なお世話だよ、鐵さんの跡を追ふと追ふまいとてめえの指圖は受けませんよ、生意氣言やアがんな、てめえと心中しやア爲まいし、盜棒め！」

「何だと」と男の一喝する時、どや／＼と其家から人が出て『まア』と止めながら直ぐ前の長屋に連れ込んだのは女の方らしい。

「見やがれ乃公が毆殺して呉れるから！人殺しめ」と男は猶も怒鳴つて居た。

坂本は我等と並んで露路の口に立つて居た土地の者の一人に向ひ、

「何事ですナ」と訊くと四十年輩の、肥つた男が笑ひながら、

「夫婦喧嘩でサ、毎度の事です」

「心中の爲ぞこないといふのは何の事です」

「ナニ彼女が未だ娘の時に情人を作らへて、添はれんとか何とか言つて六郷川で心中をやつたのですがね、男ばかり死んで自分は恐くなつて逃げ出したのでサ」

「鐵五郎といふのですか、其情人といふのは」

「さうですよ、米屋の伴でね、ちよいと美しい男でしたかね、彼女を内へ入れることは親も親類も皆な承知しなかつたのでサ。漁師の娘でね彼女も其時は此土地ぢやア珍しい美しい女でしたよ」

「そして今は彼男に添うてるんですね」

「さうですよ。何に矢張初は野合いたのですがね。さうですな一緒になつてから最早六七年も経ちますかな。随分仲の可い時は可いんですがね如何かすると喧嘩をオツ初



るんです』

『そこで心中の爲ぞこなひが出ようといふもんだナ』と若代は口を入れた。

『ハッハッハッさうですよ、……田夫野人といふのは彼の手合でせうナ』と四十男は漢語を以て其談話を止めた。

我等は行き過ぎて、やゝ暫くすると若代は、

『田夫野人が可かつた』と獨り莞爾いて居る。坂本は頻に考へながら眞面目な顔をして歩いて居る。

『僕はいくら美しい女でも心中を爲そこなつて男を見殺しに爲た女は女房に爲る氣にならんナ』と若代が言ふや坂本は、

『何故、愛があれば可いぢやないか』

『愛？男を見殺しに爲る女の愛は劍呑だ』

『然し若し今の夫婦が極く仲よく暮して喧嘩一ツ爲なかつたら如何する。人によつたら喧嘩しないで暮すかもしれぬ』

『それは別問題だ』と若代は笑つて逃げかけると坂本は進んで、

『さうさ別問題だ、心中して男を殺したこと、後になつて夫婦仲善く、楽しく暮すこと、は別問題だ』

『どうだか。若し夫婦の間に絶えず心中の事實が記憶されて居て、常に彼等の心の底にそれが蟠居つて居たら如何だらう』と自分は口を入れた。

『さうとも。だから完全の夫婦では無論ない。然しあゝいふ社會では必ずしも我等が思ふ程には過去の事實を以て現在の情を殺すやうなことは爲ないよ』

『兎に角、不完全の夫婦だ』と自分が言ふや、

『然し矢張り夫婦だ』と坂本は少し考へ『それを完全に發達させるのが人の責任だ、又夫婦の面白味も其處にあるだらうと思ふ』

『だつて一度有つた事實は消えは爲ないよ、一度男を見殺しに爲た女は何時まで経つても其女だ』と自分は云つて坂本の顔を見ると彼は微笑を含んで、

『事實は無論消えない、然し事實といふ者は左まで執着すべき價値のあるものでないんだ、事實よりも人の心の方が人に取つては大なる者だ、大なる事實だ。女をして男を見殺しに爲たことの罪に泣かしめ、夫は其情を憐れんで更に正しく清く高き方に導



くならば、即ち人の心が事實に勝つといふものだ。だから僕は如何なる事情があらうとも、夫婦の情誼を發達せしむるが人の責任、又必ず發達させ得ると信ずるので。どうだね若代、僕の議論は」

『感服した、僕の妹は幸福だ』と若代は眞面目で答へた。坂本は莞爾して、

『イヤ僕が幸福なんだ、この議論の半分はお千代の持論なんだから』

三人や、疲れて歸つて見ると、婦人連の琴、ヴァイオリン、風琴などいふ華やかな場が開いて居た。それが濟むとめでたし〜で幕。

河 霧



上田豊吉が其故郷を出たのは大凡二十年ばかり前のことであつた。

其時渠は二十二歳であつたが、郷黨みな渠が前途の成功を卜して其門出を祝した。

『大なる事業』てふ言葉の宮の壯麗しき臺を金色の霧の裡に描いて、渠は其古き城下を立ち出で、大阪京都をも見ないで直ちに東京へ乗込んだ。

故郷の朋友親戚兄弟、みな其安着の報せを得て祝し、更に渠が成功を語り合つた。

然るに、たゞ一人、「杉の杜のひげ」と綽名せられて本名は並木善兵衛といふ老人の  
みが次の如くに言つた。

「豊吉が何を成就すものぞ、五年十年のうちには必定蒼くなつて歸つて來るから見て居ろ」



『何故?』その席に居た豊吉の友が問うた。

老人は例の雪の様な髭髯をひねくり乍ら淋しうに意地の悪さうに笑つた計りで、何とも答へなかつた。

そこで少しばかり此老人の事を話して置くが、杉の杜のひげ」と言はれて其名が通つてゐるだけ、岩——のもので其頃この奇體な老人を知らぬ者は無い程であつた。

髭髯が雪のやうに白いところから其紳名を得たとはいふものゝ、小さな穢ならしい老人で、其頃七十若干とかでも頗る強壯なこつゝした體格であつた。

此老人が其小丸い眼を杉の杜の薄暗い蔭でピカ／＼輝らせて黙つて立つてゐるのを見ると誰も薄氣味の悪い老翁だと思ふ。それが老翁ばかりでなく「杉の杜」といふのが、岩——の土族屋敷では此「ひげ」の生れない前の最と前から既に氣味の悪い處になつてゐるので幾百年か経つて今は其根方の周圍五抱もある一本の杉が並本善兵衛の屋敷の隅に聳立つて居て其處が淋しい四辻になつてゐる。

善兵衛は若い時分から口の悪い男で、少し變物で右左を間違へて言ふ仲間の一人であつたが、年を取ると餘計に口が悪くなつた。

『彼奴は遠からず死ぬわい』など人の身の上の不吉極まる豫言を試みて平氣である。それが又奇妙に適中する、むづかしく言へば一種靈活な批評眼を備へてゐた人、有體に言へば天稟の直覺力が銳利である上に、郷黨が不思議がれば愈々自分も餘計に人の氣質人の運命などに注意して見るやうになり、それが面白くなり自慢になり、遂に熟練になつたのである。彼は決して卜者ではなかつた。

そこで豊吉は此「ひげ」と別に交際もしないくせに「ひげ」は豊吉の上にあんな豫言をした。

そしてそれが二十年ぶりに適中つた。適中つたといへば其丈であるが、其に三つの意味が含まれてゐる。

『豊吉が何を成就すものぞ』これが其一、

『五年十年のうちには』これが其二、

『必定歸つて来る』これが其三。

薄氣味の悪い「ひげ」が黴のやうな眼を輝らせて杉の杜の蔭から斜睨んだ處を今少し詳しく言へば、



豊吉は善人である、又た才もある、しかし根がない、いや根も随分あるが、どこかに影の薄いやうな氣味があつて、其爲ることが物の急所に中らない。又た力一杯に打ち込んだ棒の音が鈍く反響するといふやうな處がある。

豊吉は善人である、情に厚い、しかし膽が小さい、と言ふよりも寧ろ、氣が小さいので、磯ぎんちやくと同質である。

そこで彼は失敗やら成功やら、二十年の間に東京を中心として重に東北地方を舞臺に色々な事をやつて見たが、遂に失敗に終つたと言ふよりも寧ろ、最早精根の泉を涸らして了つた。

そして故郷へ歸つて來た。漂つて來たのではない、實に歸つて來たのである。彼は如何なる時にも其故郷を忘れ得なかつた、如何に渠は零落するとも、都の巷に白馬を命として埃芥のやうに沈澱して了ふ人ではなかつた。

しかし「ひげ」の「五年十年」は適中らなかつた、二十年ぶりに豊吉は歸つて來た、しかも「ひげ」の「五年十年」には意味があるので、實に適中つたのである、則ち豊吉は忽ち失敗して忽ち逃げて歸つて來るやうな男ではない、やれる丈けはやつて見る質であ

つた。

さて「杉の杜のひげ」の豫言は悉く適中つた。しかし流石の「ひげ」も取逃がした豫言が一つある、たゞ幾百年の間、人間の運命を眺めてゐた「杉の杜」のみは豫め知つてゐたに違ひない。

夏なつの末すえ、秋あきの初はじめの九月くがつなれば日曜にちようの午後一時ごころ、「杉の杜」の四辻よつちに茫然ぼんやり立つて居る者がある。

年の頃は四十ばかり、胡麻鹽頭ごましほたまの色の黒い頬ほのこけた面長おもながな男である。汗あせじみて色の變かはつた縮布ちぢみの洋服やうふくを着て脚絆きゃんの紺こんも腰こしせ草鞋わらじもぼろ／＼してゐる。都みやこからの落人おちびとでなければ斯こんな風ふうをしてはゐない。即ち上田豊吉である。

二十年ぶりの故郷こきやうの様子は随分變かはつてゐた。日本全國にほんぜんこく、何處いづこの城下じやうかも町まちは新しく變かはり、士族小路しぞくこうぢは古く變かはるものが例れいであるが岩いは——も其通りで、町まちの方は新しい建物たて物ものも出來でき、きらびやかな店みせも出來できて、萬何まんなとなく今の世よの様さまにともなつてゐるが、士族屋敷しぞくやしきの方は其反對そのはんたいで、到いたる處ところ、古い都みやこの斷礎だんそのやうな者があつて一種言ふべからざ



る沈靜の氣が隅々まで行渡つて居る。

豊吉は暫時く杉の杜の蔭で休息んでゐたが、氣の弱い渠は、斯くまでに零落れて其懐しい、故郷に歸つて來ても、猶ほ大聲をあげて自分の歸つて來たのを言ひふらすことが出來ない、大手を振つて自分の生れた土地を歩くことが出來ない、直ちに兄の家、則ち自分の生れた家に行くことが出來ない。

渠は恐るゝ其處らをふらつき初めた。夢地を歩む心地で古い記憶の端々を辿りはじめた。成程、様子が變はつた。

しかし矢張、變はらない。二十年前の壁の穴が少し太くなつた計りである。豊吉が棒の先で惡戯に開けた處の。

たゞ豊吉の目には以前より路幅が狭くなつたやうに思はれ、樹が餘程淋しくなつたやうに思はれた。蟬が其單調な眠さうな聲で鳴いてゐる。寂とした日の光がぢりぢりと照りつけて、今しも此古い士族屋敷は眠つたやうに靜かである。

杉の生垣をめぐると突當りの煉塀の上に百日紅が碧の空に映じてゐて、壁は殆ど鳶で埋もれてゐる。其横に門がある。檜、梅、橙などの庭木が門の上に黒い影を落して

門の内には棕櫚の二三本、其扇めいた太い葉が風に煽られ乍ら、びか〜と輝つて居る。

豊吉は首肯いて門札を見ると、板の色も文字の墨も同じやうに古びて「片山四郎」と書いてゐる。これは豊吉の竹馬の友である。

『達者でゐるらしい』渠は思つた、『多分子供もできてゐることだらう』

渠はそつと内をのぞいた。桑園の方から家鶏が六七羽、一羽の雄に導かれてのそのそと門の方へやつて來る處であつた。

忽ち車井戸の音が高く響いたと思ふと、『お安、金盃を持って來て呉ろ』といふ聲は此家の主人らしい。豊吉は物に襲はれたやうに四邊をさよろ〜と見廻して、急いで煉塀の角を曲つた。四邊には人らしき者の影も見えない。

『四郎だ四郎だ』豊吉は茫然立つて眼を細くして何を見てもなく其狭い樹の影の多い路の遠くを眺めた。路の遠くには陽炎がうら〜とたつて居る。

一匹の犬が豊吉の立つて居る直ぐ傍の、寒竹の生垣の間から突然現はれて豊吉を見て胡散さうに耳を立てたが、忽ち垣の内口笛が一聲二聲高く響くや犬は又た駆込んで



で仕了つた。豊吉は夢の醒めたやうに一寸眼を睜つて、淋しい微笑を眼元に浮べた。すると、一人の十二三の少年が釣竿を持つて、小蔭から出て来て豊吉には氣が付かぬらしく、此方を見向きもしないで軍歌らしいものを小聲で唱ひ乍ら彼方へ行く、其後を前の犬が地を嗅ぎ、御伴をしてゆく。

豊吉はわれ知らず其後について、ちつと少年の後影を見ながらゆく、其距離は數十歩である。實は三十年の歲月であつた、豊吉は昔の我を眼の前にありと見た。

少年と犬との影が突然消えたと思ふと、其曲角の直ぐ上の古木、昔のまゝの其枝ぶり、蟬のとまり處までが昔其儘なる——豊吉は「成程、今の兒は彼處へ行くのだな」とうれしやうに笑つて梅の樹を見上げて、そして角を曲つた。

川柳の蔭になつた一間幅位の小川の邊に三四人の少年が集つて居る、豊吉はニヤニヤ笑つて急いで其處に往つた。

大川の支流の此小川の此處は昔からの少年の釣場である。豊吉は柳の蔭に腰掛けて久しぶりに其影を昔の流に映した。小川の流は此處に来て急に幅廣くなつて、深くなつて静になつて暗くなつて居る。

柳の間を洩れる日の光が金色の線を水の中に射て、澄み渡つた水底の小砂利が銀のやうに碧玉のやうに沈んでゐる。

少年は、彼處此處の柳の株に陣取つて釣つてゐるが、今來た少年の方を振り向いて、一人の十二三の少年が、

「檜山！これを見ろ！」と言つて腹の眞赤な山嶮の尺にも近いのを差上げて見せた、そして自慢さうに、うれしやうに笑つた。

「上田、自慢するなッ」と一人の少年が叫んだ。

豊吉はつツと立ち上つて、上田と呼ばれた少年の方を向いて眉に皺を寄せて眼を細くして眩しやうに少年の顔を見た。そして其傍に往つた。

「どれ、今のお見せなさい」と豊吉は少年の顔を見乍ら言つた。

少年は不審さうに豊吉を見て、不性無性に籠の口を豊吉の前に差向けた。

「成程、成程」豊吉は一寸籠の中を見ればかりで、少年の顔をちつと見乍ら、「成程、成程」といつて小首を傾けた。

少年は「大きいだらう！」と鋭く言ひ放つて掠奪るやうに籠を取つて、水の中に突



込んだ、そして水の底をざつと見て、最早傍に人あるを忘れたやうである。  
 豊吉は呆れてしまつた『どうしても阿兄の子だ、面相の能く似てゐるばかりか、今の聲は阿兄にそっくりだ』と猶も少年の横顔を見て居たが、晝だ、丸で晝であつた！  
 此二人の様は。

川柳は日の光に其長い青葉をきらめかして、風のそよぐ毎に黒い影と入り亂れてゐる。其冷やかな蔭の水際に一人の丸く肥つた少年が釣を垂れて深い清い淵の水面を餘念なく見てゐる。其少年を少し隔れて柳の株に腰かけて、一人の旅人、零落と疲勞を其衣服と容貌に示し、夢みる如きまなざしをして少年を眺めてゐる、小川の水上の柳の上を遠く城山の石垣の頽れたのが見える。秋の初で、空氣は十分に澄んでゐる、日の光は十分に鮮かである。晝だ！意味の深い晝である。

豊吉の眼は涙にあふれて來た。瞬をして呑み込んだ時、渠は思はず其涙をはふり落した。そして何ともいへない懐しさを感じて『此處だ、おれの生まれたは此處だ、おれの死ぬのも此處だ、あゝ嬉しい、安心した』といふ心持が心の底の方から湧いて來て、何となく今までの長い間の辛苦艱難が皮のむけたやうに自分を離れた心地が

した。

『お前の父上の名は何んでいふかね』と豊吉は親しげに少年に近づいた。

少年は眼を丸くして豊吉を見た。豊吉は猶も親しげに、

『貫』といふだらう？』

少年は驚いて豊吉の顔をざつと見つめた。豊吉は少し笑を含んで、

『貫』さんは丈夫かね』

『達者だ』

『それで安心しました、あゝ其れで安心しました。お前は豊吉といふ叔父さんのことを父上から聞いたことがあらう』

少年は吃驚して立ちあがつた。

『お前の名は？』

『源造』

『源造、己はお前の叔父さんだ、豊吉だ』

少年は顔色を變へて竿を投げ捨てた。そして何にも言はず、士族屋敷の方へと一散



に駈けて往つた。

他の少年にも驚いて、豊吉を怪しうに見て、急に絲を巻くやら籠を上げるやら、こそ〜と、逃げて往つて了つた。

豊吉は呆れ返つて、ぼんやり立つて、少年らの駈けて行く後影を見送つた。

『上田の豊さんが歸つたさうだ』と彼を記憶し噂してゐた人々は皆な吃驚した。

豊吉二十の頃の知人皆な四十五十の中老になつて、子供もあれば、中には孫もあるその人々が續々と見舞にくる、殊に女の人、昔美しかつた乙女の今はお婆さんの連中が、又た續々と見舞に来る。

人々は驚いた、豊吉の餘りに老ぼれたのに。人々は祝つた、其無事であつたを。人は氣の毒に思つた、何事も成し得ないで零落れて歸つたのを。そして笑つた。そして泣いた。そして言葉盡して慰めた。

あゝ故郷！ 豊吉は二十年の間、一日も忘れたことは無かつた、一時の成功にも一時の失敗にも。そして今、全然失敗して歸つて来た、しかし斯くまでに人々がわれに

優しいことゝは思はなかつた。

彼は驚いた、兄をはじめ人々の餘りに優しいのに。そして泣いた、たゞ何とは無しに嬉しく悲しくつて。そしてがっかりして急に年を取つた。而して希望なき零落の海から、希望なき安心の島にと漂着した。

渠の兄は此不幸なる漂流者を心を盡して介抱した。其子供等は此人の善い叔父に全然、懐いて了つた。兄貫一の子は三人あつて、お花といふが十五歳で、其次が前の源造、末が勇といふ七歳の可愛い、兒である。

お花は叔父を慰め、源造は叔父さんと遊び、勇は叔父さんにあまえた。豊吉はお花が土蔵の前の石段に腰掛けて唱へ唱歌をきながら茶室の窓に倚りかゝつて居眠り、源造に誘はれて釣に出かけて居眠り乍ら釣り、勇の馬になつて、のそ〜と座敷を這ひ廻り、馬の嘶き聲を所望されて、牛の鳴く真似と間違へて勇に怒られ、家中を笑はせた。

斯る際にお花と源造に漢書の素讀、數學英語の初歩などを授けたが原因となり、兎も角、遊んで計りぬては却つて善くない、少年を集めて私塾のやうなものでも開いた



ら自分のためにも他人のためにもなるだらうとの説が人々の間に起つて、兄も無論賛成して此事を豊吉に勧めてみた。

豊吉は同意した。そして心ひそかに喜んだ、その理由は、渠初より無事に日を送ることをよるこばなかつた。のみならず遂に何事をも爲さず何を成就することなく一生空しく他の厄介で終はるといふことは彼に取つて多少の苦痛であつた。

希望なき安心の遲鈍なる生活も何時しか一月ばかり経つて、豊吉はお花の唱歌を聞きながら、居眠つてばかり居ない、秋の夕空晴れて星の光も鮮やかなる時、お花に伴はれて彼小川の邊など散歩してお花が聲低く節哀れに唱ふを聞けば其沈み終てし心かすかに躍りて、其昔、失敗し乍らも煩悶し乍らも或仕事を企て、其に力を盡した日の方が、今の安息無事よりも願はしいやうに感じた。

渠は思つた、他郷に出て失敗したのは強ち渠の罪ばかりでない、實に又た他郷の人の薄情さにも由るのである。されば若し斯様な親切な故郷の人々の間に居て、事を企てなば、必ず多少の成功はあるべく、以前のやうな形なしの失敗は有るまいと。渠は自分を知らなかつた。自分の影がどんなに薄いかを知らなかつた。そして喜んで

で私塾設立の議を承諾した、さなきだに渠は自分で何等の仕事をか企てんとして居て言ひ出しにくく、思つて居た處であるから。

「杉の杜の髯」の豫言の中つたのは此處まで、ある。さて此以後が「髯」の豫言の遺した豊吉の運命である。

月のよく冴えた夜の十時ごろであつた。大川が急に折れて城山の麓をめぐる、其崖の上を豊吉獨り、おのが影を追ひながら小さな藪路をのぼつて行く。

藪の小路を出ると墓地がある。古墳累々と崖の小高い處に並んで、月の光を受けて白く見える。豊吉は墓の間を縫ひながら行くと、一段高い處に又た數十の墓が並んでゐる。其中の極く小さな墓——小松の根にある——の前に豊吉は立ち止つた。

この墓が七年前に死んだ「並木善兵衛之墓」である、「杉の杜の髯」の安眠所である。

此日、兄の貫一其他の人々は私塾設立の着手に取りかゝり、片山といふ家の道場を借りて教場に充てる事にした。此道場といふは四間と五間の板間で、其以前豊吉も小学校から歸路、此家の少年を餓鬼大將として荒れ廻つた處である。更に維新前はお面



お籠手の眞の道場であつた。

人々は非常に奔走して、二十人の生徒に用ゐられる丈の机と腰掛とを集めた。或は役場の物置より、或は小學校の倉の隅より、半ば壞れて用に立ちさうにないものを夫れ々繕つて兎も角、間に合はした。

明日は開校式を行ふ筈で、豊吉自らも色々な準備をして、演説の草稿まで作つた岩——の土族屋敷も此日は其ために多少の談話と笑聲とを増し、日常淋しい杉の柱附近までが何となく平時と異つてゐた。

お花は叔父のために『君が代』を唱ふことに定り、源造は叔父さんが先生になるといふので學校に行つても此二三日は鼻が高い。勇は何で皆が騒ぐのか少も知らない。

そこで其夜、豊吉は片山の道場へ明日の準備の爲のこりをかたづけに往つて、歸路突然方向を變へて大川の邊へ出たのであつた。

「髻」の墓に豊吉は腰をかけて月を仰いだ。「髻」は今の豊吉を知らない、豊吉は昔の「髻」の豫言を知らぬ。

豊吉は大川の流を見下ろしてわが故郷の景色を暫時見とれてゐた、暫時してほつと

嘆息をした、さも〜がつかりしたらしく。

實にさうである、豊吉の精根は枯れてゐたのである。渠は今、堪ふ可からざる疲勞を感じた。私塾の設立、渠は此言葉のうち、何等の彈力ある者を感じなくなつた。

山河月色、昔のさゝである。昔の知人の幾人かは此墓地に眠つて居る、豊吉は此時つくづく我生涯の流も最早限りなき大海近く流れ來たのを感じた。我と我が亡友との間半透明の膜一重なるを感じた。

さうでない、たゞ渠は疲れた。一杯の水を求めるときの氣もなくなつた。

豊吉は靜に立上つて河の岸に下りた。そして水の灣をとぼ〜と辿つて河下の方へと歩いた。

月は冴えに冴えてゐる。城山は暗黒な影を河に映してゐる。澱んで流るゝ邊りは鏡の如く、瀬をなして流るゝ處は月光碎けてきら〜輝つてゐる。豊吉は夢心地になつて頻に流を下つた。

河舟の小さなのが岸に繋いであつた。豊吉はこれに飛乗るや纜を解いて棹を立てた。昔の河遊びの手練が未だのこつて居て、船はする〜と河心に出た。



遠く河すそを眺むれば、月の色の隈なきにつれて、河霧夢の如く淡く水面に浮んで  
ゐる。豊吉はこれを望んで棹を振つた、船いよ／＼下れば河霧次第に遠ざかつて行  
く。流の末は間もなく海である。  
豊吉は、遂に再び岩——に歸つて來なかつた。最も悲んだものはお花と源造であつ  
た。

小 春



## (一)

十一月某日、自分は朝から書齋に籠つて書見をして居た。其書はゾーズアルス詩集である、此詩集一冊は自分に取りて容易ならぬ關係があるので、これを手に入れたは既に八年前のこと、忘れもせぬ九月二十一日の夜であつた。あゝ八年の歲月！憶へば夢のやうである。

殊に此一二年は此詩集すら、僅に二三十巻しかない我藏書中にあつても甚しく冷遇せられ、架上最も塵深き一隅に放擲せられて居た。否、一月に一度位は引出されて瞥見された事も有つたらう、併し要するに瞥見たるに過ぎない。曾て自分の眼光を射て心靈の底深く徹底した一句一節は空しく赤い線、青い棒で標點けられてあるばかり



最早自分を動かす力は消え果て、居た。今更其理由を事々しく自問し自答するにも當るまい、こんな事は初めから解つて居る筈である。「マイケル」を読んでリウクの運命の爲に三行の涙を濺いだ自分は何時しか又リウクを誘うた浮世の力に誘はれたのだ。そして今も今、いと誇顔に「我は老熟せり」と自から許して居る。あゝ老熟！別に不思議はない、

“Man descends into the Vale of years.”

『人は歲月の谷間へと下る』

とふ一句が『エキスカーション』第九編中に在つて自分は之に太く青い線を引いてるではないか。どうせ此が人の運命だらう、其證據には自分の友人の中でも随分自分と同じく、自然を愛し自然を友として高き感情の中に住んで居た者もあつたが、今では立派な實際家になつて、他人の噂をすれば必ず『彼奴は常識が乏しい』とか『彼は事務家だ豪い處がある』など、評し、以前の話が出ると赤い顔をして、『彼時はお互に未だ若かつた』と頭を搔くではないか。

自分がゾーブルスを見捨てたのではない、ゾーブルスが自分を見捨てたのだ。

たまさか引出して見た處で何が解らう。ゾーブルスも斯ういふ事務家や老熟先生に解るやうには歌はなかつたに違ひない。

處で自分免許の此老熟先生も實は流石に全然老熟し得ないと見えて、實際界の事が旨く行かず、此頃は家にばかり引籠つて居て多く世間と交はらない。其結果でもあらうがゾーブルス詩集までが一週間に二度位は机の上に置かれるやうになつた。

さて十一月某日、自分は朝から書齋に籠つて書見をして居た、と更めて書き出す。

(11)

昨日も今日も秋の日は佳く晴れて、實に小春の天氣、仕事をすることも、散策を試みるにも、又た書を讀むにも申分ない氣候である。ゾーブルスの所謂、

『一年の熱去り、氣は水の如くに澄み、天は鏡の如くに磨かれ、光と陰と愈明かにして、愈映照せらるゝ時』

である。氣が晴々する、うちにも何處か引緊る處があつて心が浮つかない。斷行するにも沈思するにも精一ぱい出来る。感情も意志も智力も其能を盡すべき時である。冬はいぢけ春はだらけ夏は瘦せる人でも、此季節ばかりは健康と精力とを自覺するだら



う。其で季節が季節だけに自分のゾーズアルス詩集に對する心持がやゝ變つて來た。少しはしみりと詩の旨を味ふことが出来るやうである。自分は南向の窓の下で玻璃越の日光を避けながら、ソネットの二三編も讀んだか。そして“Line Composed a few miles above Tintern Abbey”の雄編に移つた。此詩の意味は大略左の如くである。

五年は経過せり。而して我今再び此河畔に立つて其泉流の咽を聴き、其危巖の聳ゆるを仰ぎ、其蒼天の地に垂れて静かなるを觀るなり。日は來りぬ。我れ再び此暗く繁れる無花果の樹蔭に坐して、彼の田園を望み、彼の果實園を望むの日は再び來りぬ。

我れ今再び彼の並樹を見るなり。我れ今再び彼の牧場を見る也。

綠草直ちに門戸に接するを見、樹林の間よりは青烟閑かに巻いて空に上るを見る、樵夫の住む所、將た隱者の獨坐して爐に對する處か。

此等の美なる風光は我に取りて、過去五年の間、彼盲者に於ける景色の如きものにては非ざりき。一室に孤坐する時、都府の熱鬧場裡に在るの日、我此風光に負ふ處

ありたり、心屈し體倦むの時に當りて、我血我心は此等を懐ふ毎に如何に甘き美感を享けて躍りたるぞ、更に負ふ處の大なる者は、我れ此不可思議なる天地の秘義に惱まざるゝに當り、是等の風光を憶ふことに依りて、其壓力を支へ得たること也。若し夫れ之れを憶うて愈感じ、冥想靜思の極に到れば我實に一呼吸の機微に萬有の生命を觸着するを感じたりき。

若し此事、單に我が空漠たる信念なりとするも、我心此世の苦惱に悶き暗憊たる日夜を送る時に當りて、我如何に屢々汝に振り向きたるよ、嗚呼ワイの流！林間の逍遙子よ、如何に屢々我心汝に振り向きたるよ！

而して我今、再び此處に立つ我心は昔に今の此樂さを感ずるのみならず、實に又た來るべき歲月に於ける我生命と我食物とは今の此時の感得中にあるべきなり。敢て望むは其感得の兒童の際の如からむことなり。

彼時は、山羊の如く然り、山野泉流たゞ自然の導くまゝに逍遙したり。彼時は飛瀑の音、我を動かすこと我情の如く、巖や山や、幽邃なる森林や、其色彩形容皆な彼時に於て我を刺激すること食慾の如きものありたり。即ち彼時は唯だ愛、唯だ感あり



しのみ、他に思考するところの者を藉り來りて感興を助くるに及ばざりし也。されど彼時は既に業に過ぎ逝きたり。而も我は此經過を吐かず哀さざるなり。我は此損失を償ひて餘ある者を得たり。即ち我は思想なき兒童の時と異り。今は自然を観ることを學びたり。今や人情の幽音悲調に耳を傾けたり。今や落日、大洋、清風、蒼天、人心を一貫して流動する所のものを感得したり。

かるが故に我は今尚ほ牧場、森林、山嶽を愛す、綠地の上、窮天の間、耳目の觸る所の者を愛す、是等は皆な我が最純なる思想の錨、我心我靈及び我徳性の乳母、導者衛士たり。

嗚呼我が最愛の友よ、(妹ドラ嬢を指す)、汝今我と共に此清泉の岸に立つ、我は汝の聲音中に我が昔日の心語を聞き、汝の驚喜して閃く所の眼光裡に我が昔日の快心を讀むなり。嗚呼！我をして少時なりとも汝に於て我昔日を觀取せしめよ、我が最愛の妹よ！

抑も亦斯く祈る所以の者は、自然は決して彼を愛せし者に背かざりしを我れ知れば

也、我等の生涯を通じて歡喜より歡喜へと導くは彼の特權なるを知れば也。彼より享くる所の静と、美と、高の感化は、世の毒舌、妄斷、嘲罵、輕薄をして吾等を犯かさしめず、我等の樂き信仰を擾る勿からしむるを知ればなり。

かるが故に、月光をして汝(妹)の逍遙を照らしめよ、霧深き山谷の風をして恣まゝに汝を吹かしめよ。汝今日の狂喜は他日汝の裏に熟して莊重深沈なる歡と化し汝の心は當に熙しき千象の宮、靜なる萬籟の殿たる可し。

嗚呼果して然らんか、或は孤獨、或は畏懼、或は苦痛、或は悲哀にして汝を惱ませざらん時、汝は正に我此言を憶ふべし。

他日若し、我又た汝を見る能はざるの地にあらむか、汝當に我と共に此清泉の岸に立ちしことを忘る勿れ。

先づザット斯ういふ意味である。自分は繰返して讀んだ。そして如何いふ句に最も強くアンダーラインしてあるかと見れば、最初の「五年は經過せり」の一句及び「我心は當に今の此樂さを感ずるのみならず、實に又た來るべき歲月に於ける我生命と我食物とは今の此時の感得中にあるべきなり」の句を始めとして「自然は決して彼を愛



せし者に背かざりし』の句の如き、そして、

“Therefore let the moon

Shine on thee in thy solitary walk ;

And let the misty mountain winds

be free to blow against thee.”

の句に至つては二重にも線が引いてある。何の爲めに引いたか、抑も亦た此濃い青い線を此等の句の下に引いたのは、何時であるか。

『七年は経過せり』と自分は思はず獨語した。さうだ。さうだ！七年は夢の如くに過ぎた。

(III)

自分が最も熱心にラーズブルスを讀んだのは豊後の佐伯に居た時分である。自分は田舎教師として此所に一年間滞在して居た。

自分は今ワイ河畔の詩を讀んで、端なく思ひ起すは實に此一年間の生活及び佐伯の風光である。彼地に於て自分は教師といふよりも寧ろ生徒であつた、ラーズブルスの

詩想に導かれて自然を學ぶ處の生徒であつた。成程七年は経過した、然し自分の眼底には彼地の山嶽、河流、溪谷、緑野、森林、悉く鮮明に残つて居て、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放つて居る。何故だらう？

『月光をして汝の逍遙を照らさしめ』、自分は夜となく朝となく山となく野となく殆ど一年の歲月を逍遙に暮らした。『山谷の風をして 恣に汝を吹かしめよ』、自分は我が情と我が身とを投出して自然の懷に任した。敢へて佐伯を以て湖畔詩人の湖國と同一とは曰はない、然し湖國の風土を敘して、

此處には雨、心より降り、晴る、時、一段眩ゆき天氣を現し、鳴らざりし泉は鳴り響かざりし瀧は響き、泉も瀧も、水溢るれども少しも濁らず、波も泡も澄み渡り青味を帯べり、

とラーズブルスが言ひしを真とすれば我が佐伯も實に其通りである。

往々雨の丘より丘に移るに當りて、或は近く或は遠く、或は幽く或は明かに、といふも亦た全く同じである。若し夫れ雲霧を説いて、

或は默然遊動して谷より谷に移るもの、往々にして動かざる自然を動かし、變らざ



る景色を變へ、塊然たる物象を化して夢となし、幻となし、靈となし、怪となし、といふに至つては水多く山多き佐伯亦た實にさうである、しかし強て我が佐伯をゾルスの湖國と對照する必要はない。手帳と鉛筆とを携へて散歩に出掛けたスコットをば嘲りしゾルスは、決して寫實的に自然を觀て其詩中に湖國の地誌と山川草木を説いたのではなく、たゞ自然其物の表象變化を觀て其真隨の美感を詠じたのであるから、若し此詩人の詩文を引いて對照すれば、我日本國中數へきれぬ程の同風光を見出すだらう。

たゞ一言する、『自分が眞にゾルスを讀んだは佐伯に居る時で、自分が最も深く自然に動かされたのは佐伯に於てゾルスを讀んだ時である』といふことを。爾來數年の間自分は孤獨、畏懼、苦惱、悲哀のかずくを盡した、自分は決して幸福な人ではなかつた、自分の生活は決して平坦ではなかつた。『嗚呼ツイの流！林間の逍遙子よ、如何に數々我心汝に振り向きたるよ！』その通りであつた、我心は此等の壓力を加へらるゝ毎に數々藩匠河畔の風光を憶つた。

今や如何、今や如何。我此一二年の生活は殆ど佐伯を忘れしめ、而してたまさかに

佐伯を憶へば彼時の生活は我ながら私の如くには思はれなくなつた。

(四)

自分は詩集を其儘にして靜に佐伯のことを憶ひはじめた。流石に忘れ果てゝは居ない、彼時の事此時のこと、自分の繰返した逍遙の時を憶ふにつけて其時自分の眼に彫込まれた風光は鮮かに現はれて來る、畫を見るよりも鮮明に現はれて來る。秋の空澄み渡つて三里隔つる元越山の半腹から眞直に立上る一縷の青烟すら、あり／＼と眼に浮んで來る。其處で自分は當時の日記を出して、彼所此所と拾ひ讀みに讀んでは其時の風景を思浮べて居ると、

『兄さんお宅ですか』と戶外から聲を掛けた者がある。

『お上り』と自分は呼んで猶ほ日記を見て居た。

自分の書齋に入つて來たのは小山といふ青年で、恰度自分が佐伯に居た時分と同輩の畫家である、といふより畫家たらんとて近頃熱心に勉強して居る自分と同郷の者である。彼は常に自分を兄さんと呼んで居る。

『御勉強ですか』



「否、さうぢやアない、今ゾーブルスを読んで佐伯のことを思ひ出したから日記を見て居た處だ」

「如何です散歩にお出になりませんか、今日は寫生しようと思つて道具を持つて來ました」

「成程、床儿が出來たね」

「漸と買ひました、大枚一圓二十五錢を投じたのですがね、未だ一度しか使つて見ません」

と疊んで棒の如くする櫛の床儿を開いて見せた。

「愈々本式になつたナ」と自分は床儿と小山とを見比べて言つた。

「さうです、最早こゝまで行けば後へは退けません」と言放つたが何となく彼の顔色はすぐれなかつた、といふものは其筈だ、彼は故郷なる父母の意に反して其將來を決して居るからである。晝に對する彼の情は燃ゆるやうで、殆ど本氣の沙汰かと彼の友は疑ふほどである。これまで彼は父母の意に従つて高等學校に入る可き準備をして居た時でも、三角に對する冷淡は晝に對する熱心と常も兩極をなして居た。さらには

つて、彼の小學校に在る時すら彼は晝のみを好んで居つたのを自分は知つて居る。此少年に向つて父母は醫師たらんことを希望して居るのである。彼は父母の旨を奉じて進んで來た。然るに幸か不幸か、彼の健康は如何にしても彼の嗜好に反する學術を忍んで學ぶほどの弾力を有して居ない。彼は二年間に赤十字社に三度入院した。醫師に勧められて三度湯治に行つた。そして此間彼の精神の苦痛は身體の病苦と譲らなかつたのは則ち彼自身その不健康なるだけに愈々將來の目的を晝家たるに決せんと悶いたからである。

それで此頃は彼も煩悶の時を脱して決心の境に入り着々其方に向つて進んで來たが未だ故郷の父母には此決心を秘して居るのである。彼がやゝもすると不安の色を顔に示すは此故である。

「ナニ晝の爲めになら倒れて止むだけの覺悟は最早決めて居ますから平氣です」と彼は言ひだして淋しく笑つた。

「君のことだから左うだらう」

「さうですとも、眞實にね兄さん、昨日も日が西に傾いて窓から射しこむと机の上に



長い影を曳いて、それを茫然見て居ると何だか哀れつばい物悲しい心持がして來ました。だが、ふと晝の事を考へて、さうだ今だと直ぐ晝板を引掛けて飛び出しました。晝のためとなら小生は何時でも氣が勇み立ちます」といつて彼は其蒼白い顔に得意の微笑を浮べた。

彼は晝板の袋から二三枚の寫生を取出して見せたが、其進歩は頗る現はれて、最早や素人の域を脱して居るやうである。

『どうです散歩に出ませう、今日は何だか霞が、つて全然春のやうですよ』と小山は自分を促がした。

『さう、最早直ぐ晝だから飯を食つてからにしよう』と自分は小山を止めて、それよりラーズアルスの詩に就いて自分の觀る處を語つた。

『丁度君の年だつた僕がラーズアルスに全心を打ちこんだのは、其熱心の度は決して君の今晝に對する熱心に譲らなかつた。君が晝板を持つて郊外をうろつき廻つて居るやうに、僕は此詩集を懐にし佐伯の山野を歩き散らかしたが、僕は今もその時の事を思ひだすと何だか懐しくつて涙がこぼれるやうな氣がするよ』と自分は可い相手を見

つけたので、先刻から獨りで憶ひ浮べて居た佐伯の自然に就いて、圖まで引いて話した。

同じ自然の崇拜者である、彼は晝に由つて、自分は詩に導かれて、自分の語る處は彼に能く了解る。彼の問ふ處は自分の言はんと言ふ處。

『先づ其な鹽梅でたゞもう夢中であつた。併し君と異ふのは、君は觀ると直ぐ晝さたくなる僕はたゞ感ずるばかりだ。それで君は時とするとき自然の美の餘りに複雑して現はれて居るのに壓倒せられて了ふ、僕には其んなことはない、君は自然を捉へようと試みる、僕は觀て感得るだけを感じる、だいたい僕の方が樂だ。時によると僕も日記中に君の見取圖ぐらゐな處を書きとめたこともあるが、それは眞の粗糲とした者だ』

『そのスケッチが見たう御座いますね』と小山の求めるまゝに十一月三日の記から讀みだした『野を散歩す日暖かにして小春の季節なり。楡紅葉は半ば散りて半ば枝に残りたる、風吹くごとに閃めき飛ぶ。海近き河口に至る。潮退いて洲あらはれ、鳥の群飛び廻る。水門を下す童子あり。灘村に舟を渡さんと舩に腰かけて潮の來るを待つらん若者あり。背低き楹堤の上に樹ちて濱風に吹かれ、紅の葉毎に光を放つ。野末杏



に百舌鳥のあはたしく鳴くが聞ゆ。純白の裏羽を日にかやかし鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹なり。其の昔は小さき島なりしが今は丘となりて、其麓には林を周らし、山鳩の栖處に恰好しきがあり。其片陰に家數二十には足らぬ小村あり、濱風の衝に當りて野を控ゆ』

その次が十一月二十二日の夜、

『月の光、夕の香をこめて僅に照りそめし頃河岸に出づ。村々浦々の人、既に舟と共に散じて晝間の喧しきに似ず最と寂びたり。白馬一匹繫ぎあり、忽ち馬子來り、牽いて石級を降り渡船に乗らんとす。馬懼れて乗らず。二三の人、船と岸とに在つて黙して之を見る。馬漸く船に乗りて船、河の中流に出づれば、灘山の端を離れて沓えくんと照る月の光、鮮かに映りて馬白く人黒く舟危し。何心なく眺めて在りし吾は幾百年の昔を眼前に見る心地して一種の哀情を惹きぬ。船廻りし時我等亦た乗りて渡る。中流より石級の方を望めば理髮所の燈火赤く四圍の闇を隈どり、そが前を少女の群ゆきつ返りつして守唄の節合するが聞ゆ』

その次が十一月二十六日の記、

『午後土河内村を訪ふ。堅田隧道の前を左に小徑をさり坂を越ゆれば一軒の農家、山の麓に在り。一個の男、一個の妻、二個の少女麥の肥料を丸め居たり。少年あり、藁を積み重ねし間より頭を出して四人の者が餘念なく仕事するを餘念なく眺め居たり。波頭を渡りて廣き野に出づ。野は麥蒔に忙がしく女子皆な男子と共に働き居たり。山の麓に見ゆるは土河内村なり、谷迫りて一寰區を爲し殊さらば世と離れて立つかの如く見ゆ、嘗て山の頂より遠く此村を望み炊烟の立ちのぼるを見て此村懐かしく我は感じぬ。村に近づくにつれて農夫等多く野に在るを見たり。静けき村なるかな。小兒の群の嬉戲せるに遇ひぬ。馬高く嘶くを聞きぬ。されど一村寂然たり。我は古き物語の村に入るが如き心地せり。若者一個庭前にて何事かを爲しつゝあるを見る。礫多き路に沿ひたる井戸の傍に少女あり。水涸れし小川の岸に幾株の老梅並び樹てり、柿の實、星の如く此梅樹の際より現はる。紅葉火の如く燃えて一叢の竹林を照らす。益々奥深く分け入れば村窮りて唯だ溪流の水清く樹林の陰より走出づるのみ。歸路夕陽野にみつ』

自分は以上の外尚ほ二三編を讀んだ。そして之を聴く小山よりも之を讀む自分の方



が當時を回想する情に堪へなかつた。

時は忽然として過ぎた、七年は夢の如くに経過した。そして半熟先生此處に茫然として半ば夢から醒めたやうな寝老眼を瞬いて居る。

## (五)

午後二人は家を出た。小山は畫板を肩から腋へ掛け疊床几を片手に、藥櫃へ水を入れて手巾で包んだのを片手に。自分はフーズブルス詩集を懐にして。

大空は春のやうに霞んで居た。普魯西ブリューでは無論なしコバルトでも濃過ぎるし、こんな空色は書き難いと小山は呟きながら行つた。

野に出て見ると、秋は矢張り秋だ。楡林は薄く黄ばみ、農家の周圍に立つ高い樺は半ば落葉して其細い網のやうな枝を空にすかして居る。丘の裾をめぐる萱の穂は白銀の如くひかり、其間から武藏野には餘り多くない楡の野生が其眞紅の葉を點出して居る。

『こんな錯雜した色は困るだらうねエ』と自分は小さな坂を上りながら頭上の林を仰いで言つた。

『さうですね、併し却つて此様な色の方が胡魔化されて描きよいかも知れませぬ』と小山は笑ひながら答へた。

『下手な畫工が描きさうな景色といふ奴に僕は時々出遇ふが、其實、實際の景色はなかく佳いんだけれども』

『だから下手が飛付いて描くのですよ、自分の力も知らないで、たゞ景色の佳いに釣られて行きますから出來上つて見ると、全然で景色の外面を塗抹つたものに成るのです』

『自然こそ可い迷惑だ』と自分は笑つた。高臺に出ると四邊が俄に開けて林の上を隠見に國境の連山が微かに見える。

『山!』と自分は思はず叫んだ。

『何處に、何處に』と小山は慌しく問うた。自分の指す方へ、近眼鏡を向けて眼を眩しさうに眺めて居たが、

『成程山だ如何です此微な色は!』と左も懐しさうに叫んだ。

此時自分の端なく想出したのは佐伯に居る時分、元越山の絶頂から遠く天外を望ん



だ時の光景である。山の上に山が重なり、秋の日の水の如く澄んだ空気に映じて紫色に染まり、其天末に絲を引くが如き連峯の夢よりも淡さを見て自分は一種の哀情を催し此等相重なる山々の谷間に住む生民を懷はざるを得なかつた。

自分は小山に此際の自分の感情を語りながら行くと、一條の流、薄暗い林の奥から音もなく走り出で又た林の奥に没する畔に來た。一個の橋がある。見るかげもなく破れて、殆ど墜ちさうになつて居る。「下手な畫工が描きさうな橋だねエ」と自分は林の蔭から之を望んで言つた。

「私が一つ描いて見ませうか」

「止し給へな、有りふれてるから」

「しかし斯んな物でも描かなければ小生の描く物がありません」

「其處で小山は程可き位置を取つて、床几を置き自分には頓着なく熱心に描き始めた。自分は日當りを避けて檜林の中へと入り、下草を敷いて腰を下し、我が年少畫家の後姿を木立の隙から眺めながら、烟草に火を點けた。

小山は黙つて描く、自分は黙つて烟草をふかす、四圍は寂然として人聲を聞かない。

自分は懷から詩集を取り出して讀みだした。頭の上を風の吹き過ぎる毎に、檜の枯葉の磨れ合ふ音ががさ／＼とするばかり。元來この檜は餘り風流な木でない。其枝は粗、其葉は大、秋が來てもほんのりとは染らないで、青い葉は青、枯葉は枯葉と、亂雑に枝にしがみついて、風吹くとも霜降るとも、容易には落ちない。冬の夜風吹きささぶ頃となつても、がさ／＼と騒々しい音で幽遠の趣を掻き擾して居る。

併し自分は此音が嗜きなので、林の奥に坐して、ちよこなんとして居ると、此音が此處でも彼方でもする、丁度何か、呷くやうである、そして自然の幽寂がひとしほ心に染みわたる！

自分は何時か小山を忘れ、讀む書にも餘り身が入らず、唯だ林の静けさに身をまかせて居ると、何だか三四年前まで、自分の胸に響いた我心の調に再び觸れたやうな心持がする。

「兄さん！」と小山は突然呼んだ、「兄さん、人の一生を四季に喩へるやうですが、春を小生のやうな時として、小春は人の幾歳位に喩へて可いでせう」と何を感じたか彼方へ向いたまゝ言つた。



「秋かね？」

「秋と言はないで、小春ですよ！」

「僕のやうなのが小春だらう！」と自分は何心なく答へて、そして我知らず、未だ曾て経験した事のない哀情が胸を衝いて起つた。

「君が春なら僕は小春サ、小春サ、いまに冬が来るだらうよ！」

「ハ、、、冬が過ぎればまた春になりますからねエ」と小山はさも軽々と答へた。

四圍は再び寂然となつた。小山は口笛を吹きながら描いて居る。自分は思つた、寧ろ此二人が意味ある畫題ではないかと。

遺 言



今度の戦で想出した、多分太沽沖に在る我軍艦内にも同じやうな事が有るだらうと思ふからお話すると、横須賀なる或海軍中佐の語るには、

我艦隊が明治二十七年の天長節を祝したのは、あたかも陸兵の華園口上陸を保護する爲め、ベカ島の蔭に集合して居た時である、其日の事で有つた。自分は士官室で艦長を始め他の士官諸氏と陛下萬歳の祝盃を挙げた後、準士官室に廻り、此處では我艦長が未だ船に乗らない以前から海軍々役に服して居ますといふ自慢話を聞かされて、其からホールへ廻つた。

戦時は艦内の生活萬事が平常よりか寛かにして有るが、此日は特に大目に見て有つたからホールの騒ぎは一通りでない。例の椀大の鐵葉製の盃、と言ふよりか常は汁椀



に使用されて居る奴で、グイ、あふりながら、或者は月琴を取り出して俗歌の曲を唄ひ且つ弾き、或者は四竹で亞米利加マーチの調子に浮かれ、或者は悲壯な聲を張上げてロングサインを歌つて居る、中には呂れつゝの廻らぬ舌で管を巻いて居る者も有る、夫れ、五人十人と其處此處に割據して勝手に大氣焰を吐いて居た。

自分の入つて來たの見て、いきなり一人の水兵が水雷長萬歳と叫ぶと、其處等に居た者一齊に立つて自分を取巻き、夫の大盃を指つけた。自分は其一つ二つを受けながら、支那の水兵は今時分定めて旅順や威海衛で大凹みに凹んで居るだらう、一つ彼奴等の萬歳を祝してやらうではないかと言ふと其は面白いと、チャン萬歳チャン、萬歳など思ひ、に叫ぶ、其意氣は彼等の眼中既に旅順口威海衛なしてある。自分は猶ほ奥の方へと彼等の間を縫つて往くと、船首水雷室の前に一小區劃がある、其處に七八名の水兵が、他の仲間と離れて一團體をなして飲んで居た。

我水兵は如何に酔つて居ても長官に對する敬禮は忘れない。彼等は自分を見るや一同起立して敬禮を行ふ、其態度の嚴肅なるは、未だ十二分に酔つて居ないらしい。中央に構へて居た一人の水兵、これは酒癖の餘り善くないながら仕事は能く行るので士

官の受の宜い奴、それが今面白い事を始めた處ですと言ふ。何だと訊ねると、皆な顔を見合はせて笑ふ、中には眼で餘計な事を饒舌るなど止める者もある。其に關はず其水兵の言ふには、此仲間近頃本國から來た手紙を読み合ふと言ふのです。自分は其奴は聞きものだ是非傍聴したいものだと言つて座を構へた。見れば皆な二通三通づゝの書状を携へて居る。其仕組が面白い、甲の手紙は乙が讀むといふ事になつて居て、其中最も甚だしい者に罰盃を命ずるといふ約束である。『最も甚だしい』といふ意味は無論彼等の情事に關することは言はないでも明白で有る。

さア初めると自分の急ぎ立つるので、そろゝ讀み上げる事になつた。自分が傍で聴くとは思ひがけない事ゆゑ、大に恐縮して居る者もある。其も其筈で、讀む手紙は悉く長崎より横須賀より、又は品川よりなど、初から其等のばかり選んで持合つたのだから、一として彼等の情事に關しない者はない、悉く罰盃を命ずべき品物である。彼是する中、自分の向に居た二等水兵が、内ポケットから手紙の束を引出さうとして、其一通を卓の下に落したが、渠は其を急に拾つてポケットに押込んで残を隣の水兵に渡した。他の者は之に氣が付かなかつたらしい、愈々讀上が濟むと彼酒癖の悪い水兵



がオイ水野、貴様は一つ隠したぞと言つて、サア出せと叫んだ。此奴怪しからんと他の水兵皆起上つて、サア出せ厭なり十杯飲めと迫る。自分は笑ひながら之を見て居た。水野は、これ丈は御免だと眞面目で言ふ、愈々他の者は此奴面白いと迫る、例の酒癖が遂に、本性を現して榮螺子のやうな奴を突きつけながら、罰盃の代のこれだと叫んだ。脅迫である。自分は餘りのことだと制止せんとする時、水野は其様な輕石は恐くないが讀まないと變に思ふだらうから讀む、自分で讀むと、彼は激昂して突立つた。「一筆示し上げろ」大同江よりの御手紙だ、今到着仕り母様大へん御よろこび涙を流してくり返し御覽相成りし。何だ不足言い！と一人の水兵が笑ひだした。水野は關はず、ズンズン讀む、其聲は震へて居た。「就ては御自身で返事書き度さ由被仰い、御枕許へ筆墨の用意致し、ところ永々の御病氣ゆゑ氣のみはあせり玉へ共お手が利き申さず情なき事よと御歎ありせめては代筆せよと被仰い間御言葉通りを一々に書取り申し必ず未練のことあるべからずし。

母が身も最早ながくは有るまじく今日明日を定め難き命にいへば今申すことをば今生の遺言とも心得て深く心にきざみ置かれ度いそなたが父は順逆の道を誤り玉ひて前原が一味に加はりいものから今だに我等さへ肩身の狭き心地致しこの度こそ其方は父にも兄にも更りて大君の御爲め國の爲め勇ましく戦ひ、命に代へて父の罪の償ひ我祖先の名を高めいはんことを返へすも頼上し。せめて士官ならばとの今日の御手紙の文句は未練にいぞ大將とて兵卒とて大君の爲め國の爲めに捧げし命に二は無之いか、心得にては眞の忠義思ひもよらずい兄は其方が上を羨みせめて軍夫に加はりてもと明暮申居いこ、をくみいは一兵士ながらも其方の幸はいかばかりならむ又た申すまでもなけれど上長の命令を堅く守り同列の方々は親しく交はり艱難を互にたすけ合ひ心を一にして大君の御爲め御勵みの程偏に祈上し。以上は母が今際の遺言と心得て必ず女々しき舉動あるべからずし。尙ほ細々のことは嫂かき添へ申すべくし。右認めいて後母様の仰にて佛壇に燈さげいへば私が手に扶られて母様は床の上に坐



り玉たまひ此遺言このめいごん父の靈れいにも告げではと讀み上げ玉たまふ御聲おんこゑ悲しく一句讀みては涙拭なみだぬぐひ一句

讀みてはむせび玉たまふ御有様の痛いたましさ……」

水野みづのが堪こらへし涙なみだこゝに至りて玉たまの如く手紙てがみの上に落ちたのを見て、聴きく方ほうでも  
じつと怵こじへて居たのが、恰あたも電氣でんきに打たれたかのやうに、一齊いつせいに飛立とびたつたが感極かんきつつて  
誰たれも一語ひとことを發し得えない。一種言しゆいふ可べからざる凄すままじさが此一區劃くわくに充みちた。

水野君みづのくん萬歳ばんざい！ と眞先まつきに叫まひんだのが彼の酒癖さけせき水兵みずへいである。渠かれは狂氣きやうきの如ごとく其大盃そのたいはいを  
振廻ふりまはした。此の時自分このときじぶんの口くちを衝ついて出た叫聲きやうせいは、  
天皇陛下てんのうへいか萬歳ばんざい！

初 孫



この度は貞夫に結構なる御品御贈り被下難有存し、お約束の寫眞やうく、昨日出来上りし間二枚さし上げ申し、内一枚は上田の姉に御届け被下度し、御覽の如く益々肥太りて最早祖父様のお手には荷が少々勝ち過ぎるやうに相成りし、されば此頃はたゞお膝の上に這上りてだいをこね居し、この分にては小生が子供の時き、いと同じ昔噺を貞坊が聞きしことも遠かるまじと思はれし、これを思へば悲しいとも嬉しいとも申しやうなき感有之これ必ず悲喜兩方と存し、父上は何を申すも七十歳いかに強壯にましますとも百年の御壽命は望み難く、去年までは父上々と申上げしを貞夫出来し後吾等夫妻が何時となく祖父様とお呼び申すやう相成り以來、父上御自身も急に祖父様らしく成られし初孫あやしホク、喜び玉ふを見ては寧ろ涙に御座し、併し涙



は不吉不吉、御覽いへ我等一家のいかり樂しく暮しゆかを、父上母上及び我等夫妻と貞夫の五人！ 春霞たなびく野邊と雖も我家のどけさには及ぶまじく

こゝに父上の祖父様らしく成られぬに引換へて母上は益々元氣よろしく殊に近頃は「ワツペウさん」といふ仇名まで取られぬ、折り「おしやべり」と衝突なされぬこ

と之れ亦た貞夫よりの事と思へば可笑しく、「おしやべり」と申せば皆様直ぐと小生の事に思召されぬは大違に、妻のことに、彼の言葉少き女が貞夫出来ぬ以來急に口數多く相成り近來は益々烈しく、そして其饒舌の對手が貞夫といふに至は實に滑稽に御座い、先夜も次の間に貞夫を相手に何か解らぬことを申し居間小生左様な事を言ふとも子供には解らぬ少し黙つて居つてお呉れと申し居

「ソラ御覽、坊やが八釜しいことをお言ひだから父様の御用のお邪魔になるとサ」

「坊やがやかましいのでは無いお前が饒舌るのだよ」

「オヤ、今度は母様が叱られましたよ、ね坊や父様が「やかましッ」て畏いことねえ、だから黙つてねえおし」

「困るね、そんな事を言つても坊やに解らないのだからお前さへ黙れば宜んだよ」

「貞坊や、坊やはお話が解らないとサ、解りますッとお言ひ、坊や解りますよッて」

右の始末に「間小生も遂に『おしやべり』の綽名を興へて最早や彼の勝手に任し居いお饒舌は兎も角も子供のために彼の仲のよい姑と嫁がどうして衝突を、と驚かれい

はんかなれど決して御心配には及ばずい、これには奇々妙々の理由あることにて、天保十四年生の母上の方が明治十二年生の妻よりも育兒の上にて寧ろ開化主義たり急進黨なることこそ其原因にいなれ、妻は御存知の田舎者にて當今の女學校に入學せしことなれば、育兒學など申す學問致せしにもあらず、言は、昔風の家で育ちしたの

女が初めて子を持ちしまでゆゑ、無論小兒を育てる上に不行届のこと多きに引換へ、母上は例の何事も後へは退かぬ御氣性なるが上に孫可愛さの餘り平生は左まで信仰し玉はぬ今の醫師及び産婆の注意のからすまで真正直に受け玉うて、それは「寝るから起きるから乳を飲ます時間から何やかと用意周到のほど驚くばかりに、更に驚

くべきは小生が妻の爲めにとて求め來りし育兒に關する書籍などを妻は未だろくく見もせぬ内に、母上は老眼に眼鏡かけながら暇さへあれば片端より讀まれぬて成程成程と感心致されぬことに、右等の事情より自然未熟なる妻の不注意を甚だ氣にし玉



ふといふ次第然るに妻は又た『阿母それは『母の務』の何枚目に書いてありました』などどと雑返しを申しのことより、愈々母上は躍起と成り玉うて『お前はカラ舊弊だから困る』と答へられ、『世は逆様になりかけた』と祖父様大笑ひ致され、無理ならぬ事に御座り。

先日貞夫少々風邪の氣有りし時、母上眼を丸くし

『小兒が六歳までの間に死にます數は實に夥しいものでワツペウ氏の表には平均百人の中十五人三分と記して御座ります』

と講義録の口調をつくりで申され、小生も思はずふきだし、天保生れの女の口からワツペウなどいふ外國人の名前を一種變てこりんな發音にて聞かされ、ことゆゑ其可笑しさ又格別なりしかば、遂に『ワツペウさん』の尊號を母上に奉ること、相成り、祖父様の貞夫をあやし玉ふ時にも

『ワツビョー〜鳩ッぽッぽウ』

と調子を取られ、位、母上も亦た敗て自からワツペウ氏を以て任じ居られ、天保出來の女ワツペウと明治生の舊弊人との育兒的衝突と來ては實に珍無類の滑稽にて、一

家常に笑聲多く、笑ふ門には福來るの諺で行けば、追々と百千萬兩何のその、岩崎三井にも少々融通してやるやう相成るべきかと内々樂みに致居り

併し今は腰辨官吏の身の上、一つのうば車さへ考へものといふ始末なれど、祖父様には貞夫最早重く抱かれ兼へば、乳母車に乗せて其處等を押廻し度きお望に、間近近大奮發を以て一つ新調を致す筈に

一輛のうば車で小兒も喜び老人も亦た小兒の如く喜び玉ふかと思へば、福は既に我家の門内に巢喰ひ居り、此上過分の福はいらぬ事に

今夜は雨降りて真に靜なる晩に、祖父様と貞夫は既に夢もなげに眼り、母上と妻は次の室にて何事か小聲に語り合ひ、折り〜忍やかに笑ふ様、小兒のこの外別に心配もなさうに



岡  
本  
の  
手  
帳



わが願は世のつねの願にあらず。この願の叶ふ時はいつなるべきか、わが命の此世  
 〇  
 にある間、叶ふまじとも覺ゆる。もし然る時はわれ五十、七十、百歳の壽を保ち得ん  
 も、そは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと観することなき  
 にあらねど、人生は眞面目なるものなりといふがわれの信念ぞかし、然るにもし此願  
 叶はずして在らば、わが命はまことに夢よりも空しきものならん。一生を夢と送る、  
 これにも増して哀れのことやあるべき。この願とは何ぞや。げに世の常の願にはあら  
 ず、かゝる願を懐くもの今の世に多くありとしも覺えず、われはこれを悲むものなり  
 世の人は夢の如くに一生を送るなり、われはこれをあはれむ。この願いだかぬ人は影



の如き人ぞかし。これ誇りたる言葉にあらざ、われはかく信じて疑はざるなり。

わがこの願の叶ふと叶はざるとは偏に神のみ心にあることなれど、わがこの願を懐くことはまことに神のめぐみなり、われはかく信じて疑はず、わが幸をよるこふものなり。この願を懐くわれをわれみづから幸なりと信ずるものなり。この願もしも叶はば神のみめぐみ幾千萬人のものにも増して此わはれなるわが上に厚きなり。幾千億の人々は此願を懐くことだにせずして其命を了りたり。

全世界の人、悉くこの願を懐く能はずとも、われは此願を追ふべし。わが斯く言ふはすでに此願の幾分をとげ得たればならんと思はる。少しも見るとなくば、見んことを願はざる人も或る奇しき物の端をだに垣間見んか、かれの願はさらに能く見んことなるべし。このゆゑにわがこの願を叶はんことを切に願ふは、この願の少しく叶ひ居ればなり。げに然り。げに然り。

この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。

わが戀は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨て、走りぬ。このゆゑにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや。今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり、今もなほ

をりく神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび漏れて流れ、わがこの傷を清め醫さんことなり。されどこれわが切なる『この願』に非ず。詩人たらんことなり、あらず、剛強正大の政府を建立して今の吾國を救はんことなり、あらず、基督教を吾國民唯一の宗教となさんことなり、あらず、これらはわが空想のみ、夢想のみ、『この願』には非ず。愛と信と義とを完うせんことなり、あらず、君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆『この願』にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり、わが血はこのために躍るぞかし。山林に自由存す、われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ。言ふ可からざる誇、まなじりの光となる。されど、これ亦、わが切なる『この願』にはあらず。

嗚呼然らば、この願とは何ぞ。

父母いたく老い給へり、此世に在す命も長かるべしとも覺えず、一日も永く壯健に在さんことはわが願にぞある。されどこれともわが切なる『この願』にはあらず。

宇宙は不思議なり、人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科學と哲學と宗教



とは此不思議を滅さんと力む。わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を闡明せんことなり。あらず、あらず、これわが『この願』にはあらざるなり。

然らば何ぞや、わがこの願とは。

美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが『この願』叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カーライル曰く

Awake, poor troubled sleeper:

Shake off thy torpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは。眠より醒めんことなり。夢を振りおとしんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまゝ見出さんことなり。

不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の秘密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。

信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今のこの膜の破れんこと、夢魔を追ひ拂はんこと、を切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而して小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而して千百億人中殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死したる時など。獨り蒼天の星を仰ぎたる時など。時には驚異の念に打たる、事あるは人々の経験する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり。

何故にわれは斯くも切にこの願を懐きつゝ、而も容易に此願を達する能はざるか、



夢中にありと知りつゝ、何故に夢よりさむる能はざるか。

英語に Worldly ても語あり、譯して世間的とでもいふ可きか、人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人稱なる吾、二人稱なる爾、三人稱なる彼、此三者を以て成立せる場所をいふ。人、生れて此場所に生育し、其感情全く此場處の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に獨り吾てふもの、俯仰して立ちつゝあることを感ずる能はざるに至るなり。

蒼天も星宿も、太陽も、山河も悉く此世間を飾る裝飾品とのみ感ぜらるゝに至るなり。

それ世間ありて天地あるに非ず、天地ありて世間あるなり。此吾は先づ天地の兒ならざる可からず。世間に立つの前、先づ天地に立たざる可からず。

何故にわれは斯くも切に『この願』を懐きつゝ、なほ容易に達する能はざるか、曰く吾は世間の兒なれば也。吾が感情は凡て世間的なればなり。

心は熱くこの願を懐くと雖も、感情は絶え間なく世間的に動き、世間的願望を追求

し、『この願』を冷遇すればなり。

怪しきまでに人は此天地の不思議に慣れて無感覺に安んじ居るなり。墳墓の累々たるを見て平然たるなり。限りなき蒼穹を仰ぎ見て平然たるなり。

信仰と言ひ、悟道と言ひ、安心と云ふ。されど要するに心理的遊戯ならざるは稀なり。何となれば彼等は驚異の感に打たれて天地の間に俯仰介立し、求めざるを得ずして神と道と安心とを求めたるに非ざればなり。われは已に此心理的遊戯に倦みたり。

余のこの願若し叶ふことなく、諸君も亦、かゝる願だに有たずとせば、吾等の宗教は遊戯のみ。吾等はたゞ自己の尤もらしき感情を弄するに過ぎざる可し。吾等の所謂信仰なるものは前提をわやまりたる結論よりもはかなきものなるべし。

政治や美文と並稱せらるゝ限りは宗教も遂に睡眠中のせいいたくなり。

『神を信するもの』彼等は自から斯く稱し居れり。然らば何故に彼等は世間的の煩ひ



に苦むと多きや。何を着んと思ひわづらふ勿れと主は教へ玉へども彼等は是等を思ひ煩ふのみに非ず。如何に人に思はれん、如何に世の認めるならんなどを思ひなやみ居るなり。是れ何故ぞや。彼等の神は天地の造りぬしならずして世のものなればなり。彼等は神を稱して天地の造り主と讃ふ。されど彼等は、此天地には極めて冷淡なり。余は今、彼等と言へり、されど此彼等の内には勿論余も加はり居るなり。

人々各追求願望するところあり、善を求め愛を求め義を求め、これ等を稱して理想を仰ぐと稱す。其れより下りては功名富貴、様々なり。此等の願望のために人々焦心苦慮す。されどわが「この願」よりすれば悉く末葉なり幻影を追へるなり、夢を追へるなり。

幻影よ、幻影よ、人は悉く最大なる事實を見る能はずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。

吾等は最早太陽を見ざるなり、たい太陽の幻を見るのみ、月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ。

吾等は最早天地を見ることなし。脳底の印象物を見るのみなり。

吾等は遂に事實を全く離れて、たゞ幻影のみを見るなり。吾等は死を見る能はず、たゞ死體を見るのみ。生を見ることなし、たゞ生體を見るのみ。故に生死の不思議に打たれずして生體の死體となりしを見るのみ。否、生體を見而して死體を見るのみ。

凡て人が事實を見ずして幻影を見るの最も甚しき例は死の場合なり。ルーテルは曾て其友人アレキスの電死を傍に見て、死の事實を見得たり。普通はたゞ幻を見るのみ。吾等の目さめし時と雖も、夢のうちに在る時と五十歩百歩の相違のみ。

明日も来るべく、今日も過ぎなんとし、昨日は逝きたり、日々同じ夢のみ繰りかへしつゝ、過ぎゆく。實に憐れなるは、この天地を夢にてつゝ、むことなり。

如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もがな。利刃を以て肉皮をそぎ取るが如くに痛快に此心眼の被覆を去りたし。其方法もがな。



深夜、月に對して冥想したり。薄暮、若王寺の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに心のをの、きしを感ぜしに過ぎず。忽然としてさめざる也。  
 われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向つて心から發し得んことは難い哉。されど此問を發せんことは吾が願なり。  
 われも此願の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

上加茂の丘に登り、松によち上りて四方を見渡しぬ。されどわが見たる處は遂に幻影の外に出づる能はざりき。美はしき野邊の夕日影、大空をたゞよふ雲のむれ、はてしなき蒼穹、何れか『美』ならざらん。されどわれ遂に幻を見たるのみ。われの夢は少しもさめざる也。

たゞ世の卑しき空想のみに苦められき。  
 星みつ空、是れ又、幻影としてのみ見らる。われは遂に幻影の外に出づる能はざる乎

此世の名利の念に苦しむ。肉の事をのみ思ひわづらふ。これ何故ぞや。神を知らざればなり。否、世に住みてのみ居て、天地に住まざればなり。夢にのみ生き幻のみ描きて、此恐ろしき不思議なる宇宙に此身を見出すこと能はざればなり。

嗚呼吾は思ひ難めるものなる哉。朝な夕な、夕な朝な、たゞ世の事をのみ思ひわづらふ。徒らにもがき、苦しみ、あせり、いらだつなり。

思へ、思へ。伴武雄何處にある。古川駒造何處にある、山口行一何處にある、有光里子何處にある。藤形何處にある。願くば吾心さめよ、嗚呼希くば吾心めさめよ。

爾の今すむ處何處ぞや。これ舊き都に非ざるか。こゝには千年の歴史あり。されど平清盛何處にある。平敦盛何處にある。花の如き平家の公達今何處にある。

陰謀、企圖、叛亂の跡こゝにあり、其人等何處にかゆきし。足利義政何處にある、其銀閣寺は、十銭の見物料を徴して空しく明治の代の見世物となりぬ。豊臣秀吉何處にかある。維新の諸豪傑何處にある。

あゝわれこゝに在り。われ茲に立つ。有りしものなし。今あるものも又た無からん吾何處より來り、吾遂に何處にかゆく。願くば吾心さめよ。希くば吾がにぶりたる



此心めさめよ。此世の夢よ、さめよ。わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非ず、人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。

たゞめさめんことなり。「秘密」に戦慄せんことなり。「不思議」に驚魂悸魄せんことなり。

知れざるものは如何にしても知れずと。こゝに於て賢明なる人々は人生問題や宇宙問題に従事することを以て閑人の閑事業と見做し給へり。

然り、然り、知れざるものは如何にしても知れざる也。これを知らんことをつとむるは實に閑人の事なるべし。されどこれを以て宗教の人を嘲るに足らざる也。宗教とは宇宙人生の不思議を解釋せんがために起りしにはあらず。不思議を不思議と痛感して後起る處の信仰に由つて成るものなり。

有神無神の争論に先だち人は先づめさめざる可からず。爾の宗教的信仰なきは、爾の心の麻痺を證明するなり。

神の人は言ふも畏し、ポローロやルーテルや、皆な「不思議」にめさめて此幽遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心をのき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むこ

とを得ずし起りし結果なり。

多くの科學者は不思議を感じずして「不思議」に弄ばるゝ愚者なり。多くの哲學者は不思議を感じずして「不思議」を退治せんと欲する夢想家のみ。



わ

か

れ



わが青年の名を田宮峰二郎と呼び、渠が住む茅屋は丘の半腹にたちて美しき庭これ  
 を圍み細き流の北の方より走り来て庭を貫きたる。流の岸には紅楓の類を植ゑ其外の  
 庭樹には松、櫻、梅など多かり、栗樹などの雑るは土地柄なるべし、——區何町の豪商  
 が別荘なりといへど家も古び庭も稍々荒れて修繕はんとせず、主人らしき人の車を  
 の門に駐まりしを見たる人稀なり、賣物なるべしとの噂一時は近所の人の間に高かり  
 しも何時か此噂も消えて跡なく、たゞ一年半以前よりこの年若き田宮の來り住みつ。  
 年は二十を越ゆる漸く三四、背高く肉瘦せたり、顔だち凛々しく人柄も順良に見ゆ  
 れど何時も物案じ顔に道ゆくを、出遇ふ此地の人々は病める人ぞと判じたり。されば  
 又た別荘に獨り住むも其故ぞと深くは怪まざりき。終日家にのみ閉籠ることは稀にて



朝に一度又は午後一度、時には夜に入りても四邊の野路を當もなげに歩み、林の中に分け入りなどするが此人の慣なれば人々は運動のためぞと、然るべきことのやうに噂せり。

されど此青年と親しく言葉かはす人なきにあらす。別荘と畑一つ隔りて牛乳屋あり、椶の木に取圍まれし二棟は右なるに牛七匹住み、左なるは人五人住みつ、夫婦に子供二人、一人の雇男は配達人なり。別荘へは長男の童が朝夕二度の牛乳を運べば、青年何時しか此童と親しみ、其後は乳屋の主人とも微笑みて物語するやうになりぬ。されど物語の種はさまざま多からず、牛の事、牛乳の事、花客先の噂などに過ぎざりき。牛乳屋の物食ふ口は牛七匹と人五人のみのやうに言ひしは誤謬にて、猶ほ驢馬一頭あり。こは主人が其生國千葉よりともなひしといふ、此家には理由ある一物なるが、主人青年に語りし處によれば千葉なる某といふ豪農の許に主人使はれし時、何かの手柄にて特に與へられしもの、由なり。さまざま美しといふにあらねど童には手ごろの生物ゆゑ長の兒が寵愛なほざりならず、たゞ彼青年にのみは其背を借すことあり。青年は童の言ふがまに、此驢馬に跨れど常に苦笑せり。青年には童が此兔馬を愛づるにも増し

て愛で慈しむ遅しき犬あればにや。

庭を貫く流は門の前を通ずる路を横ざりて直に林に入り、林を出れば土地俄に凹みて一軒の茅屋其の屋根のみを現し水車めぐれり、この邊には水車場多し、されど此はいと小さな者の一つなり、水車場を離れて孫屋立ち、一抱ばかりの椶七株八株一列に並びて冬は北の風を防ぎ夏は涼しき蔭もて此屋を覆ひ、水車場と此屋との間を家鶏の一群ゆき、若し五月雨降り續く頃など、荷物曳ける駄馬、水車場の軒先に立てば黒き水は蹄の傍を白き糞浮べて流れ、半ば眠れる馬の鬣よりは雨滴重く滴り、其背よりは湯氣立ちのぼり、家鶏は荷車の蔭に隠れて羽翼振ふ様の鬱陶しげなる、彼の青年は孫屋の縁先に腰かけて靜にこれらを眺め其傍に一人の老翁腕拱きて煙管を啣へ折りかたみに何事かを語りあひては微笑む、乃ち此老翁は青年が親しく物言ふ者の一人なり。

水車場を過ぎて間もなく橋あり、長さよりも幅のかた廣く、欄の高さは腰かくるにも足らず、これを渡りて又た林の間を行けば忽ち町の中程に出づ、こは都にて開かるる洋畫展覽會などの出品の中に能く見受くる田舎町の一つなれば茅屋と瓦屋と打雑



りたる理髮所の處に萬屋あり、萬屋の隣に農家あり、農家の前には菴敷きて童と猫と仲能く遊べる、茅屋の軒先には羽蟲の群輪をなして飛ぶが夕日に映りたる、鍛冶の鐵砧の音高く響きて夕闇に閃く火花の見事なる、雨降る日は二十許りの女何事をか姦しく叫びつ笑ひて町の片側より片側へとゆくに傘さず襟頭を縮め駒下駄つまたて、飛ぶ毎に後振り向く様の可笑しき、いづれか此町もかゝる類に洩るべき、たゞ東より西へと爪先上りの勾配ゆるく、中央をば走り流るゝ小川ありて水上は別莊を貫く流と同じく町人は皆な此小川にて様々の物洗ひすゝげど水のやゝ濁れるを厭はず、流には板橋幾つかゝりて、水際には背低き楓を處々に植ゑたる、何人の思ひつきにや、これいさゝか他所と其風情を異にせり。町の西端に寺ありて夕べの鐘はこゝより響けど鐘撞く男は六十を幾つか越えし翁なれば力足らず絶えぬの音は町の一端より一端へと、覺束なく漂ふのみ、程近き青年が別莊へは聞ゆる時あり聞き兼ねる時も多かり。此鐘の最後の一打僅に響きたる頃夕烟巻を籠めて東の林を離れし月影淡く小川の水に碎けそむれば近きわたりの騎馬隊の兵士が踵に届く長剣を左手に提げて早足に巷を上りゆく、續いて駄馬牽く馬子が鼻歌面白く、茶屋の娘に聲かけられても返事せぬが

可笑しく、彼方に赤兒の泣聲きこゆれば此方には童が吹く喇叭の音かしましく、上る兵士は月を背にし自己が影を追うて急ぎ、下る少女は月さやかに顔を照すが面恥ゆく、かの青年が林に次ぎて此町を愛づるも理なきにあらず。昨日の事は忘れ明日の事を思はず、一日くをみだらなる樂、片時の慰に暮らす人の様にも似たりとは青年が此町を評する言葉にぞある。青年別莊に住みてよりいつしか一年と半ばを過ぎて、其歳も秋の末となりぬ。或日渠は朝早く起きいで、常の如く犬を伴ひ家を出でたり。灰色の外套長く膝を被ひ露を避くる長靴は膝に及び、頭にはめりけん帽の縁廣さを戴きぬ、顔の色今日は別けて蒼白く眼は異しく光りて昨夜の眠足らぬが如し。門を出づる時、牛乳屋の童に逢ひぬ。渠は童の手より襪を受取りて立ちながら飲み、半を残して童に渡せば、童これを掌にうつしては犬に與ふ。青年の眼は遠く大空の彼方に向へり。空は雨雲ひくゝ漂ひ、木葉半ば落ち失せし林は狭霧をこめたり。青年は童に別れ、獨り流に沿うて林を出で、水車場の庭に入れば翁一人、物案じ顔に大空を仰ぎ居たり。青年の入り來れるを見て軽く禮なしつ、孫屋の縁先に置かれし烟草盆よりは烟眞直にたちのぼれり。君が今朝の装衣はと翁先づ口を開きて稍驚ける



様なり。青年は言葉なく縁先に腰かけ、やゝありて、明日は今の住家を立退くことに定めぬと青年は翁が問には答へず、微笑みて其顔を守りぬ。そは又た如何にしてと翁は愈々驚ける様に目を瞠りたり。されど又た七日の後には再び來りて徐に告別せんと青年は嘆息つきて深く物を思へる様なり、翁ははたと手を拍ち、然らば愈々遠く西に行き玉ふことゝなりしか。否、西にあらざ、先づ東に行かん、先づ亞米利加に遊ぶべし、それより英國に、其後は兼て久しく望みし佛蘭西、伊太利に。之を聞きて翁の目は急に笑を湛へ、父上も流石に今度は許し玉ひしか、まづ目出度し、何時頃立ち玉ふや。月末なるべしと青年は答へ、されば此地も亦何時歸り來て見んことの定め難く、又再び見ること叶ふまじきや是れ亦計り難ければ、今日は半日此邊を歩みて一年と五月の間、わが慰となり、わが友となり、わが筆を教へ、わが情を養ひし林や流や小鳥にまでも別れを告げばやと斯くは装衣ちぬ、されど翁には一先づ父の家に歸りて萬事の支度を終へし後、又來りて徐に別を述べんと言ひつゝ、青年は身を起して庭に立ち、軽く禮して立去らんとす。翁はたゞ微笑むのみ、何の言葉もなく青年を打まもりつ。青年の出行きし後翁は庭の中を彼方此方と歩み目出度しと繰返して獨言ちしが

ふと足を止め、眼を閉ぢ、やゝありて、されど哀の君よと深き嘆息を洩らしぬ。

青年は水車場を立出で、其儘街の方へと足を轉らしつ、節々空を打仰ぎたり。間もなく巷に出でぬ。

朝猶早ければ街は未だ往來少く、朝餉の烟重く軒より軒へと棚引き、小川の末は狹霧立置めて紗絹の彼方より上り來る荷車の音は淋びたる街に重々しき反響を起せり。

青年は橋の一に停立みて流の裾を見下しぬ。紅に染め出でし楓の葉末に凝る露は朝日を受けねど空の光を映して玉の如し。渠は意にもなく手近の小枝を折り、眞紅の葉一つを摘みて流に落せば、早瀬これを浮べて流れゆくを渠は靜に眺めて次の橋の陰に隠るゝを待つらんごとし。

此時青年の目に入りしは渠が立てる橋に程近き楓の木蔭に蹲りて物洗ひ居たる女の姿なり。水に垂れし枝は女の全身を隠せどなほよく其顔より手先までを透し見らる。横顔なれば定かに見分け難きも十八九の少女なるべし、美しき腕は臂を現はし、心をこめて洗ふは皿の類なり。

少女は青年に氣付かざる様に、只管其洗ふ器を見て何事をも打忘れたらん如し。幾



個かの皿已に洗ひ了りて傍らに重ね、今しも洗ふ大皿は特に心を用ふる様に見ゆるは雪白なるに藍色の縁とりし品なり。青年が落せし楓の葉、流れて少女の手もと近く漂ひゆくを、少女見て暫し流れ去るを打まもりしが急に手を伸して摘み、皿にのせて傍に置きぬ。葉は水に濡ひて愈々紅に、真白の皿に置かれし様は晝めきて見ゆ。此時青年は少女の横顔の何者にか肖たるやうに覺えしも思ひ出ださざりき。たい耳より腮

にかけて肉づきは渠の畫心を惹く殊に深かりしのみ。由なき戲とは思ひつゝも、少女が渠に氣付かぬを興あることに思ひしか、はた真白の皿に紅の木葉拾ひのせし振舞のみやびて見えつるか、青年は又楓の葉を一つ摘みて水に投げたり。木葉は少女の手許に流れゆきぬ、少女は直ちに摘みて又かの大皿にのせたり。而して今洗ふのは最後の品なり。

こたびは青年手に持ちし小枝をそつと水に落せば、小枝は軽く浮びて回轉りつゝ、少女の手許近く漂ひぬ。少女は直にこれを拾ひ上げて、紅の葉毎に水の滴り落つるを見てありしが又かの大皿にのせ、俄に氣付けるものゝ如く振向きたり。青年の目と少女の目と空に合ひし時、少女はさそ其面を赤らめ、暫は躊躇しが急に立ちあがり彼大皿のみを左手に持ちて道にのぼり、小走に駆け入りしは騎馬隊の兵士が常に集りて酒飲む此街唯一の旗亭なり。少女は軒下にて足を停め、今一度青年の方を見たり。

今こそ思ひ出でぬ、今の少女の顔の能く肖たりといふは我治子なるを。げに治子の姉妹なりと言はんも我いかで容易く疑ひ得べき、殊に最初わが方を振向きし時のまなざしは治子のと少しも違はず、かの美しき目と斯までに相肖たる眼を持つ少女の又此世に在らんとは思はざりしに。

されど是れも亦たわが心の迷なるべきか、われ治子を戀ふる心の深さがゆゑなるべきか。斯く思ひつゞけて青年が手は衣兜の中なる或物を握りつめたり、其顔には暫時く血の上るやうなりしが、愚なると言ひし聲は低けれど杖もて橋の欄打ちし音は強く、足下なる犬は驚きて耳を立てたり。庭ち顔は常の色に復りつ、後をも見ずして靜に街をのぼり往きぬ。

犬は渠に先立ちて街を駆のぼり早く彼方に在りて青年を待てり。登りつむれば此處は高臺の見晴し廣く大空澄み渡る日は遠方の山影鮮かに、國境を限る山脈林の上を走りて見えつ隠れつす、冬の朝、霜寒き頃、銀の鎖の末は幽なる空に消えゆく雪の峰な



ど皆な青年が心を夢心地に誘ひ渠が身うち血湧くが常なれど、今日は雲のゆき、早く空と地と一つになりしやうにて森も林も靡にかすみ秋霧重く立單むる野面に立つ案山子の姿もあはれに何處ともなく響く銃の音沈みて聞ゆ。青年は暫し四邊を見渡して停止みつをり、野路を過る人影いつしか霧深き林の奥に消えゆくなど睥視たる、若しなみ、人の人ならば鬱陶しとのみ思はんも、渠は然らず、渠が今の心の様と此朝の景色とは似通ふ節あり、霧立迷うて靡にかすむ森の様は哀れに物悲し、これ戀なり。されど其幻に似て遠き彼方に浮べる様は年若き者の夢想を俛にして希望といふ神の住み玉ふが如く、青年の心これに向つてはた、靜に波打つのみ。

林を貫きて真直に通ふ路あり、車も漸々通ひ得る程なれば左右の梢は梢と交はり、夏は木葉をもる、日影鮮かに落ちて人の肩にゆらぎ、冬は落葉深く積みて風吹く終夜物の囁く音す。一年と五月の間に渠此路を往來せしこと幾度ぞ。此路に入りては人に遇ふこと稀に、をり、野菜の類を積みし荷車ならずば馬上巻烟草を啣へて並足に歩ませたる騎兵に遇ふのみ。今朝も渠は此路を選びてたどりぬ。路の半ばにて時雨しめやかに降り來りて間もなく過ぎ去りし後は左右の林の静けさをひとしほに覺え、渠が踏

みゆく落葉の音のみことしく鳴れり。此真直なる路の急に左に折る、處に立木や疎なる林あり。青年は兼て能く此林の奥深く分け入り、切林などに腰かけて日の光と風の力とに變りゆく林の趣をめで樂しみたりければ、犬も亦此林になづみけん、今日も先に立ちて走り入りぬ。

木葉半ば落ちて大空の透し見らる、林を秋霧立ち單むる朝訪は、如何に心騒がしき人も吾知らず四邊の静けさに耳聳つるなるべし。世の巷に駈けめぐる人は目のみを鋭く働かしめて耳を用ゐざるものなり。衷心騒がしき時如何で外界の物音を聞き得ん。青年の心には深き悲ありて霧の如くか、れり、そは靜にして重き冷霧なり。渠は木葉一つ落ちし音にも耳傾け、林を隔て、遠く響く轍の音、風ありとも覺えぬに私語く枯葉の音にも耳を澄ましぬ。山鳩一羽何處よりともなく突然程近き梢に止りしが急に又飛び去りぬ。渠が耳愈々研えて四邊愈々靜寂なり。渠は己が心の様を眺むるやうの思もて四邊を見廻しぬ。始より渠が戀の春霞棚引く野邊の如かるべしとは期せざりしも又た斯く迄に物淋しく物悲しき有様に成りゆく可しとは青年今更の様に感じたり。渠に戀人あり、松本治子として、渠が二十二の時ゆくりなく相見ても間もなく相思よの人



となりぬ。『十年互に知りて遂に路傍の石に置く露ほどの思なく打過ぐるも人と人との交なり、今日見て今夜語り、其夜の夢には互に行末を契るも人と人との縁なり。』治子が此青年を戀ふるに至りしは青年が治子を思ふよりも早く、相思ふことを互に知りし時は互の命は互の心に取りかはして置かれぬ、これ相見てより一月とは經たざる間の事なり。親々は此戀を許さざりき、其故はと問は、言葉の數々もて許し難き理由を説かんも、たい相戀ふるが故に此戀は許さじと明白に言ふの直截なるに好かず。物堅しといはるゝ人々は實にも同意すべければなり。げに其如くなりき。斯くて治子は都に近きその故郷に送り返され、青年は自から望みて伯父なる人の別荘に獨居し、悲しき苦しき一年を過したり。

青年は治子の事を思絶たんとがきぬ、遂に思ひ絶ち得たりと自から欺きぬ。自から欺けるを渠は何時しか知りたれど、既に一度自から欺きし人は如何にこれを思付くとも甲斐なく、却つてこれを自ら誇らんとするが人の情の怪しき作用の一つなり。そこには必ず一個の言譯あるものなり。此青年はわれに天職ありと自ら約せり。此約束を天の容れ玉ふや否やは問ふ處にわらず。

渠は文學と畫とを併せ學び、これを以て世に立ち、これを以て渠一生の事業となさんものと志しぬ、家は富み、年は若し。此望は渠が不屈の性と天稟の才とを以てしては達し難きものにわらず。渠はこれを自信せり。一年の獨居は愈々此自信を強め、戀の苦みと悲みとは此自信と戦ひ、渠は遂に治子を捨て此天職に自個を捧ぐべしと自ら誓ひき。後の五月は此誓と戀と戦へり。而して渠自ら敗れ、遂に遠く歐洲に走らばやと思ひ定めき。最初父はこれを許さざりしも急に渠の願を入れて一日も早く出立せよと命ずる如くに促しぬ。

昨夜治子より手紙來り、今日午過ぎひそかに訪れて永久の別を告げんと申送り。永久の別れとは何ぞ。渠の心は掻き亂されぬ。昨夜は殆んど眠らざりき。行末の渠が大望は霧の彼方に立ちて朧ながら確かに渠の心を惹き、戀は霧の如く大望を包みて靜に渠の眼前に立塞がり、渠は迷ひつ、怒りつ、悲哀と激昂とにて一夜を明せり。明けがた近く暫時まどろみしが目さめし時は渠の顔眞蒼なりき。憂も怒も心の戦も止みて暴風一過、渠が胸には一片の愁雲凝つて動かず。床に在りて何處ともなく凝視めし眼よりは冷やかなる涙、雨の頬をつたひて落ちぬ。『あゝ戀しき治子よ』と叫びて跳起き



たり。水車場の翁は略々渠が上を知れるなり。

此時又もや時雨疎に降來りぬ。其輕き一滴二滴に打たれて梢より落つる木葉の風なきに飄る様を青年は心有りげに眺めたり。時雨の通りこせし後は林の中暫時明くなりしが間もなく又元の夕闇はの暗き有様となり、遠方にて銃の音かすかに聞えぬ。青年は身を起して暫時林の中を辿りしが、直ちに路にはいせず、路に近けれど人目に隠るゝ流の傍にいでたり。こは渠が家の庭を流れて彼街を貫くものとは異り、遠き大川より引きし水道の類ゆゑ、幅は三尺に足らぬど深ければ水層多く、林を貫く邊は一直線に走りて薄暗き彼方より現はれ又た薄暗き林の木蔭に隠れ去るなり。村の者が野菜洗ふためにとて此流の幅を殊更に廣く掘り、小さき入江をなせる、何時も渠が好みて訪ひ來る處にいで落葉を敷きつ、茅、野薔薇、小笹の類入り亂れし藪叢を背にして蹲り前には流の音もなく走るを眺めたり。

熱沙限りなきサハラを旅する隊商も時々甘き泉涌き緑の木蔭涼しきオアシスに相遇ひて堪へ難き渴と死ぬばかりなる疲勞を癒する由あれど、人生れ落ちての旅路には唯一度、戀てふ眞清水を掬み得て暫時は永久の天を夢むと雖も、此夢はさめ易く醒むれば、又其淋しき行程にのぼらざるを得ず、斯くて小暗き墓の門に達するまで、遂に再び第二のオアシスに相遇ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈みうせぬ彼眞清水を懐ふのみ、げに然り、而してわれ今、強て自ら此オアシスに分かれんとす、強て自ら此夢を破らんとす。これ眞にわれの堪へ得べき事なるか。

戀の泉はいつもく涌きて流れ疲れし人をまでど、此泉の湧にて行遇ふ年若き男女の旅人のみは幾度かく代りゆき、且つ若者に伴ひし乙女初は樂しげに此泉をくめど忽ち其手を差し入れてこれを濁し、若者をこゝより追ひやりつ、自己も亦た喘ぎく其跡を逐うて苦しき熱き淋しき旅路にのぼる。わが友の上にも此事あり、わが讀みし文の中にも此事多し。されど治子は一度われを此泉の湧に導きしより二年に近き月日を経て今猶ほわれを思ひわれを戀うて止まず、昨夜の手紙を讀むもの誰か此清き乙女を憐まざらん。而してわれ今、強て自ら此乙女を捨て、遠く走らんとす。此乙女を沙漠の眞中にのこしゆかんとす。これ誠にわれの忍び得ることなるか。

われ近頃、猛き獅子と巨蟒と、沙漠の眞中にて苦闘する様を描ける洋畫を見たり。願して沙漠の悲劇といふと雖も、これを即ち此世の眞相なるべきか。げに此吾なき世



こそ治子の眼には斯くも映るなるべし。而して吾は如何、吾は如何。  
 青年は戀を想ひ、人の世を想ひ、治子を想ひ、沙漠を想ひ、オーシスを想ひ、想は  
 想を聯ねて環り、深き哀より深き悲へと沈み入りぬ。風の音は人の思を遠きに導き水  
 の流は人の悲哀を深きに誘ふ。渠が前なる流は音もせで淀なく走るを、初は渠心なく  
 眺めてありしが、見よ、水上より流れ来る木葉を、渠はひたすら眺め入りぬ。紅の  
 葉、黄色の葉、大小さまざまの木葉は忽ち木蔭より走りいで、又た木蔭にかくれ走り  
 つ。忽ち浮び忽ち沈み、回轉りつ、躊躇ひつす。渠は一つを見送りつ又一つを迎へ小  
 なるを見失ひては大なるを俟てり。渠が心の劇しき戦ひは昨夜にて終り、今は荒寥た  
 る戦後の野にも等しく、悲風慘雨ならび至り、力なく光なく望なし。身も魂も疲れに  
 疲れて、何時か夢現の境に入りぬ。  
 林あり。流あり。梢よりは音せぬ程の風に誘はれて木葉落ち、流はこれを浮べて走  
 る。青年あり、外套の襟に頸を埋め身を縮めて眠れる、其顔は蒼白し。四邊の林も暫  
 時は此青年に安き眼を貸さばやと、枝頭そよがず、寂として音なし。流には紅黄大小數  
 數の木葉、乍ら來り乍ら去り、緩かに回轉りて急に沈むあり、舟の如く浮びて靜に流

る、あり。この時東の空、雲すこしく綻びて梢の間より薄き日の光、青年の顔に落ち  
 ぬ、青年は夢に舟を浮べて清き流を下りつ、あり、時は正に春の半となり、左右の岸  
 は新緑の光に輝き、仰げば梢と梢との間には大空澄みて蒼く高く、林の奥は日の光届  
 き兼ねたれど、木間へより洩る、光は様々の花を染出し、涼しき風の枝より枝にわ  
 たる毎に青き光と黒き影は幾千萬となき珠玉の亂入りたらん如く、岸に近き櫻よりは  
 幾千の胡蝶一時に梢を放れ、高く飛び、低く舞ふ。流の淀む處は陰暗く、岩を回れば  
 光景瞬間に變じ、河幅急に廣まりぬ。底は一面の白砂に水紋落ちて綾をなし、兩岸は  
 緑野低く春草烟り、森林遠くこれを圍みたり。岸に一人の美はしき少女佇立みて此方  
 を眺むる、其まなざしは治子に肖て更に氣高く、手に持つ小枝をもて青年を招ぐ様は  
 此方に舟を寄せてわれと共に戀の泉を掬み玉はずや、流れ流れて何處までゆかんとし  
 玉ふぞ、流の末は波荒き海なるをといへるが如し。流の末を打見やれば春霞たなびき  
 たり。渠は暫時躊躇ひつ、言ひ難き悲哀胸を衝いて起りぬ。少女は見て、其悲哀を癒  
 す水はこゝにありと、小枝を流に浸し此方に向つて振れば、冷たき沫飛び來りて青年  
 の頬を打ちたり。春の夢破れぬ。



風起りて木葉荒らしく鳴りつ、梢より落つる滴の落葉をうつ音雨の如し、渠は静に身を起し、暫く流を睥視てありしが、心は猶ほ夢路を辿れるが如く、まなざしは遠き物を眺むる様なり。外套の衣兜に差入れて手先に觸る、物あるを渠は堅く握りて眼を閉ぢつ。

此時犬高く吠えしかば、急ぎて路に出で口笛鋭く吹きつ、大股に歩みて、野の方に向ひ、をりく空を仰ぎては眉をひそめぬ。空は雲の脚はやく絶間くには蒼空の高く澄めるが見ゆ。

青年は絶えず衣兜の内なる物を握りしめて、四邊の光景には眼もくれず、野を横ぎり家路へと急ぎぬ。衣兜の内なるは治子よりの昨夜の書状なり。短き坂道に來りし時、下より騎兵二騎、何事かを聲高に語らひつ、登りくるに遇ひたれど渠は殆んどこれにも氣付かぬ様にて路をよけ通しやりぬ。騎兵ゆき過ぎんとして、後なる馬上の、年若き人、言葉に力を入れ『……に候間至急、至急』といふ二字は必ず加へざる可からず』と言ふや、前なる騎兵、『無論、無論……』と答へつ、青年の耳たてし時は二騎の姿既に木立に没れて笑ふ聲のみ高く聞えたり。青年は更に路をいそぎぬ。

——停車場の時計、六時を五分過ぎ、下りの汽車を待つ客七八人、聲立て、語るものなければ寂寥さはひとしほなり。洋燈の覺束なき光、隈々には屈き兼ねつ。大空晴れて星の數もよまる、許りに、風は北よりそよぎで夕暮の寒さに人々は身をちぢめたり。發車には猶ほ十分を待たざるを得ず。

此時切符を賣りはじめしかば、人々皆な立つて箱の前に集まりし時、外より男女二人の客靜に入り來りぬ。これ松本治子と田宮峰二郎なり。青年は切符を買ひて治子に渡し、二人は人々に後れてプラットホームの方にいで、人目を避くる如く、彼方なる暗きあたりを相並びて歩めり。治子はをりく目に手巾をあて、言葉なし。青年は窮みなき空遠く眺め、胸さくる計りの悲哀を壓へて、密めし聲に力を入れ、『必ず手紙を送り玉へ、今こそわが望は君が心なれ』

慷慨に堪へざるもの、如く、『君を力にてわが望は必ず遂げん』熱き涙一滴、青年が頬を連ひしも乙女は知らず。手巾を口に啣えて齒をくひしはりぬ。暫時二人は言葉なく立てり。汽笛高く響きし時、青年は急ぎ乙女の手を堅く握り、言はんとして言ふ能



はず、乙女が僅に「御身を大切に」と聲もされなく、に言ふや「君こそ、君こそ、必ず心たしかに忍び玉へ、手紙を忘れ玉ふな。必ず……」

青年は其夜、十時頃茅屋に歸りぬ。筆を走らして、をりく嘆息つきつ、  
「われ君を思ひ断たんと悶さしは實に愚の至りなりき。われ君を思ふこと愈々深くして吾益々自ら欺かんと企てぬ。思ひ断ち得て而して得る處は何ぞ、吾にも君にも永く醫し難き心の傷なるべし。而して吾が所謂天職なるもの果して全く遂げらる可きや。あゝ思なる。げにわが血は荒れて事業々々と叫ぶ聲のみぞ徒らに高く、其聲の大なるに自から欺かれて吾に限りなき力ありと思ひき」

此時、風一陣、窓に近き栗の梢を魔ありて採みしやうなる音す。青年は筆を止めて耳傾くる様なりしが、

『わが力何處にありや。口渇きし者の叫ぶ聲を聞け、風に揉まる、枯葉の音を聞け。君なくして猶ほ事業と叫ぶわが聲はこれ也。聲かれ血涸れ涙涸れて而して成途ぐる我事業こそ見物なりしに。嗚呼されど今や君はわが力なり。あらず、君を思ふわが深き深き情こそ我將來の眞の力なれ。非ず、われを思ふ君が深き高き清き情こそ我將來の

血なれ。此血は地の底を流る、春の泉なり。草も木も命をこゝに養ひ、花もこれより開き、實を結ぶも其甘き汁は即ち此泉なり。こは詩的形容にあらざ、君よ今吾が現に感ずる處なり。

昨夜までは、わが洋行も事業の名を假りて自ら欺く逃走なりき。彼處は墳墓なりき。今や然らず。今朝より君が來宅まで我近郊の散歩は濁水暫時地を潛りし時の如し。こはわが感情の滲されし時なり。再び噴出せし今は清き甘き泉となりぬ。われは勇みて此行に上るべし。望は遠し、されど光の如く明し。熱血、身うち躍る、これわが健康の徴ならずや。皆な君が賜なり』

青年の眼は輝きて、其頬には血のぼりぬ。

『されば必ず永久の別てふ言葉を口にし玉ふ勿れ。永久の別とは何ぞ。人は餘りに容易く永久の二字を口にす。恐しの二字、嚴かなる二字、人を生かし人を殺す二字。永久の望、永久の死、人は此兩極に呼吸す。永久の死なき者に永久の別ありや。されど死といふ一字は人容易に近づきて深く感ずるを得ずと雖も、別の一字は人々の日々親しく感ずるが故に、若し人、此一字に永久の二字を加へて靜に思ひ究めなば其胸さけ



ん。君とても然り。此吾と永久に別れて無究に相見ず、我は北極の氷と化し君は南極の石と成りて、感ぜず思はず、限りなく相見ずと思ひ玉ふとも猶ほ忍び玉ふことを得るや。愛兒を失ひし人は始めて死の淵の深きに驚き悲むと言ひ傳ふ、わが知れる宗教家も然かいへり。こは誤感のみ。渠が感ずるは死にあらざ、別なり。其哀は死を悲むにあらざ、別を悲むなり。死は形のみ、別は實なり。たれか愛と永久の別と兩立せしめ得るものぞ。千年萬年億々年の別を悲まず、實に永久の別を悲む。否、われは永久の別を信ぜざる也。愛の命は此信仰のみ、吾等が戀の望は實にこゝにあり。否、君のみにあらざ、われは一目見し彼旗亭の娘の君に能く肖たると、老先きなき水車場の翁と將た牛乳屋の童と問はず、皆なわれに永久の別あるものぞと思ひ忍ぶ能はず。あ、天よ地よ、すべて亡びよ。人と人とは永久に情の世界に相見ん。君よ、必ず永久の別を軽々しく口にも筆にも上し玉ひそ。これ實にわれの耐ふる處にあらざ。君を戀ふることの深きに由りて、われ初めて此深き悲哀を知り、更らに限りなきの望と力とを得たり。運命の力は強し、君と此世に又た相見ること無かるべきやを思ふだに、此心破れんとす、況んや永久の別をや。』

此時、夜更け、遠き林をわたる風の音の幽かに聞ゆるのみ、四邊は寂として聲なし。青年は暫時、夢みるごときまなざし遠く、や、ありて『わが夜も更けぬ。君今は静に休みておはさん。わが心哀し。人々皆な懐かし。わけても君戀し。あ、誰れか永久の別れといふや。否、否、否……』

渠は掌もて顔を被ひ、臂を机に立てつ、眼の前には牛乳屋、水車場、小川流る、巷、林の奥、木葉浮びて流る、真直の水道、美しき優しき治子、翁、童、驢馬に至るまで鮮かに浮び出でしが、忽ち霧に包まれて消え、夢に見し春の流の岸に立つ氣高き少女現はれぬ。そは眞の治子の姿とかはらざりき。



置  
土  
産



餅は圓形さが普通なるを故意と三角に捻りて客の眼を惹かんと企みしやうなれど實は餠をつゝむに手数のかゝらぬ工夫不思議にあたりて、三角餅の名何時しか其近在に廣まり、此茶店の小さいに似合はぬ繁盛、しかし餅ばかりでは上戸が困るとの若連中の勸告もありて、何はなくとも地酒一杯飲めるやうにせしはツイ近頃の事なりと。

戸數五百に足らぬ一筋町の東の外れに石橋あり、それを渡れば商家でもなく百姓家でもない藁葺屋根の左右兩側に建並ぶと一町ばかり、其處に入幡宮ありて、其島居の前からが片側町、三角餅の茶店は此外れにあるなり、前は青田、青田が盡きて鹽濱、堤高くして海面こそ見えね、間近き沖には大島小島の趣も備はりて、先づ眺望には乏しからぬ好地位を占むるが此店繁盛の一理由なるべし。それに町の出入口なれば村



の者にも町の者にも、旅の者にも一休息腰を下すに下しよく、ちよつと一ぶくが一杯となり章魚の足を肴に一本倒せば其儘横になりたく、置座の半分遠慮しながら窮屈さうに寝ころんで前後正體なき、有りうちの事ぞかし。

永年の繁盛ゆゑ、甲斐なき茶店ながらも利得は積んで山林田畑の幾町歩は内々出来て居さうに思はるれど、此處の主人に一の癖あり、兎角鹽漬に手を出したがり餅で儲けた金を鹽の方で失すといふ始末、俳諧の一つもやる風流氣はありながら店に坐つて居て鹽焼く烟の見ゆるだけに直ぐ儲の方に思付くとはよくの事と親類縁者も今では意見する者なく、店は女房任せ、これを助けて働く者はお絹お常として一人は主人の姪、一人は女房の姪、お絹は瘦形の年上、お常は丸く肥りて色白く、都ならば看板娘の役なれど此二人は衣装にも振りに頼着なく、糯米を磨ぐ事から小豆を煮ること餅を春くことまで男のやうに働き、其で苦情一つ言はず厭な顔一つせず客には餘計なお世辭の空笑ひ出来ぬ代り愛想よく茶も汲んで出す、何を樂で斯くも働くことかと問はれさうで問ふ人もなく、感心な女と褒められさうで別に評判にも上らず、『何時も御精が出ます』位の定文句の挨拶をかけられ『どう致しまして』と軽く應へて直ぐ鼻唄に

移る昨日も今日も此の如く、斯くて春去り秋逝くとは流石に長閑なる田舎なりけり。

茶店のことのゆゑ夜に入れば商賣なく、冬ならば宵から戸を閉めて了ふなれど夏はさうも出来ず、置座を店の向側なる田の傍まで出しての夕涼、お絹お常もこの時ばかりは全くの用なし主人の姪らしく、八時過には何も片づけて了ひ九時前には湯を済まして白地の浴衣に着更へ團扇を持つて置座に出た所は矢張どことなく艶かしく年頃の娘なり。

他處から毎晩の様に此置座に集り来る者三三人はあり、其一人は八幡宮神主の倅一人は吉次として油の小賣を小まめに稼ぎ親もなく女房もない氣樂者其他にもちよい／＼顔を出す者あれど先づ此二人を常連と見て可なるべし。二十七年の夏も半を過ぎて盆の十七日踊の晩、お絹と吉次とが何かこそ親しげに話して田圃の方へ隠れたを見たと、さも怪しさに噂せし者ありたれど恐らくそれは誤解ならん。成程二人は内密話しながら露繁き田道を辿りしやも知れぬど吉次が此頃の胸はそれどころに非ず、軍夫となりて彼地に渡り一稼大きく儲けて歸り、同じ油を賣るならば資本を下して一構の店を出したき心願、少し偏屈な男ゆゑ斯る場合に相談相手とする程の友達もなく打



まけて置座會議に上して見るほどの氣輕の天稟にもあらず、いろ／＼獨で考へた末が日頃何かに付けて親切に言うて呉れるお絹お常にだけ明して見ようと先づお絹から初める積にて斯くは舉動ひしやでなり、うたてや吉次は身の上話を少しばかり愚痴のやうに語りしのみにて遂に其夜は軍夫の一件を打明け得ずして止みぬ。何のことぞとお絹も少しは怪しく思ひたれど、さりとて別に氣にもとめざりしやうなり。

其次の夜も次の夜も吉次の姿見え、三日目の夜の十時過ぎて、平時もならば九時前には吉次の出て来る筈なるを、如何した事やら昨日も今日も油さへ賣りにあるかぬは、ことによると風邪でも引いたか、明日は一つ様子をみに行つてやらうと噂をすれば影もあり／＼と白晝のやうな月の光を浴びて其處に現はれ、

『皆さん今晚は』と平時になき眞面目なる挨拶、黙つて來て黙つて腰をかけ欠伸の一つもするが此男の柄なるを、さりとて變なと氣づきし者もあり氣付かない者もあり、其内にもお絹は頗る平氣にて、

『吉さん如何かしたの』

『少し風邪を引いて二日ばかり休みました』と自ら欺き人を誤魔化すことの出來ざる

性分の癖に嘘をつけば、人々疑はず、それは／＼然し最早爽然したかねと皆より劬はられて却つて狼狽さ、

『難有う、最早爽然としました』

『それは結構だ。時に吉さん女房を持つ氣はないかね』と、突然に可笑な事を言ひ出されて吉次はあきれ、茶店の主人幸衛門の顔を覗くやうにして見るに戲談とも思はれぬ處あり。

『へい女房ね』

『女房をサ、何もそんなに感心する事はなからう、今度のやうな一寸とした風邪でも獨身者ならこそ商賣も出來ないが女房が居れば世話もして貰へる店で商賣も出來るといふものだ、左うぢやアないか』と、尤もなる事を言はれて、二十八歳の若者、これが普通ならば別に赤い顔もせず何分宜しくと眞面目で頼まぬまでも笑顔で應ける位は有りさうな處なれど吉次は浮かぬ顔で他所を向き、

『如何して養ひませう今貰つて』

『アハ、、、麥飯を食はして共稼をすれば可からう、何も御馳走をして天神様のお



馬ぢやアあるまいし大事に飼つて置くこともならぬ  
『吉さんは必定おかみさんを大事にするよ』と、女は女だけの鑑定をしてお常正直なる處を言へばお絹も同意し、

『さうらしいね』と、これもお世辭にあらず。

『イヤこれは驚いた、そんなら早い話がお絹さんお常さん何人でも可い、吉さんの處へ押かけるとしたら如何な者だらう』と、神主の伴の若旦那と言はる、だけに無遠慮なる言草、お絹は何と聞きしか、

『そんなら私が押かけて行かうか、吉さん不可ないかね』

『アハ、、、馬鹿を言つてる、ドラ寐るとしよう、皆さん御ゆつくり』と、幸衛門の叔父さん歳よりも早く禿げし頭を撫でながら内に入りぬ。

『私も歸つて戦争の夢でも見るかな』と罪のない若旦那の起ちかゝるを止めるやうに、  
『戦争は未だ永く續きさうで御座いますかな』と吉次が座興ならぬ口振、軽く受けて續くとも續くとも眞實の戦争はこれからなりと起上り、  
『又明日の新聞が樂だ、これで敗軍だと張合が無いけれど我軍の景氣が可い』

同じ待つにも心持が違ふよ』お寝みと歸つて了へば後は娘二人と吉次のみ、置座俄に廣うなりぬ。夜は更け月冴えぬれど、そよ吹く風さへ無ければムツとして蒸熱さ晩なり吉次は投げる様に身を横にして手荒く團扇を使ひホツと吐く嘆息を紛らせばお絹、  
『吉さん未だ風邪が爽然しないのぢやアないかね』

『風邪を引いたといふのは嘘だよ』

『オヤ嘘なの、そんなら如何したの』

『如何もしないのだよ』

『をかきな人だ人に心配させて』とお絹は笑うて濟ますをお常は、

『イヤ何か吉さんは案じて居なさるやうだ』

『吉さんだつて少しは案事もあらうよ、案事の無いものは馬鹿と馬鹿だといふから』

『未だある若旦那』と小さな聲で言ふお常もその仲間なるべし。

それよりか海に行かうとお絹の高い聲に、店の内にて、最早遅いゆゑ止めよといふは叔父なり。  
『叔父さん未だ起きて居たの、今朝がいつばいだから一寸浴びて來ます浅い處で』



『危険々々遅いから』

『吉さんに一所に行つて貰ひます』

『そんなら可いけれども』

さアと促されて吉次も仕方なく連だつて行けば、お絹は先に立ち往來を外れ田の畔を辿り、堤の腰を廻ると直ぐ海なり。沖はよく和て漣の皺もなく島山の黒き影に圍まれて其寂なるは深山の湖水かとも思はるゝばかり、足許まで月影澄み遠淺の砂白く水底に光れり。磯高く曳上げし舟の中にお絹お常は浴衣を脱ぎすて、心地よげに水を踏みほんに砂粒まで數へらるゝやうなと、海近く育ちて水に慣れたれば何の可恐いこともなく沖の方へずんぐと乳の邊まで出づるを吉次は見えて懐に入れし鼈甲の櫛二枚紙に包んだまゝをそつと袂に入換へて手早く衣服を脱ぎ、さう沖の方へ出ないが可いと云ひく二人の傍まで行けば、

『吉さん御覽よ、そら足の爪まで見えるから』とお常が言ふに吉次、

『最早こゝらで歸らうよ』

『背の達かない處まで出ないと游いだ氣がしないから私はもすこし沖へ出るよ』とお

絹はお常を誘うて二人の身體軽く浮びて見るく十四五間先へ出でぬ。

『佳い心持だ吉さんお來でよ』と呼ぶはお絹なり、吉次は腕を組んで二人の游ぐを見つめたるまゝ何とも答へず。平時ならば却つて二人に止めらるゝほど沖へ出て此處までお來でとからかひ半分面白う游ぐだけの遠慮ない仲なれど、軍夫を思ひたちてより何事も心に染まず、十七日の晩お絹に話しそねて後は吾和らず此女に氣が置かれ相談出來ず、獨で二日三日商賣も止めて考へた末、愈々明日の朝早く廣島へ向けて立つに決定めはしたものの、餅屋の者に全然黙つてゆく譯にゆかず、今宵こそ幸衛門にもお絹お常にも大略話して止めても止らぬ覺悟を見せん、運悪く流弾に中るか病氣にでもなるならば歸らぬ旅の見納めと悲しいことまで考へて、せめてもの置土産にと色々工夫した結果櫛二枚を買ひ求め懐にして來たのに、幸衛門から女房を貰へと先方は本氣か知らねど自分には戯談よりも話らぬ話を持出されて先づ言ひそね、折角お常から案事のあるらしう言はれたを機會に今ぞと思ふより早く又もくだらぬ方に話を外され、櫛を出す處か、心は愈々重うなり、游ぐ處か、話らないやら情けないやら今游ぐならば手足竦縮みて其まゝ魚の餌ともなりなん。



「吉さんお來でよ」と又もやお絹呼びぬ。  
 『私は先へ歸るよ』と吉次は早々陸へ上る後よりそんなら私達も上る待つて居て呼  
 びかけられ、待つ筈の吉次、敵にでも追はれて逃げるやうな心持になり、衣服を着る  
 さへあはたしく、お絹お常の首のみ水より現れて白銀の波を掻分け陸へと遊ぶをち  
 よつと見やりしのみ、途を更へて堤へ上り左右に繁る萱の間を足早に入幡宮の方へと  
 急ぎぬ。

老松樹ちこめて神々しき社なれば月影の洩る、は拜殿階段の邊のみ、物凄き木下闇  
 を潛りて吉次は階段の下に進み、恭しく額づきて祈る意に誠をこめ、先づ今日が日ま  
 での息災を謝し奉り、これよりは知らぬ國に渡りて軍の巷危きを犯し、露に伏し雨  
 風に打たる、身の上を守り給へと祈念し、さて其次には目出度く歸國するまで幸衛門  
 を初めお絹お常等の身に異變なく來年の夏また彼の置座にて夕涼しく團居する中に我  
 をも加へ給へと祈り終りて暫は頭を得上げざりしが、ふと氣が付きて懐を探り紙包の  
 ま、櫛二枚を賽銭箱の上に置き、他の人が早く來て拾へば其人に與るばかり二人が  
 平時のやうに朝まだき薄暗き中に參詣するならば多分拾うて呉れさうなものと思ふな

き事にまで思をのこして悄々と立去りけり。

お絹とお常は吉次の去つた後をこゝに陸へ上り體をふきながら、  
 『お常さん、これから一寸吉さんの宅を覗いて見ようよ、様子が變だから私は氣にな  
 る』

『明日朝早くにお爲よ、お詣を済まして直ぐ廻つて見ようよ。餘り遅くなると叔父さ  
 んに悪いから』

『さうね』とお絹も強ては勧め兼ね道々二人は肩を摺寄せ小聲に節を合はして歌ひな  
 がら歸りぬ。

若い者の邊に消えて無くなる。此頃は其幾人といふを知らず大概は軍夫と定まり居  
 れば、吉次も其一人ぞと怪しむ者なく三角餅の茶店の噂も七十五日経過ぬ間に吉次の  
 名さへ消えてなくなりぬ。お絹お常のまめくしき勳振、幸衛門の發句と鹽、神主の  
 倅が新聞の取次、別に變りなく夏過ぎ秋逝きて冬も來にけり、身を切るやうな風吹さ  
 て寒降る夜の、まだ宵ながら餅屋では平時よりも早く閉めて、幸衛門は酒一口飲めぬ



身の慰藉なく堅い男ゆゑ火燵へ潛つて寝そべる程の樂もせず火鉢を控へて嚴然と坐り煙草を吹かしながら頻に首を捻るは句を案するなりけり。

『猿も小篋をほしげなりといふのは今夜のやうな晩だな』

『さうね』とお絹が應へしまゝ、誰も對手にせず、叔母もお常も針仕事に餘念なし。家内寂然と、八角時計の時を刻む音ばかり外は物凄き風狂へり。

『時に吉さんは如何して居たらう』と幸衛門が突然の大きな聲に、

『私も今それを思つて居たのよ』とお絹は針の手を止めて叔父の方を見れば叔父も心配らしい真面目な顔つき。

『叔父さん彼地は大變寒い處だといふぢやア有りませんか』とお常は自分の足袋の底を刺しながら言ひぬ。

『なに吉さんは彼身體だもの寒に中てられる様な事もあるまい』と叔母は針の目を通しながら言へり。

『イヤさうも言へない随分互寒いといふ事だから』と叔父のいふに随いてお絹、

『大概にして歸つて來なされば可いに、いくらお金が出來ても身體を悪くすれば何に

もなりやアしない』

『ナニ彼男の事だから一旦稼ぎに出たからには幾干か纏つた金を握るまでは歸るまい堅い珍らしい男だから何卒死なしたくないものだ』

『眞實にね』とお絹は口の中、叔母は大きな聲で、

『大丈夫、それに彼人は大酒を飲むの何のと亂暴は爲ないし』と受合ひ、鬢の亂を、うるさうに搔きあげし其飾は吉次の置土産、あの朝お絹お常の手に入りたるを、お常は神のお授と喜び上等ゆゑ外出行にすると用篋の奥に仕納ひ込み、お絹は叔母に所望されて與へしなり。

二十八年三月の末お絹が親許より二日許暇を貰うて歸り來よとの手紙あり、珍しき事と叔父幸衛門も怪しみたれど兎も角も歸つて見るが可からうと三里離れし在所の自宅へお絹は三角餅を土産に久し振にて歸りゆきぬ。何ぞと思へば嫁に行けとの相談なり。繼母の腹は言ふ迄もなく姉のお絹を外に出して自分の子、妹のお松を後に据ゑたき願、それがある許りにお絹と繼母との間面白からず理窟をつけて叔父幸衛門にお絹は預けられ彼是三年の間お絹の我家に歸りしは正月に一度それも機嫌よくは待遇はれ



ざりしを、何の彼の腹にもない親切を言はれ先方は田が幾町山がこれ程ある、婿はお前も知つて居る筈と説かれてお絹は何と答へしど。其夜七時ごろ町なる某といふ旅人宿の若者三角餅の茶店に來り、今日これ〱の客人見えて幸衛門さんに今から直ぐ御足勞を願ひますとのことなり。幸衛門は多分鹽の方の客筋ならんと早速罷り出でぬ。次の日奥の一室にて幸衛門腕こまねき、茫然と考へて居る處へお絹在所より歸り、只今と店に入ればお常は眞面目な顔で、

「叔父さんが奥で待つて居なさるよ、何か話が有るつて」

お絹にも話あり、いそ〱と中庭から上れば叔父の顔色たゞならず、お絹も更まつて、

「叔父さん只今、自宅からも宜しくと申しました」

「用事は何で有つたね、縁談ぢやアなかつたか」

「さうで御座いました、灘波へ嫁にゆけといふのであります」

「お前は如何した」と問はれてお絹躊躇ひしが、

「叔父さんともよく相談してと生返事をして置きました」

「さうか」と叔父は嘆息なり。

「叔父さんの御用といふのは何」

「用といふのでないがお前驚いては不可んよ、吉さんは彼方で病死したよ」

「まわー」とお絹は蒼くなりて涙も出ず。

「實は私も驚いて了つたのだ、昨夜何屋の若者が來て、これ〱の客人が直ぐ來て呉れるといふから行つて見ると、其人は彼地で吉さんと極く懇意にして居た方で、吉さんが病氣を親切に看病して下さつたさうな。それで吉さんの死ぬる時吉さんから二百圓渡されて此を三角餅の幸衛門に渡し幸衛門の手からお前に半分與つて呉れる、半分は親兄弟の墓を修復する費用にして其世話を頼むとの遺言、私は聞いて返事も碌々出さないで唯だ承知しましたと泣く〱歸つて來ました」

「マア如何したら可からう、可哀さうに」とお絹は泣き伏しぬ。

「それでは遺言通り此百圓はお前に渡すから確に受取つてお呉れ」と叔父の出す手をお絹は押遣つて、

「叔父さん私は確に受取りました吉さんへは私からお禮を言ひます、どうか其で吉さ



湯  
ヶ  
原  
よ  
り

んの後を立り派はに吊とうて下ください、更あらめて私わからし御ご依い頼らいしますから』



内山君足下

何故さう急に飛び出したかとの君の質問は御尤である。僕は不幸にして之を君に白状してしまはなければならぬことに立到つた。然し或はこれが僕の幸であるかも知れない、たゞ僕の今の心は確かに不幸と感じて居るのである、これを幸であつたと知ることが今後のことであらう。しかし將來これを幸であつたと知る時と雖も、たしかに不幸であると感じるに違ひない。僕は知らないで宜い、唯だ感じたくないものだ。

『こゝに一人の少女あり』小説は何時でもこんな風に初まるもので、批評家は戀の小説にも飽き／＼したとの御註文、然し年若いお互の身に取つては、事の實際が矢張りこんな風に初るのだから致し方がない。僕は批評家の御註文に應ずべく神様が僕及び



人類を造つて呉れなかつたことを感謝する。

去十三日の夜、僕は獨り机に倚掛つてぼんやり考へて居た。十時を過ぎ家の者は寢てしまひ、外は雨がしと〜降つて居る。親も兄弟もない僕の身には、こんな晩は頗る感心しないので、おまけに下宿住、所謂半夜燈前十年事、一時和雨到心頭といふ一件だから堪つたものでない、まづ僕は泣きだしさうな顔をして凝然と洋燈の傘を見つめて居たと想像し給へ。

此時フト思ひ出したのはお絹のことである、お絹、お絹、君は未だ此名にはお知己でないだらう。君ばかりでない、僕の朋友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穩かな響を傳へるかの消息を知らないのである。『こゝに一人の少女あり其名を絹といふ』と僕は小説批評家への面當に今一度特筆大書する。

僕は此少女を思ひ出すと共に『戀しい』『見た』『逢ひた』の情がむら〜とこみ上げて來た。君が何と言はうとも實際さうであつたから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又僕が愛する者は唯だ此少女ばかりといふ風な感情が爲て來た。あゝ是れ『浮きたる心』だらうか、何故に自然を愛する心は清く高くして、少女(人間)を戀ふる心

は『浮きたる心』、『さらし心』、『不健全なる心』だらうか、僕は一念こゝに及べば世に倫理學者、健全先生、批評家、なんといふ動物を地球外に放逐したくなる、西印度の猛烈なる火山よ、何故に爾の熱火を此種の動物の頭上には注がざりしぞ!

僕はお絹が梨をむいて、僕が獨りで入つて居る浴室に、そつと持つて來て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿うて散歩したことを思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を思ひ、其笑顔を思ひ、思はず机を打つて、『明日の朝に行く!』と叫んだ。

お絹とは何人ぞ、君驚く勿れ、藝者でも女郎でもない、海老茶式部でも島田の令嬢でもない、美人でもない、醜婦でもない、たゞの女である! 湯ヶ原の温泉宿中西屋の女中である! 今僕の斯う筆を執つて居る家の女中である! 田舎の百姓の娘である! 小田原は大都會と心得て居る田舎娘! この娘を僕が知つたのは昨年の夏、君も御存知の如く病後、赤十字社の醫者に勧められて二ヶ月間此湯ヶ原に滞在して居た時である。

十四日の朝僕は支度も勿々に宿を飛び出した。銀座で半襟、簪、其他娘が喜びさうな品を買ひ整へて汽車に乗つた。僕は今日まで女を喜ばすべく半襟を買はなかつたが若し彼の娘に此等の品を興つたら如何に喜ぶだらうと思ふと、僕もうれしくつて堪ら



なかつた。見榮坊！世には見榮で女に物を與つたり、與らなかつたりする者が澤山ある。僕は心から此貧しい贈物を我愛する田舎娘に呈上する！

夜來の雨はあがつたが、空気が濕つて、空には雲が漂うて居た。夏の初の旅、僕は何よりも是が好きで、今日まで數々此季節に旅行した、然しあゝ何等の幸福ぞ、胸に樂しい、嬉しい空想を懷きながら、今夜は彼の娘に遇はれると思ひながら、今夜は彼の清く澄んだ温泉に入られると思ひながら、此好時節に旅行せんとは。

國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！電車が景氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥ゆかしく、嚴かに、面を壓して近づいて來る！軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂うて居る、鷗が飛ぶ、浪が碎ける、そら雲が日を隠した！薄い影が野の上を、海の上を這ふ、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸の男とは思はなかつた。又決して厭世家たるの權利は無かつた。

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此處に住みたいといふことである。古い城、高い山、天に連らなる大洋、且つ樹木が繁つて居る。洋

畫に依つて身を立てやうといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。

小田原から先は例の人車鐵道。僕は一時も早く湯ヶ原へ着きたいので好きな小田原に半日を送るほどの樂も捨て、電車から下りて晝飯を終るや直ぐ人車に乗つた。人車へ乗ると最早半分湯ヶ原に着いた氣になつた。此人車鐵道の目的が熱海、伊豆山、湯ヶ原の如き温泉地にあるので、これに乗れば最早大丈夫といふ氣になるのは温泉行の人々皆な同感であらう。

人車は徐々として小田原の町を離れた。僕は窓から首を出して見て居る。忽ちラッパを勇ましく吹き立て、車は傾斜を飛ぶやうに滑る。空は名残なく晴れた。海風は横さまに窓を吹きつける。顧みると町の旅館の旗が竿頭に白く動いて居る。

僕は頭を轉じて行手を見た。すると軌道に沿うて三人、田舎者が小田原の城下へ出るといふ旅装、赤く見えるのは娘の、白く見えるのは老母の、からげた腰も岩乗らしめいのは老父さんで、人車の過ぎゆくのを避ける積りで立つて此方に向けて居る。「オヤお絹！』と思ふ間もなく車は飛ぶ、三人は忽ち窓の下に來た。



『お絹さん！』と僕は思はず手を舉げた。お絹はにっこり笑つて、さつと顔を赤めて禮をした。人と車との間は見ると遠ざかつた。

若し同車の人が無かつたら僕は地段駄を踏んだらう、帽子を投げつけたらう。僕と向き合つて、眞面目な顔して居る役人らしい先生が居るではないか、僕は唯だがつかりして手を拱いてしまつた。

言はでも知るお絹は最早中西屋に居ないのである、父母の家に歸り、嫁入の仕度に取りかゝつたのである。昨年の夏も他の女中から小田原のお婿さんなど擲られて居たのを自分は知つて居る、あゝ愈々さうだ！と思ふと僕は嫌になつてしまつた。一口に言へば、海も山もない、沖の大島、彼れが何だらう。大浪小浪の景色、何だ。今の今まで僕をよろこばして居た自然は、忽ちの中に何の面白味もなくなつてしまつた。僕とは他人になつてしまつた。

湯ヶ原の温泉は僕になじみの深い處であるから、たとひお絹が居ないでも僕に取つて興味のない譯はない、然し既にお絹を知つた後の僕には、お絹の居ないことは寧ろ不愉快の場所となつてしまつたのである。不愉快の人車に揺られて此の淋しい溪間に

送り届けられることは、頗る苦痛であつたが、今更引かへす事も出来ず、其日の午後五時頃、此宿に着いた。突然のことであるから宿の主人を驚かした。主人は忠實な人であるから、非常に歓迎して呉れた。湯に入つて居ると女中の一人が来て、

『小山さんお氣の毒ですね』

『何故？』

『お絹さんは最早居ませんよ』と言ひ捨て、ばた／＼と逃げて去つた。哀れなる哉、これが僕の失戀の弔詞である！失戀？失戀が聞いてあきれる。僕は戀して居たのだからけれども、夢に、實に夢にもお絹をどうしようといふ事はなかつた、お絹も亦た、僕を憎からず思つて居たらう、決して其以上のことは思はなかつたに違ひない。

處が其夜、女中どもが僕の部屋に集つて、宿の娘も来た。お絹の話が出て、お絹は愈々小田原に嫁にゆくことに定まつた一條を聞かされた時の僕の心持、僕の運命が定つたやうで、今更何とも言へぬ不快でならなかつた。然らば矢張失戀であらう！僕はお絹を自分の物、自分のみを愛すべき人と、何時の間にか思込んで居たのであらう。土産物は女中や娘に分配してしまつた。彼等は確かによるこんだ、然し僕は嬉しく



も何ともなす。

翌日は雨。朝からしよぼしよぼと降つて陰鬱極まる天氣。溪流の水増してザア／＼と騒々しいこと非常。晝飯に宿の娘が給仕に来て、僕の顔を見て笑ふから、僕も笑はざるを得ない。

「貴所はお絹に逢ひたくつて？」

「可笑しい事を言ひますね、昨年あんなに世話になつた人に會ひたいのは當然だらうと思ふ。」

「逢はして上げませうか？」

「難有いね、何分宜しく。」

「明日きつとお絹さん宅へ來ますよ。」

「來たら宜しく被仰つて下さい」と僕が眞實にしないので娘は黙つて唯だ笑つて居た。お絹は此娘と從姉妹なのである。

午後は降り止んだが晴れさうにもせず雲は地を這ふやうにして飛ぶ、狭い溪は益々狭くなつて、僕は牢獄にでも坐つて居る氣。坐敷に坐つたまゝ爲る事もなく茫然と外

を眺めて居たが、ちらと僕の眼を遮つて直ぐ又隣家の軒先で隠れてしまつた者がある。それがお絹らしい。僕は直ぐ外に出た。

石ばかりごろ／＼した往來の淋しさ。僅に十軒ばかりの温泉宿。其外の百姓家として數へる計り、物を商ふ家も準じて幾軒もない寂寞たる溪間！この溪間が雨雲に閉ざれて見る物、悉く光を失うた時の光景を想像し給へ。僕は溪流に沿うて此淋しい往來を當もなく歩いた。流を下つて行くも二三町、上れば一町、其中にペンキで塗つた橋がある、其間を、如何な心地で僕はぶらついたらう。温泉宿の欄干に倚つて外を眺めて居る人は皆な泣き出しさうな顔付をして居る、軒先で子供を負つて居る娘は病人のやうで背の子供はめそ／＼と泣いて居る。陰鬱！屈託！寂寥！そして僕の眼には何處かに悲惨の影さへも見えるのである。

お絹には出逢はなかつた。當り前である。僕は其翌日降り出しさうな空をも恐れず十國峠へと單身宿を出た。宿の者は總が／＼りで止めたが聞かない、供を連れて行けと勧めても謝絶。山は雲の中、僕は雲に登る積りで遮二無二登つた。

僕は今日まで斯んな凄寥たる光景に出遇つたことはない。足の下から灰色の雲が忽



ち現はれ、忽ち消える。草原をわたる風は物すごく鳴つて耳を掠める、雲の絶間々々から見えるものは山又山、天地間僕一人、鳥も鳴かず僕は暫く絶頂の石に倚つて居た。この時、戀もなければ失戀もない、たゞ悽愴の感に堪へず、我生の孤獨を泣かざるを得なかつた。

歸路に眞闇に繁つた森の中を通る時、僕は斯んな事を思ひながら歩いた、若し僕が足を踏み滑らしてこの溪に落ちる、死んでしまふ、中西屋では僕が歸らぬので大騒ぎを初める、樵夫を僦うて僕を索す、此暗い溪底に僕の死體が横つて居る、東京へ電報を打つ、君か淡路君か飛んで来る、そして僕は焼かれてしまふ。天地間最早小山某といふ晝かきの書生は居なくなる！と僕は思つた時、思はず足を止めた。頭の上の眞黒に繁つた枝から水がぼた／＼落ちる、墓穴のやうな溪底では水の激して流れる音が悽く響く。僕は身の毛のよだつたのを感じた。

死人のやうな顔をして僕の歸つて來たのを見て、宿の者は如何なに驚いたらう。其驚よりも僕の驚いたのは此日お絹が來たが、午後又實家へ歸つたとの事である。其夜から僕は熱が出て今日で三日になるが未だ快然しない。山に登つて風邪を引い

たのであらう。

君よ、君は今の時文評論家でないから、此三日の間、床の中に呻吟して居た時、考へたことを聞いて呉れるだらう。

戀は力である、人の抵抗することの出来ない力である、此力を認識せず、又此力を壓へ得ると思ふ人は、未だ此方に觸れなかつた人である。其證據には曾て戀の爲めに苦み悶えた人も、時經つて、普通の人となる時は、何故に彼時自分が戀の爲めに斯くまで苦悶したかを、自分で疑ふものである。則ち彼は戀の力に觸れて居ないからである。同じ人ですら其通り、況んや曾て戀の力に觸れたことのない人が如何して他人の戀の消息が解らう、その樂が解らう、其苦が解らう？

戀に迷ふを笑ふ人は、怪しげな傳説、學說に迷はぬがよい。戀は人の至情である。此至情をあざける人は、百萬年も千萬年も生きるが可い、御氣の毒ながら地球の皮は忽ち諸君を吸ひ込むべく待つて居る、泡のかたまり先生諸君、僕は諸君が此不可思議なる大宇宙をも統御して居るやうな顔付をして居るのを見ると冷笑したくなる。僕は諸君が今少しく眞面目に、謙遜に、嚴肅に、此人生と此天地の問題を見て貰ひたいの



である。

諸君が戀を笑ふのは、畢竟人を笑ふのである。人は諸君が思つてゐるよりも神秘なる動物である。若し人の心に宿る所の戀をすら笑ふべく信ずべからざる者ならば、人生遂に何の價ぞ、人の心ほど虚偽な者は無いではないか。諸君にして若し、月夜笛を聞いて、諸君の心に少しにても『永遠』の俛が映るならば、戀を信ぜよ。若し、諸君にして中江兆民先生と同人種であつて、十八里雲圍氣を振舞はして満足して居るならば、諸君は何の權威あつて、『春短し何に不滅の命ぞと』云々と歌ふ人の自由に干渉し得るぞ。『若い時は二度はない』と稱してあらゆる肉慾を恣にする青年男女の自由を干渉し得るぞ。

内山君足下、先づ此位にして置かう。さて斯の如くに僕は戀其物に隨喜した。これは失戀の賜かも知れない。明後日は僕は歸京する。

小田原を通る時、僕は如何な感があるだらう。

小 山 生

目 出



某法學士洋行の送別會が芝山内の紅葉館に開かれ、會の散じたのは夜の八時頃でもあらうか。其崩が七八名、京橋區彌左衛門町の同好俱樂部に落つたことがある。小介川文學士が伴うて來た一人の男を除いては皆な此俱樂部の會員で、其の一人はオックスフォード大學の出身、其一人はハーバート大學の出身など、皆それ／＼の肩書を持つて居る年少氣鋭、前途有望といふ連中はかり。卓を圍んでんでに吐き出す氣焰の猛烈なるは言ふまでもないことで、政論あり、人物評あり、經濟策あり、時に神學の議論まで現れて一しきりはシガアの烟の煙々濛々たる中に六七の面影が隱見出沒して、甲走つた肉聲の幾種が一高一低、縦横に入り亂れ、これに伴ふ音樂はドスンと卓を打つ音、ゴト／＼と床を蹴る音、そして折り／＼冬の街を吹き荒す北風の窓ガ



ラスを掠める響である。時々使童が出入して淡白の食品、勁烈の飲料を持運んで居た。ストーブは熾に燃えて居る――

「貴方は何處の御出身ですか」と突然高等商業出身の某、今は或會社に出て重役の覺目出度き一人の男が小介川文學士の隣に坐つて居る新來の客に問ひかけた。勝手な氣焰もやゝ吐き疲れた頃で、蓋し話頭を轉じて少し舌の爛れを癒さうといふ積りらしい。人々も同意と見えて一時に口を閉ぢたけれど、其中の二三人は別に此間に氣を止めず、ソファに身を埋めてダラリと手を兩脇に垂れ、天井を眺めて眼を細くして居る者もあれば、シガーをバク／＼ふかして居る者もある。一人は毒瓦斯を抜くべく起つて窓を少し開けた。餘の人々は新來の客に目を注いだ。

「僕ですか、僕は」と言ひ澁んだ男は年の頃二十七八、面長な顔は淺黒く、鼻下に濃き八字髭あり、人々の洋服なるに引違へて羽織袴といふ衣装、今は都下で最も有力なる某新聞の經濟部主任記者たり、次の總選舉には某黨より推れて議員候補者たるべき人物、兒玉進五とて小介川文學士は既に人々に紹介したのである。

兒玉は先程來、多く口を開かず、微笑して人々の氣焰を聴いて居たが、今突然出身

の學校を問はれたので、一寸口を開き得なかつたのである。

「僕の出た學校をお尋ねになるのですか」と兒玉は語を續うとして、更に斯う問うた。

「さうです。君の出られた學校です。三田ですか、早稲田ですか」と高等商業の紳士は此二者を出でじといふ面持で問うた。

「違ひます」と兒玉は微笑した。

「オ、さうですか。何處です」

「大島學校です」

「大島學校？ 聞いたことのない學校ですな、お國の學校ですか」

「さうです、故郷の小學校です、私立小學です」と言つた時の兒玉の顔は眞面目であつたけれど、人々は笑ひ出した。

「戲談を言つては困ります。だから新聞記者は人が悪い。人が眞面目で聞くのに」と高商紳士は短くなつたシガーをストーブに投げ込んだ。

「僕も眞面目で答へたのです。全く僕は高商紳士の出身です。故意と奇妙な答をして諸君を驚かす積は決して持たないので。これまでも僕は出身の學校を聞かれまして



が、初から答へない時もあり、答へる時は何時も此の答をするのです』  
 『さうすると貴方は小學校以外の教育はお受にならんかつたのですか。と申すと失敬  
 ですが其以外の學校にはお入りならなかつたのですか』とソファに掛けて居たオック  
 スフォード出身の紳士が身を起して聞いた。其口元には何となく嘲笑の色を浮べて居  
 る。

『さうです、僕はオックスフォードにもハーバートにも帝國大學にも早稲田にも三田  
 にも高等商業學校にも居たことは無いのです。たゞ故郷の大島小學校を出たばかりで  
 す。斯う申すと、諸君は妙にお取になるかも知れませんが、僕はこれでも奇かに大島  
 小學校出身といふことを誇つて居るのです。又た心から感謝して居るので御座います。  
 僕は不幸にして外國に留學することも出来ず、大學に入ることも出来ず、ですから僕  
 の教育、所謂教育なるものは不完全なものでせう。

けれども尚ほ僕は僕は大島小學校の出身なることを、諸君の如き立派な肩書を持つて居  
 る、中で公言して少しも恥ぢず、寧ろ誇つて吹聴したくなるのです。

問はれなければ黙つて居ます。問はれても言うて益なき仲間に向つては黙つて居ま

す。けれども諸君の如き教育高き紳士に問はれては實に眞面目に僕は僕は大島小學校の出  
 身といふことを公言するのです。

早稲田を出たものは早稲田を愛し、大學を出たものは大學を愛するのは當然で、諸  
 君も必ず其出身の學校を愛し且つ誇らるゝでせう、其如く僕は故郷の大島小學校を愛  
 し且つ其出身たることを誇るのです』

『さうです、僕も故郷の小學校を愛します』と言つたのはハーバート出身の紳士。

『そして誇りますか。そして其出身たることを感謝しますか』と問ひ返へした兒玉の  
 口調はやゝ激して居た。

『さうです』

『何故ですか』と問うた兒玉の眼は輝いた。

『イヤさう眞面目に問はれては困る。僕は小兒の時を回想して當時の學校を懐しく思  
 ふだけの意味で言つたのです』とハーバートは罪のない微笑を浮べて言譯した。

『解りました。それだけの意味なら解りました。けれども貴方がさういふことを申さ  
 れるのも要之、僕が一の小さな小學校の出身であることを誇るとか、感謝するとか言



ふのは、嬌激の言を弄して自ら欺き又自ら快とする者のやうに取つて居るゝからだらうと思ひます。しかし、僕は決してさういふ輕薄な心を以て言ふのではないのです。若し諸君の中、僕と同じく大島小學校に居られた方が有つたなら、矢張僕と同じやうな情を持たれるだらうと信じます。

大島小學校に居たものが、今東京に三人居ます。これが僕の同窓です。此三人が集まる會が僕等の同窓會です。其一人は三田を卒業して今は郵船會社に出て居ます。其一人は法學士となつて今は東京地方裁判所の判事をして居ます。けれども彼等二人は僕と同じく大島小學校出身なることを今でも僕と同じやうに誇り且つ感謝して居るのです。そして僕等は月に一度同窓會を開いて一夕を最も清く、最も楽しく語り且つ遊ぶのです。

兒玉の言々々々、肺腑より出で、其顔には熱誠の色動いて居るのを見て、人々は流石に耳を傾けて謹聽するやうになつた。

オックスフォード出身の紳士は年長者だけに別けても兒玉の言ふ處に感じた體で、『それほどに言はれますからには、其大島小學校とやらいふ學校には何か特殊の事が

あつて、貴方の心をそれほどまでに動かして居るのだらうと思はれます。それをお話し下さいませんか。ね、諸君、それを聞かして戴かうではないか』  
『さうとも、兒玉さん僕の言つたことはお氣に觸らんやうに願ひます。何卒その大島小學校のことを話して貰ひたいものです』とハーバートは前言のお謝罪にオックスフォードに賛成した。

『諸君がお聴下さるなら申しませぬ、強ては申しませぬ。餘り面白い話ではないですか。眞面目な事實は流行の小説とは少し趣を異にしますから』と兒玉は微笑を洩らし、『小説も面白い御座います。けれ共事實は更に面白い御座います』

『是非お話を願ひたいものです』とハーバートは乘氣になつた。  
『宜しう御座います、それではお話しませう』

僕の十二の時です。僕は父母に従つて暫く他國に出て居ましたが、父が官を辭すると共に、故郷に歸りまして、僕は、大島小學校といふに入りました。

海岸から三四町離れた山の麓に立つて居る此小學校は見た所決して立派なものではありません。殊に僕の入つた頃は粗末な平屋で、教室の數も四五つしか無かつたので



す。それで他國の立派な堂々たる小學校に居て急に其様見すばらしい學校に來た僕は子供心にも決して愉快な心地は爲なかつたのです。

けれども僕の故郷は二萬石の大名の城下で、縣下では殆んど言ふに足らぬ小町、特に海陸共に交通の便を最も缺いて居ますから、純然たる片田舎で、日本全國津々浦々でも行わたつて居る筈の文明の恩澤も僕の故郷には其微光すら認め得なかつたのです。學校といふのは此大島小學校ばかり、其以外にはいろはの字も學ぶ場所はなかつたので御座います。僕も初は不精々々に通つて居ました。

校長の名は大島伸一、其頃僅に二十七八でしたらう。背は左まで高くはないが、骨太の肉附の良、丸額の頭の大きな人で叱が長く切れ、鼻高く口締り、柔和の中に威嚴のある容貌で、生徒は皆な能く馴れ親しんで居ました。僕が此校長の下に大島小學校に居たのは二年半で、月日にすれば言ふに足らず、十二歳より十五歳まで、人の年齢にすれば腕白盛でありましたけれど、僕が眞の教育を受けたのは此時、僕の一生の羅針盤を置かれたのは實に此時です。

僕が大島小學校に上つてから四五日目で御座いました、四十を越えた位の一人の男が

學校の運動場に来て、校長と頻りに何事か話して居ましたが、其周圍に七八名の生徒が立つて居て、顔を上げて二人の物語を聞いて居ました。暫くして其男は丁寧にお時儀を爲て、校長も至極丁寧に禮をして、そして二人は別れました。

僕は子供心にも此様子を見て不審に思つたといふは、其男の衣服から風采から舉動までが、一見百姓です、純然たる水呑百姓といふ體裁です、けれども校長の之に對する様子は郡長様に對する程の丁寧なことなので、既に浮世の虚榮心に心の幾分を染められて居た僕の中には全く怪しく映つたのです。

けれども家に歸つて別に此事を父にも問はず、學校朋輩にも聞きませんでした。

一月経たぬ内に自然と此不審が晴れて來ました。四十男の水呑百姓と思つたのは、學校より十町ばかり隔たつて居る松林の奥に一構の宅地を擁し、米倉の三棟を並べて居る百姓、池上權藏といふ男で、大島小學校の創立者、恩人、保護者であつたのです。それならば何故、池上小學校と名告ずして大島小學校といふ校長と同姓の名稱を付けたか、諸君も必ず不審に思はれるでせう。これには又意味の深い理由が有るので、僕が此小學校に入る僅四年前に此學校は創立されたので其より更に十年前のこと、



正月元日の朝でした、新年の初光は今將に青海原の果より其第一線を投げ、東雲の横雲は黄金色に染まり、沖なる島山の頂は紫風に包まれ、天地見るとして清新の氣に充たされて居る時、濱は寂寞として一人の人影なく、穩かに寄せては返す浪を弄し、又弄されて、千鳥の群は岩より岩へと飛びかうて居ましたが、斯かる際にも絶望の底に沈んだ人の心は益々闇を求めて迷ふものと見え、一人の若者ありて、蒼ざめた顔を襟に埋め、一の岩角に蹲居つて頻りと吐息を洩らして居ました。彼は其覺悟を決めながら、なほ躊躇うて居たのです。

人の足音に驚いて後を振り返ると、一人の老人が近づいて來る處です。老人が傍に來

て、『日が今昇るのを見なさい、何と神々しい景色ではないか』と優しく言葉をかけるや

で、若者は何を思ふ暇もなく、たい茫然と老人の顔を見て居たのです。『見なさい今だ、今が初日出だ』と老人は言ひつゝ、海原遠く眺めて居るので、若者も連れられて沖を眺めました、真紅の底に黄金色を含んだ一團球は今しも半天際を躍出でて、暫したゆたうて居る様です。

『神々しいぢやアないか、人間といふものは何時でも此初日出の光を忘れさへ爲なれば可いのぢや』と老人は感に堪へぬやうに言つて手を合して靜かに禮拜しました。若者も思はず手を合はせました。見るが中に日は波間を離れ、大空も海原も妙なる光に満ち、老人と若者は恍惚として此景色に打たれて居ました。

『私は六十になるが斯な立派な日の出を見たことはない。來年はこれよりも美くしい初日の出を拜みたいものだ。あゝ佳い心持ちや』と老人は言つて更に若者に向ひ『お前さんは何處の者ぢや』と問ひました。

『村の者で御座います』と若者は僅に答へました。老人は其柔和な顔に微笑を浮べて『毎年初日の出を拜みに出るのか』

『さうでは御座いません』

『さうか、それでは今年が初めてだの。昔からも一年の謀は元旦にありといふから、お前さんも、今日の日の出を忘れないで居なさい。如何ぢや大變顔の色が悪いやうぢやが、そんな元氣のない顔色をして居ては世の中を渡れるものではない、一緒に日の出を拜んだも目出度い縁ぢや、これから私の宅へ來るが可い、雜煮でも祝はう』



老人は先に立つて行くので、若者も其儘後に従き、遂に老人の宅に行つたのです。砂山を越え、竹藪の間の薄暗き路を通ると土族屋敷に出る、老人は其屋敷の一つに入りました。

老人の名は大島仁藏、若者の名は池上権藏であるといふことを言へば、諸君は、既に大概の想像はつくだらうと思ひます。

老人は若者の自殺の覺悟を最初から見取つて居たのですけれども最後まで直接にさうとは一言も言ひませんでした。

屠蘇を飲ましながら、言葉静かに言つて聞かした教訓は決して珍らしい説ではなかつたのです。少し理窟を並べる男なら誰でも言ひ得ることなんでした。

朝日が波を躍出るやうな元氣を人は何時も持つて居なければならぬ。

だから人は何時も暗い中から起きて日の出を拜むやうに心掛けなければならぬ。

そして日の入るまで、手あたり次第、何でも御座れ、其日に爲るだけの事を一心不乱に爲なければならぬ。

日は毎日、出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、

其翌日は又新しい日の出を拜むことが出来る。

一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

老人の言ひ聞かした言葉は先づ斯んなものでありました。そして権藏は奮ひ起つて老人の下を去つたのです。

池上権藏は此日から生れ更りました、元より強健な體軀を持つて居て元氣も盛な男ではありましたが、放蕩に放蕩を重ねて親譲の田地は殆ど消えて無くなり、家、屋敷まで人手に渡りかけたので、遂に失望落膽し、今更ら世間へも面目なく、果は思ひ迫つて大いに決心して居たのです。けれども彼は此日から生れ更りました。

一日又一日、彼は稼ぎに稼ぎ、百姓は勿論、炭も焼けば、材木も切り出す、養蠶もやり、地木綿も織らし、凡そ農家の力で出来ることなら、何でも手當次第、そして一生懸命にやりました、五年目には田地も取返し、畑は以前より殖え、山懐の荒地は美事な桑園と變じ、村内でも屈指の富有な百姓と成り終せたのです。しかも彼の勞働辛苦は初と少しも變らないのです。



大島老人の病床に侍して、最後の教訓を彼が求めた時、老人は静かに、

『お前さんは日の出を覚えて居なさるか』

『毎朝拜んで居ります』

『お前さんは日の出の盛な處を見て、元氣よく働いたのは宜しい、これからは、其美しい處を見て、美しい働をも爲るが可からう。美しい事を』

權藏は暫く考へて居たが、

『それでは先づ如何な事を爲せば宜しう御座いませう』と問ひました。老人は目を閉ぢたまゝ、

『それはお前さんが考へなければならん、お前さんの心で、これは美しいことだと思ふこと、日の出を見てあゝ美しいと思ふと同じやうな事ならば、何でも宜しい。お前さんは日の出を拜むだらう』

『へい拜みます』

『それなら拜まれるほどのことをなさい』

『及びもつかん事で御座ります、勿體ないことで御座ります』と權藏は平伏しました。

『イヤさうでない、お前さんは日の出の元氣を忘れなしたか』  
と言はれて權藏は、『解りました、難有う存じます』と言つたがり、感泣して暫くは頭を得上げませんでした。

大島仁藏翁の死後、權藏は一時、守本尊を失つた體で、頗る鬱いで居ましたが、それも少時で、忽ち元の元氣を恢復し、のみならず、以前に増して働き出しました。

鬱いで居たのは考へて居たのです。彼は老人の最後の教訓を暫時も忘れることが出来ないので、拜まれる程の美しい事を爲るには何を爲たら可からうと一心に考へたのです。神々しき朝日に向つて祈念を凝らしたこともあつたのです。ふと、思ひ當つた時には彼は思はず躍り上つて喜んださうです。『自分は大島先生を拜んでも尙ほ足りない程に思ふ、それならば大島先生のやうなことを爲ればよい』

其處で學校を建てる決心が彼の心に湧いたので、諸君は彼の決心の餘り露骨で、單純なことを笑はれるかも知れませんが、しかし元來教育のない一個の百姓です、寧ろ其心ばせの眞率で無邪氣な處を思へば實に美しさを感ずるのです、僕は、

兎も角も此決心が定まるや、彼は更に五年の間眞黒になつて働き、そして、遂に一の



小學校を創立して、これを大島仁藏の二子大島伸一に獻じ、大島小學校と命名して先生の紀念となし一切のことを若先生伸一に任して了つたのです。

以上は大島小學校の由來で御座います。けれども果して池上權藏の志は學校を建てたばかりで、成就しましたらうか。

若し大島伸一先生を得なかつたなら、此小學校も亦た、世間に有りふれた者と大差なく終つたかも知れません。

然し伸一先生は老先生の麗はしき性情を享けて更にこれを新しく磨き上げた人物として此小學校を監督し我々を第二の權藏となつて教導されたのです、權藏の志は最も完全に成就されました。

忘れもしません、僕が病氣で學校を休んで居ると、先生が訪ねて来て、

「貴方は豪い人になるのだから、決して病氣位に負けてはならん病氣を負かしてやらなければ」と言つて僕を勵ましたことがあります。伸一先生は決して此意味を舊式に言つたのではありません。

『爲す有る人となれ』とは先生の訓言でした。人は碌々として死ぬべきでない、力の

限を盡して、英雄豪傑の士となるを本懐とせよとは其倫理でした。

人は人以上の者になることは出来ない、然し人は人の能力の全部を盡すべき義務を持つて居る。此義務を盡せば則ち英雄である、これが先生の英雄經です。

そして老先生が權藏に告げた言葉、あれが其註解です、そして權藏其人を以て先生は實物教育の標本としたのです。

日の出を見るとは、大島小學校の神聖なる警語で、其堂々たる冲天の勢と、其胸くまで氣高い精神と、これが此警語の意味です。

一日又一日と、全力を盡して働く、これが其實行なのです。

伸一先生の柔和にして毅然たる人物は、これ等の教訓を兒童の心に吹き込むに適して居たのです。

そして、先生も亦た、一心不亂に此精神を以て兒童を導き、何時も樂げに見え、何時も其顔は希望に輝いて居ました。

小學校生活の詳しい事は別に申しますまい。去年の夏でした、僕は久しぶりで故郷に歸つて見ましたが、伸一先生は年を取つたばかり、其精神と其生活は少しも變りま



せん、年を取つたと言つた處で四十二三ですもの、人間の働き盛りです。精神意氣に變りのある筈もないのです。

「たゞ老て益々其教育事業を樂み、其單純な質素な生活を樂んで居らるゝのを見ては僕も今更、崇高の念に打たれたのです。」

昔のまゝの練壁は處々崩れ落ちて、瓦も完全なのは見當らぬ位、それに葛蔓が這ひ上つて居ますから、一見廢寺の壁を見るやうです。

其壁を越して、桑樹の老木が繁り、壁の折れ曲つた角には幾百年経つか、鬱として日影を遮つて居る樅樹が盤居つて居ます。

昔風の門を入ると桑園の間を野路のやうにして立關に達する。家は僅に四間。以前の家を壊して其古材木で建てたものらしく家の形を作して居るだけで、風致も何も無いのです。

先生は其一間を書齋として居られました、書籍は學校用の外、新刊物が二三種床の上に置いてあるばかりでした。

縁側には豆が古ぼけた細籠に入れて干してある、其横に怪げな盆栽が二鉢並べてあ

りました。

『東京の仕事は如何です。新聞は毎々難有う、續々面白い議論が出ますなア』と先生は僕の顔を見るや口を開きました。

『イヤ如何も愚論ばかりで恥かしう御座います、然しあれでも私の力一杯なのです』

『それで十分です、力の限り書いて其で愚論なら別に仕方も無いからな。けれども樂は有ります。私はこの頃になつて益々感ずることは、人は如何な場合に居ても常に樂しい心を持つて其仕事をする事が出来れば、即ち其人は眞の幸福な人といひ得ることだ。不精しくにやつた仕事に立派な仕事はない、そして一生懸命に仕事する時ほど樂しいものはないやうだ』

先生の此等の言葉は其實平凡な説ですけれど、僕は先生の生活を見て此等の説を聞くに平凡な言葉に清新な力の含んで居ることを感じました。

伸一先生は給料を月十八圓しか受取りませんが、それで老母と妻子、一家六人の家族を養うて居るのです。家産といふは家屋敷ばかり、これを池上權藏の資産と比べて見ると百分一にも當らないのです。



けれども先生は其家を圍む幾畝かの空地を自ら耕して菜園とし種々の野菜を植ゑて居ます。又五六羽の鶏を飼うて、一家で用ゆるだけの卵を採つて居ます。書齋の前の小庭は奇麗に掃除がして有つて、其處へは鶏も入れないやうにしてあります。

先生の生活は決して英雄豪傑の風では有りません、けれども先生は眞の生活をして居るので、先生は決して村學究らしい窮屈な生活、ケチ／＼した生活はして居ません、けれど先生の自分の虚榮心の犠牲になるやうな生活は爲て居ません。

僕は先生と對座して四方山の物語をして居ながら、熟々思ひました、世に美しき生活があるならば、先生の生活の如きは實にそれであると、先生の言論には英雄の意氣の充ちて居ながら先生の生活は一見平凡極まるものでした。

先生を訪うた翌日でした。使者が手紙を持って來て今から生徒十數名を連れて遠足にゆくが君も仲間に加はらんかといふ誘引です。僕は直ぐ支度して先生の宅に駆けつけました、それが朝の六時、山野を歩き散らして歸つて來たのが夕の六時でした、先生は夏期休業と雖も常に生徒に近づき、生徒の爲めに時間を送つて居らるゝのです。

諸君の中、若し僕の故郷に旅行せられるやうなことが有つたならば、是非一度大島小學校を訪はれたいものです。海岸に近き山、山には松柏茂り、其頂には古城の石垣を残したる、其麓の小高き處に立つて居るのが大島小學校であります。それが僕の出身の學校なのです、四十幾歳の屈強な體軀をした校長大島氏は、四五人の教員を相手に二百餘人の生徒の教鞭を採つて居られます。

『日の出を見よ』といふ警語は今も昔に變りなく、恰も日の出の力と美とが今も昔も變りのないやうに、全校の題目となり、目標となり、唱歌となり居るのを御覽になりませう。

語り終つて兒玉は一呼吸吐くやオックスフォードの紳士は、

「なるほど能く解りました、日の出は力です、美です、そして實は又希望です、僕は貴殿が大島小學校の出身であることを感謝し、誇らるゝことを、當然と思ひます。僕も一度是非お國に參つて大島伸一先生にもお目にかゝりたく御座います。

『そして、僕は池上權藏に會つて見たい』など高等商業の紳士は大真面目で言つた。『權藏は今如何して居ますか』と問うたのはハーバートである。



『さうでした、権藏のことを言ふのを忘れて居ました、益々達者に暮して居ます。大島小學校も今は村の經濟で維持して居ます、が、しかし村の經濟の主腦は池上権藏ですから、學校の保護者は依然として其の昔覺悟まできめた百姓権藏であります。』

権藏の富は今や一郡第一となり、彼の手に依つて色々の公共事業が行はれて居るのです。けれど諸君が若し彼に會つたら恐らく意外に思はるゝだらうと思ひます。

権藏は最早彼是六十です。けれども日の出づる前に起きて日の没するまで働くことは今も昔も變りません。そして大島老人が彼を救うた時、岩の上に立つて、

「來年はこれよりも美しい初日の出を拜みたいものだ」と言つた言葉、其言葉を堅く覺えて居て、其精神を能く味はうて、年と共に希望を新たに、一日又一日と働いて老の至るのを少しも感じない様子です。

老を知らなければ老いず、僕は池上権藏は死ぬるまで老いなければらうと思ひます、死ぬる今はの際にも、彼は更に一段の光明なる生命を望んで居るだらうと思ひます。不死不朽とはこのことでは御座いますまいか。

権藏は其居間の床に大島老先生の肖像をか、げ、其横に日の出の圖が下つて居ます。

これは伸一先生に求めて書いて貰つたのださうです。そして大島小學校の一室には池上権藏の肖像が掛けてあります』

それより一週間ばかり経つて、兒玉進五の宅で彼の所謂同窓會が開かれた。

兒玉は此席で同好俱樂部の一條を話した。他の二人は唯だ微笑したばかり、別に何とも評さなかつた。

會毎に三人は相談して必ず月に一度の贈品を大島小學校に送る、それが必ずしも立派な物ばかりではない、筆墨の類、書籍圖書の類などで、オルガン一臺を寄贈したのが一番金目の物であつた。

『今度は何を送らう』と兒玉は二人に問うた。

『矢張書籍が可からうぢやないか』と判事が答へた。

『本なら僕が考へがある。今度會社で世界航海圖の新しいのが出來たから、あれを買つて送らう。如何だね』と郵船會社員が一案を出した。

『それも至極妙だ。けれども其他何にしよう』



『畫は如何だらう』と判事が一案を出した。

『畫も可いが最早有りふれたものばかりだからなわ』

『實は先日、倫敦の友人から「世界の名畫」と題して、随分巧妙に刷つてあるのを二十枚ばかり贈つて呉れたがね、それは如何だらうかと思ふのだ』

『可からう!』と他の二人は賛成した。

『其所で例の唱歌の一件だがね、僕は色々考へたが今更唱歌にも及ぶまいと思ふのだ。如何だらう。日の出を見る』で澤山ぢやアないか。それをなまじつか今の歌人に頼んで作らした所で、ありふれた初日の歌などは感心しないぜ。若し作るなら學校から出た者が作つたのでなければ、とても「日の出を見る」の一語で我等が感ずるやうな物は出来ないぞ、如何だらう?』と兒玉の説いたのに二人は異議なく賛成し、兒玉は二人の前で大島校長宛にすらくと次の手紙を書いた。

『御依頼の唱歌の件は我等三人とも同意致し兼ね候。東京にも歌人の大家先生は澤山あれど我等のやうに先生の薰陶を受け大島小學校の門に學び候ものならで、能く我等の精神感情を日の出の唱歌に歌ひ出し得るもの有るべきや、甚だ覺束なく存候。我等

の學校も何時かは眞の詩人出づることあらん。その時までは矢張り「日の出を見る」で十分かと存候。日の出の唱歌を歌うて朝寝坊する人物が學校から出るやうになりては何の益にも立つまじく、其邊御賢慮願上候』

三人は連名で此手紙を出した。大島先生から直ぐ返事が来て、

『御主意御尤に候。日の出の唱歌は思ひ止まり候。淺ましい哉。教室に慣れ候に従つて心よりも形を教へたく相成る傾き有之、以後も御注意願上候』



非  
凡  
な  
る  
凡  
人



## (上)

五六人の年若い者が集つて互に友の上を噂し合つたことが有る、其時、一人が――  
 僕の子供の時から友に桂正作といふ男がある、今年二十四で今は横濱の或會社に  
 技手として雇はれ専ら電気事業に従事して居るが、先づ此男ほど類の異つた人物はあ  
 るまいかと思はれる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとして偏物でもなく、奇人でもない。  
 非凡なる凡人といふが最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた處で、  
 秀吉とか、ナポレオンとか其他の天才に感心するのは異ふので、此種の人物は千百



歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産出し得る人物である、又た平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖えればそれだけ社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此故である。

僕等が未だ小學校に通つて居る時分であつた。或日、其日は日曜で僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似を仕て、我こそ秀吉だとか義経だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働いて大あばれに荒れ、遂に喉が渴いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家へ、裏山からドヤ〜と駆下りて、案内も乞はず、いきなり井戸邊に集つて我勝にと水を汲んで飲んだ。

すると二階の窓から正作が顔を出して此方を見て居る。僕はこれを見るや、

『來ないか』と呼んだ。けれども平常にない眞面目くさつた顔つきをして頭を横に振つた。腕白の方でも人並のことを仕てのける桂正作、不思議と出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其儘又た山に駆登つて了つた。

騒ぎ疲ふれて衆人散々に我家へと歸り去り、僕は一人桂の宅に立寄つた。黙つて二

階へ上つて見ると、正作は『テーブル』に向ひ椅子に腰をかけて、一心になつて何か讀んで居る。

僕は先づ此『テーブル』と椅子のことから説明しようと思ふ。『テーブル』といふは粗末な日本机の兩脚の下に繼臺をした品物で、椅子とは足繼の下に箱を置いたゞけのこと。けれども正作は眞面目で此工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心して直ぐこれだけのことを實行したのである。そして其後常に此椅子テーブルで彼は勉強して居たのである。其テーブルの上には教科書其他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。で彼は日曜の好い天氣なるにも關はず、何の本か脇目もふらないで讀んで居るので、僕は其傍に行つて、

『何を讀んで居るのだ』と言ひながら見ると、洋綴の厚い本である。

『西國立志編だ』と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ夢の醒めない人のやうで、心は猶ほ書籍の中にあるらしい。

『面白いかね？』

『ウ、ン、面白』



『日本外史と何方が面白い』と僕が問ふや、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、何時の元氣の可い聲で、

『それやア此の方が面白いよ。日本外史とは物が異ふ。昨夜僕は梅田先生の處から借りて来てから読みはじめたけれど面白うて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ』と言つて嬉しくつて堪らない風であつた。

其後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其本といふは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にバラ／＼になりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴直した。

此時が僕も桂も數へ年の十四歳。桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此書を読んだか知れない、殆ど暗誦するほど熟讀したらしい、そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

げに桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう、桂自身でもさう言つて居る。

『若し僕が西國立志編を讀まなかつたら如何であつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお蔭だ』と。

けれども西國立志編(スマイルスの自助論)を讀んだものは洋の東西を問はず幾百萬人あるか知れないが、桂正作のやうに、『余を作りし者は此書なり』と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと桂は中位の人たるに過ぎない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、彼よりも優れた少年は幾らも居た。又た彼は可なりの腕白者で、僕等と一所に随分荒れたものである。それで學校に於ても郷黨に在つても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに壓ゆべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、敢爲の氣象と言つた方が可からう。則ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣となるのである。現に彼の父は山氣のために失敗し、彼の兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神としたのである。

兎も角、彼の父は尋常の人ではなかつた。やはり昔の武士で、維新の戦争にも出て一かどの功をも立てたのである。體格は骨太の岩乘な作り、其顔は皆長く切れ、鼻



高く一見して堂々たる容貌、氣象も武人氣質で、容易に物に屈しない。であるから若し武人のまゝで押通したならば、少くとも藩閥の力で今日には人にも知られた將軍になつて居たかも知れない。が、彼は維新の戦争から歸ると直ぐ「農」の一字に隠れて了つた。隠れたといふよりか出直したのである。そして「殖産」といふ流行語にかぶれて遂に破産してしまつた。

桂家の屋敷は元來、町に在つたのを、家運の傾くと共に之を小松山の下に運んで建て直したので、其時も僕の父などは斯う言つて居た、あれほどの立派な屋敷を打壊さないうで其まゝ人に譲り、其金で別に建てたら可からうと。けれども、桂正作の父の氣象は此一事でも解つて居る。小松山の麓に移つてこの方は、純粹の百姓になつて正作の父は働いて居るのを僕は屢々見た。

であるから正作が西國立志編を読み初めた頃は、其家政は餘程困難であつたに違ひない。けれども其家庭には何時も多少の山氣が浮動して居たといふ證據には、正作が或日僕に向つて、宅には田中鶴吉の手紙があると得意らしく語つたことがある。其理由は、桂の父が、當時世間で大評判であつた田中鶴吉の小笠原拓殖事業にひどく感

服して、わぎ／＼書面を送つて田中に敬意を表した處、田中が又た直ぐ禮狀を出して其が桂の父に届いたといふ一件、又或日正作が僕に向ひ、今から何ヶ月とかすると蛤を澤山御馳走するといふから、何故だと聞くと、父が蛤の繁殖事業を初め、種を取寄せて濱に下したから遠からず、此附近は蛤が非常に採れるやうになると答へた。先づ此等の事で家庭の様子も想像することが出来るのである。

父の山氣を露骨に受けついで、正作の兄は十六の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになつて了つた。布哇に行つたとも言ひ、南米に行つたとも噂せられたが、實際のことは誰も知らなかつた。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入つて了ひ、暫しく故郷を離れたが正作は家政の都合でさういふわけにゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり給料四圓か五圓かで某町まで二里の道程を朝夕往復することになつた。

間もなく冬期休暇になり、僕は歸省の途に就いて故郷近く車で來ると、小さな坂がある、其麓で車を下り手荷物を車夫に託し、自分はステッキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間さきを歩く少年がある、身に古ぼけたトンビを着て、手に古ぼけた手提カ



パンを持つて、静に坂を登りつゝある、其姿が如何も桂正作に似て居るので、  
 『桂君ぢやアないか』と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作  
 立ち止つて僕を待ち、

『冬期休暇になつたのか』

『どうだ君は未だ銀行に通つてるか』

『ウン、通つてるけれども少しも面白くなら』

『どうしてや?』と僕は驚いて聞いた。

『どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛棒が出来ないだらうと思ふ。第一僕は  
 銀行業からして僕の目的ぢやないのだから』

二人は話しなから歩いた、車夫のみ先へやり。

『何が君の目的だ』

『工業で身を立つる決心だ』と言つて正作は微笑し、『僕は毎日此道を往復しながら色  
 色考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ』  
 ワットやステブソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼

の聖書である。

僕の黙つて頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

『だから僕は來春は東京へ出ようかと思つて居る』

『東京へ?』と驚いて問ひ返した。

『さうさ東京へ。旅費は最早出來たが、彼地へ行つて三月ばかりを食へる丈の金を  
 持つて居なければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで來年の三月までの給料は  
 全部僕が貰ふことにした。だから四月早々は出立るだらうと思ふ』

桂正作の計畫は總て此筆法である。彼は随分少年に有勝な空想を描くけれども、計  
 畫を立て、これを實行する上に就いては少年の時から今日に至るまで、少しも變らず、  
 一定の順序を立て、一步步々と着々實行して遂に目的通りに成就するのである。無論  
 これは西國立志編の感化でも有らう、けれども一つには彼の性情が祖父に似て居るか  
 らだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出來  
 ないが、其一つを言へば眞書太閤記三百卷を寫すに十年計畫を立て、遂に見事寫し終  
 つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが今でも其氣根の大いなるに驚いて居



る。正作は確に此祖父の血を受けたに違ひない。若くは此祖父の感化を受けたやうと思ふ。

途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り愈々僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには今度會ふのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだからと。僕も其積りで正作に離別を告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙を寄越したけれど、何時も無事を知らずばかりで別に着京後の様子を告げない。又た故郷の者も誰も如何して正作が暮して居るか知らない、父母すら知らない、唯だ何人も疑はないことが一つあつた、曰く桂正作は何等かの計畫を立て、其目的に向つて着々歩を進めて居るだらうといふ事實である。

僕は三十年の春上京した。そして宿所が定まるや、早速築地何町何番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此時二人は既に十九歳。

(下)

午後三時頃であつた。僕は築地何町を隅から隅まで探して、漸くのこと桂の住家を探し當てた。容易に分らぬも道埋、某方といふ其某は車屋の主人ならんとは。兎ゆる横町の貧しげな家ばかり並んで居る中に挾つて九尺間口の二階屋、其二階が『活ける西國立志編』君の巢である。

『桂君といふ人が貴方の處に居ますか』

『へいいらつしやいます、あの書生さんでせう』との山の神の挨拶。聲を聞きつけてミシ／＼と二階を下りて來て、『ヤア』と現れたのが、一別以來三年會はなんだ桂正作である。

足も立てられないやうな汚い疊を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六疊敷、煤けた天井低く頭を壓し、疊も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。

桂ほど書籍を大切にすることは少ない。彼は如何なる書物でも決して机の上や、座敷の真中に放擲するやうなことは仕ない。斯う言ふと桂は書籍ばかりを大切にすゝるやうなれど必ずしもさうでない。彼は身の周圍のもの總てを大事にする。



見ると机も可なり立派。書籍箱も左まで黒くない。彼は其の必要品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美點も惡弊も受けて居ない。今の流行語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けたいけに頗るハイカラ的である。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例の如く整然として重ねてある。其他周囲の物總てが皆な其處を得て、キッチンとして居る。

室の下部にして黒く暗鬱なるを憂ふる勿れ、桂正作は其主義と、其性情に依つて、總て此等の黒くして暗鬱たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。

彼は例の如く最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問ふがなにく上京後の彼の生活は、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かした。

彼ほど虚榮心の少ない男は珍らしい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行つて、それで満足し、安心し、そして勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ、進んで行

く。  
一別以來、正作の爲したことを聞くと實に此通りである。僕は聞いて居る中にも益々彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食ふ男ではなかつた。

何がな面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任して遍巡り歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの翁を見て、彼は直ちにこれと物語り、事情を明して弟子入を頼み、それより二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢、五厘、時には二錢を投げて貰つて出鱈目を書き、幾錢かづゝの收入を得た。

或日、彼は客のなき儘に、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、ステブソン、などいふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男兒を連れ衣裝の善い婦人が前に立つた。『ワット』と子供が讀んで、『母上、ワットとは何のこと?』と聞いた。桂は顔を擧げて子供に解り易いやうに此大發明家のことを話して聞かし、『坊様も大きくなつたら斯な



豪い人におなりなさいよ」と言つた。さうすると婦人が「失禮ですけれど」と言ひつゝ、二十錢銀貨を手渡しして立ち去つた。

「僕は其銀貨を費はないで未だ持つて居る」と正作は言つて罪のない微笑をもらした。彼は斯く勞働して居る間、其宿所は木賃宿、夜は神田の夜學校に行つて、専ら數學を學んで居たのである。

日清の間が切迫して来るや、彼は直ぐと新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。斯て其歳も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且つ問ひ且つ聞いて居る中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう！」と桂は突然言つて、札の抽斗から手早く墓口を取出して懐へ入れた。

「何處へ？」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へサ」と言つて正作は立かけたので、

「イヤ飯なら僕は宿屋へ歸つて食ふから心配しなはうが可うよ』



院尊照光日るたし寓寄に年非治明が步獨



『まアそんなことを云はないで一所に食ひ給へな。そして今夜は此處に泊り給へ。未だ話が澤山残つて居る』

僕も其意に従ひ、二人して車屋を出た。路の二三町も歩いたが、桂は其間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなど言つて居た。けれども僕は桂の生活の様から察して、三百里外の故郷に往復することの到底、言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶を爲て置いた。

『此處だ！』と言つて桂は先に立つて、繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して、暫時ためらつて居ると内から、

『オイ君！』と呼んだ。爲かたが無いから入ると、桂は程よき場處に陣取つて笑味を含んで此方を見て居る。見まはすと、桂の外に四五名の労働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を飲むもの、殊の外静肅である。二人差向ひで卓に倚るや、

『僕は三度々此處で飯を食ふのだ』と桂は平氣で言つて、『君は何を食ふか。何でも



出来るよ』

『何でも可い、僕は』

『さうか、それでは』と桂は女中に向つて二三品命じたが、其名は符牒のやうで僕には解らなかつた。暫時くすると、刺身、煮肴、煮、汁などが出て飯を盛つた茶碗に香物。

桂は美味さうに食ひ初めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを無理に食ひ初めて居ると、思はず涙が込上げて來た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は悲運の底にあれど、要するに彼は紳士の子、それが下等社會と一所に一膳めしに舌打ち鳴らすか、と思つて涙含んだのではない。決してさうではない。いや、乍ら箸を取つて二口三口食ふや、卒然、僕は思つた、あ、此飯は此有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある少年が、勞働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をして呉れる好意だ、それを何ぞや不味さうに食ふとは！ 桂は此處で三度の食事をするではないか、これを厭々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうかと、さう思うと僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすが／＼して、桂と共に

美味しく食事をして、繩暖簾を出た。

其夜二人で薄い布團に一所に寝て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや他の友の上のことや、將來の望を語り合つたことは僕今でも思ひ起すと、楽しい懐しい其夜の様が眼の先に浮んで來る。

其後、僕と桂は互に往來して居たが早くも其年の夏期休暇が來た。すると一日、桂が僕の下宿屋に來て、

『僕は故郷に歸つて來ようかと思ふ。實は最早決めて居るのだ』といふ意外な言葉。

『それは可いけれども君……』と僕は直ぐ旅費等のことを心配して口を開くと、『實は金も出來て居るのだ。三十圓ばかり貯蓄して居るから、往復の旅費と土産物とで二十圓有つたら可からうと思ふ。三十圓悉皆費つて了ふと後で困るからね』といふのを聞いて僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると二年前から既に歸省の計畫を立て、其積りで貯金したとのこと。

どうだ諸君！ 斯ういふことは出來易い様で、なか／＼出來ないことだよ。桂は凡人だらう。けれども其爲すことは非凡ではないか。



此處で僕も大に歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を立つた。

翌年、三十一年に目出度學校を卒業し、電氣部の技手として横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。

其後今日まで五年になる。其間彼は何をしたか。たゞ其職分を忠實に勤めただけか。さうでない!

彼は大なる事を爲て居る。彼の弟が二人あつて、二人とも彼の兄、逃亡した兄に似て手に合はない突飛物、一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ、五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くと、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲めに、所々奔走して或は商店に入れ、或は家僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出してしまふ。

然ども正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀まし、そして工手學校に入れて了つた。僅の給料で

自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は卅四年に至つて現れ、五郎は技手と成つて今は東京芝居の某會社に雇はれ、眞面目に勤勞して居るのである。

荒雄も亦た國を飛び出した。今は正作と五郎と二人で此の弟の處置に苦心して居る。今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が『桂さんは未だ會社です』と言ふから、會社の様子も見たく、其足で會社を訪うた。

桂の仕事を爲て居る場處に行つて見ると、僕は電氣の事を詳しく知らないから十分の説明は出来ないが、一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つて居て、正作は一人其鐵柱の周圍を幾度となく廻つて熱心に何事か爲て居る。最早電燈が點いて白晝の如く此一群の人を照らして居る。人々は黙して正作の爲る處を見て居る。器械に狂ひの生じたのを正作が見分し、修繕して居るのらしい。

桂の顔、様子! 彼は無人の地に居て、我を忘れ世界を忘れ、身も魂も、今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌、斯くまでに眞面目なるを見たことがない。見て居る中に、僕は一種の壯嚴に打たれた。

諸君! 何卒か僕の友のために、杯をあげて呉れ給へ、彼の將來を祝福して!



畫  
の  
悲  
み



畫を好かぬ子供は先づ少いとして、其中にも自分は子供の時、何よりも畫が好きであつた。(と岡本某が語りだした)。

好きこそ物の上手とやらで、自分も他の學課の内畫では同級生の内自分に及ぶものがない。畫と數學となら、憚りながら誰でも來いなんで、自分も大に得意がつて居たのである。しかし得意といふことは多少競争を意味する。自分の畫の好きなことは全く天性といつても可からう、自分を獨で置けば畫ばかり書いて居たものだ。

獨で畫を畫いて居るといへば至極温順しく聞えるが、其癖自分ほど腕白者は同級生の中にならばかりか、校長が持て餘して數々退校を以て嚇したのでも全校第一といふことが分る。



全校第一腕白でも數學でも。しかるに天性好きな畫では全校第一の名譽を志村といふ少年に奪はれて居た。この少年は數學は勿論、其他の學力も全校生徒中、第二流以下であるが、畫の天才に至つては全く並ぶものがないので、僅に墨を摩さうかとも言はれる者は自分一人、其他は悉く志村の天才を崇め奉つて居るばかりであつた。ところが自分は志村を崇拜しない、今に見るといふ意氣込で頻りと勵んで居た。

元來志村は自分よりか歳も兄、級も一年上であつたが、自分は學力優等といふので自分の居る級と志村の居る級とを同時にやるべく校長から特別の處置をせられたので自然志村は自分の競争者となつて居た。

然るに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の人氣は、温順しい志村に傾いて居る、志村は色の白い柔和な、女にして見たいやうな少年、自分は美少年ではあつたが亂暴で傲慢、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一番を占めて居て、試験の時は必ず最優等の成績を得る處から教員は自分の高慢が癢に觸り、生徒は自分の壓制が癢に觸り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人の心持は、せめて畫でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱を挫いてやれといふ積りであつた。自分はよく此消息を解

して居た。そして心中ひそかに不平でならぬのは志村の畫必ずしも能く出來て居ない時でも校長をはじめ衆人がこれを激賞し、自分の畫は確に上出來であつても、さまで賞めて呉れ手のないことである。少年ながらも自分は人氣といふものを悪んで居た。

或日學校で生徒の製作物の展覽會が開かれた。其出品は重に習字、圖畫、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろぞろと押かける。取りどりの評判。製作物を出した生徒は氣が氣でない、皆そは／＼して展覽室を出たり入つたりして居る。自分も此展覽會に出品する積りで畫紙一枚に大きく馬の頭を畫いた。馬の顔を斜に見た處で、無論少年の手には餘る畫題であるのを、自分は此一舉に由つて是非志村に打勝たうといふ意氣込だから一生懸命、學校から宅に歸ると一室に籠つて畫く、手本を本にして生意氣にも實物の寫生を試み、幸ひ自分の宅から一町ばかり離れた桑園の中に借馬屋があるので、幾度となく其處の庇に通つた。輪廓といひ、陰影と云ひ、運筆といひ、自分は確にこれまで自分の畫いたものは勿論、志村が畫いたもの、中でこれに比ぶべき出來はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、いかに不公平な教員や生徒でも、今度こそは自分の實力に壓倒さるゝだらうと、大勝利を豫期して出品した。



出品の製作は皆な自宅で畫くのだから、何人も誰が何を畫くのか知らない、又互に秘密にして居た。殊に志村と自分は互の畫題を最も秘密にして知らさないやうにして居た。であるから自分は馬を畫きながらも志村は何を畫いて居るかといふ問を常に懷いて居たのである。

さて展覽會の當日、恐らく全校數百の生徒中最も胸を轟かして、展覽室に入つた者は自分であらう。圖畫室は既に生徒及び生徒の父兄姉妹で充満になつて居る。そして二枚の大畫(今日の所謂大作)が並べて掲げてある前は最も見物人が集つて居る。二枚の大畫は言はずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先づ荒膽を抜かれてしまつた。志村の畫題はコロンブスの肖像ならんとは！而もチョークで書いてある。元來學校では鉛筆畫ばかりで、チョーク畫は教へない。自分もチョークで畫くなど思ひもつかんことであるから、畫の善惡は兎も角、先づ此一事で自分は驚いてしまつた。その上ならん、馬の頭と鬚面を被ふ堂々たるコロンブスの肖像とは、一見まるで比べ者にならんのである。且つ鉛筆の色はどんなに巧みに畫いても到底チョークの色には及ばない。畫題といひ色彩といひ、自分のは要

するに少年が書いた畫、志村のは本物である。技術の巧拙は問ふ處でない、掲げて以て衆人の展覽に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いとは言へなかつた。さなきだに志村崇拜の連中は、これを見て歡呼して居る。「馬も佳いがコロンブスは如何だ！」などいふ聲が彼處でも此處でもする。

自分は學校の門を走り出た。そして家には歸らず、直ぐ田圃へ出た。止めようと思つても涙が止まらない。口惜いやら情ないやら、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草の中に打倒れてしまつた。

足をばた／＼やつて大聲を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其處らの石を拾ひ、四方八方に投げ付けて居た。

かう暴れて居るうちにも自分は、彼奴何時の間にチョーク畫を習つたらう、何人が彼奴に教へたらうと其ればかり思ひ續けた。

泣いたのと暴れたので幾らか胸がすくと共に、次第に疲れて來たので、いつか其處に臥てしまひ、自分は蒼々たる大空を見上げて居ると、川瀬の音が涼々として聞える。若草を薙いで來る風が、得ならぬ春の香を送つて面を掠める。佳い心持になつて、自



分は暫時くちつとして居たが、突然、さうだ自分もチョークで書いて見よう、さうだといふ一念に打たれたので、其儘飛び起き急いで宅に歸り、父の許を得て、直ぐチョークを買ひ整へ畫板を提げて直ぐ又外に飛び出した。

この時まで自分はチョークを持つたことが無い。どういふ風に書くものやら全然不案内であつたがチョークで書いた畫を見たことは度々あり、たゞこれまで自分で畫かないのは到底未だ自分の力に及ばぬものとあきらめて居たからなので、志村があの位畫けるなら自分も幾干か出来るだらうと思つたのである。

再び先の川邊へ出た。そして先づ自分の思ひついた畫題は水車、この水車は其以前鉛筆で畫いたことがあるので、チョークの手始めに今一度これを寫生してやらうと、堤を辿つて上流の方へと、足を向けた。

水車は川向にあつて其古めかしい處、木立の繁みに半ば被はれて居る鹽梅、蔦葛が這ひ纏うて居る具合、少年心にも面白い畫題と心得て居たのである。これを對岸から寫すので、自分は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで川柳の蔭で見えなかつたが一人の少年が草の中に坐つて頻りに水車を寫生して居るのを見つけた。自分と少年と

は四五十間隔たつて居たが自分は一見して志村であることを知つた。彼は一心になつて居るので自分の近づいたのに氣もつかぬらしかつた。

おや、彼奴が來て居る、どうして彼奴は自分の先へと廻るだらう、忌ま／＼しい奴だと大に癢に觸つたが、さりとて引返すのは猶ほいやだし、如何して呉れようと、其儘突立つて志村の方を見て居た。

彼は熱心に畫いて居る。草の上に腰から上が出て、其立てた膝に畫板が寄掛けてある。そして川柳の影が後から彼の全身を被ひ、たゞ其白い顔の邊から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穩かに落ちて居る。これは面白い、彼奴を寫してやらうと、自分は其儘其處に腰を下して、志村其人の寫生に取りかゝつた。それでも感心なことには、畫板に向ふと最早志村もいま／＼しい奴など思ふ心は消えて畫く方に全く心を奪られてしまつた。

彼は頭を上げては水車を見、又畫板に向ふ、そして折り／＼左も愉快らしい微笑を頬に浮べて居た。彼が微笑する毎に、自分も我知らず微笑せざるを得なかつた。

さうする中に、志村は突然立ち上がつて、其拍子に自分の方を向いた、そして何と



も言ひ難き柔和な顔をして、につこりと笑つた。自分も思はず笑つた。

「君は何を畫いて居るのだ」と聞くから、

「君を寫生して居たのだ」

「僕は最早水車を畫いてしまつたよ」

「さうか、僕は未だ出來ないのだ」

「さうか」と言つて志村は其儘再び腰を下し、もとの姿勢になつて、

「畫き給へ、僕は其間にこれを直すから」

自分は畫き初めたが、畫いて居るうち、彼を忌ましくしいと思つた心は全く消えてしまひ、却つて彼が可愛くなつて來た。其うちに畫き終つたので、

「出來た、出來た！」と叫ぶと、志村は自分の傍に來り、

「おや君はチョークで畫いたね」

「初めてだから全然畫にならん、君はチョーク畫を誰に習つた？」

「そら先達で東京から歸つて來た奥野さんに習つた。然し未だ習ひたてだから何にも畫けない」

「コロンブスは佳く出來て居たね、僕は驚いちやつた」

それから二人は連立つて學校へ行つた。此以後自分と志村は全く仲が善くなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元來が温順しい少年であるから、自分を又無き朋友として親しんで呉れた。二人で畫板を携へ野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。

間もなく自分も志村も中學校に入ることとなり、故郷の村落を離れて、縣の中央なる某町に寄留することとなつた。中學に入つても二人は畫を畫くことを何よりに樂にして、以前と同じく相伴うて寫生に出掛けて居た。

此某町から我村落まで七里、若し車道をゆけば十三里の大迂廻になるので我々は中學校の寄宿舎から村落に歸る時、決して車に乗らず、夏と冬と定期休業毎に必ず、此七里の途を草鞋がけで歩いたものである。

七里の途はたゞ山ばかり、坂あり、谷あり、溪流あり、淵あり、瀧あり、村落あり、兒童あり、林あり、森あり、寄宿舎の門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分は此等の形、色、光、趣を如何いふ風に畫いたら、自分の心を夢のやうに鎖して居



る謎を解くことが出来るかと、そのみに心を奪られて歩いた。志村も同じ心、後になり先になり、二人で歩いて居ると、時々路傍に腰を下して鉛筆の寫生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼も止めないと云ふ風で、思はず時が経ち、驚いて二人とも、次の一里を駆足で飛んだこともあつた。

爾來數年、志村は故ありて中學校を退いて村落に歸り、自分は國を去つて東京に遊學することとなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四五年経つてしまつた。東京に出てから、自分は畫を思ひつゝも畫を自ら畫かなくなり、たゞ都會の大家の名作を見て、僅に自分の畫心を満足させて居たのである。

處が自分の二十の時であつた、久しぶりで故郷の村落に歸つた。宅の物置に曾て自分を持ちあつた畫板が有つたの見つけ、同時に志村のことを思ひだしたので、早速人に聞いて見ると、驚くまいことか、彼は十七の歳病死したとのことである。

自分は久しぶりで畫板と鉛筆を提げて家を出た。故郷の風景は舊の通りである、然し自分は最早以前の少年ではない、自分はたゞ幾歲かの年を増したばかりでなく、幸か不幸か、人生の問題になやまされ、生死の問題に深入りし、等しく自然に對しても

以前の心とは全く趣を變へて居たのである。言ひ難き暗愁は暫時も自分を安めない。時は夏の最中、自分はたゞ畫板を提げたといふばかり、何を畫いて見る氣にもならん。獨りふらふらと野末に出た。曾て志村と共に能く寫生に出た野末に。間にも歡びあり、光にも悲あり麥藁帽の廂を傾けて、彼方の丘、此方の林を望めばまじくと照る日に輝いて眩ゆさばかりの景色。自分は思はず泣いた。



馬  
上  
の  
友



「君、最早寝るのか？」と今しも當直を終へて士官室に入つて来た一人の大尉が、自分ぶんに問うた。

「寝るには早し、起きて居ても對話者はなし、困つて居た處サ」と自分ぶんは起かけて居た腰こしを更にソファソファに下して『それとも何か珍談ちんたんが有るかね？』

「大ありだ、まア話したまへ」と言ひつゝ大尉は手早く外套ぐわいたうの頭巾づきんを脱ぎ、巻いて居た白い毛絲けいとの襟卷えりまきを外し、ハンケチで顔かほを摩りながら『鼻はなの先の感覺かんかくが無くなつて了つた。恐しい風だ。ボーイ！』聲こゑに應じて使童室ポイイの小窓こまどが開き、眠さうな眼めつきをした水兵すみへいの顔かほが現れた。

「湯ゆが沸ゆいてるなら、一本熱ほんあつくして呉れ、出来できなきやウイスキーウイスキーを持つて来い！」と



彼は命じた。

時は明治二十七年十二月の末、我國の艦隊が大連灣に集合して榮城灣上陸の準備の整ふのを待つて居た頃である。自分は新聞記者、大尉は兼て自分と仲よく話して話も能く合ふ士官の一人である。

ボーイはウイスキーを持つて來た。大尉は自分にも杯を差しして、

『是非君に聞いて貰ひたい珍談があるのだ』と頗る愉快げに言つて彼は其杯を干し、

『聽いて呉れるか？』

『聽くとも、話したまへ』

夜は更けて一艦の人、其職に在るもの、外は悉く寝て了ひ、朔風帆網をたゝいて艦上は物凄く鳴つて居るけれども室内は極めて静である。

士官は其一語一句力ある口調で――

僕は今日、公務を帯びて運送船備後丸に行つたが、彼の船には君も知つて居る通り、海軍士官が乗つて居る、其士官と用談を済まして歸るべく舷門のところまで來たのだ。(大尉は歐文直譯風の口調を使ふのが癖で、而も其癖を彼は得意として居るのである)

すると一人の男が其處に立つて居て他の船員と何事か物語りつゝあつた。僕は何心なく舷門を下りかけると其男が手を舉げて僕に敬禮する途端、僕と彼とは互に顔を見合せて驚いたといふよりか寧ろ訝つたといふが適當だらう。

如何も見たことのある男だと僕は思つて、思はず足を止めた。けれども若しも此時、此船のボーイが來て今一度僕を士官の部屋に呼びもどさなかつたならば、僕は不審と思ひつゝも直に舷門を下りて其まゝ小蒸氣に乗り、歸つて來て了つたらうと思ふ。

運命は僕等を幸ひした。僕が二足三足、舷梯を下りかけるとボーイが飛んで來て僕を呼び止め、僕は再びケビンに呼びこまれて、互に失念して居た用務を辨すべく更に二十分ばかりを費した。

其用務が済むと直に僕は對手の士官に向ひ、顔の四角な、眼のぎよろりとした、口髭の眞黒な、年の頃は二十八九かそれとも三十位な、背の高い、此船の事務員らしい男は、彼は何者だと訊ねた。士官は手輕に、

『事務長だらう、それは』

『名前は何？』と僕は問うた。



『糸井といふのが姓だが、名は知らない、今度初めて此船に乗つたので……』

士官の言葉の終らぬ中に僕は『糸井！糸井！糸井！』と叫んだ。士官は喫驚して僕の顔を見て居たが、元來、餘り好奇心に誘はれない男、寧ろ其頭の未だ黒い割合には其心が少々固定して居る男だから、僕の此叫聲について左までの注意を拂はず、シガ―を口にしたまゝ、只だ眼を大きく見張つた許りであつた。

僕は直ぐケビンを出て甲板にのぼるや、一人の水夫に向つて事務長の部屋に案内しろと命じた。

『事務長は彼處に居ます』と水夫の指す方を見ると、先の男は欄干に寄つて、たゞ一人茫然と立つて居る、其様が、其男も僕と同じく、或一種の不審に打たれて、それを解くべく心を悩まして居たらしかつた。

僕はツカ〜と近づいて、言葉靜かに、

『貴方は若しか糸井國之助君とは申されせんか、間違つたら失禮ですが』と云うた。そして對手の顔をツカ〜と見た。對手は暫時く口をもつて居たが、忽ち物慣れた口調と、船の事務員に通有なる懇懇の態度を以つて、

『私は糸井で御座いますが、さうお仰いますと若か貴方は……』皆まで言はず、僕は直ぐ手を出して、

『野村です、野村勉二郎です』と叫んだ。糸井の手はデツとばかり僕の手を握つて、僕も彼も、暫時く言葉を出し得なかつた。

僕が海軍士官の一人位になつて居る事は別に彼を驚かさす程の身の成ゆきではない。けれども糸井其人が日本第一の汽船會社に事務長の役を務め居ることを發見した僕の驚愕は決して尋常ではなかつたのである。

僕と糸井の再會の歡喜が如何なる言葉に依つて互に言ひ交はされたかを詳しく言ふ必要もあるまい。二人は直に食堂に入つて杯をあげ互の健康を祝した。抑も此糸井なる男は何者であるか。まア聽いて呉れたまへ、斯ういふ譯だ――

僕の未だ十五の時だ。さうだ中學校に初めて入つた年の秋のとだ。小春日和の佳い天氣の日であつたが、僕の宅から五六町もゆくと小な丘がある、それは他の山脈は全く獨立して居るので丁度瘤のやうに見える、それへ僕は一人で遊びに出かけた。日曜だから他にも少年が遊びに来て居た。此丘に登ると町が一目で見わたされるの



で公園にでもすれば持つて来いの場所だが、小けな町には別に公園の必要もないので、少年等の遊場になつて居るばかり。

僕は木の根に腰をかけて何心なく下を見て居ると直ぐ目の下の並木道を、一人の少年が馬に乗つて面白さうに駆けて居たが、折り／＼其姿が樹の枝に隠れて見えなくなるかと思ふと又た現れ、少年は三四町の處を往きつもどりつして、自在に馬を扱つて居るのである。僕は一心に見て居たが、次第にそれが羨ましくなつて、自分でも乗つて見たくて堪らなくなつた。

直ぐ丘を下りて並木道に出て見ると、少年は丁度僕の前に馬を進めて来た。見れば僕と同年頃の少年で、身には粗末な筒袖の衣服を着て、頭の髪は蓬々と生へたま、櫛を入れたこともないらしい、が其顔は丸く肥つて其眼つきは如何にも凛々しげに、其様子が一見して農家の兒とは趣を異にして居るのである。

少年は僕の顔を二三度駆け通つたが、忽ち馬首を轉じて桑園の中に入り入つて了つた。細い徑が一筋、桑園を通じて一軒の茅屋に達して居る。

僕は茫然と其後姿を見送つて居たが、ふと一策を思ひつき、直ぐ其後について桑

園の中に入つて、や、暫くゆくと右傍に棒が立つて居て、それに『かし馬』の三字を筆太に書いた板が釘付けにしてあるのを發見した。

『かし馬』があるといふことを聞いて居たが、さてはこの馬かと僕は其ま、ツカ／＼と内に入ると今しもさきの少年が馬から下りて馬を柵の木に繋いで居るところ。

少年はちよつと僕を振り向いて見たが、黙つて中庭に入つて了つた。見廻すと、古ぼけた母屋は、重い屋根に壓しつけられて今にも壓しつぶされさうである。軒は傾き柱は歪んで居て、藁葺屋根は名ばかり、緑の苔、白い苔一面に敷いて其所々に雑草さへ生へて居る。物置のやうな馬小屋に馬が一頭繋いである。

四邊は藁、枯草、木の枝などが散亂して其間を矮鶏が二三羽餌をあさつて居た。

僕は柵の木の傍に近づいて馬を見て居ると、中庭からのそり現れた男は、年頃五十幾歳、目の深く落窪んだ、胡麻鹽頭の、背の高い人物。無言で僕を見て居たが、

『貴君は馬に乗れるのか？』と言、如何にも人を馬鹿にした口調で問うた。

『乗つたことはないが乗つて見たいと思つて居るのだ』と僕も平氣で答へてやつた。

『そんなら乗つて見るが可い』と言ひつゝ、彼、其人は僕が此家の主人と鑑定した、



氣むづかしさうな老人は直に馬首を捉へて控へて居る。

凹むことの何よりも嫌ひな、生意氣なる少年なる僕は、内心やゝひるんだけれど、先の少年に勵まされて居たから勇氣を鼓して、馬の傍に寄り、鞍に手をかけた。そして足を鏡に掛けたまでは可いが、なか／＼身體が軽く馬の背に上らない。中學校の運動場で木馬を飛び越えることに自慢して居た僕も、生きた馬の背に乗る一段に及んで頗る當惑して居ると、傍で苦笑をして居た意地の悪いお爺さん、遂に見かねたか、其荒々しい腕を伸して僕の身體をちよいと拘つた。と思ふと僕の身體は早くも馬の上にいるを發見した。

さて馬の背に乗つて見ると、生れてから初めて馬なる動物に乗つた僕は、馬の丈の今更に高く、馬の背の今更に幅廣く、しかして我身體が一種異様な彈力に支へられて居るを感じて驚いた。

何所までも人の悪いお爺さんは手綱を柵の木から解いて馬の頭を並木道の方に向け『そら！』と言ひさま、その手綱を鞍へ投げかけた。人の善さうな馬はのそりのそりと、さも面倒臭さうに其四足を動かさしはじめた。この時、此馬が若し、馬の主人

のやうな意地悪ならば、必定思つたに違ひない『生意氣な小僧だ。一ッおどかして、泣面かゝしてやらう』と、後足で急に突立つ位な藝を演じたかも知れない。

けれども元來少年に向つて甚だ親切なる馬は、彼の老人よりも僕を愛し、たゞ斯う思つた『やれ／＼厄介な物を背負されたことだ。仕方がない其所らを一周歩いて來てやらう』

桑園を出て並木道にかゝると、今まで靜かに並足で歩いて居た馬は、早足になつて其蹄を鳴らし初めた。僕の身體はヒョイ／＼と上に飛び上がり、丁度、鞍の上で躍つて居るかのやうである。僕は思つた『他人が馬に乗つて居るのを見ても又た騎馬の畫を見ても、皆な馬と人とは恰も一體のやうになつて其運動が如何にも自由自在らしく見え、甚しきは馬の上で何十貫目の鐵棒を振り廻すなどいふ豪傑も居る。それなのに自分の身體は何故斯う馬の背に着かないで今にも轉げ落ちさうになるのだらう』と。けれども僕は勇氣を奮つて手綱を採つたまゝ、馬の走るに任して置いた。馬は船と異つて彼自身に感覺があるのだから如何放擲て置いても物に衝突する心配はない。其點は頗る安心なものだ。



並木道が盡きると國道に出る、これを左に廻ると丘を一周して歸ることが出来る、然し其道程は十七八町以上もある。馬は頭を左に轉じて此一周をやらうとした。蓋し彼は数々かく教へられて居たに違ひない。

此時僕は如何しようかと思つたといふは、十七八町の道程が恐いのではなく、國道は並木道と異つてやゝ人通りが多い、車が通る、荷馬車が通る、其間を首尾よく乗りぬくことは僕に取つて頗る覺束ない役だと思つたからである。けれども馬は遠慮なく其目的通りに歩みだした。馬に乗せられて居る僕は如何することも出来ない。

はや國道を三四十間も行くと、後から蹄を鳴らして來た騎馬がある。忽ち僕の傍へ來たのを見ると先の少年が裸馬に乗つて來たのである。

『何所へゆくのです』と彼は莞爾笑つて問うた。

『何所へゆくのだから知らな』と僕は答へざるを得なかつた。少年は笑つて、

『これから馬を洗ひにゆくのだから貴方も私に従いておいでなさい』と國道を右に折れて田圃路に馬を進めた。さうすると僕の乗つて居る馬は恰も若主人の言ふことを解して居るかのやうに、先に立つてゆく馬の後を追うてやはり田圃道に下りた。

路が狭いので馬を駢べることが出来ない。少年は後を振り向き、靜に馬を進ませせて居る。

『何所へ馬を洗ひにゆくの？』と僕は問うた。

『蛇の池です』

『蛇の池？』と僕は驚いた。この池は山の麓にあつて、周囲は老樹鬱として繁り、蒼蒼と水を湛へて居るので如何にも物凄さうに見え、少年等も氣味を悪がつてめつたに近づかない所である。

『何時でも蛇の池で馬を洗ふのだらうか』

『さうです！』と少年は平氣で言ひ放つた。田圃路を十町もゆくと家數四五十軒もある小村に達する。其村を横ざると路が爪先上りになつて竹藪の彼方を流れる溪流の音が聞えだした。

間もなく池の河に出ると、少年はひらり馬から下りたので僕は鞍を捉へてずる／＼と下りた、といふよりか滑り落ちたといふ方が適當だらう。

池の一邊が遠淺になつて居て其處の汀はやゝ池に突出して居るので成程馬を洗ふに



は丁度可い場所だと僕も思つた。

池を挟んで居る兩方の山は嶮峻にして見上ぐるまでに高く、西岸は山の影で暗いけれど東岸は西に傾いた秋の日を受けて明るく輝いて居る。風のない日であるから、一碧鏡のやうな湖面は山の影森の影を倒に映し、湖心最も寂なる邊には白雲の影をさへ沈めて居る。

少年は裸馬を牽いて膝のあたりまで水の届く所に出て、馬を洗ひ初めた。僕は岸からこれを眺めて居る。僕の乗つて来た馬は柳に繋がれたまゝ草を食つて居る。

馬と少年を中心にして波紋が脈々と起り、それに日の光が映つて如何にも奇麗であつた。

『此馬も洗ふのか』と僕は大聲で問うた。其聲を山彦が應へて湖面に響き渡つた。少年は頭を擧げて僕を見て、優しい笑顔を満面に漲らして首を左右に振つた。僕は其後、何時までも此時のことを忘れない。今でも眼の先に直ぐ此時の光景を浮べることが出来る。僕の眼の底には此等の光景が畫を見るよりも鮮かにのこつて居るのである。暫時くして我少年は馬を洗ひ了り、岸にのぼつて来た。

『何故此方の馬は洗はないのだ？』

『鞍を置いて来たから』と少年は答へ『歸りは二人が此馬に乗つて裸馬の方は牽いて歸るのだ』と言ひつゝ彼は少時休息すべく草の上に足を投出した。僕も其傍に坐り、

『僕でも乗れるやうになれるだらうか』

『なれますとも。直ぐ乗れるやうになる』

『君は幾年だ？』

『十五』

『十五なら僕も同じだ、これから毎日乗りに行くから教へて呉れたまへ』といふや少年は少し顔を赤らめて、

『私は出来ないから父上に教へてお貰ひなさい。父上は上手だから』

『父上は馬の先生かえ』

『先生だ。昔は殿様に馬を教へたのださうだ』と少年は答へて得意の色を示すべく禁じ得なかつた。

これを聞いて僕も少年ながらに、やゝ彼の身の上が讀めて来て、急に尊敬の意が加



はり、初から氣に入つた此少年が今更慕しくなつて何時しか仲の好い以前からの朋友のやうな氣になつて了つた。

「これから毎日遊びにゆくよ」

「あゝ来たまへ、學校へも何處へも行かないのだから毎日宅に居るから」と彼も既に僕を朋友達扱ひにして親しく話すのである。

「何故學校に行かないの？」と僕は無遠慮に問うた。

「父上がやつて呉れないのだ」と少年は眞面目に言つて『もう歸らせよう！』と立つた。

僕を前に、鞍の上に乗せて少年は後に乗り、裸馬の手綱を取つて、これを牽き、池の邊を出立つて歸路に就いた。少年は後から巧に馬を御し、馬は心地よく走つて田圃路を過ぎ、國道に出で、國道から並木道に入ると、短い秋の日は既に暮近く、空氣は水の如く澄み、並木の小枝を蒼空に透して仰げば、星影の一ツ二ツも枯葉の間から覗かれさうな頃となつた。少年は口笛を吹く、二頭の馬は蹄の音を揃へて走る、僕は何とも知れず、たゞ嬉しくて堪らなかつた。

此日から僕は殆ど毎日のやうに此少年の許に出かけて、二人して馬の頭を並べ、並木道を走らし、丘を一周し、時には蛇の池に馬を洗ひにゆくなどこれまでにない面白い日を送り得ることゝなつたのである。

聞き得たる處に依ると少年の父は糸井專造といひ以前は藩の馬術の指南役で知行百五十石を領し、随分立派に暮して居たのだが、維新後の零落甚しく遂に今の有様となり果てたといふ事だ。專造の零落は時勢の罪ばかりでなく、其大部分は彼自身の性癖に由れることは、僕も彼に近づくにつれて人の噂を確めたのである。

彼は馬術の外、何の技術もない殆ど無學文盲な人物であるばかりか、頗る片意地で頑固で、少も世の成行を見て身の計を立てるといふことを爲さない。そればかりなら未だ可いが、それが高じて世の成行を誼ひ且つ力めて逆行しようとのみ爲て居たのである。貧苦の中の『かし馬』は生業の爲ばかりでなく、一つは專造其人の性癖も満足せしめる爲であつたといふ證據は、中學校の生徒、巡查、市の若い者などが馬を借りた彼の許にゆくと、彼は自分の弟子でも来たかのやうにこれを扱ひ、馬の乗様が如何だとか、斯うだとか、小言の千百も並べた末が頭をなして怒鳴りつけることも度々あるの



で、氣の弱いものか、氣の短いものは一度で懲りて行かなくなる、それを彼は却て得意らしく、今の奴等にはとても馬に乗れないと力むのを見ても解る。

專造はそれでも可いが氣の毒なのは子息の國之助である。父は彼を尋常小學校までやつて退校して下ひ、乗馬術だけ十分に仕こめば祖先に對して申譯は立つと、自分の無學を悔いずして却て愛兒までを無學に終らしめようとして居るのである。

僕は國之助を知つてから、其事情を知るにつれて少年心にも同情に堪へず、色々の本を貸して讀ますやうにして居たが、彼は渴けるものゝ水を求めるが如く、一書を讀み了れば又一書と、僕の貸し得る丈けの本は三四ヶ月の間に大概讀んでしまつた。彼が最も愛讀したのは、ロビンソン漂流記の和譯と、ジュールベルヌの海底旅行の和譯、在來の本では源平盛衰記三國誌等であつた。

僕は彼に知識の泉を貸したばかりでなく、實に少年に取つて更に大なるもの、即ち空想の翼を貸した。

彼と二人で馬首を並べ田圃路を歩みながらの物語は一として將來の空想でないことはなくなつた。彼は或時、

『馬乗になるよりか船乗りになるほうが如何に愉快か知れない。馬に乗つて五大洲を横行することは出来ないが船に乗れば地球を一周することが出来る』と言つて『僕は如何しても船乗になるのだ』と力んだ。

翌年の正月の末と記憶する、夜の八時頃僕は學友の宅に遊びに行つて其歸りがけ、例の並木道を一人で通りかゝると、糸井國之助にひよつくり出遇つた。彼は何時もの快活なるに反し、屈託した顔つきをして居るから如何したのだと聴くと、

『今父上と喧嘩したのだ』といふ。

『如何して!』僕は驚いて訊ねた。

『僕は斷然と僕の目的を話して父の賛成を求めたのだ。今から五六年東京へやつて呉れると頼んで見た。處が父は非常に怒つて、船乗になつて何になるのだ、貴様は武士の子だ、武士の子が船頭になるなんて見下げ果たした見たと怒鳴つけた、僕は父の言草が餘り亂暴だから二言三言争ふと、如何したことか父は泣きだして、子息にまで馬鹿にせられるやうになつたとは情ない、貴様のやうな奴は最早力にしようとは思はないから、出てゆくなら何處へでも勝手に出てゆけ、そのかはり生涯歸つて來て呉れるな



と言ひだしたのだ。母も傍で泣くし、僕もとうとう泣いて父に謝罪したが、考へて見ると僕ほど不幸なものはないよ……」と言ひさして國之助は愁然と頭を垂れた。

『そして君は今何所へゆくのだ』

『何處へゆく積りもない、たゞ餘り屈託したから外へ飛び出したのだ』

『そんならこれから僕の宅に來たまへ』と彼を誘うてかへり、言葉を盡して慰めてやつた。

實に彼は不幸な少年であつた。彼の兄は幼にして此世を去り、彼の力とする人は父ばかり、其父は世間並はづれた頑固者、而も彼の胸底には燃ゆるばかりの志が潜んで居る。彼はそれを壓へて父の許に、朝夕たゞ馬の背に乗つて居なければならぬといは！

彼の心を知るものは僕一人であるから彼は僕に親しみ、僕を力とし、三日も僕が彼を訪はなければ必ず彼は僕を訪ねて來た。

けれども運命は何時までも僕等二人を狭い町に置いて互に往來することを許さなくなつた。十六の春の末、僕は叔父に招かれて東京に留學することとなり愈々出立とい

ふ四五日前に僕は此事を國之助に話した。

國之助の驚愕は實に意想外であつた。初は信じなかつたが、遂に事實なることを知るや彼は顔色を變へて黙つて了つた。

出立の前日、僕の父は愛兒の門出を祝すべく學友などを招いて心ばかりの饗宴を開いたが、其時僕は國之助をも招いたけれど彼は來なかつた。

其夜、彼から一通の手紙が來て、其文言の意味は『君若し東京に去らば僕は最早、友も何もなくなつて了ふ。明日から誰と馬を駢べて乗らう、誰と此志を語らう、誰が僕の志を憐んで慰めて呉れる、誰れが僕を勵まして呉れる、然し今更これを言ふのは愚痴だ、僕は僕に志を立てさして呉れた君の恩を忘れない、そして此志は必ず貫いて見せる。君も亦た何時までも僕を忘れて呉れるな』といふだけであるが、僕はこれを読んで一人泣いたのである。

翌日は朝早く父と共に宅を立つた。母や、弟や、學友や、親戚の者は峠の中の茶屋まで見送つて呉れた。僕の故郷から其頃港まで出るには五里の道を入車で走らなければならぬ。父は港まで僕を送るべくやはり車に乗つて峠を越されたのである。僕は立



つ前に國之助に會ひたく思つたけれど、多分見送つて呉れるだらうと思つた彼の姿が中の茶屋でも見なかつたので、頗る失望したのである。不思議に感じつ、峠の絶頂の茶屋まで來ると、馬に乗つて坂を見下して居る一人の少年が彼であつた。彼は莞爾笑つて馬を近づけ、

『早かつたねえ』とたゞ一言。

人車の進むにつれて馬も進む、彼は馬を人車に並べて走らす。馬上の人、車上の人、語らんとして語ることが出来ない。

『最早可いから歸つて呉れたまへ』

『何に、もすこし』と彼は低く答へて静に駈ける。坂を下つて更に半里、馬と車は相並んで走つた。

『眞實に最早可いよ』

『もすこし』

『如何かして君も上京するやうにしたまへ』

『さうなると僕も嬉しいけれど……』

そのまゝ二人は無言。野は菜種の花が咲き亂れて居る。大空は霞み、雲雀は高く啼いて居る。何處を眺めても佳い景色である。

小川に渡した石橋まで來ると、彼は突然馬をとめて『左様なら！此處で別れる！』と言ひ放つた其眼元には涙が一ぱい合されて居た。

車が二三町行き過ぎた時、僕は後を振り向いて見ると、我少年は馬を石橋に立て、此方を見送つて居た。僕は車の上で熱涙を呑んだ。

東京に着くや僕は、直ぐ手紙を出し、彼からも書狀が來たが、それも一度きりで、其後は僕から三四度音信したけれど遂に彼の返事はなかつたので僕も何時かそのまゝ、捨置くことゝなつた。

僕は十七歳まで東京に居て、それから江田島の海軍兵學校に入り、江田島を出るや軍艦に乗り込み其まゝ、終に一度も故郷に歸らなかつたから糸井國之助の其後の様子は全く今日が日まで知らなかつたのである。僕の父母は僕の江田島に居る時分既に東京に住居を移して居たのだ。

ところが彼も亦た僕の江田島に居る時分、故郷を飛び出して長崎に出たとの事であ



る。

長崎に出た後、如何して船員となり、事務長になつたのか、彼は十分話さないから解らないが何しろ彼の事だから非常に勉強したに違ひはない。如何だ！珍談だらう！今日僕が十年ぶりに此少年と備後丸で、大連灣で、再び出會はし、そして二人の馬乗が、二人とも船乗になつて居たといふことは！

我が海軍士官の物語はこゝで終つた、自分は何心なく「何故、糸井は君の手紙に返事を出さなくなつたのだらう」『あゝ、僕も其事を聞いた。すると彼は平氣で郵便錢すら其頃はなかつたと答へた』

自分は士官と共に杯をあげて糸井國之助の健康を祝した。

悪

魔



「如何な奴？」

(一)

「まア、奴なんて、口が悪いのねえ」

「そんなら如何な先生？」

「私、知らないワ、如何ななんて」

「だつて見たのだらう」

「先刻御挨拶を仕たの」

「だから如何な人だか訊くのサ」

相手の君子は急に真面目な顔をして自分を凝視め、微に吐息をして「大變學者だッ



てねえ』

『誰がさう言ッた。自分で言ッたのだらう』 『御自分が何でそんなこと被仰るもんですか。宅の母上がさう言ッて、よ』 『どうせ斯な山の中に住みたいといふんだから變物の青飄箆だらう』

『武様變物ぢやないワねえ』と君子は言ひ捨て、駈け出したが、五六歩で立どまり、莞爾笑つて『日が暮れたら遊びにお出でなッ。必然！』

『知らないッ！』と自分は其まゝ、裏山に登つて小松原を歩いて居たが、何となく胸がむしやくしやすする。君子は十八、自分は二十從兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好であつたらしいのが、今度、淺海の一家突然、君子の宅の母家を借りて住むこととなり、其總領息子の謙輔、東京に久しく留學して居た青年が歸つて來るといふので一週間も前から叔母を初め君子姉妹までが噂をして待つて居て、それで今日の朝、愈々謙輔が着いたとのこと、君子に遇つて見ると嬉しうに、そはくして居る。癖に觸らざるを得ない。

元來山内家と自分の布浦家とは古くからの親戚で、某町からは十二三町もゆる此山

の中に小さな丘一ツ隔て代々往んで居るので、君子の母は自分の叔母に當り、叔母は五年前に其良人を失ひ今では君子と豊子と繁といふ末の男兒と四人暮し、母屋は廣過るとして閉めて了ひ、門の傍なる離室三間を常の住居となし、又自分も早く父を失ひ、母と二人淋しく暮し、下男下女の外は、先づ自分を男の中の大将として兩家極めて親密なる交際をして來て居たのである。

一月程前に町から人が來て、今度出來た登記所の所長として來られた淺海氏の爲に山内の母家を借りたと思ふが、相談して見て呉れないかとのこと、この中間に立つた人は年來の交際ゆゑ、自分の母も早速承知して山内の叔母に此意を傳へて尙ほ色々相談した結果が、登記所の所長様と言へば田舎では一個の立派な紳士、それが借りたいとあれば無下に否むも可笑なもの、又此淋しい山の中に一家でも殖えれば、女ばかりの世界が大に心強くなるといふ利益もあり、兎も角も貸した方が可からうといふことに定まつて、其旨を先方に答へたのである。

淺海氏は喜んで町の假住居から移轉つて來たが、家族は三人である。主人の所長殿は年齢頃五十二三、背の高い色の淺黒い、頭髮半ば白き立派な人物、妻は四十六七で



叔母よりか少しの年長者、夫婦ともに見たところ氣だての優しい、快活な、交際に慣れた人々らしく、十二歳の女の子を一人連れただので我々の一族は又もや二人の女子を得て、何所までも女人國の體を失はないけれど、猶且つ五十以上の堂々たる一男子を得たことは叔母達の大に意を強うしたところであつた。

寂莫たる山林の生活が此後から少からず賑うて来て、見聞の狭い叔母達から見ると、役人生活に慣れて所々を渡り歩いて来た淺海一家の人の物語や生活法は少からず興味を惹き、好奇心を満足せしめ、又た尊重の念をさへ起さしめたのである。

そして二週間も経つと、婦人連に取りては更に一の興味ある問題が出来たといふのは、謙輔が遠からず歸宅するとの事實が知れたのである。

謙輔年齢は二十三、其註文には一二年田舎に居て靜に讀書したい、就ては住宅は町を避け出来るだけ閑靜な所にして貰ひたいとのこと、淺海氏が登記所に通ふ路の遠く且つ難儀なるをも辭せないで、山内の母屋を喜んだのは此理由であつたのである。

謙輔が着く三日前の晩、自分が叔母の宅へ遊びにゆくと、叔母は自分と君子に向ひ、『淺海の奥様が今日謙輔様の寫眞を見せたが威のある立派な方だよ。宅でも君が男で

あつて呉れると私も大變力になるけれど、繁がちやアまだ先が長うて、あんな立派な息子になるのはちよつくりのことぢやない。私は今日寫眞を見て眞實に羨ましかつた』

『さう、そんなに立派な方？』と君子は頭をかしげて、裁縫の手を止めて問うた。

『あア』と軽く應じて叔母は『お前もこれからすこし氣をつけないと可けないよ。田舎娘で行儀も作法も知らないと思はれないやうに仕なければ』

『さうですなえ』と君子は至極感心したらしい。

『だつて田舎娘が急に東京者になれもすまいぢやあないか』と自分がつい口を入れると、叔母は『けれども田舎娘には田舎娘で相當の教育をして來たのだから笑はれるやうなことを仕ては君ばかりぢやアない、私まで卑下れるからなえ』

『眞實にさうだわ』と君子は頗る眞面目である。

『何に關はん僕は暴れて見せてやるのだ』

『眞實に武様は變物だよ』と君子は今更らしく眼を見張つた。

『さうよ、變物のところを見せてやるのだ』『馬鹿をいふもんぢやアないよ、お前な



ぞも謙輔様が來られたら色々教へて貰う方が可い』と叔母は大真面目。

『何をサ』『何かにつけてサ』『僕は鮎釣と狸狩を教へてやらア』

叔母も君子も機嫌が可くないので自分は直ぐ外に飛び出したが、此時から既に自分は淺海謙輔が我等の仲間に加はることを何となく歓迎しては居なかつたのである。

それは今、君子に別れて小松原を歩いて居ても、何時ものやうに面白くないばかりか、口惜いやうな、情けないやうな氣がして堪らなかつた。

## (二)

成程自分は變物に違ひない。自分は子供の時分から他の腕白仲間と一緒に遊ぶことは餘り好かなかつた。なるべく單獨で悪戯が爲たかつた。たゞ其中に君子にだけは心置きなく遊ぶことが出来、君子は自分の従妹であるばかりか、時には姉のやうな心持もして、長ずるに従ひ、益々君子と親み、其姿を二三日見ないと、如何も物足らず感じて淋しさを覺えたものである。

それで君子は自分のことを變物だと常も言つて居たが、自分は君子にさう言はれることは別に不快な感も起らなかつたのである。

ところが、淺海謙輔のことで、今度、君子から變物と言はれたことだけは、今更のやうに聞えて、自分は少からず不快の念を醸したのである。

『變物なら如何したい！』と自分は反抗して見なくなつた。

『どうせ僕は變物だよ。猶ほ變物になつて見せるぞ』と一念の發作を禁じ得なかつた。既に斯ういふ風だから自分は、淺海謙輔に近づく氣は毛頭もないばかりか、なるべく其機會を避けるやうにして居たのである。

であるから君子が遊びに來いと言つたけれど、必定謙輔も同席だらうと、行かないで其夕は宅にヒッ込んで居たが、我儘者の癖にして、斯うなると益々氣色が悪くなるばかり、遂には何故君子が呼びに寄こさないだらう、とまで思ひ、獨りで焦れて居た。夜の九時頃まで読みもせぬ本を机の上に、洋燈の心を出して見たり引込めて見たりして居たが、ふと頭を上げて見ると窓の障子に月影が射して居るので、其まゝ外に飛び出した。

夏の末、秋の初の夜の沓え渡り、半圓の月清く澄みて下界はしつとりと露けく静かに、山も林も黒い影に淡靄の白き光を浴びて浮んで居る。



丘の背を辿つて山内の裏山まで来て、子供の時から君子等と筵を布いて遊んだ平地へ出ると、此處からは北向の村を見渡すことが出来る。村は何處、林は何處、たい見る、月の光は、あらゆる直線を和げ、あらゆる色彩を融き、我世をさながら夢の世に變へて居るのである。自分は岩陰に佇んで居た。

暫くすると何者か自分と同じく上つて来た人の氣勢、靜に控へ、呼吸を凝らして居ると、其者は自分の傍らの岩に腰をかけた。隔つこと十歩、されど岩陰は自分を隠して居る。

彼も動かさず、我も動かさず、斯くて幾分を過ぎた。此時、寂として音なく、たい何處にか蟲の音の微かに、遠く聞えるばかり。

忽ち物言ふ聲！ 自分は悚然として閉息した。言葉は嚴かに音は澄みて、『天に在ます神、慈愛の神様……萬有を統給ふ神よ、塵深き都を去つて此靜かなる山の上に立ち、心置きなく祈禱を捧げ得ることを感謝します。信仰薄く、常に地の煩悶に苦しむ我を憐み給へ。この清き村、この靜かなる山、此美しき自然の懷に導き給ひしを感謝します……』

聲は慄へ、嗚咽泣く音を交へて『されど神様、されど、されど……斯く祈りつ、我心は何故に眞實に覺醒する能はざる乎、神様、此天地を統給ふ神様、限りなき時と限りなき空間、思へば不思議にして驚く可き此世界に此生を寄せながらも、我心は何故に常に平然として月に泣き花に笑ふの情と親を慕ひ戀を樂むの心とにのみ其安和を得て満足するか。神よ、神よ、不思議と知りつゝも不思議を感ずる能はざる人の心は初より神の定め給ひし約束なるか……然らば何故に神は、我心に此遂げ難き希望を置き給ひしか……何故に我心を更に暗く且つ鈍く作り玉はざりしか……獸も等しく生存を希ふ欲望を與へながら、而も且つ天を仰いで其限りなきを見、此の生命の泡沫の如きを思ひ得るの心を、人には授け給ひしぞ……嗚呼神よ、我苦悶の聲を憐み給へ……』

聲は止み、泣く音のみ微かに聞えて、や、少時、少時は泣く音も絶えて幾分か過ぎたが、やがて彼は其處を去つて元と來し途へ引返し、其足音も聞えなくなつた。

何者ぞ？ 言ふまでもなく淺海謙輔！ 自分は直ぐ山を下りて叔毎の離室を訪うた。

君子は『何故早く來ないの？』『たゞ來なかつたのサ』と言へど自分は山に得し不安と



不審の胸猶ほ静まらず。『今山に上つて月を見て来た』『さう？ 先刻まで謙輔様が来て居て東京の話をして聞かしたのに』『如何な先生だ？』

『優しさうな人よ』と君子は母を顧みて、『ねえ母上』『さうさ、そして何處か人ずれの仕ない内氣な所があつて眞實に私は氣に入つちやつた』と叔母。

『明日武様ところへも挨拶に行く和被仰つて、よ』と君子は、『そして武様の事を話したの』『何と言つて？』

『年齢は十九だが腕白者だから何分願ひますと私が頼んで置いた』と叔母。

『そして變物だつて私が言つてやつた』と君子は笑つて自分の顔を覗き込んだ。

けれども自分は山に得た不審の心安からず、君子に反抗の氣も乗り兼ねて可笑くもない、腹も立ぬ。黙つて居ると、君子は言譯らしく、『けれども私武様を譽めて置いてよ』『何と言つて？』『變物だけれど感心に書物が好で英語が上手だつて。可いでせう其なら』『馬鹿言つてらア』と自分は苦笑したばかり。

『何處で英語を習つたのだつて訊いてよ。木實様といふ人に教はつたのだと言つたら木實といふ人は何だと聞くから耶蘇だつて言つたの』『そしたら何と言つて？』『今其

人は何處に居るか聞くから、先達迄町に居て教會堂の牧師でしたが今は何處へか轉任して居ませんと言つたの。そしたらね武様耶蘇信者かツて訊いてよ』『信者だつて言つたの？』『否え、初は耶蘇らしかつたけれど今は何でも無い』『そしたら何と言つて？』『たゞ黙つて居てよ。そしてね私に耶蘇の説教を聞いたことがあるかと訊くから、武様が曩日山で木實様の声色だつて説教の眞似事をしたのを聞きました。けだと言つたの。笑つていらしつてよ』『餘計なことを言つてらア』と自分は言つて歸らうとすると、叔母は早口に、『耶蘇かも知れない謙輔様も』『さうかも知れない』と自分は起つた。君子も起つて、『耶蘇だつて可いワ』『大嫌ひだつて言つてた癖に』『それは以前のことだワ』

## (三)

實に自分は木實先生に英語を學び又た耶蘇教の説教をも聞かされた。けれども自分は英語だけ學んで宗旨の方は如何しても氣乗がしなかつたのである。

英語のバイブルは讀み習うたが、バイブルの教は自分は如何しても受取れなかつたのである。又自分は其教を求める氣も全然無かつたから、木實先生は自分を愛して呉



れる一方で、甚だ失望して居たらしかつた。轉任して町を立つ前の晩、久しく無沙汰して居た自分を使者を以てわざ／＼招び寄せ、自分をたゞ一人會堂の隅に坐らして「天に在ます父よ、何卒か此青年を救ひ玉うて無窮き生命の泉を汲ましめ給へ……」云と熱心に祈られた其時、自分はたゞ眞面目に先生の親切を感じたばかりで、宗旨の上には少しも心を動かさなかつたのである。

けれども計らず淺海謙輔の祈禱を竊聽した時は言ふべからざる者を感じて、自分が淺海に對する反抗の念をすら幾分、曖昧にして了つた。

翌日の朝、謙輔は自分の宅を訪うて來た、母も自分も出て挨拶した。見ると背のすらりとした色の白い、思つたよりは若々しい青年で、自分達に物言ふ聲音には一種の愛嬌ありて敵をも和げさうな力あり、其眼は輝きて鋭く、忙しく左右を顧眄するところ、彼が不穩の心を示して居た。

其の誘ふに任して相伴うて野に出た。露は旭にきらめき、遙けき野末の村よりは烟が上つて居る、この村は海濱に沿うて鹽田あり、烟は鹽竈より立上るのである。「貴方は朝晩散步を爲さいますか」と彼は自分を顧て問うた。

「散歩と言つて規則立つたことは爲ませんが、野山を馳け廻ることは何より好きですから始終行つて居ます」「お一人で？」「さうです、僕には友達が別にありませんから」「これから僕と一緒に歩きませう」

「何卒願ひます」「此邊には佳い風景の所が澤山に有るでせう」「別に佳いといふ所も有りません、大概こんなものです、海濱に出れば幾分か變つて居ますが……」

それより二人は丘に上り村を過りなどして、一時間ばかりも歩いた、其間、自分には見慣れて珍らしとも思はぬ村落樹林の景も謙輔には餘程氣に入つたらしかつた。

「貴方には面白くもないでせう、こんな景色は？」と問うたから自分は有體に「何もありません」「さうでせう。珍らしいから美しくいと思ふのは景色ばかりでなく、何事もさうでせう。私も其内には貴方のやうに此景色が何でもないやうになる時が必然來るのです」と彼は理由ありげに言ふので、自分は「當然のことです、別議はないでせう」「さうです。當然のことです、けれども私は其當然が甚だ氣に喰はないのです」「何故です。當然のことは當然のことです」「さうです。人の心が左様作られて居るといへばそれまで……併し……」



謙輔は黙つて了つた。自分はその顔を見て、彼の眼は凄く光り、彼の唇は堅く閉ぢて居る、端なく自分は彼の前夜の祈禱の言葉を想ひ起した。

「貴方は耶蘇教をお聴になつたことが有るさうですね」と突然問はれて「有りませ、……けれど今は……」  
 「今はお止めになりましたか」「初から信者ではありません、  
 んた、聴いたばかりです」「では貴方は神様は無いものと思ふのですか」「あるか無いかそんなことは思つたことも無いのです。有るものでせうか」自分の語氣にはやゝ冷嘲を帯びて居た。

謙輔は静に「有るかも知れません、無いかも知れません」「だつて貴方は神に祈つたではないか」と言ひたかつた、けれど流石に口には出し得ず、たゞ彼の顔を打まもつた。

「牧師は何と貴方に教へました？」と問ひかけたので「有ると教へました」「たゞ有ると?」「さうです、有ると教へて其理由を色々話して聴かしました。けれども私は……」言ひかけると彼は直に、

「其理由が解らないといふのでせう」「さうです。私には理由が解らないのです。け

れども研究も仕ませんでした」「研究!研究!私も研究は大嫌ひです。神の有無を研究するのは……幽霊の有無を研究するのと同じことです」と言つて謙輔は冷かに笑つた。

「幽霊も神様も同じやうなものですかな」「兄弟分でせう!……あゝ佳い風景だ!」と彼は突然足を止めたので氣がつくと、近郊遠村を見渡し得る丘の背に我々は立つて居たのである。

「そら、彼所に見えるのが此所の教會堂です」と自分は町端に立つて居るペンキ塗の家を指した。謙輔はたゞ首肯したばかり。村の少女が二人、松葉搔の籠を背負つて傍の徑を過ゆく。其一人が自分に會釋したのを自分は呼び止めて「オイお鶴、お鶴!先生に今晚出かけると言つて呉れ」「先生とは誰です」と謙輔は訊いた。自分は笑つて「お鶴の兄です。叔母の家の小作を仕て居ますが、淨瑠璃の名人で、面白い男です、變物扱ひに村の者は仕て居ますが私は好きだから時々遊びに行つてやるのです」「貴方も淨瑠璃を行つて居ますか」「彼奴が勝手に先生になつて無理に私を弟子に仕て居ますから少しづつ行つて居ます。讚美歌よりか淨瑠璃の方が面白いやうですなア」



謙輔は思はず聲を放つて笑ひ『さうかも知れませんが、先生も耶蘇教の先生よりかいかも知れない！』『然し木實先生は全く好い人でした、この前の會堂の先生は『好人物必ずしも眞實の傳道者でないやうです』』

二人は暫時く黙したまふで立つて居ると、松原の彼方で先の少女の唄ふ聲が聞える。謙輔は『一度私も淨瑠璃の先生の所へ連れて行きませんか』『何時でも御一緒に参りませう』

以上の如くして自分は淺海謙輔と相知つたのである。

(四)

謙輔の言葉の節々、自分は頗る不審に思つたのである。彼は果して耶蘇教信者であらうか。自分に取つては彼が耶蘇であらうと無からうと、何であらうと別に關係もないことで、氣に留めるほどのことで無い筈が、實際はさうでなく、今までは、教會に出入してすら何にも感じなかつた自分が、不思議にも痛く彼の舉動に動かされたのである。

淺海謙輔は果して耶蘇教徒であらうか。神に祈りたる、其熱心な言葉を思ふと正し

く信者らしく、而も彼は『神は有るかも知れず、無いかも知れなう』などいふ曖昧なことを言つて居る。

のみならず、讚美歌より淨瑠璃の方が面白いと自分の言つた言葉は奇怪とは思はず、却つて大笑したではないか。

彼も亦た一個の變物であるまいか。

自分には謙輔の人物が不審であつたのである。

(五)

謙輔に初めて會つた日から三日目、郷里から二十里隔たつて居る某町に住んで居る叔父の宅から自分を招く手紙が來た。本年は珍らしい大競馬があるから是非に來いと祭の案内状。自分は餘り進まなかつたが、母が強ひるので終に出立した。

三四日滯留の積が一週間になり十日になり、更に叔父一家の者と讚岐琴平詣を爲なればならぬこととなり、忽ち一月足らず過ぎて漸く宅に歸ることが出來た。

宅に着いたのは夜の七時頃である。母と差向ひ夕飯を濟ますや土産物を持つて叔母の家を訪ふべく外に出ると、夕月の影冴えて、丁度、淺海謙輔が初めて此處へ來た頃



の夜の様と同じである。月は一月進み、秋は半となり、露重く蟲の音繁く、引く呼吸のや、冷さを覺ゆるまでになつたわけである。

叔母と外の子供達は居たが君の姿が見えない。

『お君さんは？』と問うた自分の語氣には我知らざる不安と不足の音を帯びて居たのである。

『謙様の宅よ、姉さんは』と豊子が何氣なく答へた。

『呼んでおいでよ』と叔母が言ふかと思つたら黙つて居る。自分は旅行中の事どもを話して居たが何となく心が落着かない。それとも叔母は氣の着く道理もなし、色々と言つて居たが自分の答辯に氣の乗らないのを見て『疲れて居るだらうから早く歸つてお寐み。謙様もお前の歸りを待つて居なかつたから明日は朝から遊びに来るが可い』と言つたが君子のことは何とも言はない。

外に出たが直ぐ宅に歸る氣にならず。仰いで大空を望めば星の一個、今更の如く眼に映る。自分は今更といふ、何故なれば、これまで幾百千度、空を仰いで星影を見たが、此時ほど我心に其清くして澄みたる、意味ありげなる趣を印したとはないからで

ある。今までに感じたことのない、うら悲しい懐かして、涙さへ誘ふばかりになつた。今から思ふと、自分は其頃、君子を戀ひして居たことが解るのである。何故自分は謙輔を叔母や君子等の如くに歓迎することが出来なかつたか、何故自分は、君子が謙輔に近づいたことを知ると共に、我知らず深い哀みを感じたか。此悲哀は戀の果敢なさの悲哀ではないか。

けれども自分は當時、明かに自分の戀を認めては居なかつたのである。たゞ夫れ物足らぬ思ひ、言ひ知らぬ哀を催したばかりに過ぎない。

家には歸らないで自分の足は知らず、裏山の松原に向いた。徑は幾重にも迂回して緩かに、樹間より洩る、月影を踏んで頂に到り、先の夜、謙輔が神に熱禱した岩陰まで出て、暫く停立んで居ると、人の話聲が近づいて来る。

自分の今来た路を登つて来る人は山内の者か自分の宅の人ならでは無し、何者かと氣をつけて待つて居ると、一人は謙輔の聲、一人は君子の聲！

自分は直ぐ身を木蔭に隠して了つた。彼等の様子を覗かふこと、其物語を竊聽すること、これ善きこと悪きことなど思ひきはむるの心さへ起らず。



暗き影の中より二人の黒き姿が現れた。透し見る、二人は肩の磨れ合ふまでに身を寄り添へて歩く、一步は一步より遅く、忽ち二個の姿一個に合ひし如くに自分には見えだが、又た二個に分れて頂きの平地に竝んで立つに及び、二人は月に向ひ暫く無言の體。

『だつて田舎よりか如何しても東京の方が可いでせう』といふ君子の聲。

『さうです、都會に住む人は悪魔になり、田舎の者は悉く善人だといふ譯は決してないけれど、私のやうな人間には如何しても田舎の方が可いやうです。近いところが都會に居てはこんな山もなければ、こんな見晴らしもありません。全くないではないが、田舎に住んで心閑かに眺めると、都會に居て名利競争の暇に賞美するのは全然精神が違ふやうです』『さうですかねえ』『然し理窟を言へば何でも議論は出来ませんが、私は理窟は如何でも可いので、たゞ田舎が好き、それで文句はないのです。たゞ思ひます、田舎の好きな人は都會の好きな人よりか幸福だと、さう思ひます……どうせ人は皆な死んで了ふのですからねえ……』『でも尾間さんは先の世が在ると仰しやうなしたよ』『尾間君などに何が解るものですか』『マアあんなことを！』『眞實で

すよ、彼の人なんか、神様が如何だとか、かうだとか、木で作つて衣兜の中に納つてあるやうに手軽く神様々々といひますがあれは皆な偽の皮ですよ』『ぢやア偽言者でせうか』『マア偽言者でせうなア』『ぢやア未來は無いものでせうか』『あるかも知れませんが、無いかも知れません』『でも有るつて尾間さんは言ひましたよ』『尾間君などは善人です』『だつて貴方、今偽言者だつて仰しやうなアありませんか』『偽言者の善人は澤山ありますよ、傳道師などは大概さうのやうです』『貴方の仰しやることは私などに寸毫も解りません』

然り、竊聽する自分にも解らない。謙輔は曾て自分にも同じやうなことを言ひ、亦た今、君子に向つて語る、其一語、其一句、好んで斯くもひねくるのか、さうでもないらしい。怪しいかな彼！

『尾間君などは解るやうに言ひますが、あれで自分は何も解つて居ないのでですよ』

『大變悪く仰しやいますねえ』『悪く言ふ譯ぢやない、私は全くさう信ずるので。』

若し彼が解つて居るのなら、私は狂氣です』と言ひ放つた謙輔の聲は甚く激して居た。

『そんなことは有りませんワ』『いゝえ、狂氣です。けれども私は尾間君の善人より



か自分の狂氣の方を選びます」

君子は黙つて了つた。頭を垂れて立つ少女、傍に立つ一人は昂然として大空を見渡して居る。

「歸りませう！」

謙輔は静かに前に立つた。君子は其後に。先には並び歩いた二人が、今は前後して相隔つる二歩三歩、林に入り言葉もなく山を下りて了つた。

尾間とは新任の傳道師、彼如何にして二人の題目となつたか。自分の居ない間に、わが静なる山家は、更らに一人の友を加へたのか。

自分は家に歸り床に就いたが、暫時は眠る能はず、君子とたゞ二人、長閑に往來して暮らした彼日、彼時、色々と思ひ浮べて居ると、丘の麓を聲朗かに唄ひゆく、聲は正しくお鶴の兄、我が淨瑠璃の先生！

(六)

次の朝君子に會つた。君子は奥の三疊でたゞ一人裁縫を仕て居た。自分を見て「お歸り、大變遅かつたのねえ。待つて居てよ」「嘘言つてらア、待つても居ない癖に」

と自分は其傍に坐つた。見ると見慣れぬ男の衣服を縫つて居る。

「誰の？それは」『これ？謙様の。好い柄でせう。さうさう言ひ遅れました、お土産難有う、私大變あの縞が気に入つたのよ』「随分長滞留だつたらう」『眞實に長かつたわねえ、私待ち疲れて了つてよ』と言ひつゝ、針を運ばして居る。其顔を見ると、血の氣は失せて、何處となく憔悴て見えるので「如何かしたの？顔色が悪いよ』『さう？如何も仕ませんよ、昨夜何だか能く眠られなかつたからでせう』と顔を上げ頬に垂れた髪を掻きあげて又た下を向いた。

「如何して？何處か悪いのぢやアないの』『武様！』と君子は顔を上げ、笑味に恥を帯びて「私、昨夜妙な夢を見てよ」

「謙輔先生のお嫁になつた夢でも見たの？」と自分はツイ口を滑らした。君子はサツと顔を赤らめ、「知らないワ！そんな夢ぢやアないワ！』『どんな夢？それぢやア』

「死んだ夢なの、死んで地獄に落ちた夢。何だか可畏つて可畏つて、赤鬼や青鬼がぞろぞろ居て、火の池に私を突き落して私が這ひ上らうとすれば又た突落すのよ』と熱心に語る其眼の中に光あり、睫毛は潤んで居る。「そしてね』と急に聲をひそめ、「向を



見ると謙様も居るのよ、謙様が大きな聲で君さん〜早く逃ろ、早く逃ろッて言ひながら火の中に浮いたり沈んだり爲さるの……『僕は居なかつて？僕は？』

君子は頭を振つて歎息をして、『妙な夢でせう』

『僕が居たら直ぐ君さんを助けてやるんだけれど、謙様なんか弱蟲だから駄目だ』

『地獄なんて、眞實に有るものでせうか』と君子は何處までも眞面目である。

『有るかも知れないよ、耶穌でも佛教でもさう言ふから』武様眞實に如何思つて？』

『どつちでも可いと思ふ。そんなことは如何でも可いぢやアないか。君さんと一緒に』

なら僕は地獄にでも行かア』『私、否』『極樂なら？』といふ自分の間に君子は答へず、急に起上つて次の間に出たと思ふと、『武様、謙様が入らッしやッてよ……武様も来て居ますから此處へお入りなさいナ』

(七)

暫くすると尾間利雄も来た、自分が尾間に會ふは初め。君子は馴れ〜しく言葉を交へて居る。叔母の發案で、今日は小春の上日和、山遊に大勢で押出せといふに皆々賛成し、尾間に謙輔、自分に君子、謙輔の妹の春子、それに豊子と繁と同勢七人。叔

母は下女下男と共に後から辨當を運ぶといふ手配まで決り、河に沿うた山、俗に赤山と呼ぶ低い平たい、見晴の佳い丘へと繰り出した。

『御酒は先へ持つて行つたら？』と出立際に叔母の注意。『酒は持たない方が可いでせう』と尾間の牧師。『イヤ持つて行かう、少しでも持つて往かないと山遊の氣が仕ないから』と浅海謙輔の言葉に附いて『賛成、賛成！』と自分は早くも叔母の手から例の一瓢を受取り擔いで了つた。尾間は見て苦笑した。

『讚美歌を持つて行きませうか』と言つたのは君子、大賛成を表したのは尾間、自分も謙輔も黙つて居た。

繁を先登に、これに續く春子豊子、男三人と君子とは後になり先になる。最後の下男の一人が藁莖と毛絨とを擔いで續く。

背の一番高いのが浅海謙輔、次が自分で、尾間は君子よりや、高い。尾間は二十六の由なれど小柄ゆゑ浅海の方が却つて老けて見える。顔の一番白いのが君子で次ぎが尾間、自分の顔は分らないが、浅海と同じ黒さであらう。尾間は洋服を着て杖を持つて居る。衣囊を膨らし居るのは聖書か、それとも謙輔の所謂木で作つた手輕な神様か。



浅海は飛白の羽織に米利堅帽、これは彼の常の衣装らしい。君子は束髪にリボン、其色が桃色、薔薇の花簪は見慣れぬ一物、多分浅海が尾間が贈った品らしい。

『繁さん、左様走つては危ないよ』と後を追うて駆け出した豊子に從いて春子の姿も小藪の曲角に隠れて了つた。

角まで来ると『ワツ』と三人。喫驚した顔で飛び上つた尾間の様子が剽軽だと君子は相好を崩して笑ふ、自分も笑ふ、謙輔も笑ふ、笑ふや一、心持は異つて居たかも知れない。

『尾間様、杖を拜借な』と君子は振り向く。

『何に爲さる？』『何でも可いから貸して頂戴な』と言はれて尾間は大事さうに持つて居た杖を渡す。自分達は如何するのかと見て居ると、君子はたゞそれを携へて行くのである。

麓を廻つて一町ばかり、一軒の農家がある。小犬が吠えて飛び出した。ワツと三人の子供は後へ逃げ廻る、君子は杖を振り廻した。犬は益々吠える。君子は遂に杖を犬に投げつけると、犬は一躍、平氣な顔でそれをくはへ後の山へ上つて了つた。喫驚し

たのは尾間の牧師である。手早く上着を脱いで草の上に投げ出した端途に衣兜から飛び出したのが聖書、あはや田溝に轉げ落ちさうにして僅に草の根に止つたのを見向もせず、一目算に犬の後を追駈けた。

浅海は腹を抱へて笑ふ、其際に自分は聖書を拾つて我が懐の奥に隠した。見たものは誰もない。

尾間が杖を取り返すに十分もかゝつたらうか、上着を肩にかけたまゝズボンから眞白な手布を出して汗を拭きながら歩む、聖書のことは氣が着かぬらしい。

此一幕が終むと間もなく赤山の麓なる河岸に出た。川幅三四間、岸には川楊繁る。

水は澄み底は小石の數も讀まざるべく、小舟一艘繋いであるのを見て、我年若き傳道師は逸早く飛び乗つた。其勢の餘り烈しかったので、軽く繋ぎし綱抜けて舟はするゝと一問ばかり沖へ。波紋ゆらゆらと起つて岸を打つ時、舟は止つて流緩るれば流れもせず、後へ先へも其儘尾間は流罪の體となつて了つた。

小供は手を拍つて山へと登りはじめる。浅海もこれに續き、君子と自分は後に残つたが二人の間は四五間隔たつて居たのである。



小舟には水棹なし、尾間は驚いたが如何することも出来ない。下男は爲に近所の家へ竹棹を借りて走る。自分は岸に立つて懐から先の聖書を取り出し、故意と素知らぬ顔で繙いて讀む真似をすると、尾間は見て「オヤ驚いた、それは僕のぢやアないですか」と急いで衣兜を捜したが「不可せん、それを見ちやア不可せん、布浦様、武雄さん、眞當です、それを見ちやア不可せん」と躍起となつて叫んだ。

「可いぢやア有りませんか、秘密の本ぢやア無いでせう、先刻貴方が落して御存知ないのを拾つて置いたのです」と自分はたゞ、擲擲ふ積りで益々聖書をひねくる。

「どうも難有う、然し……、ア、困つたなア」と其當惑さ加減は尋常でない。

淺海も不審に思つて足を止めて見て居る。

皮表紙四六版の聖書、それも手磨のした、流石に其職の人が持つて居さうな古ぼけた書、別に不思議はないのである。君子が五歩六歩、自分の傍に近づいた時、表紙の裏に附てゐる紙挾の間から少し現れて居る紙片に眼が着いた、其文字に、鉛筆で「愛する山の女神、君子の君に榮あれ!!!」

自分はハタと書を閉ぢた時、君子は傍に来て「何ぞ書いて有るの?、お見せなさい

な」『尾間様!』自分は呼びかけて「返しますよ、そら!」と投げた。書は無事に彼の手へ、自分は走つて淺海の後を追うた。七人、山に擲うた時、自分の素知らぬ風を見て、君子は勿論、淺海も、又た尾間すら文字を見た自分を怪まなかつた。けれども一種、言ひがたき不快の念、それは前夜、君子の姿の見えなかつた時に感じたそれとは異つて、苦々しい、重苦しい思が自分の胸を壓へて山遊も一向に面白くない。けれども顔には少しも出さなかつた。

一番面白さうなのは子供の次ぎには尾間牧師、次には君子、淺海も面白さうであるが、尾間ほどハシヤいで居ない。君子はやゝ浮れ氣味で、地獄の夢など消えて跡なき夢物語。天國は近きにありさうな様子。

辨當が來た、酒を出す、尾間は見向きも仕ない、淺海は二三杯、自分は五六杯、後には下男が飲んで了つた。

松の小蔭に立てば冷しき風吹き、見渡せば野は半ば刈り取られ、廣びると佳き眺めを面白くとも楽しいとも嬉しかつたのは以前の山遊、今は甚だ下らない。君子と尾間は聲を合はして讚美歌を歌つて居る、淺海は黙つて聽いて居る、自分は黙つて見て



居る。子供等は叔母や下男と戯れて居る。尾間のホワイトシャツは反射し、君子のリボンは翻へる。

此日、尾間と初めて相見、此日より自分は尾間が嫌ひになつた。そして淺海謙輔を何となく慕はしく思ひはじめたのは實に此日からである。

## (八)

山遊の日から五箇月経つた。此短い月日の間に如何なことが有つたか自分の口から言ふよりか淺海謙輔の筆の方が適切で而も意味が深いだらう。

春三月、謙輔は飄然として家を出て再び都に去つて了つたのである。自分すら其前夜まで知らなかつた、朝になつて見ると、謙輔が居ない、淺海の父母は、たゞ昨夜急に思ひ立つて旅行の途に上つたとのみ、我々に告げた。實は父母すらそれが永久の門出たることを知らなかつたのである。

けれども謙輔は途中から自分に一冊の隨筆を送り來した、自分は何度繰返して讀んだらう。

要するに彼は眞實の傳道者であつた、と自分は此處に斷言するのである。自分は彼

に由つて實に新しき生命を得た。と言ふよりか寧ろ、彼に依つて自分は眞實の生命に入る門を開かれたと自分は斷言する。

要するに彼は煩悶の兒である。自分も亦た彼に依つて深い煩悶の淵に沈むことゝなつた。けれども自分はこれを少しも悔いないのである。

彼の名は今以て世間に聞えない。恐らく永久に聞えないだらう、けれども初より社會生存を無視したる彼には當然の事で、彼は勿論、自分とても敢て苦にもしないのである。

『惡魔』は我山林生活に於ける彼の隨筆。かれ自から題して『惡魔』と書し、自分に送つたのである。

其序文に曰く——武雄君足下、此一冊を君が机下に呈す。これ余が隨筆なり、月日なき日記なり、小説なり、演説なり、祈禱なり、呪詛なり、而して實に懺悔なり。過し半年の永かりしことよ！此間、余が君の親切に負ふ所如何に多かりしやを思ふ時、この冊子を示して可なる人、君に非ずして遂に誰ぞ。

今日まで、君は忍んで余が苦悶の聲を聞き給ひぬ、願くは今一度我ために忍んで此



冊子を一讀せよ。讀み了つて火中に投ずるも余に於て憾なし、藏して永く不幸なる青年が紀念とも見給は、これ亦可なり。或は又これを君子に示し給ふとも其は君が處置に任す。

惡魔よ！惡魔よ！生命の秘義に觸るゝ可く、僅に一幕を隅つるのみにして而も遂に爾の捻じたる黑影を拂ふ能はざるは永久の恨なるかな。

斯の如くして余も亦た遂に獸の如く死する也。斯の如くして余も亦た遂に泥土に歸する也——。

自分はこれより左に『惡魔』の數節を抜く。

〔一〕

君子と知るを得たり。君子は十八と言へど都會の娘に比ぶれば十六位にしか見えず。其眼は人を魔するの力あり、睫毛長く垂れて常に物を思ふが如きまなざし。

舉止活潑なれども溫雅の風姿を亂るに至らず、言語明晰にして語音に妙なる響あり、髪は長く黒く房々と耳を覆ふ。教育あるが如し。

豐子は我妹の友なるべし、君子は如何、余が友たるを得るや否や。余は其友たるを

望む。

我が山林の生活を彩るに斯る少女あるべしとは思はざりしに。我も少女も共に幸多からんことを祈る。

君子の母は善き人なるが如し、されど君子の容姿の母に肖ざるは、亡き父の血を受けしものか。

〔二〕

月明を踏んで山に登る。月光流水の如く、山も林も野も村も、寂として夢の如し、岩に伏して祈る。

祈る時、我が胸は掻き亂れぬ。この靜なる山林の生活を得て、而も我遂に安んずる能はざるか。神を祈れども神を知らざる者は我なるかな。

されど、されど我は『不安』を否まざるなり、我が『不安』はわが靈の生命なり、生命の根なり源なり、我は安くして犬の如く死なんより悶きて天界を失落せる惡魔の子の如く生くべし。

空しき言葉なるかな。斯く書しつゝ、我心の焦だちを覺ゆるなり。嗚呼、これ何の故ぞ



や。

〔三〕

幻影あり。

我を導く一個の星あり、我が眼前に淡青色の光を放つて進む。我其後を尾して行く。既にして我が住む地球は星の如く小くなれり。空冥遙に他の群星と共に輝やくを見る。而して我眼を翻へして上下左右前後八方を見渡すに、一道の光輝紫色を帯びて天の一方に横ふを見る、思ふにこれ某太陽の光、暗黒裡に入りて其光を失ひしならん。矢の如く走りゆく光あり。頭上に五個の大圓球あり。皆な血の色を帯びて浮ぶが如く懸れり。

幻影か、幻影か、余は斯る幻影を追ふことを好む。

〔四〕

布浦武雄は才あり氣力ある好青年なるが如し。木實某が彼を化して『信者』となさんと試みし勞力の無益に歸したるは笑ふべきかな。化して石となし驢馬となす、余はこれをアラビヤナイトに於て見る、化して『信者』となさんと勞苦する魔術者を基督の

弟子に見るは傷しいかな。されど怪む勿れ、彼等弟子と稱する輩も亦た化成の『信者』にてあるなり。

神を求めよ、されど如何にして？ 神とは此世の神か、果して然らば貨幣も何の選ぶ處ぞ。

嗚呼吾等が住む此小き星も亡る時あらん、秋の梢より木の葉の落つるが如くして。これ比喩に非ずして推測せる自然法なり、事實なり。此事實を感じて其心を動かすこと、戀を感じて其情を動かすが如くんば、神を求む、然らずんば死を求む。

我黙して山上に立つ時、忽然として我生存の不思議なるを感ず、此時に於て『歴史』なく『將來』なし、たゞ見る、我が生命其者の此不思議なる宇宙に現存することを。あこれ天地生存の感にあらずや。かゝる時、口言ふ能はず、たゞ奇異にして恐ろしき感、わが靈を震動せしむ。思ふ基督が四十日間、荒野に於て嘗め盡したるものは此痛感にあらざるか。

〔五〕

山を下れば社會あり、食物あり、衣服あり、住宅あり、父母あり、隣人あり、こゝ



に交際あり、名譽あり、恥辱あり、而して哀き人情あり。過去に歴史あり、幻の如く我等を追ひ、將來に希望あり、屋氣樓の如く前程に浮ぶ。

こゝに文學あり、美術あり、政治あり、而して此處に宗教ありて神を説く。或は無常を説く。要するに紛々として我等を繞る者、我等が肉となり情となり、生命となり、而して首尾よく社會生存の實を擧ぐ。

社會生存とは何ぞや、余の術語なり、億萬の人、其生存を自覺せりと云ふ。そは社會に於ける生存のみ。

山を下れば社會あり。天地生存を自覺せる余も、社會に入ることを得、忽然として社會の一員となり了んぬ。而も遂に我靈を震動したる痛烈なる感想を忘るゝ能はざるが故に苦惱する余は悲惨なるかな。

## 〔六〕

君子と共に野を散歩す。岡に上り、林に入りて坐す。鮮なる秋の日影、樹間より洩れて君子が肩に點々たり。二人は語りて時の移るを知らざりき。妙なる香氣ありて君子が身を包むが如く覺えぬ。この少時、われは世を忘れ、天地を忘れ、我をすら忘れ

たる、これ何故ぞや。

斯くて又た少時、われ卒然眼を轉じて四邊を視たり、あゝ何の力ぞ、我は此刹那に於て君子を忘れ、一切を沒了して、たゞ夫れ天地悠悠、我が生の此無窮なる空間に繋かれるを感じ、堪へ難き哀愁泉の如く湧きぬ。

## 〔七〕

町なる教會に行く。小さき建物なれども尙ほ百人を容るゝには餘りあるべし。信者の集會三十名ばかり。都會の教會とは異り年若き男女は數名に過ぎず、多くは中年以上の人々にて。小兒も加はれり

傳道師なる尾間利雄と語る。快活多辯、愉快なる人物なり。彼は我家をも訪ふべく約しぬ。

神よ、願くは我をも謙遜なる信者の中に加へ給へ。我が苦惱を柔らげ給へ。あゝ在さいるところなき神よ、無窮を統べ給ふ神よ、常に此生の泡沫の如きを感じて、容易く永久の生命を信する能はざる我をも憐み給へ。人類ありて以來、幾千億萬の我々が祖先今何處にありや、あゝ神よ、時の不思議なる謎を示し給へ。



丘の麓に民家ありて其屋根よりは青烟の立登るを見る、其裏には父あり母あり妻子あり、彼等は朝な朝な起き出で、野に耕し夕は團居して談笑す、屋後に墓地ありて月明の底に眠れり。あゝ神よこれ我には大なる謎なるかな哀しき謎なるかな。あゝ神よ、我も亦た彼等と共に人情哀樂の泉を汲んで此生を安んず可き乎。

(八)

尾間利雄来る、談論す。君子傍らに在りて聴く。尾間曰く、君は愛を疑はざる可し。既に愛を疑はずんば神の愛、基督の愛を信するに於て異存のあるべき筈なしと論鋒頗る鋭利なり。我一々うなづきぬ。尾間は轉じて君子に向ひ、淳々として天に在す父の愛を説き、永生を説き、人の罪を説きたり。更に天国を説き地獄を説きぬ。而して曰く永遠の亡、これ地獄なりと。君子の心動きたりと覺し。

われは明言す、斯る傳道は『虚偽』なりと。あゝ天とは何ぞや、命とは何ぞや、亡とは何ぞや。

形容詞を止めよ、説教を止めよ、自己を宇宙の外に置き、神と人と其處に並べて鐵物の見本を説明するが如くに宗教を説く勿れ。理學士も熱心に語るなり。爾の熱心を

誇る勿れ。眞面目を誇る勿れ、眞面目といふ心持は大した價値あるものに非ざるなり。心的現象の一に過ぎず、人は木片をも大眞面目に信するもの也。

神の有無を言ふ勿れ。『人』なる言葉をや止めよ、爾先づ生物の一個として面と面、直ちに此無窮なる宇宙に對し、爾の生命其者の存在を直感せよ。

されど之れも亦た余が説教にあらざるか。

(九)

人は世間から生れ出で、世間の中に葬られて了ふのではない、天地から生れて天地に葬られるのである。世間とは人々相集合して成立つ形のない者、人とは物質、此物質は此大なる自然てゝ物質の一部分である、これほど簡単な事實はないので小學校の生徒も知つて居る事である。然るに不思議にも人は此事實を忘れてしまひ、成長するに従ひたゞ世間ばかり相手に生きて居る、世間を相手に或は泣き或は笑ひ、そして一生涯を送つてしまふ。そしてヒョククリ死んで了ひ、彼が全く忘却して相手にも仕なかつた自然の中に消滅して了ふ。

凡て人間界の不思議中、これほどの不思議はないのである。さういふ私もやはり其



お仲間なので、四六時中、夢にも現にも私の心を動かして居るもの、九分九厘は世間である。

ところが、昨夜のことであつた、私はフト真夜中に眼が覺めた。夢も見ない熟睡の中から覺めた。一室は仄暗く、あたりは森として居る。此時、私の心に電のやうに閃いて來た一つの思想があつた、思想といはうか、感情といはうか、將た現象と言はうか、心理學者の分類するところの知情意の何れに屬すべき者たるを私は知らない。

『ア、不思議！、此處は何處だ、宇宙だ、自分は此大宇宙の一部分だ、生命よ、生命よ、此生命は此宇宙の呼吸である』

たゞ斯う言へば言葉の連續に過ぎないが、然し私の感じたことは到底如何なる言葉で以てしても現すことが出來ない。此畏ろしき心の現象が閃いた時、其時實に私自身の存在を感じたのである。世間に於ける自己ではない、利害得喪、是非善惡の爲めに心を惱す自己ではない。文學とか宗教とか政治とか、はた倫理とかいふ題目に思を焦す自己ではない、又た親子の愛、男女の戀に熱き涙を流す自己でもない。たゞ夫れ一個の生物たる私の存在、此宇宙に於ける存在を感じたのである。

然し忽ちにして此心の現象は消えて了つた、恰度闇に閃めく電光が忽然として又た闇に消えて了ふやうに、私は再びこれ呼び返さうと力めて見たがだめであつた。

しかしながら此時私は染々と感じた。『さて、人間とは不思議なものである。生命とは不思議なものである』と。

以上の如く君子に語りたれども、たゞ首肯けるのみ、さして異なりたる感を起したる様も見えざりき。

神を説くは易し、神を求めずんば止む能はざるの境に人心を導くことは難し、尾間の言は解し易く、我が語るところの經驗は、經驗ありし其人にあらずんば遂に解すべからざる乎。

(十)

鬼あり、黒き翼を振つて我室に現はれぬ、聲荒らかに曰ふ『來れ！、爾に見すべきものあり』彼に尾して飛びゆくに其道程を知らず。鬼曰く『見よ！、爾彼等を知るか』と。黒闇の裡、色彩鮮明に現はるゝ二個の人物あり。一は尾間利雄、一は君子！

『爾、彼等を知るか』鬼は冷かに問ひぬ。



「知れり。一は傳道師尾間利雄。一は少女君子」

「見よ、彼等さも睦じき様ならずや」

「然り、互に寄り添うて歩むなり」と我が聲は慄へぬ。

「見よ、彼等相抱きぬ」と鬼は私語けり。我は顔を背けて見ざらんと欲して能はず。

鬼は晒ひて、

「何ぞ正視せざる？、彼等は樂げなり」

「然り樂げなり、されど我は多く見ること好まざるなり」

「何故ぞや。花の咲ける、鳥の囀づる、男女の相親しむ。みな自然の女神の織りなす

綾のみ。怪むに足らざるなり」

「然り、然り、爾の言ふところの如し」

「然も爾の顔に苦痛の色あるは何ぞや」と鬼は苦笑して問ひぬ。

「女の愚なるを憐むなり」と我が聲は激しぬ。

「欺く勿れ、自ら欺く勿れ。愚なる女を爾は何が故に戀ひるた」

「あゝ我戀ひせしか、戀とは何ぞや」

「戀とは爾が今、彼の少女の上に注ぐ心の様の如きを言ふなり。戀とは唯だかくの如きのみ」

「我は彼女を惡む」

「則ち戀のみ。戀は惡み、恨み、憤ることを教ふ。爾も亦た其奴のみ。……見よ、

見よ、彼等も戀の奴なり、されど彼等は樂げなり、幸福なり、爾これを祝せざるか」

余は口言ふ能はず、たゞ眼を張つて闇黒裡に旋轉する二個の幻影を見るのみ。彼等

は聲高らかに得意の讚美歌を歌ひつゝ、互に手を執つて胡蝶の如く舞ひ、落花の如く飄

へり。翻々として上天遙に上りゆくなり。

鬼は喜ばしげに叫んで曰く「あゝ爾等永久に幸福なれ。神の御前に爾等の戀を遂げ

よ！」

「惡魔！惡魔！」と我が血は沸き、我が眼目は破け、我が聲は噎れつ、直に無限の闇の底深く身を躍らせば、飄々蕩々として窮まるるところを知らず、火光矢の如く身邊を掠めて飛ぶこと無數、泣く聲、叫ぶ聲、遠くして哀笛の如きもの身を繞りて聞ゆ。夢にわらず、現にわらず。



〔十一〕

布浦武雄と相親しむこと益々深し。君子は町なる教會に通ふこと度重なり、尾間利雄は余が許に來る毎に必ず君子を訪ひ、時として君子をのみ訪ふことあり。武雄は尾間をよろこばざるが如し。

武雄と尾間が問答こそ面白けれ。武雄曰く『君は女の信者を作ること、男の信者を作ること、何れを難しとし給ふや』

尾間は眞面目になりて『そは同じことなり。等しく人なる以上は神のこれを召し給ふに何の差別あらん』

『神の召し給ふには差別なかるべし。されど等しく人形を作るにも男形と女形とは勞力に於いて甚しく差ありと聞く、信者を作る亦た此類ならずや』

尾間は益々眞面目になりて『我等を人形造に喩へ給ふこと苦しからず、基督は自身を牧者に喩へ給ひしことすらあり。故に君が問に答へん、女は男に比ぶれば心直にして教を納れ道に順ひ易し、男はこれに反す、されば女の信者を作るは甚だ易きことなり』

『且つ甚だ樂きことなるが如く見ゆ、如何』と問はれて尾間は大聲に笑ひ『左なり、左なり、大に樂きものなり』と言ひ放ちて意に介せざる様なりし。

〔十二〕

惡魔あり、私語いて曰く『何故に爾は自殺する能はざるか。自殺の罪惡説は爾の冷笑する處ならずや。爾は罪惡説の故を以て自殺せざるには非ず、自覺せよ。』

爾に希望ある乎。曰く無し。爾に平和あるか。曰く無し。爾の有するところは唯だ苦惱のみ、千萬人の中の一人も經驗することなき苦惱のみ。爾は詛はれつゝあるなり。爾は宗教を以て満足せず、爾は花の美、月の光を以て満足せず、爾は實に人の力を以てしては遂げ難きものを追はんと悶くなり。

今や爾は何事を以てするも興味を感ぜざる也。然らば何故に自殺せざるか。死は萬事休する最後の平和に非ずや。平和、然らずんば空。

此處に一個鋭利なる小刀あり、爾の爲めに特に用意し置きたるなり。以て胸を刺すに足る。  
イザ一擧手のこと！十分にして或は五分間にして足る。僅かに五分間の苦痛！



爾が父母、兄弟、朋友、總て爾の一度見し處の人、見ざる億萬人、すべて後より爾を追ひゆく可し。彼等も終には爾と等しかるべし。數年若しくは數十年の遲速のみ。イザ小刀こゝにあり、何故に躊躇ふか。一擧手の事、五分間にして足る、五分間、三分間！

見よ、爾の崇拜する古英雄、古聖人、爾の親しかりし朋友某等、皆な死の國の民ならずや。死の國には友多し、友多し、彼もあり、彼もあり。

一擧手のこと！何故にためらふか。嗚呼、爾はたゞ空くためらふのみ、其理由を解せざるなり。若し理由ありとすれば一個、僅に爾を憤激せしむるものあり、曰く自殺は薄弱の行爲なり、平和を得ずんば得るまで戦へ、信仰なくんば信仰を得るまで苦戦せよ。自殺は薄弱の行爲なりと。

されど爾は已に此憤激を用ゆること餘りに數々、最早爾を立たしむるの彈力なきまでに使ひたり。

欺く勿れ、爾は未だ真面目ならぬなり。自殺をも爲し得ず、希望もなく平和もなし。爾は憐の男なり、あゝ爾は世にも憐なる一人なり。死か生か、其一を正しく選ぶ能は

ず、獸の如く生くることすら能はず、たゞ苦惱のみ、名け難き苦惱の兒のみ。たゞ肉體を古びたる衣の如く纏ひつゝ、戰慄す、吐血す』

われ靜に答へて曰く——『自殺して終に如何。生と死と何の相違ぞ。宇宙はあらゆる法則なり。死するも生くるも我等この法則の外に脱るゝ能はず。死は吾等を運びて宇宙の外に持去るかか如き感想を懐くことは、自殺者及び死を輕視する者の總ての誤謬ならずや。』

われ此處に嚴存す。宇宙は全體なり、あゝ我れ此存在を如何すべき。死するも生くるも遂に此存在の事實は人の力もて打消し能ふべきに非ず。在るものは如何にしてもあるなり。あゝ我、不思議なるかな』

惡魔笑つて曰く——『いみじくも言へるもの哉。爾は終に苦惱の兒なり。死の存在を得るに若かず、死の法則に順ふに若かず』

(十三)

戀よ、戀よ、われ戀を欲す。少女の香に打たる、時、己が惱める魂は安きを得るなり。君子と偕に在るときは、限り知らぬ樂さを覺ゆ。



されど君子は余を憎からず思ふのみ、寧ろ彼の尾間利雄を戀ひつゝあり。

〔十四〕

武雄と語る。余曰く——『若し冷かなる言葉を以てすれば我等が選ぶ可きは二者の一のみ。曰く天地に大道存し、大道は神より出で、人は之を信じて、愛と美とを永久の眞と信ずること。曰く天地はたゞ盲動の暗黒のみ、人は愚と悪との肉塊のみ、美とは空名のみ、愛とは動物の發作のみ、空より生じて空に消ゆべきのみ。』

此二者のみ、光若くは暗。されど奇怪なるは我等が心の立場なり。二者の一をも信ずる能はず。確信する能はず。確信の實を擧ぐる能はず。

道路二岐に分る、我等が足其分點に立つ。右すべき乎。右すべくんば右し、左すべくんば左す、決する能はずんば躊躇す。凡て此等の行爲は極めて明白なり。

然るに天地人生の意義を思ふ時に於て、人の心も奇怪なるかな、光明か暗黒か、其一を選ぶべくして選ばず、躊躇し苦悶すべくして然らず、平然として談笑論議す。

懸崖の上を歩む時、深淵眼下に蒼たり、路帯よりも細し、心期せずしく戦く、足自ら慄ふ。光と暗とを界する危道に立ちて我等が心の平然たるは何故ぞ。

要するに吾等の心は光明と暗黒とを選ぶべき必然の地位に立たざるなり。習慣と傳説の底に住みて日より日と動物的生命を驅りつゝあるのみ。斯くて尙ほ善といひ惡といひ神といふも終に空しき言葉ならんのみ。

所謂宗教を説き信仰を叫ぶ者、此類ならぬは殆ど稀なり。基督が十字架の苦を説く前に、荒野の苦悶を解せざる可からず。基督は十字架に依つて尊し、されど荒野の苦悶ありて基督ありしなり。

吾等は先づ正直に我等が心の今の立場を明めざる可からず。『求めよ然らば與へられん』果して然らば先づ求めよ、されど先づ求むるに先つて求むるの心を求めざる可らず。

〔十五〕

武雄と共に淨瑠璃の先生を訪ふ。先生の名は虎三。三十に近き壯夫なり。赤顔の背高き男。

丘を越えて行けば、藪の小蔭に茅屋あり、冬の夜の闇を破りて障子に映る火影のゆらぐを見る。裡に入れば土間に築きし竈の下熾に燃えて、其傍に蹲居りたるは虎三なり。



り。我等の入り来るを見て起たんともせず、手を火にかざしたるまゝ、顔を向け「此寒のによくこそ」

余は武雄が就いて學ぶところを聞き、更らに虎三のみが語る一段を聞きぬ。彼の肉聲の一高一低、嗚咽が如きとき、忽ちさら／＼と音して屋外におとなふものあり。暫くして止みぬ。一室の中、たゞ朗々の聲、痛哀の調を聞くのみ。

辭して戸外に出づれば、飛ぶが如き雲間より月現はれ、過ぎゆきし霞の跡白く狭き山路を隈どれり。武雄は今夜學びしところを歌ひつゝ、ゆく。

岡の頂に達す。見渡せば近郊の田園樹林、寒き月影に沈み、天外の清光霜を帯ぶ。

二人は暫く立つゝけ居たりしが、此時、言ひ難き哀感と共に我知らず落涙す。

『何が故に落涙したまふ』と武雄問ひぬ。

『この如き時、涙を禁じ能はざるもの余のみには非ず。たゞ去れ月明の清きを哀むといはんか、あらず、君の歌ふを聞き、其聲の冴えて山彦に響くを聞き、山を見、林を見、仰いて千古の月明に對し、窮りなき大空を望むとき、人情と自然との幽なれど絶えざる約束を感ぜざるを得ず、これを以て泣くなり。』

君は曾て、旅して遠く笛の音を聞きしことありと言ひたまひぬ。余も亦たこれ聞きぬ、而して今夜に等しき哀感に打たれぬ。この如きは其他に數々余の経験せしところ。あゝ余が存在の不思議にまどひつゝも猶ほ僅に堪へ忍び得るは全く此哀感の故のみなり。時の羽風耳邊を掠めて飛び、此生の泡沫の如く、人類の運命の途に果敢なきを感じて消魂する時も、僅に此哀感の力にて我が心は幽ながらも永遠の命の俤に觸れ得るなり』

## (九)

浅海謙輔の『悪魔』は大概以上の如きものであつた。自分はこれを君子に示さうかとも思つたが、要するに無益のことゝ思ひ止まつたのである。

君子は初め自分を愛して居たが、然しそれは所謂の從兄妹の戀で言ふに足りない。謙輔が來てから、君子の心は大に傾き、自分は確に二人の戀の成立つべきを思つた。けれども謙輔は君子に取つて餘り大きな謎語であつた。謙輔の言葉は決して甘つたるくなかつた。

其處へ現れたのが尾間利雄である。利雄は熱心に君子を説き、神の愛を嚼んで含め



て聴かした。得意の讚美歌を以て君子の心を動かした。そして二人は殆んど戀の底に沈まうと仕たのである。

浅海が去るや、自分は叔母を説いて君子を自分の友なる隣村の青年に嫁がしめた。君子は愛の自由を説いて此結婚に反対した時、叔母の驚愕は尋常でなかつたのである。何時の間に君子が斯る主張を公言するやうになつたのか、殆ど寢耳に水の感があつたらしい。

けれども兎も角も君子は遂に自分の友の許に嫁いで了つた。そして間もなく尾間は轉任して我郷里を離れた。

君子には今、一人の兒が出来て、頗る平和に暮して居る。神の愛は忘れて了つたらしい。耶蘇教の耶の字も今はなくなつた。自分がをりく浅海謙輔のことを話すと、彼の頃は面白かつたとのみ。

言ふことを忘れて居たが、謙輔の父母は謙輔が去つて後、半年目で他に轉任したのである。それで謙輔は其後遂に一度も我山林に來ないのである。恐らく永遠に來ない

だらう。

尾間は相變らず神の愛を説いて居ることだらう。謙輔は今も「惡魔」を筆にしつゝあるや如何に。



正  
直  
者



見たところ成程私は正直な人物らしく思はれるでせう。たゞ正直なばかりでなく、人並變つた偏物らしくも見えるでせう。

けれども私は決して正直な者ではないのです。なまじ正直者と他から思はれたばかりに容易ならぬ罪を今日まで成し遂げて生涯の半を送つて來たのであります。

鏡に對へば私にも直ぐ私自身の容貌が能く解ります。私の顔には角といふものがありません。冴えた色がありません。眉毛が濃く、頬鬚が多く、鼻が丸く、唇が厚く、そして何處かに間の脱けたところがあります。笑へば皆に深い皺が寄るのです。それが――淺ましいことには――言ひ知れぬ愛嬌になつて居ます。それに私は随分大きな方ですから、何時も着物は袖の足りないのを着て太い手が武骨に出て居るので一見素



朴らしくも見られるのであります。身體の小さい人はチヨコマカと才はじて、身體の重味のないばかりか心の重味までが無いやうに他から推れるものですが、身體の太い男は、馬鹿でも悪黨でも横着者でも先づ他から重く思はれるのが普通で、私も其例には洩れなかつたのであります。

口數多ければ未だしも、私は口無調法でした、けれども滔々と饒舌れないかといふに左様でもないのです。時に由つては随分人並の辯舌は振ふのであります。唯々、これが天稟でせう。大概の場合は他人の言ふことのみ聞いて、例の皆の皺を見せるばかり。それで居て他人の言ふことは何もかも能く解り、推測もする、邪推もする、裏表も知つて居るのであります。

私のやうな男は世間に随分見受けますが、皆な其身の置かれた境遇、例へば昔でいふ士農工商の境遇に居て、それ／＼面白い芝居を打つて居ます。たゞ此種の人は、(私も其一人)滅多に其境遇から外には飛び出し得ないものであります、其飛び出し得ないところに彼の重味も着いて、其打つ芝居が愈々巧く當るのであります。ところで私の境遇の低いのと、それから私には或特別の天性があるので、私の演

じて来た芝居が誠に淺猿しい、醜いものとなつたのであります、或特別の天性といふのは、今こゝで言はないでも、後で段々に解つて来るでせう。

しかし誤解をふせぐ爲めに一言します、私は決して世の中のこと悉く芝居と同じだといふ説を持つて居るのではありません。たゞ前に説きました如き、私共のやうな性質を持つて居る連中は、何處かに冷いところがあつて、身に迫つて来た事柄をも、靜に傍觀することが出来るのです、それですから極く眞面目な、誠實な顔をしながら、而も克く巧んで物事を處置することが出来ます。既に巧んで處置するといへば、其處に芝居らしい趣があるではありませんか。

さて、これから私の身の上を二ツお話しします。私の父は古い英學者で永年中學校の教師を務めて居ましたが、同窓の友ともいふべき人々は皆其の學び得し新智識を利用して社會樞要の地位を占めましたけれど、私の父のみは最初語學の教師となつたがり、終に其職以外に何事も爲し得ず、私の十二の春まで一教師として此世を送り、變則英語の專賣者になつて生涯を終へました。父の死と共に私は全くの孤兒となりました、といふものは母の顔を私は少しも知りま



せん。父は私の母の亡くなつて後は、始終妾同様なものを置いたばかりで、それも七人八人ではなく、私の記憶に存つて居るばかりでも四人ばかりあり、終に眞の家庭らしいものは作らなかつたのです。

何故父は、さる不倫なことをして居たかといふ理由は知りませんが、けれども父の子なる私の性質から推測しますると、父は唯だ肉慾の満足を得るばかりで女を置くことを知つて、家庭などのことには全然心を動かさなかつたのだらうと思はれます。

私の知つて居る三四人の妾に就いても父は情愛を以てこれを選した様子は少しもありませんでした。私は少し許り酒を呑みますが父は決して酒杯を手にしたとなく、又た私よりも更に無口で、家に居てもたゞ茫然と火鉢に對つて烟草を吹かして居るか、それではなくは机に向つて英書を繙いて居るかで家中は常に寂寞として居ました。

それですから女中兼帯の妾が來ても初の中は父や私を對手に饒舌りしますが、一月二月と經つ中に何時しかこれも無言の業に堪へ得るやうになつて了ふのです。

冷寒い空氣と暗鬱な影とが常に立置めて居る中に、私も亦た父と同じやうな性質で、別に悲しいとも辛苦しいとも思はず生育ちました。それですから私は父の在る前か

ら既に孤兒同然であつたのであります。

兄もなく弟もなく、頼にすべき親戚もなく、十二歳の少年は父の死と共に父の友なる某中學校の國語の教師の家に引取られました。教師の姓は加藤。其加藤の言葉に依れば私を引取つたのは父が生前の依頼であつたさうです。

加藤が私を親切にして呉れたか如何だかといふことは別に言ふほどのこともありません。普通の學僕同様なことを仕ながら英語の夜學校に通ひ、國語の方は直接に加藤から少しづつ學んで居ましたが、孤獨には慣れて居ますから私の心持では加藤の待遇に就いて格別の感じを持ちませんでした。

『お前の父上は至極好人物であつたが、惜いことに活動といふものを仕ないで退居ばかり居なすつたから、折角の利器を懐きながら老朽ちて了はれた。お前は一つウンと世の中に飛び出して大に活動しなければ可かん、學問が如何あつても活動といふことが無ければ今の世は用ゐられんちや』加藤は其細い眼を光らして自分に向ひ此言葉を聞かしたことは幾度であるか知れませんが、

なるほど左様だ、加藤の叔父さんの言はれる通りだと私も思はぬではないが、天稟



は争はれぬもので、重苦しい性質は言葉の弾力や、理想の槓杆では容易に動きませんでした。所謂、なるがまゝに移つてゆく其境遇に處して唯だ其日々をじつくりと暮す、それが私の運命であつたのです。

十九の秋、加藤は病んで床に就き、二十日ばかりで遂に此世を去りました、六十七歳ですから先づ以て長命の方でせう。死ぬ少し前に私を枕許に喚んで、斯ういひました。

『お前の父上から私が受取つた金は四百圓足らずであつた、家財や書籍を賣つて二百圓ばかり、都合六百圓に三十圓不足する金を私がお前と一しよに預かつたのぢや。父上の頼みは此金を食料に、金の續く間お前を世話して呉れとのことであつた、それがお前の十二の時から今年までザツと八年の間で、預つた金は大概無くなつて了つたが未だ百圓ばかり残つて居る勘定になる、それを今お前に此處でお返しするから、お前は私の死んだ後、この金を持つて獨立して見るが可からうと私は思ふのぢや』

加藤の言ふとは私に能く飲みこめました。要之、加藤の死んだ後、私は百圓の金を持つて、加藤の家を出てゆき、如何にもして獨立ちで世の中を渡つて行くことになつた

のであります。それでも加藤が私に百圓の金を渡すといふのが今から思ふと不思議で、實をいふと、あの時加藤から一文なしで直ぐ立退きを命ぜられても私は文句なしに其言葉に従ひ、文句のないばかりか、當然のこと、考へて立退いたのであらうと思はれます。ですから百圓受取つた時は、眞實私はうれしう思ひました。加藤の死んでから一週間経つて、私は住みなれた家を、別に大して悲しいとも思はず、出てゆきました。

落着く先は麴町區某小學校の直ぐ近所にある下宿屋の一室です。私は加藤生前の世話で小學校の英語の教師になりましたので、月給は十圓、下宿料が七圓ですから差當り食ふには困りませんでした。

其頃の私は今よりも丸顔の、可愛い顔つきをして居ました上に、言葉の少ない、それで愛嬌もある少年でしたから、校長初め同僚からも可愛がられ、下宿屋のおかみさんからも「澤村さん〜」とちやほやされました。大概のものは斯うなると一寸得意になる者です。まして年からいふと生意氣盛ですから、つい言はないでも可い悪まれ口をたゝいたり、怒らんでも可いことに顔を赤くして聲を高めて見たり、かりそめにも先生を鼻の先にぶら下げて居る者ですが、私に限つてそれがありません。何時も同



じやうな顔をして下宿を出て、同じやうな風で歸つて来る、袴を脱ぐと直ぐ疊んで納ふ、見たところ實體な感心な青年であつたに違ひありません。

下宿屋のかみさんといふのは其ころ四十四五でしたらう、年頃の娘と十四になる男の子と三人暮の後家の内職で、間数は僅に四個、それも立派な部屋は一間もないのです。娘はおかみさんに似て細面の、色の蒼白い、病身らしい子でしたが、眼は黒眼勝のはつきりとしたので、先づ此子の特長とでもいひませうか、其眼で熟と人の顔を見て、暫くして微かにほゝゑむのが此娘の癖でした。名はおしんですから、私どもはしんちやんと呼んで居たのです。

おかみさんは輕薄な御世辭も言ひませんが、下宿人の誰にも親切であつたやうです。別でも私を可愛がつてくれて二月三月居る中には親子かと思はれるまでにしてくれました。けれど私は情ないことに、親子の情といふものを知らない人間ですから、うれしいとは思ひましたが、たいては感動もしなかつたのです。

人の心ほど奇態なものはありません。それほどの親切に對して私が感動もせず、初めて下宿に來た時と少しも變らぬ態度を保つて居ましたので、おかみさんの心は益々動

き、愈々私に感心して、私をば又とない正直な、温順な謙遜な青年だと全然信仰して了つたのです。

娘のおしんも同じことで、母のやうに口にくそ餘り出して言ひませんが、私を信仰する熱度は母と少しも變らぬことが其舉動で私には能く解つて居ました。

今から思ひますと、眞實に正直な、温順な、謙遜な人といふは無論、此私ではなく、此娘でありました。私はおしんをば完全無缺の人間とは思ひませんが、少くとも女として彼の位なのは餘り類がないと今では信じて居るのであります。ひとつは健康のすぐれないためでもありませんが、おしんの起居振舞から言葉から、こゝろばせまでが如何にも穩かで、おつとりとした中に情深いやうなところがありません。

年は二つ違で、先づ同年輩ですが、私は年よりもふけて見える方、おしんは子供らしいところがあつて、二ツも若く思はれるはうでしたから、おしんの私に對する心持は母と同じながら、其うちに何處かあまへるやうな風もあつたのであります。

私が一人部屋にすつこんで居ると能く遊びに參りまして色々な話をして事によると夜を更すこともありましたが、そんなこんな例を申せば或晩のことです、



「あなたの親父はどんな方で御座いました」とおしんが訊きましたから、  
 「どんな人ッて別に言ひやうもないが、大變烟草が好きでした」  
 「きつと好い方でしたらうねえ」

「何故して？」

「だッて貴方の親父ですもの」

又或時のことです、おしんは私が謝絶のを無理に私の衣服を疊みながら、

「貴方は他から話しかけないと、めつたにお口をき、ませんねえ」

「さうですか、自分ではそんな積りもないのだが」

「でも母もさう申して居ますよ」

「さうですか、それではこれから氣をつけませう」

「あら、別段悪いと申したのでは御座いませんわ」

「イ、エ、そんなことは善くないことです。私の父など始終黙つて居て、  
 口をきかないで死んで了ひました」  
 「でも必定お心は優しい方でしたらうよ。なんでも宅の父上のやうであつたらうッて、

母が申して居ました」

「あなたの父上はどんな方です」

「口数はき、ませんが、何時でもにこ〜して居て母でも私でもめつたに叱るなんぞ  
 いふことは御座いませんでした」

「私の父はにこ〜したことは御座いません」

「エア、それでは可恐い方でしたの」

「別に可恐くもありません、たゞ黙つて居るばかりで小言も言ひませんから」

「母上さんは如何でした——さう〜貴方は母上さんは御存じないのですねえ」と言  
 つておしんは暫く黙つて居ましたが、何と考へたか、

「貴方宅の母を如何思つて入らつしやいます？」と訊きました。

「優しい方と思つて居ます。眞實の母のやうに思ひます」

「あら、うれしいこと、母が聴いたら如何なによろこびませう」

先づ斯ういふ風でしたが、おしんは矢張年頃の娘です、母と同じ親切な心ばかりで  
 はすみません、月日の経つと共に、親切以上の心で私に近づくのが私にも解るやうに



なりました。母親も心づいて居たには違ひないですが、如何いふ者か、それを少しも氣にしないばかりか、娘と一しよになつて益々私を可愛がつてくれました。さてそれなら私はおしんを如何思ひましたかと言ふと、おしんの情の十分の一も私にはありませんでした、そんなら私はおしんを冷かに扱つたかと言ふとさうではありませぬ、おしんの思ふまゝ、思はせ、するがまゝにさせて置きなした。

そして其の結果は如何でせう！、忘れもしませぬ二月十五日の夜のことです。夜の十二時過ぎでした。下宿人は勿論、母も男の子も皆な寝て了つて家の内はシンとして居ましたが、外はドン／＼雪が降りそれに風が出て雨戸をうつ雪の音がサラ／＼と折節聞えて居ました。おしんは九時ごろから私の部屋に来てゐたのですが、十二時打つて何分か経ちまして部屋を出てゆく時、

『よう御座いますか、必定二三日中に母上に言つて頂戴よ、母上は二つ返事で承知しますから、ね、必定言つて頂戴よ』と繰返して言ひました。その時のおしんの顔は今でも忘れませぬ。

この晩から私とおしんは母親の眼をも忍ぶ仲となりまして、おしんは望を達したと

いふ満足の様子の外に、深い決心と、かすかながらも言ひ知れぬ恐怖とで、子供のやうに笑ふ時があるかと思へば、蒼い顔をして吐息をついて居る時もあり、そして私の様子は以前と少しも變らんでありません。たゞ竊かに願つて居た慾望、おしんの身體が自分の身體に近づく毎に愈々つのる慾望、後には機會があつたらとまで熱中して居た慾望が達せられたので大に満足しましたが、心の平穩なることは以前の通りで自然變つた様子が顔にも舉動にも現れなかつたのであります。

おしんは身も魂も私にゆだねて了ひました。私を愛し私を信じて、少しも疑はないのです。それです。早く母親に打明けて結婚を申込んでくれると言ひましても、私にまア／＼私にまかせて置けと申せば、それで安んじて居たのです。

私が前に、自分に特別の天性があると申したのは肉慾のことです。私のやうな物に偏らず、冷やかに、其傍を素通りしてゆくことの出来る男が、男女の慾となると前後を顧ることが出来ませんでした。それです。おしんの操を一度破りました以後は、おしんの好む好まぬに關はず、母親の目も同宿の者の眼もくらし得るかぎり、此慾を満たしました。それをおしんは私の愛情の猛烈なためだと解して居たのです。



それで私は結婚の積がないかといふに、さうでもないのです。いつそ結婚して丁はうかと思つたことも有りましたが、どうもそれをおかみさんに打出していふ決心は起りませんでした。言へばおかみさんは大よるこびて承知することも知つては居ましたけれども、ぐづぐづで二月ばかり経ちました。

ところが四月の末のことです、其日は日曜で私は同僚の一人からは非遊びに來いと招かれまして、宿に歸つたのは夜の八時ごろでした、部屋に入るとおしんが其處に坐つて居ましたが私の顔を見るや直ぐ突伏して了つたので、流石の私も胸がドキリとしました。急いで傍に坐り、

『如何したの、え、如何したの』

見ればおしんは泣いて居るのです。『え、如何したといふに、しんちゃんやヨラしんちゃん？』

『だつてね、母上が餘りなことを言ふのですもの』といひながら擧げた顔を見ますとなるほど涙は出て居るけれど泣いて居るのか、笑つて居るのか判らないのです。これで私も少しは胸が落着きましたから、

『何て言つたの母上さんが』

『何とつて別に判然したことは言ひませぬけれど、何だか二人のことを母上は感付いて居るらしいことよ』

『それで何とか言つて』

『お前どうする氣かとだしぬけに聞きますから、どうするツて何を、と言ひましたら、母上にだけは明亮言つておくれ。お前は澤村さんと約束でも仕たのではないかと言ひますから、私はたゞ黙つて居たのよ。さうすると母上さんが、女といふものは操が大事だとか何とか色々なことを言ふのですよ。私悲しくなつて泣きたしたの。さうするとね、母上さんが、若しお前が澤村さんの妻になる氣なら私も決して否やは言はない、澤村さんなら私も氣に入つて居るのだからお前の決心さへちやんと打明けて呉れば私から今夜にでも澤村さんと相談するが如何かと申しますのよ。私もそれならさうして頂戴と言はうかと思つたけれど、若しね、だしぬけに母上さんが貴方にそんなことを言ひだしたら、貴方に考へがあつて其とふつかるといけなと思ひましたから、何と言つて可いか分らなくなつたから黙つて居ました、さうすると母上さんが黙つて』



了しましたから、私尚ほ悲くなつて泣いて居ましたのよ。けれどもね、何とか言はないと悪いと思ひましたから、それぢやア母上さん何卒か貴女から澤村さんに聞いて見て下さいと頼みましたの。けれども其前に私から一寸澤村さんに言うて見ますから其後にして下さいと言ひましたのよ。それぢやアお前の可いやうになさいと母上さんは何だか機嫌が悪いのよ。だから私も直ぐお部屋へ来て先刻から待つて居ましたの』斯う言はれて私はすつかり當惑して了つたのです。これが當前の方なら、「ウンよろしい、それなら私から直ぐ母上さんに相談しよう」と決心するところですけれど、私には其決心が出ないので。私の性質として、かういふ場合に直ぐ熱することが出来ないのです。

『それは困つた』と口を衝いて出るかといふに、さうでもないのです。

『それでは母上さんが今に何とか相談に来るでせう、其時よく相談すれば可い』と静かに言つて火鉢にもたれて涙の痕をハンケチで拭いて居るおしんの背を撫でました。すると例の慾情が燃えあがりましたから我知らずおしんに摩寄りました。何と淺猿しい人間ではありませんか。

其途端にズツと障子を開けて入つて来たのが母上さんです。(其頃私はおかみさんと呼ばず母上さんと言つて居ました他の下宿人の一人二人もさう呼んで居たのです) おしんの來て居る時、母上さんの來ることは此二三ヶ月殆ど無いことですから私は喫驚しておしんの傍を飛退きました。おしんは起つて外に出てゆきました。其あとに母上さんは坐りましたから、私も其向ふに坐り、二人の仲には小さな長火鉢があるのです。

『私少し御相談があるのですが』と先方は直ぐ切りだしました、そして力めて話を眞面目にしようとする様子ですが、やはり言ひ悪いと見えて笑を含んで居るのです。

『ハア』と言つたぎり私は何とも言葉が出ません。

『大概お察しても御座いますせうが。それで貴方のお心持は如何でせうか、それを一應承はりませんとね、私も心配でなりませんから』

『イ、え、最早僕には如何といふ意見もないのですから、母上さんのお心持一つで……』

『それでは私にも別に否應はないので御座います、あんな者でも貴方が生涯連れ添つ



て下さるといふ事なら、私も貴方の御人物は承知して何時も感心して居ますのすから何よりだといふ事になります」

『なに僕のやうな男が……』

『それでは急に話を決めませうでは御座いませんか、それでないと、それでないと、まア貴方に限つて萬々そんな事はありませんけれども、若いもの同志のことですから、世間では又た何と申すか分りませんし、さうすると貴方の學校の方も何ですから……』

『さうです、だから僕も何です、その一應、その校長にだけは打明けて相談して置かうと思ひますから……』

『それは可いお考です、校長さんにお話になりまして、校長さんが表面仲に立つてくだされば何よりで御座います』とこれで相談は決つたのです。

母は事の成行きを少しも疑ひませぬので、校長に相談すれば萬事好結果と呑みこんで了つたのです。私は校長に相談すると言つたのは一方の血路を開いて置いたのです。私のやうな正直者は何時も波に流されながら波に乗つて居るのです。

母上さんが自分の居間（私は一室しかない二階に居ました）に歸つてゆくや私はこ

ろり寝ころんで二十分ばかり茫然して居ましたが、其間何も考がないのでたゞぼんやりと天井を眺めてまじ／＼と眼瞼を動かして居たばかりです、けれども今一度おしんが来るだらうと待つて居たのです。來さうもないから床をのべて寝てしまひました。

翌朝おしんが來て部屋を片附けて呉れましたが、すつかり妻といふ舉動です。眼だけで物を言つて、口数は多くきません、袴の皺などを直してくれて、私の出てゆく時ちひさな聲で、

『それでは今日校長さんに相談して下さいな』と言ひました、其聲、其調子、少しも疑はないのです。相談といふのはたゞ一通り話して置くだけのこと、初から決めて居るのでした。

授業が終むと私は校長に少し相談があるからと、一室に連れ込んで、結婚の一條を話しました。けれど勿論私とおしんの關係は言ひませぬ、たゞ手短に下宿屋の女主人から娘を貰つて呉れると言はれて居るが如何したものだらうと持込んだけでした。これが他のものなら直ぐ校長に娘との關係を疑はれるのですが、私は信用されて居るから校長も平氣なもので、



「君は結婚する氣かね」と聞きました、先づ。  
 「私は如何でも可いと思ふのです、だから貴下に御意見を伺がひますので」と私も平氣な顔でいひました。

「まア不賛成だねえ、早いよ、せめて二十五六になればだが君は丁年にすら足りないのだからねえ、尤も君は二十五六の者でも及ばぬ確固したところのある人だけれど、矢張年は年だからねえ」

「兎も角校長に相談してと先方には申して置きましたのですから……」

「宜しい、それぢやア私から謝絶つて上げませう」と校長の言葉は頗る手輕いのです。

「けれど随分先方では熱心なのですから唯だ謝絶るわけにも參らんやうですが」

「おかみさんが全然君にほれこんで居ると聞いたが愈々事が持上がつたね。まア待ち給へ妙案があるだらう」と校長は笑味を含んで考へて居ました。

「妙案がある、君今日歸つて斯ういひ給へ、校長に相談したら可からうと賛成したが、然し校長の言ふには下宿屋に居て下宿の娘と結婚するのは不味い、それよりか其處を出で校長の宅に當分厄介になる、そして一月も經つたところで校長からお前さ

んのところの娘を澤村にくれんかと斯う相談を持ちこむ、さうすれば、人目もよし、勿論儀式にも適ふし、さうし給へ、と親切に言つてくれたから其議に従はうと思ふ、斯う言ひ給へ。それならおかみさんも尤もだと思ふに違ひない。其處で君は直ぐ私の宅に移轉し給へ。狭いけれど玄關の三疊に弟が居る、當分あれと同居するサ。それで君は今後下宿屋に立寄りらんやうにする、一月も經つた所で、私から理窟をつけて破談を申込めば先方だつて文句はなし、それなりで君の身の方がつくといふものだ、これだ。此妙案しか外にあるまい」

私は其意を奉じて下宿屋に歸りました。そして校長の妙案を持出しますと、母上さんは大よるこびです、おしんは鬱いで居ましたが別と否とも言ふことが出来ません、其晩おしんは十二時過ぎまで私の室に居ましたが、其いじらしい風は今も私の目に残つて居ます。繰返して、どうか一月と言はず、一時も早く一緒になつてくれるといひました。そして私が一月の間は遊にも來ないやうにするからと申しましたら、それは九段の公園あたりで時々會つてくれるといひますから私もそれは承知したのであります。



校長の宅に移つてから一月経ちました。私は一度も下宿屋には行きませんでした。けれどもおしんとは四度婚曳しました。最後のとき、おしんは、

『それでは明日ですよ。きつと明日ですよ。若し明日校長さんが来て呉れないなら貴郎でも可いから来て下さいよ』と言つて、いそ／＼して私と別れました。

おしんの望通り、其翌日校長は下宿屋を訪ねました。私は如何なることかと、ないない大心配で待つて居たのです。事によるとおしんとの關係が全然はれて了ひはせんかと、心配はそれのみでした。間もなく校長は歸つて來ました。

『案外話が早く着いた。君、あのおかみさんなか／＼解つて居るなア』と、これを聞いて私はほつと呼吸を吐きました。

『如何でした、おかみさん何とか申しませんでしたか』

『何、何を言ふものか。私これ／＼で結婚はまだ早いし、それに澤村には未だ勉強がさせたいからイヤといふ氣はないけれど、先づ當分見合せてもらひたい、縁があれば何年か先のことだが、何時のことかそれも分からぬから娘さんは良縁のあり次第何時でも嫁にやられたら可からうと言つたゞけサ、それでもと言へないぢやアないか』

『娘が傍に居ましたか』

『イヤ私が入つたら直ぐ二階へ上つて了つた』

『おかみさん何と申しました』

『だから今いつたやうに私が言ふと、顔色を變へて居たが私ももとは判事の妻です、無理にとは申しません。何卒か澤村さんに宜しく仰有つて下さいだつて。判事の後家さんとは知らなかつた。君あれはなか／＼確固ものだぜ』

『それから娘を御覧になりましたかお歸りに』

『イ、ヤ見ない。二階で待つて居たのサ。可哀さうに』

その後私も二度とおしんには遇ひません。破談後一週間経つて、私は夜そつと下宿屋の前を通りましたら戸が閉まつて、「かしや」の札が關の中に薄く張つてあるのを見ましたばかりです。

正直者の仕事の一つがこれです。いづれ其中、外のをもお話しいたしませう。



第

三

者



大井君足下

君も僕も此問題の第三者である。

第三者といふ奴は冷静なる判断を下し得る者である。そして結婚とか離婚とかいふ感情の問題には第三者ほど大切なものはないのだ。と先づ君も僕もあきらめて取りかかるより致方があるまい。

そこで先づ役割は僕がお鶴の代表者、君が江間君の代表者、代表者といふ言葉は穩當でないが、今の場合、僕がお鶴の義兄であり、君が江間君の朋友であつて見れば先づそんなものと見て可からう。由來叔父さんとか義兄さんといふ奴は妙な役廻りには



められる者だ。

單刀直入申上げるが、お鶴は脈があがつたよ。だめだよ。此女の血管には最早愛とか戀とかいふ熱のある汁氣はちつとも流れて居ないぞ。平氣の平三で居るぞ。君は第一に此事實を江間君に傳へ玉へ。

女といふしろものは例の「機會」と同じことで前額に髪のあるばかり、後頭には無い。一度あちらを向くともうだめだ。捕へようとすれば益々逃げてゆく。江間君にさう言ひ玉へ、斷然離婚しろと。

## (二)

武島君足下

前額の御講釋、委細承知した。けれども江間はなかく思ひきりさうにもないよ。自分では未だ前額の髪を握つて居る氣で居るから困る、これを放してなるものかと、蒼くなつて力んで居る。

其處で實は君の言葉通り、お鶴さんは平氣で居ることを話した處が、可哀さうに、『それは僕も無論信じて居る、彼女の愛はとうにさめて居た』と口では言つたが心で

は未だなかくさう思つて居ないらしい。『しかし君、妻は僕を愛しないでも僕は妻を愛するから離婚は出来ない』と言つて其聲は泣きだしさうであつた。

君、其處は君の力だ、何とかお鶴さんを説いて見ないか、兎も角も今一度歸さして呉れ給へ、さうすれば又江間御自身の力で脈を取りかへす工夫もあるだらう。

然し、僕は離婚の方が賛成であることを一言して置く。

## (三)

大井君足下

今一度繰り返すがお鶴の脈はあがつたよ。昨日もこんなことを言つて居た『今度結婚するなら極く優しい人が可い、わたしのやうな我儘者は勘辨の強い人でないと到底添ひとげられないから』

つまり江間君は飽きられたのだ。二度目の結婚のことを口に出すやうでは、再び江間君の許に歸れと言つて見た處で無益な話。

それでも昨日の夕方、縁側に立つて何か頻りと考へて居るやうであつた、見ると泣いて居たッけ。思ひだして悲しくなつたのだらう。然し思ひだした愛は、蒲燒の味を



思ひだして口に唾液をわかす程のことで、今度喰ふ鰻は先の鰻ではない。僕も離婚説であることを一言して置く。

## (四)

武島君足下

鰻の比喩は恐れ入った。そして見るとお鶴さんは江間を喰ひ飽きたのだ。喰ひ飽かされた者こそ可い面の皮だ。不幸にして江間は未だお鶴さんを喰ひ足りないに見える。折角のことだから骨までしゃぶらしてしまへばよいに。江間は瘦せたよ。

今朝僕が様子を見にゆくと先生未だ寝て居た「オイどうしたのだ最早九時過ぎだぞ」と言ふと「何時でもかまはん」と顔を衾の中にかくしてしまつた。枕許にはラブ時代にお鶴さんからよこした手紙が二三通置いてある「君泣いてるな」と僕は思はず怒鳴つてやつた。さうすると「馬鹿を言へ」と顔を出したのを見ると成程泣いては居なう、涙の痕はないが、眞蒼な顔をして頬もたしかにこけて居た「女房といふものは其様に難有いものか知らん」と僕が言ふと、

「君は僕を侮辱するな！」

『ウン侮辱するよ！』

『先敬ぢやアないか、失敬だ！』

『失敬でも何でもかまはん、僕は君を侮辱する、大井徳五郎は君を侮辱する、侮辱せざるを得ずだ』

『何が得ずだ、得ずの理由を言ひ給へ、笑ひごとぢやアないぞ』と先生半分起き上つた、武島君足下、君も可笑いだらう、僕も實は笑はざるを得なかつたのだ、然し江間の見幕がすさまじいので、強ひて眞面目な顔をして『まア寝て居たまへ、起きない方がよからう、君は病人だから』と言ふと、先生寝てしまつたが天井を見つめて居る。江間君、君さうおこらないで僕の言ふこと聞け、僕は君の親友だぞ、一朝一夕の交ではないぞ、然も敢て僕は君を侮辱するのだ、侮辱せざるを得ないのだ……』

『いくらでも侮辱し給へ』

『まア黙つて聞き給へ、両方に愛があつてこそ夫婦だらう、こんなことは君の方が百も承知の筈だ、君は何時も僕を野蠻人だの豪傑だのとけなして居た位だから、僕が君に愛の講釋をするのは少し勝手が違ふやうだが、一方ばかりの愛では眞實の夫婦では



ない位ぐわいのことは知しつて居ゐるぞ。然しかるにお鶴つるさんは如何どうだ、君きみを捨すて、逃にげたちやアないか、果はしてお鶴つるさんに愛あいがあると云いはれうか、愛あいがないなら君きみの妻つまちやアない、赤あかの他人たにんだ、其その赤あかの他人たにんをどうあつても妻つまといふ名目めいもくにして置おきたいなんて、君きみの持論ぢろんのやうでもないぢやアないか、今更いまさら何をくよくよ思おもふのだらう。男をとこを出だし給たまへ男をとこを、……僕ぼくは君きみのその蒼あおい面つらを見ると初はじめては可哀あはれさうだと思おもふけれど終しまひには侮辱おとしやしたくな

『だから君きみは野蠻やばんじん人にんだ、男をとこたア何なんのことだ、君等きみらのいふのは瘦我慢やせがまんのことだ。僕ぼくは愛あいのために瘦我慢やせがまんを張はるまでに墮落だらくしないぞ』

『成程なるほど君きみはエライ、立派りっぱなハイカラだ、然しかしいくら君きみがお鶴つるさんを愛あいしても、お鶴つるさんが少すこしも君きみを愛あいしないならどうする』

『しかたがない』

『大ありだ！』

『さうさ、僕ぼくの愛あいを以もつて彼かれの愛あいを呼よび醒さますのだ』

『馬鹿ばかを言いへ！ 離婚りこんするのだ』

『それは出来できない、僕ぼくはお鶴つるを何處どこまでも愛あいして居ゐるから』

『これは可笑おかしい、君きみがそれほどまでに愛あいして居ゐる女をんなが何故なぜ逃げたらう』

『だから僕ぼくは苦くるんで居ゐるのだ』

『苦くるしいかも知れないが理窟りくつはかうだ、それほどまでに君きみの愛あいは燃もえて居ゐるのに而しかも女をんなは逃にげた、然しからば逃にげた女をんなを歸かへして見みた處ところで君きみの愛あいは女をんなの愛あいを呼よび醒さます力ちからがない、理窟りくつはかうだよ、冷静れいせいに判斷はんだんし給たまへ』

『違ちがつて居ゐる、今いままでは僕ぼくの愛あいが十分じゅうぶんお鶴つるに知しれなかつたのだ、僕ぼくは十分じゅうぶん愛あいしたけれど彼かれは其そのを知しつて呉くれれなかつたのだ。それと思おもふと僕ぼくは如何いかにも殘念ざんねんでたまらない、何故なぜだらう？ 何故なぜ僕ぼくの愛あいが解わからないのだらう？』

『知らんねえ、僕ぼくはたゞさういふ女をんななら離婚りこんしてしまふだけだ』

武島君たけじまきん足下そくか、先づ問答もんたふは右みぎの次第しだいで、僕ぼくも少々せうしょうもてあぐんでしまつた。とても急きんには思おもひさりさうにも見みえない、可哀あはれさうに先生せんせい何處どこまでお鶴つるさんにはれたのだらう、お鶴つるさんは君きみの義妹ぎまいだが何處どこに其程そのほどの好い處ところがあるだらう。女をんなほど不思議ふしぎな動物どうぶつは無な。



兎も角、今しばらく見物して居ようぢやないか。第三者の尊嚴を維持しようぢやないか。

## (五)

大井君足下

君の手紙は面白く讀んだ、君はなかくの文學者である。會社をやめて文人の仲間に加はつた方が可からう。謹んで君に大井蠻骨の雅號を奉る。

お蔭様で江間君の近狀が解つた。僕は心に心が動いた。君の言ふ通りお鶴にそれほどの好い處があるとは僕にも受取れない、こゝらが所謂ほれた欲目といふ奴かも知れない。江間君の目から見るとたまらん處があるのだらう。兎も角、僕は君の手紙をお鶴に見せた。泣いたよ。

『どうだね、歸る氣になつたかね』と僕は問はざるを得なかつた。

『さうねえ』

『それほどまでに思つて居る夫を捨てるなんて罪だぜ、よく考へて御覽』

『しかしねえ兄さん、歸つて見た處でつまらないんですもの』

『しかしお前は江間さんを憎いとは思はないだらう』

『さうねえ、憎くは無いわ。だつて今までのやうぢやア全くつまらないんですもの』

『今度歸れば今までのやうに江間さんも亂暴な事はしないだらうよ、其んなに苦しんでる程だから』

『兄さんはさう思つて？』

『さうサ、人の性質といふものは一朝一夕に變るもんでなし、先づ持つて生れた氣質は生涯變らないと言つても可い位だから、江間君も今度の一件で全く今までの風を變へてしまふことは出来まい、しかし幾干かは變へるだらうよ』

『とてもだめ、兄さん。わたしは最早つくづく思つたわ、とても此人の性は變らない。と、若し變るものなら今までの中に少しは變りさうなものですわ、二人のそたでたは今度初まつたのぢやアなし、先月の初にも兄さんの御厄介になつたぢやアありませんか。彼の時兄さんが、不幸なる愛だつて被仰つたが全くさうよ、江間さんも私も不幸なのね』

お鶴は涙をほろ／＼落した。大井君足下、お鶴は江間君の愛を全然否定しては居な



いのだ、のみならず彼は江間君の不幸に少なからず同情を持つて居るらしい。しかし彼自身は最早江間君を愛しては居ないのである。つまり彼の逃げだしたのは江間君の愛が其性質のために常に暴らうしく彼の頭上に注がれ、そして彼は其愛を受け入れるには餘りに弱かつたのである。

一月前どたどが持上つて僕をわざ／＼呼び寄せた時も、僕はしみ／＼江間君の愛の決して淺くないことを見ると同時に、江間君の性格の如何にもお鶴の性格と一致しないことを感じた。そこで僕は江間君に向つて、君の愛は不幸なる愛だと言つた。今少しく心持を安らかに持つて、いら／＼しないで、春風吹き渡る野邊を二人が手に手を取つて散歩するやうな心持で暮らしたら如何だらうと忠告した。

然し性格の衝突は本人ですら如何とも爲難い、況んや他人の忠告位で納まるものではない。僕は一月前既に早晚破裂することを確信して居た。

おまけに彼等二人は最早四五月前から互に對手の人物を研究するに怠らなかつたらしい。江間君はお鶴を、お鶴は江間君を、研究といはんよりも邪推しだした。二人は夫婦として一家にありながら殆ど敵同志のやうに狙ひ合つて居たらしい。敵ならば却

つて忘却する時もある、なまじに愛てふ魔力に捕へられて居るだけ、互に互を忘れることが出来ないで、二六時中、二人の問題は其一人で有つたらしい。この如くして夫婦の間が平和に行く道理があらうか。

彼等の不幸は彼等二人の愛の如何ではなく、二人とも愛を現す方法を誤つたのである、そして方法を誤らしめたものは彼等の性質である。

であるから君、到底此二人は一緒になつた處で決して幸福ではない。お鶴は今にして初めて之を感じて來た。だからとても再び江間君に歸らう筈がない。江間君はお鶴の愛よりも更に深い愛を持つて居るだけ、却つてお鶴ほど冷やかに此結果を見ることが出来ないのである。

見物大賛成、しばらく君も見て居たまへ、江間君も其うちには冷えるから。冷えればお鶴と同じ心持になつて來るから。

## (六)

武島君足下

我々は見物して居る積りで居たが當局者は成程第三者よりも熱心である。江間から



次のやうな手紙とも隨筆とも知れぬものを送つて來たから參考の爲め御覽に入れることにした。

鶴子今は余を愛せずなりたり然し曾ては余を愛したるなり。余は曾て鶴子を愛し而して今日も愛す、實に愛する彼女は余を捨て、走りぬ、されど其事の爲に余の愛は加ふるとも減せず、激揚するとも銷沈せず。

余自身と雖も、余の愛着の念のかくまに深かりしを知らざりし。彼女の余を見捨てたる今日、寒風一陣、心頭に吹き入りて、めぐり轉じて我を惱ます、此苦惱の堪へ難きことよ。

嗚呼戀てふもの、苦しきかな。冷めし戀の夢を逐ふ苦、何にか譬へん。

余は永久に鶴子を愛す、我が心は暫時も鶴子を忘るゝ能はざる也。鶴子は最早戀の墓か、然らば余は其中に埋れん。

諸君にして若し余に鶴子を思ひきれと言ふならば、これ余に死せよといふことを勸むる也、而して余の今の苦惱は死の更に平易なるほどまでに深きを知らざる也、思ひもそめぬなり。

云々と未だ色々のことが書いてあつた、然り我々は第三者である、なんで江間君の苦惱のそれほどまでに深いといふことを知らうぞ、否、知つては居る、しかし知るといふことゝ感ずるといふことは全く別だ、醫者は病人の苦痛を知つて居る、しかし感じはしない、たゞ藥を投じて其熱のさめゆくを待つばかりである。武島君足下、我々の病人はまだ容易に熱がさめさうにもない。

彼の母及び姉妹は此病人を見てひとかたならぬ心痛をして居る、然し母も姉妹もお鶴さんには何等の尊敬を拂つて居ない、寧ろ少なからぬ悪感を持つて居るといふものは、要するにお鶴さんの人格問題に歸着するので、もつけの幸だから離婚しろといふのが我が病人の周囲の輿論らしい。第三者の中でもこのやうな第三者は少し熱のある奴で由來當局者の苦痛のお手傳をするばかりのもの、甚だ始末の困るしるものだ。

(七)

大井君足下

江間君の書はなるほど戀の苦惱を自白して申分なき出來である、僕もこれを讀んで至極同情に堪へなかつた。しかし由來同情といふ難有さうに聞えるしるものは左程價



値はないので、到底本人が感ずる百分一も感ずるものではない、實は人間の組織がさういふ風に出て居るのだから如何とも致方がない。つまり第三者或は第二者が到底思ひもそめぬ苦惱に沈んだのが御本人の不幸とあきらめる外はない、そのかはり御本人は又到底他の者の感じ得ないおたのしみを感じて、折ふし他の者にも其百分一を同感せしめたから、つまり決算は至極よく合つて居るのである。

幸と僕も人間並に同情位のところで濟んだ、これをお鶴に讀ますと、或は同情以上突走るかも知れないから、僕は第三者の冷静を以てお鶴には見せなかつた、これは君も賛成だらうと思ふ。

元來お鶴も女の一人であるから、やはり感情の奴隷である、感情の奴隷の常に陥る悪徳は自己を欺いて自ら知らざることである、故に女ほどよく自己を欺くものはない。自己を欺いて居ながら一かどの善い事でもした氣で居るものである。であるからお鶴に江間の書でも見せようものなら、忽ちエラクなつてしまひ、忽ち節婦になりすまし(則ち自己を欺き)これほどまでに此身をも思つて下さるならば此人の爲に犠牲になつても宜しい位の考をむらゝと起すかも知れない。何と危険な話ではないか。さう急

に節婦になられるものならば、彼は一年も添つた男を捨て、逃けては來ないのだ。

殊にお鶴といふ女は其中にも「むらゝ」派の最も激烈な方なので、おまけに膽の極めて小さい女であるから少し、優しい言葉でもかけられると直ぐに涙、誠にしほらしい娘々した、ラブるのには持つて來いといふ女になつてしまふ、畢竟江間君のラブ魂を全然魔し去つたのは此點であらうと思はれる。その代り殆ど人の想像にも及ばぬくだらぬ事で氣が狂つたかと思ふほどの大騒をやらかす。泣く、眞蒼になる、眼に毒々しい光を遠慮なく漲らして人の顔をねめつける、恨む、ひつかく、くひつく、そして全く方角の違つた憎々しい邪推をまはす。かうなると殆ど手もつけられぬ女となる。江間君との衝突は蓋しお鶴に原因するのが多いと、僕は鑑定して居るのだ。

蓋し、お鶴といふ女は妻とすべき女ではない、ラブつて居るに詭向きの女で、自分でもさう思つて居るらしい、昨日も僕と濱を散歩して居ると、

「兄さん、私のやうな者は實際人の妻なんかには成られないんだわ」とためいきをしなから言ふから、

「さうかも知れない」



『さうよ、とても私のやうな我儘者は誰も辛棒できないわ、江間さんだから一年も休  
へて居たのかも知れないのよ』

『そんなら逃げて来ないでも可いぢやないか』

『だって私の方で辛棒が出来ないんですもの』

『それが則ち我儘サ』

『さうかも知れせんよ、しかし最早かうなつては仕方がないから、私は今度お嫁に  
ゆくなら四十にも五十にもなつた人の處に行きたいわ、子供と思つて我儘をしても可  
愛がつて呉れるから』

『古川市兵衛さんはどうだね、僕も外には心當りが無い、それとも平沼専三かね』

『あんな事を言つて、人が悪いのね、一生獨身で居る方が可いかも知れない』

『ラブばかりして』

『まさか』とお鶴は笑つて少し顔をあからめたが、思ひだしたやうに『しかし兄さん、  
結婚してしまふと全くつまらないのね、何だか生涯のことがきまつてしまつたやうで  
望も何にも無くなつてしまひますわ。人間は戀して居るうちが一番幸福ですわね』

先づこんなもので實にたわいのない女さ。江間君も結婚しないで居たら却て今のや  
うな目に遇はず、お互に幸福であつたかも知れない。

昨夜九時頃、細君の部屋に行つて見るとお鶴は細君の針仕事の傍で頬杖を支き何か  
読んで居た。眞面目な顔をして、ひどく感に堪へん風であつたが、

『兄さんの御存知の方に基督教の牧師は無くつて?』と問ふから、

『いくらも有るが、どうしたの?』

『私はさういふ處へいきたいね』

『お嫁にかね?』

『い、え、唯だ世話になつて居たいわ、田舎なら猶ほ可いけれど』

『そしてどうすると言ふんだね?』

『兄さん私はね、一生獨身で傳道したいわ、質朴な田舎に住んで居て其村の一人でも  
神の道に導いて一人の靈魂でも可いから救ひたいわ』

これを聞いて僕はふきだし度くなつた。君も恐らく笑はざるを得まい。何と果敢な  
い空想ではないか。こんなのを稱して「小さな美感」とでもいふのだらう「田舎の村



の傳道」どうしても清新派の小説の題目だ。しかし今の生若い基督者の中にはお鶴と同じやうな男子が随分あるやうだ。

要するに女はこんなものだらうよ。ラブの相手が無くなると急に心細くなつて、悲しくなつて、眞面目になつて、エラく感激して、一人の靈魂でも救ひたくなる位が大出来の方だらう。

(八)

武島君足下

酷くお鶴さんを攻撃するぢやアないか。然し傳道の一節は僕も思はず吹きだした。

ところが此處に吹き出しては居られんことがある。今朝江間が青い顔をして出馬に及び、

「君、僕はどうあつてもお鶴のことを思ひきることが出来ん、僕の書いたものを見たらう、全く僕は苦しくて堪らん、助けると思つて如何かして呉れ」といふ言葉すら眞實に苦しさうだ。

「だから頻りと運動して居るぢやアないか」と僕も困つたから言つた。さうすると、

「イヤ君等の盡力は打壊はす方の盡力だ。決して僕等夫婦を前のやうに爲する氣ではないのだ。實に君等は残忍酷薄なことをする」

「しかし其が第三者の義務だ、君と同じやうに氣が狂つてしまふなら第三者の効能はないのだ」

「そんな義務は盡してもらひたくない」

「難有き仕合せに存じ奉ります、實は僕もてこずつて居たのだ」

「君、それは眞面目でいふのか」とすこい顔をするから、

「君は本氣かね」

「死ぬるか生きるかの苦を爲て居る者が本氣でなからうか」

「少くとも病氣だね、熱病 患者だね」

「宜しい熱病 患者でも宜しい、君等はそれを見殺しにするのだ」

「熱の冷めるのを待つて居るのだ。君無理をするとぶりかへすよ」

「戲言言つちや困る」と患者少しく機嫌を直し「僕の熱は到底冷めない、上つても冷めは爲ないが君等のやうに爲て居られるとお鶴は益々冷却してしまふ」



『君は未だそんなことを言つて居るね、お鶴さんは冷却したから逃げだしたのぢやないか』

『それはさうだらう、然しお鶴も人間なもの、僕がこんなに苦しんで居ると聞けば多少心を動かすだらう。まさか憎いとは思ふまい、僕はそれで十分だから君何とかして武島君にも相談をして歸つて来るやうに力を盡して呉れ玉へな、頼むから、助けると思つて』

『君に聞くがそんな女が君の傍に居て君は幸福と思ふかね、君はお鶴さんを買ひかぶつて居るのだ、君の夫人であつた人を攻撃するぢやないが、あの女は唯の女の、もちつと手におへない女だよ。武島君の手紙の中にもラブするには可いかも知れんが決して妻とすべき女ではないつて言つて来たぜ。君もこりくした筈だが』

『僕だつてお鶴の性質は知つて居る。随分持て餘した、然し愛は少しも變らない、將來或は不幸かも知れないが決して頓着しないのだ』

『矢張逃げた魚は大きいのだ』

『決してさうは思はない』

『なに其が人情だよ、お鶴さんが逃げたので今更ら難有く思ふのだよ、釣り上げて見給へ、やはり唯の小さい魚だから、おまけに君を刺す危険な魚だから。海は広いよ、其中には又大きな鯛もかゝるだらう、釣り直し給へ』

『小さくても刺されても僕は逃げた魚を望む』

『生憎と先方では命を拾つた積りでうれしさうに遊び廻つて居るだらう』

『酷いこと言ふ』と先生大しよげにしよげて黙つて終つたから僕も氣の毒になり、君のお鶴さんの人物評を讀ませてやつたら多少思ひつくだらうかと、君から來た昨夕の手紙を見せた。

はいしまつたと思つたが後のお祭、江間は熱心に讀んで、讀み終ると暫く目をふさいで居たが、

『なるほど第三者といふ者は冷酷な者だ』と言つて長嘆息を發するから、

『可笑なことを言ふね』と聞くよ、

『お鶴の人物は武島君の評する通りかも知れない、それはどうでも宜しい。しかし何も強ひてお鶴をして僕を思ひ出さないうやうに爲なくても可いぢやないか。僕の書いた



たことが武島君にも氣の毒に取れるならお鶴に見せて呉れたつて可いぢやないか、君等はお鶴が冷えたといふけれど實は君等も手傳つて冷えさせて居るのだ。宜しい最早頼まない、僕は直接にお鶴と話す、僕の口からお鶴に向つて僕の苦痛を訴へる』

『逢ひたいといふのかね、逃げた女房に』

『何でも宜しい僕は第三者に一任するわけにいかない。君等が僕の將來を慮つて思ひきれといふのは感謝する。しかし必ずしも愛の冷却しない僕の妻をして益々冷却せしめやうとするのは實に慘酷だ、僕は武島君に手紙をやつてお鶴に逢はして貰はう』

『それは君の隨意だ、しかし多分お鶴さんは君に逢ふまいよ』と僕は餘り馬鹿々々しいから扶ぐつてやつた。

『そんなことは無い、僕はきつと逢ふ』と言ひ放つて先生歸つてしまつた。多分先生からも手紙が行くだらう、このことに就いては僕何とも言はない、一に君の處置にかせる。

そして僕は見物の方に廻らう。

## (九)

大井君足下

来たよ手紙が。長々しく書いてあつたが要するにお鶴に逢はして呉ろといふ意味。逢はすことは決して雙方の爲でないから僕は何處までも第三者の冷酷(江間君の所謂)を守つて居ようかと思つたが、それでもお鶴はどういふかと試に問うて見た。

『兄さんは孰ちが可いと思つて?』と聞くから、

『逢はん方が可いと思ふ、逢つて見て話の様子で歸つても可いと思ふのかね』

『歸る氣は少しもないけれど、それで何如な顔をして居るかと思つて逢つて見たいわ』

『そんなことなら逢はん方が可い』

『さう、ぢやア逢ひますまいよ』

見給へ、女といふものは先づこれだ。其處で僕は斷然、逢つた處で無益だ、却て君の面を汚すばかりと答へてやつた。

兎も角、君様子を見に行つて呉れ給へな。實に氣の毒なものだ。

## (十)

武島君足下



江間が行つたらう。僕は君の手紙を見るや、其夜出かけて見ると、先生最早立つた後サ。驚いて母なる人に尋ねると、何でも君の手紙は見たいらしい。然し彼は母に、一寸返子まで行つて来ると言つて、止めるのも聞かないで立つたさうな。一足違ひで江間の男を十割下げさしてしまつた。然し僕もまさか君が止めるのを、押切つて出かけるとは思はなかつた。

## (十一)

大井君足下

芝居はそろそろ大切に近づいた。夜の十時。突如として江間君が現れた。第三者の冷静なる僕もこれを見て暫時は驚かざるを得なかつた。眠くなりかけた眼をこすつて驚と見ても矢張蒼ざめた顔の、すごい眼つきをした男、江間君其人。

「如何して君は来た」

「お鶴に逢ひに来た」

「お鶴は最早寝たよ」と言つたのは自分ながら可笑しかつた「だつて君、逢はない方が可いと僕は返事をしたが」と言ひ足した。

「君の手紙は見た、しかし僕は利害を考へて逢ふのぢやない。逢つて僕から直接にお鶴の心を開きたいのだ」

「腹が立つばかりだぜ」

「いや僕は決して怒らない、怒りたくても怒ることが僕には出来ないのだ、何卒逢はして呉れ玉へ、僕は……僕は唯一言したいことがある」

「ぢや逢ひ給へ」と言はざるを得なかつた、其顔を見ても、其聲を聞いては、其處で僕はお鶴を起して乃の次第を話すと、お鶴は非常に驚いて、寧ろ恐れて、

「兄さんも一緒に居て下さいな、私は恐いから」と慄へ上つて居る、女が男を恐れるやうになつては愛も戀も有つたものではない。

八畳の間の畳を一間を置いて、お鶴の傍に僕が坐り、江間君と差向つた。お鶴は顔を上げ得ないのも無理はない、江間君は昂然として此方に向いて居る。かういふ場台になると有繋に、みえはあるものと見えて、江間君は寧ろお鶴をしりめにかけて居る。

「お鶴、お前は最早これぎり僕の處へは歸らない氣かね？」と先づ江間君から口を切つた。お鶴は一寸顔をあげたが直ぐ又下を向いてしまつて一言も發しない。



『お前は僕の愛を疑ぐつて居るね』

『さうでは御座いませんよ』とお鶴は僅に口を開いた、其様子はまるで鷹に睨まれた雀も同様、わな／＼として氣も轉動して居るらしい。僕はこれらの様子を見て、此會見の結果を直ぐ豫測してしまつた。打解けて物を言つた處で江間君の思ふやうになるは甚だ覺束ないのに、かう四角四面に、まるで外交談判でもするやうにお互が構へ込んで面白話になるわけがない。女は畏縮して、益々男の心から遠ざかるばかりである。

『そんなら何故僕を見捨てた』

『とても御互の幸福ではないやうですから』

『これは可笑しい、僕がお前を愛し、お前が僕を愛するなら其以上の幸福はないではないか、それともお前は最早僕を愛さないのかね？』

お鶴は此間に何とも返事のしようのないのは當然のことである。

『どうだね？、愛しないなら愛しないと明白に言へ！』

江間君の聲は疇走つて來た。大井君足下、江間君、此種の間を此種の聲で、今日ま

で幾度となく長火鉢の傍で發したのである、と僕の思つたのは無理もあるまい。これでは折角出かゝつた愛も引込んでしまふ。

『返事をしないか！』と江間君の喝破した時、これが火鉢の傍であるなら忽ち鐵拳空に舞ふ大亂ちきの序幕であつたらう。お鶴は泣くやうな顔をして僕を見上げて救を求めた。

『まア君のやうに言つてもお鶴は困るだらう、お鶴は決して君を愛しないではないがつまり性の合はんものが夫婦になつて居た處で將來お互の幸福でないと思つたのだらうよ』と僕は口を入れた。

『イヤ君と話をするのぢやない、お鶴の口から明白な答辯を望むのだ』

『政府委員の答辯を望むかね』と僕はまぜつ返し度くなつた位。大井君足下、江間君は女にもてる柄ぢやないことを僕は愈々確めた。

『私も兄さんの被仰つたのと同じよ』

『そんなら何處が性が合はんのだ、合はなければ合ふやうにすれば可いちやないか、性なんて口實だ、お前の愛がないのだ！』



『さうお思ひなさるなら、それでも仕方が御座りません』とお鶴忽ち「性」を發揮して皮肉の矢を一本。

『うん僕はさう認定する、然し僕は何處までもお前を愛する……』

『貴所のが愛でせうか』

『愛だとも、愛でなくて何だ』

『さう、妙な愛が御座いますね』

『妙とは何だ失敬な……』

『だつて妙ぢや御座いませんか、ぶつたりたゝいたりする愛があるでせうか、そんな愛なら私は御免蒙りますわ』

『それは別問題だ、お前が失敬なことをいふからなるのだ、愛とは別問題だ』

『だから私はそんな愛なら御免を蒙るといふんですわ』

『まあ、二人でそんなことを言つて居たつて仕方がない、江間君それよりか本問題に取りかゝらうぢやないか』と遂に又僕は口を入れざるを得なかつた。大井君足下、僕は斯る馬鹿々々しき場に立合ふことを免かれた君の幸福を祝する。彼等は「愛」を持

餘して遂に丸めてだんごとなし、江間君はこれを嫌がるお鶴の口に捻込まうとして居るのである。而も其だんごは餘り、あくどくつて大概の女は一度口に入れて見ても直ぐ吐き出すべきしろものらしい。

『本問題とは何だらう』

『離婚問題サ』

『イヤ僕は決して離婚しない、たとひお鶴は僕を見捨て、僕はお鶴を愛して居るのであるから断じて離婚しない』

『だつて御覽の通りのお鶴ぢやないか、離婚しない處で決して君の幸福ではなからう、君がそれほどにまでお鶴を思つて呉れるならお鶴の望み通り離婚してやつたはうがお鶴を愛する所以ぢやあるまいか、君よく考へて呉れ給へ、第一君の體面にも關するよ』

『體面も幸福も僕は最早關はないのだ、又離婚してやつてお鶴を愛するなんて、そんな聖人には僕成りたくない』

『さういふなら君はどうすると言ふんだ』

『お鶴に歸つて貰ひたいのだ』



「だつてお鶴は歸らんといふぢやないか」

「お鶴、お前はどうかあつても歸らんのか、僕がこれほどまでに頼むのに歸つて呉れんか」と江間君はお鶴をきつと見て言つた。

「それは兄さんに聞いて下さいな、私の身體は兄さんに任してゐるのですから」

「イヤお前の口から直接に返事をして呉れる」

「兄さん貴所何とか言つて頂戴な、私こわいからあちらへ行きますよ」と小聲で言つてお鶴は逃げてしまつた。江間君は驚いたが止めることも出来ず、熱と見送つて暫時は物を得言はなかつた。

「よろしい解つた！離婚のことは何れ大井君から何とか返事をして貰ふことにする。

失敬」

「まア今夜は泊つて行き給へ」

「イヤ宿が取つて有るから。失敬」

憤然として江間君は去つた、會見の様子は以上の通り。江間君も恐らく意外だらうと思ふ。

(十一)

武島君足下

今朝訪問して見ると未だ歸つて居なかつた。母じやびとは心配で昨夜遂に眠らなかつたさうな。

暫時すると歸つて来た、其顔色を見ると僕も泣きたくなつた。母にも僕にも一言も言はないで直ぐ布団を被つて寝てしまつた。そのまゝ休ました方がよからうと、僕も會社へ出勤して、午後四時頃私宅へ歸つて見ると、手紙が来て居た、其文面に依れば最早自分もあきらめた、然し今直ぐ離婚したくない、籍まで持つて行かれては縁が全く絶えたやうな氣がして、とても堪へ得ない事である、だから實際は離婚でもよいから、せめて今暫く籍を置いて貰ひたい、自分は不幸な男である自分を愛しない女をこれ程までに愛し然も此愛を自分の思ふやうに示すことが出来ないとは。といふ意味であつた。

いづれ會見の様子は君から報知があるだらうが、兎も角も以上のことを通知する。僕も最早此以上には手段がない。お鶴さんも今が今再婚する身體でもなからうから、



江間の言ふ通りにしてやつたらどうだらう。

ところで僕は今日、會社で北海道の支店詰を命じたから三四日の中には出發しなければならぬことゝなつた。一度逢ひたいが忙がしくつて僕から訪ねる譯にいかぬ。君上京して呉れるなら非常にうれしいが。

兎も角も一度逢ひたい。

(十三)

大井君足下

君と別れてから後、二週間ばかりは極めて穩かに過ぎた。お鶴も別に變りなく、性のまゝに手足を動かして居た。心細い聲で讚美歌を歌つて見たり、口をすぼめて氣取つて見たり、驚く程浮かれて見たり、泣いて居るかと思ふ程沈んで見たり、少し氣に入らんことがあると忽ちしよげて突慥に僕の妻に當つて見たり、さうかと思ふと四五の娘のやうなあどけないことを言つて見たりして日を送つて居た。見た處では例のお鶴に變りはないが、然し何處かに物足りなさうな處が見える、何となくじれつたさうな風もあるらしかつた。或日突然、

『兄さん江間様はどうなすつたでせう』と聞くから、

『別にどうも爲まいよ、病氣も次第に快くなつて來たらし』

『さう、それなら可いけれど』

『お前氣になるかね?』

『だつて一年も連添つた人ですもの多少氣になりますわ』

『感心だね、いつそのこと歸つてやつたら病氣も忽ち全快するだらう』

『兄さんは直ぐあんなことを言つてからかふから嫌、眞面目で聞いて下さいよ、私昨夜こわい夢を見たのよ』

『江間君に追駈けられる夢でも見たのかね』

『心中した夢! 私思ひだしてもぞつとするの。未だ江間様と結婚しない時でした、江間様と連れだつて大宮に行つたことが御座いましたね……』

『おや〜乙なことを爲たのね、僕初めて聞くよ』

『だから今自状するんぢやありませんか……昨夜の夢も矢張その大宮。私が木の間から覗いて居ると一人の男が池の周圍をまご〜して行つたり來たりして居るのよ。』



月影にすかして見ると江間様によく肖て居るから、若しかと思つて出て見ると果して江間様なのよ、貴郎どうしてこんな處に來て入らつしやるの、御病氣は最早快くなつたのですかと聞くとね、悲しさうな顔をしてね、とても僕にはお前のことが思ひ切れんからこれから自殺しようと思ふ處だ、しかしお鶴僕は決してお前を恨みはせん、恨むどころか一年の間でも僕のやうな狂人じみた男の妻として能く辛棒して呉れた、僕はうれしいと言つて私の顔をぢつと見ながらほろ／＼涙をこぼすのですよ、私も急に悲しくなつて、江間様悉んな私が悪いのだから勘忍して頂戴な、私は最早どうあつても貴郎のお傍を離れないからと言つてしがみ附いたのよ、さうして二人で抱き合つて思ひきり泣いたのよ。それから江間様の被仰るには此儘二人で東京に歸つて又夫婦になつた處で大井や武島の言ふ通り決して幸福ではない、二人の性は決して直りはしないのだから其れよりか今二人がかうやつて抱合つて居る時、そのまゝ死んでしまつた方が可いと言ふのよ、さうですとも、私も貴所と一緒に死んだ方が可いと、夫れから二人で抱き合つたまゝ、池へ飛び込んでしまつたの。それから先を言ふと兄さん笑ふから止しませう』

『なんで笑ふものか、言つて御覽な』

『それから妙なのよ、死ぬる時少しも苦しくないの。それから私が江間様に最早死んだのでせうかと聞くと死んだのだらうよつて、被仰るのよ。それから二人で手を引いて野のやうな處をぶら／＼歩いてると快い氣持なのよ、そして江間様が大變優しくなつて今までの江間様のやうぢやないの。きつとこれは二人とも性が直つてしまつて二人とも天使のやうになつたのだらうと思ふと私うれしくつて堪らないのよ。すぐ好きな讚美歌を歌はうと思つて聲を出さうとすると出ないから、頻りと出さうと掬いたら眼が覺めてしまつて』

僕は此夢物語を聞いた時、たゞ微笑したゞけで別に何とも言はなかつた、お鶴も此夢をたいして氣にする風でもなかつた。處が二三日経つと突然江間君から次のやうな手紙が來た。

僕の病氣は未だ全快しない、度々お見舞ひ下さつて難有いには難有いが、僕は少しも全快を欲しない。

餘り女々しいやうでさぞ君も僕に愛憎が盡きたであらう、僕も自分で自分の心かわ



からない。先達夜中君を驚かした時、僕はたゞ僕の心のほどを打明けて君にもお鶴にも訴へる積りで出かけたのである。處が御覽の如きでいたらしく。要するに家庭に於ける僕はあの通りなので、僕の性質にはどうしても穩に靜かに物を抱擁するやうな趣はないのである。言ひ換ふれば僕は愛を湛へ得る器ではない、自分の愛する女をして心靜かに氣も暢やかに我愛の泉を掬はしむることは出来ないのがある。

これを思ふと僕は性命の薄運を歎く外はない、僕は決してお鶴を恨まない、恨むどころか一年の間でも僕のやうな不具者と連れ添つて辛棒して居て呉れたことを感謝するのである。

そして僕はお鶴のことを思ふと實に可哀さうで堪らなくなる。お鶴も僕と同じく不具者の一人、其心は清く正しいが其性は深く穩でない。しかも燃ゆるやうな愛情を以て其心を焼くことがある。あゝ可憐の少女よ、吾等二人は實に薄命に造られて来た！二人とも、人並に戀てふものを知つたが爲めに、そして其一人は人並よりも幾倍烈しき情火を燃やしたるが爲めに、そして不運にも此二人一度相抱きたるが爲めに、遂に幾千萬人にして僅に一人が陥るべき不幸に二人とも陥ちてしまつた。

僕は最早此世に希望も何にもない。若し僕の病氣が癒ゆるとして僕は死灰のそれと同じである。

僕とても男の一人、幾度か我心を引起すべき槓杆を用ゐた。「正義」「真理」「事業」「名譽」、その他の、平生僕を奮起さすべき題目に由つて僕を再び此世の人たらしめんと試みた。案外に脆いものは此等の題目であつた。愛のために碎けた心に向つて、何等の力も與へ得ないのである。茫々たる天地にたゞ一人立つて居るやうな氣がして淋しくて堪らない。

戀しくもある哉お鶴。來つて我を救へ、助けよ、此薄命なる孤獨者を救へと、嗚呼僕は幾度叫んだか。

然し最早僕も全くあきらめた。否、あきらめたのらしい。死と定まりし人の案外沈靜なる如く僕も大に沈靜になつて來た。

就いては止め置いた籍をお返しする。此旨をどうかお鶴にも傳へて呉れ給へ。結婚してから今日は丁度一年と十五日」

我々第三者と雖も此手紙を讀んでは涙のこぼれない譯にゆかない。殊に不思議なの



はお鶴の夢の中で江間君が言つたといふ言葉と右の手紙の中の文句とをまるで同じな處があることだ。そして見るとお鶴の心の底には未だ江間君の心が宿つて居るかも知れない、戀ほど奇態なものはなく女ほど變手古な動物はない。かうなると第三者の冷靜も甚だ當にならなくなつた。

さて江間君も愈々籍を返すといふので丁度手紙を受取つた日から四日目、僕は朝早く上京し、其日の午後四時頃江間君を訪ね、庭の方からまはつて其書齋の外から聲をかけること返事がない、不在か知らんと今度は母堂に會つて御留守かと聞くと。居る筈だとのこと。然るに何處にも先生の影が見えない、定めし散歩にでも出たのだらうと僕は暫時く母堂と語つて居たところが、母堂の言葉の中に今朝お鶴さんから手紙が來たらしなかつた、差出人の名は書いてないが確にお鶴さんの手であつたとの事に僕も頗る驚いたそれは間違でせう、お鶴が手紙をよこす筈がありません」と言つて見たが、いやどうしてもお鶴さんの手であると言はれる。争つたところで仕方がないから僕は唯「へえ不思議なこともあるものだ」位の挨拶をして歸宅した。

翌朝僕は再び江間君を訪ふ積りで家を出かけると、返子の妻から電報。直ぐ歸つて

來いといふ意味。別に何とも書いてはないが、僕はお鶴の身の上といふことを直ぐ覺つた。返子に歸つて見ると果して。

江間君とお鶴の死體が奥の八疊の間に最早運びこんであつた。様子を聞いて見るとお鶴は前夜八時頃、月が佳いから一寸海濱を散歩すると言つて出たさう歸つて來ず、僕の妻は夜通し心配して待つて居ると、次の朝になつて小坪と鎌倉材木座との間の崖の下で心の中があつたとの取沙汰、女の風俗を聞いて見るとどうも怪しいので早速飛んで行つて見ると、二人の死體が既に礫に引上げてあつたさうな。

僕は白狀するが此珍事に就いて何等の豫測も出來なかつた、餘りに小説じみて、餘りに事が突飛なので、到底僕のやうな者の頭では其前兆を捉へることが出來なかつたのである。

しかしお鶴も江間君も書置らしい者は遣して置かなかつた。たゞ江間君の懷中にお鶴からやつた手紙があつて其手紙に依ると江間君から僕によこした最後の手紙をお鶴が讀んだものらしい、僕は机の抽斗に入れて置いたのである。今までお鶴は僕が許して見せぬ手紙は決して見たことのない女であるのが、故意か偶然か、兎も角僕の納つ



て置いた手紙を見つけて出して、之を讀んだのは唯事ではないのである。

それから其手紙を讀んで非常に泣いたらしい。泣いて江間君に手紙を出したらしい。其手紙には先夜の夢物語が書いてあつた。然し少しも其夢を實行しようなどの意味はほのめかしてない。又た江間君を誘出すやうな文句もない。

前後の事情を以て推測するに、江間君の飛び出したのも心中の覺悟ではなく、お鶴が散歩に出たのも江間君に出遇ふ積りではなかつたらしい。この以上は到底僕等如き第三者には判断も推測も出来ないものである。

大井君足下、僕は此哀れなる男女が、あの斷崖の上に立ち月色茫茫たる相模灘を望んで、其薄命なる肉體を冷酷なる自然に還し、其刹那に燃え上つた愛情を永久に保たんことを願ひ、相抱いて泣いた光景をあり〜と想像することが出来る。

東京の新聞紙には痴情云々を例の筆法で書いて居た。痴情か、痴情か、痴情とは何ぞや。若し自殺する人が、生きて此世に呼吸すべく何の意味だと問はゞ、何人か克くこれに對して彼を満足さす程の答辯を爲し得る者ぞ、第三者の説明と答辯とは當局者にどれほどの力があらう。

僕から言はすると、江間君もお鶴も今は相携へて、お鶴が夢に見たやうな野邊を散歩して居るだらう、お鶴は心のくばかりに其好きな唱歌を謳うて居るだらう。



女

難



## (一)

今より四年前の事である、(と或男が話した) 自分は何かの用事で銀座を歩いて居ると、或四辻の隅に一人の男が尺八を吹いて居るのを見た。七八人の人が其前に立つて居るので、自分もふと足を止めて聴く人の仲間に加はつた。

頃は春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並の影が東側の家の礎から二三尺も上に這ひ上つて居た。それで尺八を吹く男の腰から上は鮮かな夕陽に照らされて居たのである。

夕暮近いで、街は一層の雑踏を極め、鐵道馬車の往來、人車の東西に駆けぬける車輪の音、途を急ぐ人足の響など、四方は騒然紛然として居た。此騒がしい場所の騒



がしい時に彼男は悠然と尺八を吹いて居たのである。それであるから、自分の目には彼が半身に浴びて居る春の夕陽までが如何にも静かに、穩かに見えて、彼の尺八の音の遠く限り、其所に悠々たる一寰區が作られて居るやうに思はれたのである。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を聴きながらも、熟々彼の姿を看た。

彼は盲人である。年頃は三十三でもあらうか、日に焼けて黒いのと、垢に埋れて汚ないのとで年も確とは判じかねるほどであつた。たゞ汚ないばかりでなく、見るからして彼は甚だ憔悴して居た、思ふに晝は街の塵に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢染みた夜具を被るのであらう。容貌は長い方で、鼻も高く眉毛も濃く、額は櫛を加へたこともない蓬々とした髪で半ば被はれて居るが、見たところ程能く發達し、よく下品な人に見るやうな骨張つた無下に凸出した額ではない。

音の力は恐ろしい者で、如何な下等な男女が弾吹しても、聴く方から思ふと、何となく弾吹者其人までをゆかしく感ずるものである。殊に此盲人は其のむさぐるしい姿に反映して何處となく人品の高いところがあるので、猶ほ更ら自分の心を動かした。

恐らく聴いて居る他の人々も同感であつたらうと思ふ。其吹き出づる哀樂の曲は彼が運命拙なき身の上の舊歡今悲を語るが如くに人々は感じたであらう。聴き捨てにする人は少なく、一錢二錢を彼の手に握らして立去るが多かつた。

## (三)

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑さを避け、山に近き一小屋を借りて住んで居た。或夜のこと、月影殊に冴えて居たので獨り散歩して濱に出た。

濱は晝間の賑ひに引きかへて、月の景色の妙なるにも拘はらず人出少し。自分は小川の海に注ぐ汀に立つて波に碎くる白銀の光を眺めて居ると、何處からともなく尺八の音が微に聞えたので、四邊を見まはすと、笛の音は西の方、程近いところ、漁船の多く曳上げてある邊から起るのである。

近づいて見ると、果して一艘の小舟の水際より四五間も曳上げてあるを其周圍を取り巻いて、或者は舷に腰かけ、或者は砂上に蹲居り、或者は立ちなど、十人あまりの男女が集つて居る、其中に一人の男が舷に倚つて尺八を吹いて居るのである。

自分は人々の群よりは、離れて聴いて居た。月影はこんもりと此一群を映らして居



る。人々は一語を發しないで耳を傾けて居た。今しも一曲が終つたらしい、聴者の三四人は立ち去つた。餘の人々は次の曲を待つて居るけれど吹く男は尺八を膝に突き首を垂れたまゝ、身動きも仕ないのである。斯して又四五分も経つた。他の三四人が又立ち去つた。自分は小舟に近づいた。

見ると残つて居る聴者の三人は濱の童の一人、村の若者の二人のみ、自分は舷に近く笛吹く男の前に立つた。男は頭を上げた。思ひきや彼は此春、銀座街頭に見たる其盲人ならんとは。されど盲人なる彼れの盲目ならずとも自分を見知るべくもあらず、暫時自分の方を向いて居たが、やがて又吹き初めた。指端を弄して低き音の縷の如きを引くこと暫し、突然中止して舷より下りた。自分は卒然、

「盲人さん、私の宅に来て、少し聞かして呉れんか」

「へい、へい」と彼は驚いたやうに言つて急に自分の顔を見て、そして又頭を垂れ首を傾け「へい、何處様へでも参ります」

「ウン、それぢや来てお呉れ」と自分は先に立つた。

「お前の眼は全く見えなひのかね」と四五歩にして振り返りさう自分は問うた。

「い、エ、右の方は少し見えるので御座います」  
「少しでも見えれば結構だね」

「へい、へい、」と彼は軽く笑つたが「イヤなまじすこしばかり見えるのも能く御座いませぬ、慾が出ましてな」

「オイ橋だぞ」と溝にかけし小橋に注意して「けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼ぐわけにゆかんではないか」

「稼ぐのなら宜う御座います流すので……」

「お前何處だい、生れは」

「生れは西で御座います、へい」

「私はお前を此春、銀座で見たことがある、如何いふものか其時から時々お前のことを思ひだすのだ、だから今もお前の顔を一目見て直ぐ知つた」

「へい左様で御座いますが、へいもう行き當りはつたりで足の向き次第、國々を流して歩くので御座いますから何處で何誰様に逢ひます事やら……」

途で二三の年若い男女に出遇つた。輕雲一片月をかざしたので四邊は朦朧になつた。



手風琴の軽い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅に着いた。

## (三)

縁側に席を與へて、先づ麥湯一杯、それから一曲を所望した。自分は尺八の事には全然素人であるから、彼が吹く其曲の善悪、彼の技の巧拙は解らないけれども、心をこめて吹く其音色の脈々として我に迫る時、われ知らず凄動したのである。泣かんか泣くには餘に悲哀深し、吹く彼は抑も何の感ずることなきか。

曲終れば、音を賣るもの、常として必ず笑み、必ず謙遜の言葉の二三を吐くなるに反して、彼は默然として控へ、今しも我が吹き終つた音の虚空に消えゆく、消えゆきし、其跡を逐ふかと思はるゝ許りであつた。

自分は彼の言葉つき、其態度に依り、初より其身の上に潜める物語のあるべきを想像して居たから、遠慮なく切りだした。

『尺八は本式に稽古したのでらうか、失敬なことを聞くが』

『イ、エ左様ではないので御座います、全く自己流で、たゞ子供の時から好きで吹き慣らしたといふばかりで、人様にお聞かせ申すものではないので御座います、へい』

『イヤさうでない、全く巧妙いものだ、それほど技があるなら人の門を流して歩かならでも弟子でも取つた方が楽だらうと思ふ、お前獨身者かね？』

『へい、親もなければ妻子もない氣樂な孤獨者で御座います、へっへ、』

『イヤ氣樂でもあるまい、日に焼け雨に打たれ、住むところも定まらず國々を流れゆくなどは餘り氣樂でもなからうぢやアないか。けれどもいづれ何か理由のあるとだらうと思ふ、身の上話を一つ聞かして貰ひたいものだ』と思ひ切つて正面から問ひかけた。人の不幸や、零落につけこんで、其秘密まで聞かうとするのは、決して心あるもの、することではないとは承知しながらも、彼に二度まで遇ひ、其遇うた場所と趣とが少からず自分を動かした、めに、それらを顧慮することが出来なかつたのである。

『へい、お話しても宜しう御座います。今日は如何いふものか頻りと子供の時の事を想ひだして、先程も別荘の坊様達がお庭の中で聲を揃へて唱歌を歌つてお出でになるのを聞いた時何だか泣きたくなりました。』

私の九十の頃で御座います、能く母に連れられて城下から三里奥の山里に住んで居る叔母の家を訪ねて、二晩三晩泊つたもので御座います。今日も恰度その頃のことを



久しふりで思ひ出しました。今思ふと、私が十七八の時分他が尺八を吹くの聞いて、心を挫られるやうな気が仕ましたが、今私が九や十の子供の時を想ひ出して堪らなくなるのと丁度同じ心持で御座います。

父には五の歳に別れまして、母と祖母との手で育てられ、一反ばかりの廣い屋敷に山茶花もあり百日紅もあり、黄金色の荔枝の實が袖垣に下つて居たのは今も眼の先にちらつきます。家と屋敷ばかり廣うても貧乏士族で實は喰ふにも困る中を母が手内職で、子供心には何の苦勞もなく日を送つて居たので御座います。

母も心細いので山家の里に時々歸るのが何よりの樂み、朝早く起きて、淋しい士族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼくと歩きだす時の心持は何とも言へませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めの中こそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の餅に石を投げたりして参りますが峠にかゝる半程で凹たれて了ひました。それを母が勵まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とか言ひまして茶屋の婆が一人定めの名物を喰はして貰ふのを樂みに、又一呼吸の勇氣を出しました。峠を越して半程まで來ると、直ぐ下に叔母の村里が見えます、春さきは狭い谷々に霞が靨鬱いて晝のや

うで御座いました、村里が見えると最早着いた氣で其處の路傍の石で一休みしまして、母は烟草を吸ひ、私は山の崖から落ちる清水を飲みました。

叔母の家は古い郷土で、其頃は大分家産が傾いて居たさうですが、それでも私の目には大變金持のやうに見えたので御座います。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、葛の這ひ上つた練塀や、深い井戸が私には皆な難有かつたので、下男下女が私のことを城下の旦那様と言つてくれるのがうれしかつたので御座います。

けれども何より嬉しくつて今思ひだしても堪りませんのは同じ年輩の従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人は能く山の峽間の溪川に山鱒を釣りに行つたもので御座います。山岸の一方が淵になつて蒼々と湛へ、此方は淺く瀬になつて居ますから私共は其瀬に立つて糸を淵に投込んで釣るので御座います。見上げると兩側の山は切削いた様に突立つて、それに雜木や菘松が暗く茂つて居ますから、下から瞻ると空は帯のやうなのです。聲を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣つて居ると森として居ます。或日兩人は餘念なく釣つて居ますと、何時の間にか空が變つて、颯と雨が降つて來ました。ところが其日は殊によく釣れるので二人とも歸らうと言はないのです。太い



雨が竿に中る、水面は水煙を立て、雨が跳ねる、見あげると雨の足が山の絶頂から白い糸のやうに長く篠白を立て、落ちるのです。衣服はびしょぬれになる、これは大變だと思ふ矢先に、グイ〜と強く糸を引く、上げると尺にも近い山鯉の紫と紅の條のゐるのが釣れるので御座います、暴れるやつをグイと握つて籠に押込む時は、水に住む魚までが此雨に濡れて他の時よりも一倍鮮かたで新しいやうに思はれました、

『最早歸らうか』と一人が言つて此方を一寸向きませんが、直ぐ又た水面を見ます。

『歸らうか』と一人が答へますが、これは見向きもしません、實際何を自分で言つたのかまるで夢中なので御座います。

其内に雷が直ぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思ふやうな怖い音がして來たので、二人は物をも言はず糸を巻いて、籠を提げるのが早いかドンドン逃げだしました。途中まで來ると下男が迎に來るのに逢ひましたが、家に歸ると叔母と母とに叱られて、籠を井戸端に投げ出したまゝ、衣服を着更へ直ぐ物置のやうな二階の一室に入り小さくなつて、源平盛衰記の古本を出して晝を見たものです。

けれども母と叔母は對座で居ても決して笑ひ轉げるやうなことはありません。二人

とも言葉の少ない、物案じ顔の、色彩の悪い女でしたが、何か優しい低い聲でひそひそ話合つて居ました。一度は母が泣顔をして居る傍で叔母が涙ぐんで居るのを見ましたが私は別に氣にも留めず、たゞ一寸可憐いやうな氣がして直ぐと茶間を飛び出したことがありました。

私は七日も十日も泊つて居たいので御座いますが、長くて四日も経ちますと母が歸らうと言ひますので仕方なしに歸るので御座います。一度は一人残つて居ると強情を張りましたので、母だけ先に歸りましたが、私は日の暮れかゝりに縁先に立つて居ますと、叔母の家は山に據つて高く築き上げてありますから山里の暮ゆくのが見下されるです。西の空は夕日の餘光が水の様に冴えて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼い煙が谷や森の裾に浮いて居ます、何だか裏悲しくなりました。寺の鐘までが平時とは違ふやうに聞え、其長く曳く音が谷々を渡つて遠く消えてゆくのを聞きましたら、急に母が戀しくなつて、何故一所に歸らなかつたらう、今時分は家に着いて祖母さんと何か話して御座るだらうなど思ひますと堪らなくなつて叔母に是から直ぐ歸ると云ひだしました。叔母は笑つて取合つて呉れませんが、其中に燈火が點く、從兄弟と挾將棋をやるな



どする中に何時か紛れて了ひましたが、次の日は下男に送られ直ぐ家に歸りました。

又た母と一しよに歸る時など、二人とも出かける時ほどの元氣はありませんが、峠を越す時、母は幾度となく休みます。思ひ出しますのは其時の母の顔で御座います。石に腰を卸してほつと呼吸を吐いて言ふに言はれん悲しげな顔を仕ます。其顔をみますと私までが子供心にも悲いやうな氣がしまして黙つてつくねんと母の傍に腰をかけて居るので御座います。さうすると母が「お前腹が減きはせんか、腹が減いたら餅をお喰べ。出して上げようか」と言つて合財囊の口を開きかけます。私が「腹は減かない」と言へば、「そんなことを言はないで一つお喰べ、母親も喰べるから」と言つて無理に餅を呉れます。さうされますと、私は何故か尙ほ悲しくなつて、母の膝にしがみ附いて泣きたいほどに感じました。

私は今でも母が戀ひしくつて堪らんので御座います」

盲人は懐舊の念に堪へずや、急に言葉を止めて頭を垂れて居たが、暫時して（聽者の誰人なるかは既に忘れ終てたかの如く熱心に）

「けれども是は當然で御座います、母が全然私のために生きて居ましたので、一人の私

をたゞ無暗と可愛がりました。めつたに叱つたこともありません、たまさか叱りましても直ぐに母の方から謝罪するやうに私の機嫌を取りました。それで私は我儘な剛情者に育ちましたかと言ふにさうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら氣が弱くて女のやうなところがあつたので御座います。

これが昔氣質の祖母の氣に入りません、やゝともすると母に向ひまして、

「お前が餘り優しくするから修藏までが氣の弱い兒になつて了ふ。お前からして今少し毅然して男は男らしく育てんと不可せんで」とかう言つたものです。

けれども母の性質として如何しても男は男らしくといふやうな烈い育て方は出来ないので。たゞ無暗と私が可愛いので、先から先と私の行末を考へては、それを幸福の方には取らないで、不幸なことばかりを想ひ、一層私があふんで堪らないので御座いました。

或時、母は私の行末を心配する餘りに、善教寺といふ寺の傍に店を出して居た怪しい賣卜者の所へ私を連れて参りました。

賣卜者の顔は能く憶えて居ります、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔容



は薄氣味悪う御座いましたか母と話を其言葉つきは大變に優しくつて丁寧で、  
『ア、左様かな、それは心配なことで、御尤も、能く私かトて進めます』と云  
調子で御座いました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗いて見たり、箆竹をがちや／＼いはして見たり、まるで  
人相見と八卦見と一所にやつて居ましたか、やがてのことに、

『イヤ御心配なさるな、此の兒さんは末は必然出世なさる、よほど好い人相だ。けれ  
ど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に氣をつけてゆけば必然立派なもの  
なる』と私の頭を撫でまして『む、好い兒だ』と繁々私の顔を見ました。

母は大喜びに喜びまして家に歸るや直ぐと祖母にこの事を吹聴しました處が祖母は  
笑ひながら、

『男は劔難の方が未だ男らしいぢやないか、この兒は色が白うて弱々しいから其でト  
者から女難があると言はれたのぢや、けれども今から女難もあるまい、早くて十七八、  
遅くとも二十ごろから氣をつけるが可い』と申しました。

ところが私には其時(十二でした)最早女難があつたので御座います。

こゝまでお話したので御座いますから、これから私の女難の二つ三つを懺悔いたし  
ませう。賣卜者はうまく私の行末をトひ當てたので御座います。

その頃、私の家から三町ばかり離れて飯塚といふ家が御座いましたか其處の娘にお  
さよと申しまして十五ばかりの春のすらりとして可愛らしい兒が居ました。

其兒が途で私を見ると必然我家に遊びに來いと言ふのです。私も初の中は行きませ  
んでしたが餘り度々言ふので一度参りますると、一時間も二時間も止めて還さないで  
膝の上に抱き上げたり、頸にかけたり、頭の髪を丁寧に搔き下して猶ほ可愛く  
なつたと其柔かな頬を無理に私の顔に押しつけたり、色々な真似をするので御座いま  
す。

さうすると私もそれが嬉しいやうな氣がして、その後は度々遊びに出かけておさよ  
の顔を見ないと物足りないやうになりました。

その中、賣卜者から女難のことを言はれ、母からは女難といふことの講釋を聞かさ  
れましたので、子供心にも、若しか今のが女難ではあるまいか、と甚く可恐くなりま  
したが、母の前では顔にも出さず、ない／＼心を痛めて居ながらも時々おさよの許に



遊びに参りましたので御座います。

今から思ひますと、矢張そのころ私はおさを慕うて居たに違ひないのです、おさが私を抱いて赤兒扱ひにするのを私は表面で嫌がりながら内々はうれしく思ひ、其温かな柔かい肌で押つけられた時の心持は今でも忘れないので御座います。女難といへば其時最早女難に罹つて居たといつても宜しう御座いませう。

母は毎日のやうに、女は可恐ものだといふ講釋をして聴かし、色々昔の人のことや、城下の若い者の身の上などを例に引いて話すので御座います。安珍清姬の事まで例に引きました。外面如菩薩内心如夜叉などいふ文句は耳にたこの出来るほど聞かされまして、何でも若い女と見たら鬼か蛇のやうに思ふが可い、親切らしいことを女が言ふのは皆なだますので、うかと其口に乘らうものなら直ぐ大難に罹りますぞよといふのが母の口癖でありましたので御座います。

私は母を信仰して居ましたから母の言ふことは少しも疑ひませんでした。それですからおさよも事に依つたら内心如夜叉ではないかと可恐がりながらも、自分で言譯を作へて、おさよさんは未だ子供だし自分も未だ子供だからそんな可恐いことはない、

おさよさんが自分を可愛がるのは眞實に可愛がるので決して欺すのぢやあないと斯ういふ風に考へて居たので御座います。

ところが或日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び出して来て、私を無理に引張り込みました。そして何故此四五日遊びに来なかつたと聞きまますから、風邪を引いたといひますと、其は大變だ、最早療つたかと、私の顔を覗きこんで、未だ顔色が好くない、大事になさいよ修さんが病氣になつたら私は死んで了ふと言つて熱と私の眼を見るので御座います。私は氣が弱う御座いますから斯ういはれますと何だかうれしいやら悲しいやらツイ我知らず涙ぐみました、それを見ておさよは私を抱きかへましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもつて居るので御座います。そして今夜は泊れ母上の代りに私が抱いて寝てあげるからといひます。母上に叱られるから嫌だと申しますと、母上には私が今往つて謝つて来るから關はないといひます。其時私が、若し母上に言つたら猶ほ叱られる、おさよさんの所へ遊びに来るのも内證なんだからと小聲で言ひましたら、卒然私を突き離して、何故内證で来るの、修さんと私と遊んぢやア悪いの、悪いのなら最早来なくつても可う御座んすよと、可恐い顔をして私を睨



みつけたので御座います。私は慄へ上つて縁側から飛び下り、一目散に飯塚の家から駆け出しました。

それからといふものは決して飯塚に参りません、おさよに途で逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見て何時もたゞ笑つて居ましたから、私は尙ほおさよが自分を欺しかけて居たのだと信じたもので御座います。

## (五)

次の女難は私の十九の時御座います。此時は最早祖母も母も死んで了ひ、私は叔母の家、厄介になりながら、村の小學校に出して貰つて月五圓の給料を受けて居ました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母は其秋に亡くなりましたから私は急に孤兒になつて了ひ、終に叔母の家に引取られたので御座います。十八の年まで淋しい山里に居て學問といふ學問は何にも爲ないでたゞ城下の中學校に寄宿して居る従兄弟から送つて寄こす少年雜誌見たやうなものを讀み、其他は叔母の家に昔から在つた源平盛衰記、太平記、漢楚軍談、忠義水滸傳のやうなものばかり讀んだので御座います。それから小學校の教師さへも全くは覺束ないのですけれど、叔母の家が村の舊家で、其

威光で無理に雇つて貰つたといふ次第で御座いました、母の病氣の時、母は呉れど、も女に氣をつけると、死ぬる間際まで女難を戒め、何卒早く立身して呉れ、草葉の蔭から祈つて居るぞと言つて死にました。けれども如何して立身するか。それは全然母にも見當がつかなくなつたので御座います。母は叔母の家から私の學資を出さうとしたらしう御座いました。これが都合よく参りませんのですから、私の立身を堅く信じながらも、たゞそれは漠としたことで、實は内々甚く心痛したものと見えます。それですから母としては唯だ女難を戒める外に私の立身の方法はなかつたので御座います。私は又性質意氣地が無いのかして自分の立身のことには如何いふものか餘り氣をかけませんでした。たゞ母に急に別れたので、其當座の悲しさ、一月二月に叔母の家に居ても如何かすると人の見ぬところをめぐり泣いて居りました。

月日の経つ内に悲もだん／＼薄らぎ、終には時々思ひ出す位のこと、叔母の親切にほだされ何時しか叔母を母のやうに思うて日を送るやうになつたので御座います。

十八の歳から、叔母の家を五町ばかり離れた小學校に通つて、同僚の三四人と共に村の子供の世話をして、夜は尺八の稽古に浮身をやつし、此世を面白可笑しく暮すや



うになりました。尺八の稽古といへば、そのころ村に老人が居まして、自己流の尺八を吹いて居ましたのを村の若い者が煽て、大先生のやうにいひふらし、終に私も其弟子分になつたので御座います。けれども元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、たゞ無暗と吹くばかり、其内手が慣れて来れば、やれ誰が巧いとか拙いとか各自に評判をし合つて皆なで天狗になつたので御座います。私の性質でありませうか私だけは若い者の中でも別段に凝り固まり、間がな隙がな、尺八を手にして、それを吹いてさへ居れば欲も得もなく、朝早く日の昇らぬうちに裏の山に上つて、岩に腰をかけて曉の霧を浴びながら吹いて居ますと、私の尺八の音でもつて朝霧が晴れ、私の轉ばす音につれて日がだん／＼昇るやうにまで思つた事もあつたので御座います。それですから自然と若い者の中でも私が一番巧いといふことになり、老先生までが眞實に稽古すれば日本一の名人になるなど、そのかしたものです。その中十九になりました。丁度春の初めのことで御座います。日の暮方で、私は例の通り、尺八を持つて村の小川の岸に腰をかけて、獨り吹き澄まして居ますと、後から『修藏様、』と呼ぶものがあります。振り回つて見ると武之允といふいかめしい名を寺の和尚から附け

て貰つた男で隣村に越す坂の上に住んで居る若い者でした。

『何だ。武之允山城守』

『全く修藏様は尺八が巧いよ』とにや／＼笑ふのです。この男は少し變物で、横着物で、随分人をひやかすやうな口振をする奴ですから『殿ぞ』と尺八を構へて喝す眞似をしますと、彼奴急に眞面目になりまして、

『修藏様に是非見て貰ひたいものがあるんだが見て呉れませんか』と妙なことを言ひ出したので御座います。變に思ひまして、

『何だらう、私に見て貰ひたいといふのは』

『何でも可いから、たゞ見て貰へば可いのだ』

『どんなものだい、品物かい』と問ひますと武の奴、妙な笑ひかたをして、

『貴郎の大すきなものだ』

『手前はおれを愚弄なッ』

『愚弄のぢやアない、全く見て貰ひたいので御座んす。私のお頼だから見非見てやつて下さる』と今度は又大眞面目に言ふので御座います。







障子に燈火がぼんやり映つて、家の内はひっそりとして居ます。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、外で躊躇つて居ますと、

『お入りなされ！』と暗い處で武が言ひました。

其聲は低いけれども底力があつて、何だか私を命令するやうでした。

『此處で見てやるから持つて來い』と私は外から言ひました。

『お入りなされと言ふに！』と今度は猶ほ強く言ひましたので私も仕方ないから、のっそり内庭に入りました。私の入つたのを見て、武は上にあがり茶の間の次ぎに入りました。暫く出て参りません、其様子が内の誰かところどころ話をして居るやうでした。間もなく出て参りまして、今度は優しく、

『お上りなされませ、汚ないけれども』といひますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の一間に入りますと、此處は案内小綺麗になつて居まして、行燈の火が小さくして部屋の隅に置いてありました。しかし先づ私の目につきましたのは其處に一人の娘が坐つて居ることです。私が入ると娘は急に起たうとして又た居住ひを直して顔を横に向けました。私は變ですから坐ることも出来ません、すると

武が出抜けに、

『見て貰ひたいと言ふたのは是で御座います』といふや女は突伏して了ひました。私は何と言つて可いか、文句が出ません、呆氣に取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤らめて言ひ悪さうにして居ましたか、

『まア此處へ坐つて下さりませ、私は一寸出て來ますから』と言ひ捨て、行かうとしますから、

『何だ、何だ、私は嫌だ、一人残るのは』と思はず言ひますと、

『それでは坐つて下さらんのか』と言つて可憐い顔をして私を睨みました。私が歸るといへば直ぐにでも蹴飛ばしさうな見暮ですから私も仕方なしに其處に坐つて黙つて居ますと、娘は泣いて居るのです。嗚咽びかへつて居るのです、それを見た武の顔は眞實に例へやうもありません、額に青筋を立て、齒を喰ひしるかと思ふと、泣き出しさうな顔をして眼をまじまじさせます。何か言ひ出しさうにしては口の邊を手の甲で摩るので御座います。

『一體如何したのだ』と私も事の様子が餘り妙なので問ひかけました。しますると武



が啞りながらかういふので御座います。妹が是非貴方に遇はしてくれと言つて聞かない、色々言ひ聞かしたが無知しても承知しない、それだから貴方を欺して連れて来たのだ、何卒か不憚な女だと思つて可愛がつてやつて呉れ、私から手を突いて頼むからと、先づかういふ次第なのです。馬鹿々々しい話だとお笑ひも御座いませうが、全くさうでしたので、先づ私が村の色男になつたので御座います。

其頃私は女難の戒を全で忘れたのでありませんが、何を申すにも山里の事ですから、若い者が二三人集れば直ぐ娘の評判で御座います。小學校の同僚も何ぞと言へば何處の娘は別嬪だとか、彼娘には最早色があるとか、そんな噂をするのは平氣で、全くそれが一ツの楽しみなのですから、私も何時か其風に染みまして村の娘にからかつて見たい氣も時々起したので御座います、さすが母の戒がありますから、浮とは手も出しませんでしたが、決して心から其實、女を恐れて居たのではなく、若し可い機會があつたら必然色の一つ位出来る筈になつて居たので御座います。

ところで武の妹はお幸と申しまして若い者の中で大評判な可愛い娘で御座いまして年は其頃十七でした。私も始終顔を見知つて居ましたが言葉を交した事はなかつたの

です。先方では私が叔母の家の者であり、學校の先生といふ事で遇ふ度に禮をして行過ぎるので御座います、田舎の娘に似あはない色の白、眼のはつきりとした女で、身體付は能くおさよに似てすらりとして居ました。城下の娘にもあの位なのは少ないなどと村の者が自慢さうに評判して居たのですが全くさうだと私も遇ふ度に思つて居たので御座います。でありますから、私も眼の前にお幸を突きつけられて、其兄から代つて口説かれましては女難などを思ふ事が出来なかつたのです。それに氣の弱い私ですから、よしんば危いこと、氣がつかましたと、とても彼の場合、武とお幸を振り切つて逃げて歸るといふやうな思切つた所作は私には出来ないので御座いました。その後は私も二晩置きか三晩置きには必ずお幸の許に通ひましたが、極く内證にして居ましたから、誰も氣がつかまませんでした。それに兄の武之允が何かにつけて被保つて呉れますし、又た武の女房も初から能く事情を知つて居て、やはり武と同じやうにお幸と私の仲を巧くゆくやうにのみ骨を折つてくれましたので私も武の家では公然で遊んだもので御座います。

二人の仲は武の夫婦から時々冷かされるほど好う御座いました。かれこれする内二



月三月も経ち、忘れもしません六月七日の晩のとです、夜の八時頃、私は平時のやうにお幸の許に参りますと、此晩は宵から天氣模様が怪かつたのが十時頃には降りだして参りました。大降りにならぬ内、歸らうと言ひ出しますと、お幸と武の女房が止めて歸しません、武は不在で御座いました、今に歸るだらうから歸つたら橋まで送らすからと申しますので暫時ぐづぐづして居ますと、武が歸つて参りました。何處で飲んだか大々酔つて居ましたが、私が奥の部屋に臥轉んで居ると、其處へづかへづかへ入つて來まして、どつかり大躰をかきました。お幸は私の傍に坐つて居たので御座います。「外方は大變な降りで御座りませぬ、今夜はお泊りなされませ」と武は妙に言ひだしました、と申すのは私がこれまで泊らうとしても武は、若し泊つたことが知れたら不味いからと何時も私を宥めて歸しましたので、私も決して泊つたことはなかつたのです。

「イヤ矢張り泊らん方が可からう」と私の言ひますのを、打消すやうにして武は、「實は今夜少しばかり話がありませぬ、それでお泊りなされといふのだから、お泊りなされというたらお泊りなされ」と語氣がやゝ暴らなつて参りました。舌も少し

廻り兼ねる體で御座いました。

「話があるッて何だらう、今直ぐ聞いても可いぢやアなうか」

「貴方氣が付いて居ますか」と出抜けに聞かれました。

「何をサ？」私は判じ兼ねたので御座います。

「だから貴方は不可ませぬ、お幸はこれになりなされたぜ」と腹に手を當て、見せましたので私は喫驚して了つたので御座います。お幸は起つて茶の間に逃げました。

「眞實かえ、それは」と思はず聲を小さくしました。

「眞實かつて、貴方がそれを知らんといふことはない、だけれども知らなかつたらそれまでの話です、最早貴方も知つて見れば此後の方法をつけんぢやア」

「如何すれば可いだらう？」と私は氣が顛倒して居ますから言ふことが戰々して居ます、さうしますと武は可恐い眼をして、

「今になつてそれを聞く法がありますか、初から解りきつて居るぢやありませんか、貴方の方でもかうなればかうと覺悟がある筈ぢや」

言はれて見れば尤もな次第ですが、全く私には何の覺悟もなかつたので、たゞ夢中



になつてお幸の許に通つたばかりですから、かやうに武から言はれると文句が出ないのです。

私の黙つて居るのを見て、武は忌々しうに舌打ちしましたが、

『直ぐ公然女房になされ』

『女房に？』

『嫌で御座りますか？』

『嫌ぢやないが、今直ぐと言つたところで叔母が承知するかせんか解らんぢやないか』

『叔母さんが何といはうと貴方が其氣なら何でもない、貴方さへウンと言へば私が明日にでも表向の夫婦に見せます。何にも此處ばかりが世界ぢやないから、叔母さんや村の者がぐづぐづ言やア二人で何處へでも出てゆけば可い、人間一匹何をしても飯は喰へますぞ？』とまで云はれて私も急に力が着きましたから、

『よろしい、それでは兎も角も一應叔母と相談して、叔母が承知すれば可し、故障を言へばお前のいふ通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お

幸は之れを承知だらうか』  
 『へん！そんな事を私に聞くがものは有りませんぢやないか、貴方の行くところなら假令火の中、水の底と來まサア！』と指の尖で私の頬を突いて先の見幕にも似ず上機嫌なんです。

その晩はそれで歸りましたが、サア此話が如何しても叔母に言ひ出されないので御座います。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いて居ますし、母の死ぬる前にも叔母に女難のことは繰返して頼んで置いたのですから、私の口からお幸のことでも言ひ出さうものなら如何なにも驚きもし、心配もするか解らないので御座います。次の朝から三日の間、私は今言はるか、最早切り出さうかと叔母の部屋を出たり入ったりしましたが、とうとう言ふことが出来なかつたので御座います。

叔母に言ふことが出来ないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃亡の支度をして武の家に出かけましたが、それもイザとなつて踏み出すことが出来ませんでした。と申すのは『これが女難だな』といふ恐しい考が、次第々々高つて來て、今までお幸の許に通つたことを思ふと『失策つた』といふ念が湧き上るの



で御座います。それですから若し、お幸を連れて逃げでもすれば、行先如何な苦勞をするかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちて了ふと、一念かうなりましては駈落も出来なくなつたので御座います。

それで四苦八苦、考へに考へぬいた末が、一人で土地を逃げるといふ了見になりなした、忘れも致しません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩で御座います。お幸に一目逢ひたいといふ未練は山々でしたが、此處が大事の場合だと、母の法名を念佛のやうに唱へまして、暗に乗じて山里を逃亡いたしました、其晩あたりは何も知らないお幸が私の來るのを待ち焦れて居たのに違ひありません。女に欺されてはならぬとばかり致へられた私が何時か罪もない女を欺すこととなり、女難を免れる積りで女を捨てた時は最早女難にかゝつて居たので、其時の私にはそれが解らなかつたので御座います。

叔母の家から持出した金は僅か十圓で御座いますから東京へ着きますと間もなく尺八を吹いて人の門に立たなければならぬ次第となりましたのです。それから二十八の年まで足かけ十年の間の事は申し上げますまい。國とは音信不通、東京には勿論、親族

もなければ古い朋友もないので、種々様々の事をやつて参りましたが、何時も女のことで大事の場合を失策つて了ひました。二十八になるまでは公然の妻も一度は持ちました、が半年も續かず、女の方から逃げて了ひました。しかし其妻も私が本郷に下宿して居る中に其處の娘と出来あつたので御座います。

二十八の時の女難が私の生涯の終りで、女難と一所に目を亡くして了つたので御座いますから、それをお話いたして長物語を切り上げることにいたします』

## (六)

『二十八の夏で御座いました、そのころはや、運が向いて参りまして、鐵道局の雇となり月給十八圓貰つて居ました。女には懲りて居ますから女房も持たず、婆さんも雇はず、一人で六疊と三疊の長屋を借りまして自炊しながら局に通つて居つたので御座います。

住居は愛宕下町の狭い露路で、兩側に長屋が立つて居ます中の其の一軒でした。長屋は兩側とも六軒づつ、仕切つてありましたが、私の住んで居たのは一番奥で、直前には大工の夫婦者が住んで居たので御座います。



長屋の者は大通りに住む方とは違ひまして、御承知でも御座いませうが、互に親しむのが早いもので、私が十二軒の奥に移りますと間もなく、十一軒の人は皆な私に挨拶するやうになりました。

その中でも前に住む大工は年頃が私と同じですし、朝出かける時と、晩歸る時とが大概同じで御座いますから始終顔を合せますので何時か懇意になり、終には大工の方から度々遊びに来るやうになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸の職人といふ氣風が何處までも附いて廻り、様子がいなせで辯舌が爽かまで至極面白い男で御座いました。たゞ容貌は餘り立派では御座いせん、鼻の丸い額の狭いなどは殊に目につきました。笑ふ時は何處かに人のよい、悪く言へば少し抜けて居るやうな處が見えて、それが亦た此人の愛嬌で御座います。

私のところへ夜遊びに来ると、必然酒の香をぶん／＼させて、いきなり尻をまくつて跣坐をかきまです。そして私が酒を呑まぬのを冷かしたもので御座います。

そして又た、頻りと女房を持てとすゝめました。其序に如何かいたしませすと「君な

どは女で苦勞したこともない唐偏木だから女の難有味を知らないのだ」とやるのです。御本人は如何かと申しますと、餘り苦勞をしたらしくもないので、其女房も、親方が世話をしたて持たしてくれたいかといふので御座います。

けれども私は東京に出てから十年の間、種々な苦勞をしたに似ず、矢張り持つて生れた性質と見えまして、烈しい事も出来ず、烈しい言葉すら餘り使はず、見たところ女などには近よることも出来ない野暮天に見えますので、大工の藤吉が唐偏木で女の味も知らぬといふのは決して無理ではなかつたのです。實際私は意氣で女難にかゝつたといふよりか皆んな、溫柔くつて野暮だから却て女難にかゝつたので御座います。

或夜のこと藤吉が参りまして、洗濯物があるなら鼻に洗はせるから出せと申しますから、遠慮なく単衣と襦袢を出しました。さう致しませすと其翌日の夕方に大工の女房が自分で洗濯物を持つて参りまして、これだからお上さんを早くお持ちなさい、女房の難有味はこれでも解らうと私の膝の上に持つて來たのを投げ出して歸りました。この女はお俊と申しまして、年は二十四五で御座います。長屋中でお俊は何時か噂にのぼり、又お俊の前でもお上さんは如何見ても意氣だなどと、賞めそやす山の神がある



位くらゐですから私の目めにもこれは唯ただの女おんなではない位くらゐのとは感かんづいて居ゐたので御座ございます。藤吉とうきちは毎晩まいばんのやうに來きるやうになりました。それは一ツは私わたしから尺八しゃくはちを習ならはうといふ熱心ねつしんであつたで御座ございます。笛ふえとか尺八しゃくはちとかいふものは性質うまれつきと見えまして藤吉とうきちは器用きような男をとこでありながら如何どうしても進歩しんぱいたしません。それでも屈くつせずブウウ吹ふいて居ゐたので御座ございます。

お俊しゅんも遊あそびに來きるやうになりました。初はじめては二人ふたりで押おしかけて參まゐりましたが後のちには日ひ曜日ようびなど、藤吉とうきちの居ゐない時ときは晝間ひるまでも一人ひとりで遊あそびに來きて、一人ひとりで饒舌しやべつて歸かへつてゆくやうになつたので御座ございます。私わたしも後のちには藤吉とうきちの家いへに出掛でかけて夜よるの十二時じふにじまで下くだらん話はなしをして遊あそぶやうになりました。お俊しゅんは頻しきりに私わたしの世話せわを焼やいて、飯めしまで炊たいて呉くれることもあり、茶ちやが出來できると持もつて來きて呉くれる、私わたしの役所やくしょから歸かへらぬ中うちにちやんと晩ばんの支度しだをして呉くれることもあり、それですから藤吉とうきちが或時あるとき冷ひやかしまして、

『お前は此頃このころ亭主ていしゅが二人ふたり出來きたから忙いそがしいなア』と言いつたことがありませう。けれども藤吉とうきちは決けつして私わたしを疑うたぐるやうなことはなく、初はじめてはたゞ隣となり交際つきあひでしたのが、後のちには何なんでも身みの上うへのことを打明うちあけて私わたしに相談さうだんするやうになりました。それですから私わたしも其積そのつみ

りで交際つきあひつて、随分ずいぶん彼奴かのやつの力ちからにもなつてやり、時ときには金かねの用ようまでたしてやりましたので彼奴かのやつは猶なほ私わたしを又またない友ともと信しんじ、二日ふたひばかり私わたしが風邪かぜをひいた時ときなど一日いちにちは仕事を休やすんで私わたしの傍そばに附ついて居ゐたことさへ御座ござります。

それに長屋中ながやちゆう、皆みな私わたしを可愛あひがつて呉くれまして、溫柔おとよしい方かただ良い方かただ、珍めづらしい堅人かたじんだと褒ほめて呉くれるので御座ございます。ですからお俊しゅんばかりでなくお上かみさん達たちが頼たのみもせぬ用ようを達たして呉くれるので御座ございます。ところが可笑おかしいのはお俊しゅんがこれを焼やいて、何も私わたしが附ついて居ゐるに餘計よけいなお世話せわだと、お上かみさん達たちの目めの前まへで嫌いやな顔かほをする、それをお上かみさん達たちは猶なほ面白おもしろ半分はんぶんに私わたしの世話せわを焼やいたこともありましたが、けれども、それでお俊しゅんと私わたしの仲なかを長屋ながやの者ものが疑うたぐるかといふに決けつしてさうでなく、てんで私わたしをば木きか金かねで作つくつたもの、やうに無類むるいの堅人かたじんだと信しんじて居ゐたので御座ございます。けれどもお俊しゅんの方ほうはそれほどの信用しんようはないのです。ですからお俊しゅんさんは少し怪あやしいが、とても物ものにはならぬなど、明あらさまに私わたしに向むかつて言いつた山の神かみさへ居ゐたので御座ございます。

實際じつさい、お俊しゅんは怪あやしいと言いはれても仕方しかたがありません。或晩あるばんのことに私わたしが床とこを延のべて居ゐますと、お俊しゅんが飛とんで參まゐりまして、



『どうせ私ぢやお氣に入りませんよ』と言ひざま布團を引奪つて自分でどん／＼敷き  
 『サア、旦那様お休みなさい、オー世話の焼ける亭主だ』と言ひながら色氣のある眼  
 元で熟と私を見上げましたことなどは、たゞの仕草ではなかつたので御座います。そ  
 して其時の私の心持を言ひますと、決して長屋の者が信じて居たほどの堅固なもので  
 なかつたので、木や石でない限り、矢張り妙な心持がしたので御座います。

私が或時藤吉に向ひ『如何もお俊さんは意氣だ、さるで素人ぢやアないやうだ』と  
 申しますと、藤吉にや／＼笑つて居ました。『巧いところを當てられた、實はあれは  
 さる茶屋で可なり名を賣つた女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞い  
 て見ると堅氣の職人のところにゆきたいといふので、それこそ幸と私に世話して呉  
 れたのだ』と少々得意の氣味でお俊の身元を打明けたので御座います。その時から猶  
 更ら私はお俊の態度を妙に感じて來ました。

けれども先づ平穩無事に日が経ちます中、丁度八月の中頃の馬鹿に熱い日の晩で御  
 座います、長屋の者はみんな外に出て涼んで居ました。私だけは前の晩寢冷をしたの  
 で身體の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就きました。なんでも十時ごろまで外はが

や／＼話聲が聞えて居ました。が其内だん／＼静になりお俊もおとなしく内に引込んだ  
 らしかつたのです。私は眠られないのと熱苦しいとで、床を出まして暫く長火鉢の傍  
 でマツチで烟草を喫つて居ましたが、外へ出て見る氣になり寢衣のまゝ、フイと露路に  
 飛び出しました。露路には最早誰も居ないので、露路から通りに出ますと、月が傾い  
 て丁度愛宕山の上にあるので御座います。外はさすがに少しは風があるので其處から  
 ぶら／＼歩いて居ますと、向ふから一人の男が、何かぶつ／＼口小言を云ひながらや  
 つて参ります、其様子が酔ばらひらしいので私は道を避けて居ますとよろ／＼と私の  
 前に來て顔を上げたのを見れば藤吉で御座いました。

藤吉は私を見るやいさなり、

『イヤ大將、うめえとところで遇つた、今これからお前さんとこへ、押かけるよとなん  
 だ。サア家へ歸れ、今夜こそ己は勘辨ならんだ、如何してもお前さんに聞いて貰ふこ  
 とがあるんだ』私の手を取つてグイ／＼露路の方へ引張つて参るので御座います。

私も酔ばらひと思ひまして『よし／＼、サア歸らう、何でも聞かう』と一所に連立  
 つて家に入りました。



藤吉の顔を見ると凄惨な程蒼ざめて眼が坐つて居るので御座います。坐るが早い、  
 『サア聞いて呉れ、私は最早如何しても勘辨がならんのだ』と、それから巻舌で長々と  
 述べ立てましたところを聞きますと、つまりかうなんです、藤吉が其日仲間の者四五  
 人と一所に或所で一杯やりますと、仲間の一人が何かの機会から藤吉と口論を初めま  
 した。互に悪口雑言を仕合つて居ます内に、相手の男が、親方のお古を頂戴して難有  
 がつて居るやうな意氣地なしは黙つて引込めと怒鳴つたものと見えます。それが藤吉  
 にグツと癢に觸りましたといふものは、これまでに朋輩からお俊は親方が手をつけて  
 持餘したのを藤吉に押つけたのだといふ當磨を二三度聞かされたさうで、それを  
 藤吉が人知れず苦にして居た矢先、又もや斯ういうて罵られたものですから言ふに言  
 はれぬ不平が一度に破裂したので御座います、餘計なお世話だ、親方のお古なら如何  
 した、手前はお古を貰ふことも出来まいと、我鳴りつけたものと見えます。さうする  
 と相手はあざ笑つて、お古ならまだ可いが、新しいのだ、今でも月に二三度はお手が  
 附くのだと悪たれたので御座います。藤吉はこれ聞きませんが早い、よし、見て居  
 る』と直ぐ其處を飛び出して家に歸るとお俊をたゞき出して丁了見でぶらぶらと歸

る途中、私に逢つたので御座いました。

それでこれから直ぐにお俊を追出す積りだがお前さんも同意だらうと申しますから  
 私はお俊が元親方と怪しい關係のあつた女であるか、ないか、そんなことは解らない  
 けれど、今ではお前を大切に立派なお丁さんになつて居るのだから追出すほどの  
 ことはあるまい、見たところでも親方と怪しいいふ様子もないやうだ、それは私が請  
 合ふと申しますと、藤吉『今でも怪しいなら打殺してやるのだ、以前の關係が有ると  
 聞いたゞけで私は承知が出来ねえのだ、お俊を追出して親方の横面を張擲つて呉れる  
 のだ、何ぞといへば女房まで世話をしてやつたといふ、大きな面をして無暗と親方風  
 を吹かすからして最早氣に喰はねえで居たのだ、お古を押附けて置いて世話も何もあ  
 るものか、ふざけるない！』私が幾何なだめても聴かないでとうとう宅に歸つて參つ  
 たので御座います。

私も打捨つても置かれなないと、藤吉の後について行かうとしますと、關はないで置  
 いて呉れると、私を内に入れません、仕方なしに外に立つて内の様子を聴いて居まし  
 た、お俊は最早床に就いて居た様子でしたが、藤吉は引ずり起して怒鳴りつけて居る



ので御座います、お俊は何も言はないで聞いて居たやうですが、暫時くしますとブイと外へ出て参りました。私を見て、

『下らないこと言つてらア、酔ばらひに取合つても仕方がないから打捨て置きませう』と言ひながらズン／＼私の宅に入るの御座います。私もお俊の後について宅へ歸りました。

『誰が下らないことを焚付けたのだらうねえ、眞實に仕様がなないねえ』とお俊はかう言つて、長火鉢の横に坐つて、其所に置いてあつた煙草を吸うて居るのです。

『明日の朝になれば何でもないサ』と私も爲事なしに宥めて居ましたが、お俊が歸りさうにもないので、

『静かになつたやうだから見て来たら可からう』と言ひますと、お俊は黙つて起つて出てゆきましたから、私は直ぐ蚊帳の内に入つて了つたので御座います。ところが間もなくお俊は戻つて参りまして、

『能く寝て居るから外面から戸締りをして来ました』と澄まして居るのです。

『そしてお前さん如何するのだ』と私は蚊帳の内から問ひました。

『私はいかして朝まで寝ないで居てやるのサ』

『そんなことが出来るものか、歸つて寝たが可からう』と申しますとお俊は焦つたさうに『打捨て置いて下さいよ、酔ばらひだから夜中に又に如何なことをするか解るもんどやアない、私や可恐ワ』と平氣で煙草を吸つて居るのです。私も言ひやうがないから黙つて居ますと、お俊も平時のお饒舌に似ず黙つて居るので御座います、蚊帳の中から透かして見ると、薄暗い洋燈の光が房々とした髪から横顔にかけてぼーつとして居ます、夫に蒸暑いのでダラリとした様子が何時にない艶かしい様に私は思つたので御座います。

其内、かれこれ二十分も経ちましたらうか。お俊は折り／＼團扇で蚊を追つて居ましたが『オ、ひどい蚊だ』と急に起ち上がりまして、蚊帳の傍に来て『貴方最早寝たの?』と聞きました。

『最早寝かけて居るところだ』と私は何故か寝ぼけ聲を使ひました。

『一寸と入らして頂戴な、蚊で堪らないから』と言ひさせ、やつと一人寝の蚊帳の中に入つて来たので御座います。



朝早くお俊は歸つてゆきました。如何いふ風に藤吉の機嫌を取つたものか、それとも酔が醒めて藤吉が逆戻りしたのか、温順しく仕事に出て参りました。出際に上口から頭を出して『お早う』と言ひさま、妙に笑つて頭を搔いて見せまして、『おれお謝罪は歸つてから』と、言ひ捨て、出て参りました。其後姿を見送つて『ア、悪いことをした』と私はギツクリ胸に來ましたけれど最早追附ません。それからといふものは、お俊の亭主は眞實に二人になつたので御座います。

それから一月も経ぬ内に藤吉は又た親方に何か言はれて、ブン／＼怒つて歸つて参りましたが、今度は少しも酔つて居ないので。お俊と別れて自分は暫く横濱へ稼ぎに行くと言つた様子は甚く覺悟をしたらしいので、私も濱へ行くことは強ひて止めません、お俊と別れるには及ぶまい、暫く私が預かるから半年も稼いだら歸つて来て又一所になるが可からうと申しますと、藤吉は涙を流してよろこびまして、萬事よろしく頼むと家を疊んでお俊を私の宅に同居させ、横濱へ出かけて了ひました。

最早かうなれば澄ましたもので、お俊と私は全然夫婦氣取で暮らして居たので御座います。さうすると一月程たちまして私は眼病にかゝつたので御座います。たいした

こともあるまいと初めは醫者にもかゝらず、役所には力めて通つて居ましたが、段々に悪くなりまして終には役所を休むやうになりました。醫者に見せますと容易ならぬ眼病だと言はれて、それから急に出来る丈の療治にかゝりましたが治る様子も見えないので御座います。

お俊はなかく／＼氣を注げて看護してくれました。藤吉からは何の消息もありません。私は藤吉のことを思ひますと、あゝ悪いことを爲たと、つく／＼我身の罪を思ふので御座います。さればとてお俊を諭して藤吉の後を逐はすことを致す程の決心は出ませんので、たゞ悪い／＼と思ひながらお俊の情を受けて居りました。

その内だん／＼眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んで居るし、私は氣が氣でならず、若し盲目になつたらといふ一念が起るたびに、悶え苦しみました。

こゝに怪しいことの御座いますのは、お俊の様子が甚く變つたことで御座います、何となく私を看護する舉動が前のやうでなく、つまらぬことに疝癢を起して私に難く當るので御座います。そして折り／＼は半日も何處にか出行いて歸らぬこともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は面白くなくつて堪りません。とこ



ろが或日のことで御座いました『御免なさい』と太い聲で尋ねて来た者がありません。  
『入らつしやい』とお俊は起つてゆきました。暫く何か其男とこそ話をして居  
ましたが、やがて私の枕元に参りまして『頭領が見えました、何か貴郎にお話したい  
ことがあるさうです』

何の頭領だらうと思つて居ます中に、其男はづか／＼私の枕元に参りまして、  
『お初にお目にかゝります、私ことは大工助次郎と申しますもので、藤吉初めお俊が  
これまで色々お世話様になりましたにつきましては、お禮の申上げようも御座いませ  
ん、別してお俊が厚いお情を被りました儀につきましては藤吉に代りまして私より十  
分の御禮を申上げます。就きましては、お俊儀は今日只今より私が世話することにな  
りましたに就きましては早速お宅を立退ことに致します、左様悪からず御承知を願ひ  
置きます』と切口上でべら／＼と饒舌立てました。私は文句が出ないので御座います。  
それからお俊と頭領がどたばた荷どしらへをするやうでしたが、間もなくお俊が私  
の傍に参りまして『色々事情があるのだから、悪く思つちやアいけませんよ、左様な  
ら、お大事に』

二人は出て行きました。私は泣くことも叫喚することも出来ません、これは皆な罰だと  
思ひます、と母の憔悴した姿や、孕んだまゝ置去りにして来たお幸の姿などが眼前に現  
れるので御座います。

役所は免められ、眼はとう／＼片方が見えなくなり片方は少し見えても物の役には  
立たず、其内少しの貯蓄は無くなつて了りました。それから今の姿に零落たので御座  
います、今ではこれを悲しいとも思ひません、たゞ自分で吹く尺八の音につれて戀  
ひしい母のことを思ひ出しますと、いつそ死んで了つたらと思ふことも御座います  
死ぬることも出来ないで御座います。

盲人は去るに望んで更に一曲を吹いた。自分は殆ど其哀音悲調を聴くに堪へなかつ  
た。戀の曲、懐舊の情、流轉の哀、うたてや其底に永久の恨をこめて居るではないか。  
月は西に落ち、盲人は去つた。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。



19867

獨步全集 前編終

明治四十三年六月十二日印刷  
明治四十三年六月十六日發行

〔獨步全集前編〕

定價金 貳圓

著 者 故國 木 田 獨 步

發 行 者 大 橋 新 太 郎  
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印 刷 者 淺 野 鐵 吉  
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印 刷 所 東 洋 印 刷 株 式 會 社  
東京市芝區愛宕町三丁目一番地



發 行 所

(東京市日本橋區本町三丁目)

博

文

館

振替貯金口座東京二四〇番  
取寄電話本局二六二〇番



故 尾崎紅葉君著  
 巖谷小波君 石橋思案君 共輯

紅葉全集

全六册菊判特製  
 表装美麗紙數  
 一册九百五十頁  
 正價金壹圓八拾錢  
 小包各金拾貳錢

→【内容】←

- 第一卷 ○色懺悔 ○新挑花扇 ○南無阿彌陀佛 ○戀の蛇 ○夏瘦 ○新色懺悔 ○猿枕 ○ながし ○七十二文命の安寝 ○風雅娘 ○巴波川 ○拈華微笑 ○此ぬし ○關東五郎 ○文
- 第二卷 ○伽羅枕 ○むき玉子 ○夏小袖 ○おぼる船 ○紙きぬた ○戀の病
- 第三卷 ○三人妻 ○男ごころ ○袖時雨 ○俠黒兒 ○心の闇 ○むらさき
- 第四卷 ○隣の女 ○鷹料理 ○冷熱 ○青葡萄 ○不言不語 ○二箇條 ○浮木丸 ○八重襪
- 第五卷 ○多情多恨 ○千箱の玉章 ○安知歌貌林 ○寒牡丹
- 第六卷 ○金色夜叉前編 ○金色夜叉中編 ○金色夜叉後編 ○續金色夜叉 ○續々金色夜叉 ○新續金色夜叉 ○煙霞療養 ○紅葉山人傳 ○紅葉著作年表

博文館發行

故 川上眉山君著  
 巖谷小波君 石橋思案君 共輯

眉山全集

全四册菊判特製  
 表装美麗紙數  
 一册八百五十頁  
 正價金壹圓八拾錢  
 小包料一册金拾貳錢

→【内容】←

- 第一編 ○雪折竹 ○風流狂言記 ○お駒 ○有明 ○青葉 ○大さかづき ○書記官 ○うら
  - 第二編 ○梅紅葉 ○左巻 ○野人 ○行衛 ○二重帯 ○一軒百姓 ○鶴澤橋 ○三銃士
  - 第三編 ○男 ○春宵 ○虚偽の價 ○落葉 ○爪木折 ○綾小袖 ○春潮 ○片影 ○滑稽相續三人
  - 第四編 ○新家庭 ○昔の戀 ○梅の寮 ○同胞 ○覺道 ○一夜天下 ○寶の山 ○于紅萬紫
- 幽麗にして清適なる眉山氏の筆は眞に明治の華文なり況んや其想、おのづから當代の重きをなして清適なる眉山氏の筆は眞に明治の華文なり況んや其想、おのづから當代の著作に取めたる諸篇は、就れも當世文壇をして、眉山氏が絶倫の盛名を擡にせしめたるもの、實に是れ我讀書界に於ける珍璧にして、而してまた明治文壇に異彩ある大作家の面影なり

博文館發行



島崎藤村 小説 藤村集

全一册四六判體裁雅  
鏤木清方君挿畫十七葉  
正金七拾五錢  
郵税八錢

芽出

(以上十七編)

内並黃昏 一夜 群 土產  
壁木 伯爵夫人 青年 雜貨店  
容壁 苦しき人 死 奉公人  
收穫 旅 弟子 河岸の家

田村松魚 著 北米の花

全一册洋裝裝菊判  
總布一册製表裝美  
正金壹圓拾錢  
小包料金拾貳錢

著者は今の青年文士中一種の風骨を有す。年少氣鋭、未見の山河と未知の社會を研究し、別に其作風を起さんとするの意あり。三十六年北米の野に遊び、爾來七年間の長星霜具さに米大陸の天地に放浪し。研鑽琢磨功を積んで後歸國、今春再び東部の文壇に立つ。此の書は即ち著者が新らしき生涯と新らしき趣味とを世に公にせる其第一聲なりとす。卷中納むる所の長短篇小説數種及び隨筆數項は皆北米の花の美と艶麗を競ふ。 (博文館發行)

相馬御風 短篇 ゴーリッキー集

全一册四六判美  
紙一册四六判美  
正金四拾五錢  
郵税六錢

茲に譯出せられたる六篇は、ゴーリッキーが最も得意とせる短篇中、更に最も傑出せるものを選びたるものなれば人一度之れを讀みんが、大膽深刻なる描寫を以て成る歐洲文壇の新作風と、かの最も男性的の力に充つと稱せられたるゴーリッキーが崇高なる新人生觀とを窺ひ知るを得べし

吉江孤雁 譯 ツルゲーネフ集

全一册四六判美  
紙一册四六判美  
正金四拾八錢  
郵税六錢

ロシアの文豪ツルゲーネフの傑作三篇を收む。曰く「幻」曰く「フアウスト」曰く「ム、」と「幻」と「フアウスト」とは作者が現實の世界と神秘の世界との接觸點、可解と不可解との交渉を捉へたるもの「ム、」は嗟の戀と可憐な犬との物語にして哀愁と可笑味と其の筆端に横溢せり。作者は如何に深く人は如何に其の自然觀は如何に再現時たるか。其の人生觀は如何に其の如何の也。其の自然觀は如何に再現時たるか。其の人生觀は如何に其の如何の也。 (博文館發行)



土居春曙 譯 新 社 會 劇

全一冊 菊判上製美本  
紙數 三百四十一頁  
正 價 金 六 拾 五 錢  
小包料 金 八 錢

本書は勝利三幕清濁四幕遺言一幕空想三幕の四篇を含み今回新設されたる文藝協會演劇研究所の教科書として用ゐらるゝもの  
本書は著者が登場研究の経験により直に實驗に適應せしむべく少からざる苦心と用意とを以て執筆せしもの  
本書は新社會劇を研究せんと欲する初學者に取りては唯一の新階梯たるを以て荷も劇に志せる者は本書に依りて私演朗讀を試み見よ西劇の新味を會得すると同時に我が將來の藝壇に資すべき清新の演法は自ら其間に發明せらるべし

小松月陵 譯 沙翁物語十種

全一冊 四六判美本  
紙數 三百九十頁  
正 價 金 四 拾 五 錢  
郵 稅 金 六 錢

此書は英國少年の爲めにチャールス、ラムと其姉メリーとが物したる沙翁物語中特に十篇を撰びたるものにして譯者の意志は廣く我國社會一般に不朽の大著沙翁劇を味はしめん事を庶幾するが故也  
（博文館發行）

山崎紫紅 著 史劇十二曲

全一冊 四六判表裝美  
紙數 五百五十頁  
正 價 金 九 拾 五 錢  
郵 稅 金 八 錢

最近二年間に於ける著者勞作の結晶物なり、上場せられて都下の劇壇を賑はしたる  
歌舞伎物語。その夜の石田。亂れ笹松。一本信玄最後。  
當流鉢木。破戒會我。外明智光秀。戀の洞。その他三篇。  
志ある諸君一讀を乞ふ

小山内薫 著 演劇新潮

全一冊 四六判美本  
紙數 三百九十頁  
正 價 金 五 拾 五 錢  
郵 稅 金 六 錢

俳優は讀め！興行主は讀め！好劇家は讀め！  
この書は學問の書に非ず、議論の書に非ず、研究の書に非ず。舞臺演劇一切の實際的組織より俳優の技藝に及び、俳優の技藝より脚本の解剖に及び、演劇の演劇革新の心願は數十葉の美しき挿畫と共に  
新思潮の年若き著者たる  
（博文館發行）



第四高等  
學校教授  
文學士  
鹽釜天颯君著

# ゲーテの詩研究

全一冊四六判洋裝  
釘瀟洒頗美本  
正金四拾五錢  
郵税金六錢

ゲーテは沙翁と共に世界の文壇に於ける將星なり而かも詩聖としてのゲーテ以外人間としてのゲーテを知らずんば未だ彼が人格の全豹を窺ふ者と言ふ可らず而して彼が全人格を最も善く傳ふるものは詩とフウストとなり本書はゲーテが詩に現はれたる思想感情を釋ねて彼が偽らざる人間性を曝露すると共に技巧風格を究めて横溢せる詩界を鐘愛せんとすゲーテの靈肉兩界の眞面目を知らんとせば此書を措きて他に求むべからず

文學士 樋口龍峽君著

## 時代と文藝

正金四拾錢

全一冊四六判  
三百五十六頁

郵税金六錢

(博文館發行)

長谷川天溪君著

## 自然主義

正金五拾錢

全一冊四六判  
四百十六頁

郵税金六錢

2x  
7/18  
x



